
バカと少年の異世界道中記

カトラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと少年の異世界道中記

【Nコード】

N3078U

【作者名】

カトラス

【あらすじ】

オリキャラと吉井明久の2人が主役の物語。
彼等はその身に力を宿し異世界を駆け巡る。

初投稿しました。駄文ですが何とぞよろしくおねがいします。ちなみに主人公たちのカップリングは未定です。

プロローグ1（前書き）

オリ主の方のプロローグですが内容が重いうえに話があまり進みません。

プロローグ1

その出来事は突然起こった。何の前触れもなく。

「はあ、はあ、一体何なんだよあれは!？」

俺は逃げていた。突如として世界的に現れた奴らから。

「夢だったら早く覚めるよチクショウが。」

奴らを一言で例えるなばそれは「異形」と言わざるをえない。

そして奴らは無差別に破壊を開始した。家をビルを街を森を全てを焼き払い破壊した。

「誰か、誰かいないのか。いたら返事をしてくれ」

もう誰も居ないのかもしれない。それでも俺は探し続けた生き残っている人を。

だけどそれも終わりが来てしまった。俺は奴らに見つかってしまった。

「お前らは一体何なんだよ!？ 何のために俺達を殺すんだ。答えろ!！」

だが俺の問いに答えが返ってくる事はなく、異形達は俺に襲いかかった。

プロローグ1（後書き）

次の話でオリ主サイドのプロローグは終了です。 終わらせられた
らしいな（汗）

プロローグ2 (前書き)

今回でプロローグは終わりです。

プロローグ2

「くっ、むざむざ殺されてたまるか。」

俺は近くに落ちてあつた鉄パイプを拾い上げ構える。そして考える。この絶望な状況からどうやって逃げるかを。追い詰められているからこそ冷静に対処しなければならない。

普通に戦つても返り討ちにあいそこで終わりだ。なんとか隙を作り逃げきる事が今自分がやらなければならないことだと自分に言いきかせる。

幸い奴らの動きは鈍い。つけいる隙はあるはず。

「落ち着け、ここで取り乱したらその場でアウトだ。チャンスは一度しかない。」

狙うは奴らが襲いかかる一瞬。俺がとる行動は一つ。奴らの内の一体に対して全力で鉄パイプを叩き込む。倒せはしないが隙は作れる。そして異形達が襲いかかってきた。

「今だ、狙うは一転突破。くらいやがれ！」

俺は全力で鉄パイプを奴らの内の一体に叩き込もうとした。だが、その一撃が当たることはなかった。なぜなら俺は奴の腕に刺し貫かれていた。自分の認識があまかった。

奴らは動きが鈍いのではなく鈍く見せていたのだった。
全ては獲物が自分から向かってくるようにしむけるための芝居をうつっていたのだ。

「じはあ！？ウエツ。」

俺は血を吐き今の自分の状態をすぐには把握できなかった。何が起こったのかもわからずに刺し貫かれたのだ。

今頭の中を駆け巡るのは痛いと感じるの感情だけだった。

自分は死ぬ。そう悟った。だが待っていたのは死ではなかった。

何かが身体の中に入り込んできた。そして俺の身体は徐々に変化していった。

そう自分を殺し、家族と友を殺し、世界を殺した異形と同じ姿に。

「どうなってんだよ・・・まさか！？こいつらは」

今自分に起きている変化、生死関係なく人っ子1人いなくなった世界、そこから導き出された答えは一つ。

その解答はあまりにも残酷だった。異形にやられたものは死ぬのではなく奴らと同じ異形にされてしまう。

それは死よりも残酷な結末だった。

「ダメだ意識が遠のく。ここまでののか。」

次第に自分が何なのかわからなくなってくる。何も考えられない。悔しい。

何も出来ずに殺され、死ぬことも許されず化け物に変えられる。それがたまらなく悔しかった。

「チクシヨウ。チクシヨウ!!」

俺は叫んだ。叫ぶしかできなくなった。だがその時、一陣の風が吹き何かが走って来る。

「なっ!?!」

目を疑った。その何かは一瞬にして自分以外の異形を全て切り裂いた。

異形達は何も発することもなく切り裂かれ消滅した。そして、奴等を切り裂いたそれは俺を見据えた。

「狼? いや似ているけど違う。」

白い大剣をくわえた狼もどきが俺を捉えた。殺される。そう思った。けど恐怖はなくむしろ感謝した。

このまま化け物になるぐらいならまだ人として死ねるからだ。だから

ら俺はこういった。

「俺を殺してくれ。まだ人であるうちに殺してくれ頼む。」

だが奴は俺を見据え言った。イキタイカト。最初は何を言ってるのかが分からなかった。だが俺は無意識に答えた。

「俺は・・・生きたい」

そう俺は生きたい。なにも知らずに殺され何もわからずに化け物にされる。そんなのはイヤだ。

俺は知りたい。真実を。生きれる確率が1%でもあるならその可能性に賭けたい。

だから、俺は・・・

「俺は生きてやる!!」

その答えに満足したのか、狼モドキはくわえていた白い大剣を俺に突き刺した。

そして大剣が輝き、狼モドキが言った。

「イキタイナラカクゴラキメロ。オマエガスムミチハイバラノミ

チ、オマエガセオウモノハオモイゾ。」

答えは決まっている。どんなに過酷でも、重いものを背負うことになっても。

「ソウカ、ナラバイキヌイテミセロ トクイテン」

その言葉を最後に俺の意識は途絶えた。

side ????

後数分で滅びゆく世界にひとりの来訪者が現れた。

「くっ、手遅れだったか。だが1人でも多くの生存者を見つけなければ。」

そして彼は時間の許す生存者を限り探し続けた。そして…

「むっ、あれは!?!」

1人の少年を見つけた。息をしているのを確認して彼は安堵した。

だが、もう時間がなかった。

「生存者はこの少年だけか。悔しいがもう時間がない。この世界から離脱する」

彼は少年を抱えて自分の船に戻った。そして彼が去ってから数分後、この世界は消滅した。

プロローグ2（後書き）

キャラ紹介と設定を載せてから本編がスタートです。本編は世界消滅から2年後から始まります。

はあく文才が欲しい。orz

人物紹介（前書き）

キャラ設定です。

人物紹介

オリキヤラ

神薙かんなぎ
綾人あやと

年齢 17

外見 スパ ボFの主人公の一人のレナンジエス・スターロード

本作の主人公の一人。2年前に起こった謎の現象で全てを失った。アルカールにより救出されてからしばらくは全てを失ったショックにより精神的に不安定だったが、真実を知るために立ち直る。

その後、アルカールの元で修行をしながら自分の世界で起こった現象を調査し強大なる悪意が絡んでいることを知る。

性格は普段は冷静沈着だが心には熱く燃える闘志を秘めている。

元いた世界では幼い頃に両親を無くし孤児院で育った。

孤児の年長者として他の子供の世話役を自ら買って出たり孤児院の経営難を少しでも良くするために色々なバイトを掛け持つ生活をしてきたため学校には行けてないが勉強は出来る方である。

自衛の手段として様々な武術を学んでおり腕っ節は結構強い。

趣味は漫画やゲームといった所謂オタク趣味で、その中でも仮面ライダーとウルトラマン、ガンダムを愛している。

小さくて可愛い生き物を見ると愛ですにはいられないという特殊な性癖を持っているが本人はきにしていない。

吉井 明久

「バカとテストと召喚獣」の主人公で本作でのもう一人の主人公。

とある事故による異世界へと飛ばされる。偶然にも飛ばされた場所で謎の組織の悪事を目撃してしまい口封じのために攻撃され重傷をおってしまふ。

助けにきたアルカール達により一命はとりとめるも名前以外の記憶を失ってしまう。

性格は記憶を失っても変わらず、バカだが誰かのために全力で頑張れる真っ直ぐな心をもっている。

アルカール

「サガ・フロンティア」に登場する謎のヒーロー

ヒーロー達が住む異世界サントアリオ出身のヒーロー。

様々な異世界で起こっている謎の現象、世界の消滅という異常事態に危機感を感じたサントアリオヒーロー委員会により調査して原因の究明を命ぜられる。

調査の過程で救出した綾人から世界で起こった出来事を聞き、今まで調査した資料からある二つの組織の存在を知りヒーロー委員会に報告して組織の調査を命ぜられる。

綾人が調査に志願した時最初は反対しようとしたが綾人の揺るがない意志の強さに負け自分の弟子として稽古をつけながら調査をすめる。

ルシエド

「ワイルドアームズセカンドイグニッション」に登場。

ガーディアンの一で欲望を司るガーディアン。

綾人の世界で起こった現象にある存在を感じ、聖剣アガートラムを携え異世界に跳んだ。

到着した世界で綾人の中にその存在を感じたが綾人の中に逃げ込まれ、綾人を殺したらそのショックにより復活されてしまう恐れがあり手詰まりになってしまったが綾人の生きたいという強い想いと生きる事への欲望に共鳴し一か八かの賭けにでてその存在の封印と綾人の延命に成功する。

封印してからは綾人の使い魔兼お目付け役という形で同行している。

第1話 あれから2年後。時が経つのは早いもんだ。(前書き)

ようやく本編スタートです。プロローグに時間をかけてしまったから。

綾「ようやくだよ。もう少し早く仕上げられないのか？」

できたらいいんだがなあ

綾「このダメ作者は無視して本編をどうぞ。」

ちよっ!?!?ヒドくない。

第1話 あれから2年後。時が経つのは早いもんだ。

「また、あの時の夢か…。」

ここはリージョンシップ「キグナス」の一室。俺は2年前に体験した悪夢を見てしまいおきてしまった。もう一度寝直そうとした時通信が掛かってきた。

「綾人、もう直ぐ目的地に到着する準備してくれ。」

「……ん、りよおくかい。ふわあ〜」

「どうした？やけに眠そうだが、お前また夜更かしか？」

「いや、あの時の夢を見ただけだ。」

「……そうか。大丈夫か？ムリなら休んでいても」

「あと仮面ライダーBLACK全話見ただけだ。」

「お前またか！？そんなもの見ている暇があるなら少しでも眠ると」

「いう事ができんのかバカ弟子!!」

「ざけんな!BLACKは名作なんだよ!一日全話見るのは基本中の基本だろうが!!」

「そんな基本しるか!とにかく至急準備してブリッジに上がってこい。いいな!」

ピッ と通信が切れた。

なんて奴だヒーローの癖に仮面ライダーの偉大さが分かってないなんてどういう神経してんだ?小一時間ほど問い詰めてやる。まあ、それはさておき

「とりあえず準備するか。」

・・・あれから2年がたった。俺を救助したアルカールの話では生き残ったのは俺一人だけだったそうだ。そして生き残った俺はアルカールの出身世界サントアリオに保護された。意識を取り戻した俺は最初その現実を受け入れられなかった。無理もない。突然すべてを失ったのだ。

これは夢だ。夢から早く覚めないと。と自分に言い聞かせた。ただど日を経つにつれていやでもこれは夢じゃないという現実を突きつけられた。自分も死んだ方が良かったと思つた。

けど、そう思つたら思い出した。あの時自分が言つた言葉をその覚悟を。

「（俺は生きたい。生きて真実を知りたい。知らなければならぬ。）」

それを思い出したら不思議と喪失感はなくなっていた。むしろじつとしていらなくなり気づいたときには俺の体は動いていた。

ヒーロー委員会に調査メンバーに入れてくれと志願していた。

最初は反対されたがアルカールが委員会を説得してくれて委員会も最終的に納得してくれた。

アルカールの弟子とヒーロー候補生という形で調査の同行を許可された。

そして委員会からは念押しされた。（一度決めたのなら最後までその覚悟を貫き通せ、必ず生きて帰ってこい。）と。

それからアルカールに鍛えられながら調査を進め今に至る。

「さあ、今回こそ当たって欲しいもんだ。」

「確かに、最近ハズレばかりだったからな。」

「……ルシエド。いつから居たんだ？」

「最初から居た。お前たちが通信越しにバカ騒ぎしていた時からな。」

いきなり出てきたコイツはルシエド。あの時俺を助けてくれた狼モドキだ。

「狼モドキではない。ケルベロスだ。」

とこんな感じで人の心を勝ってに読む失礼な奴だ。

「読んではいない。我にその様な力はない。お前の考えていることはわかりやすいだけだ。」

いやっお前絶対そういう能力持っているだろ？でないとそんな突っ込みできないだろ？

「そんな事より早くブリッジに行ったらどうだ。そろそろ到着なのだろ？」

すっかり忘れてた。早く行かないとあのおっさんがキレてしまう。くそっ無駄な時間をつかってしまった。早く行かなければ。

「あのおっさんキレたら、收拾つけられないからな。急ぐぞルシエド。」

「ふっ 心得た。」

俺達はダッシュユでブリッジに向かった。おっさんがキレてませんよ
うに。

第1話 あれから2年後。時が経つのは早いもんだ。(後書き)

綾「結局、ブリッジにまで行けなかった。おい作者。」

ごめんなさい×5

綾「はあくまったく。次はもう少し話進めろよ。」

明「そっだよ！僕だけまだ一文字も出ていないんだから！」

とりあえず頑張って見ます。明久は次の話で登場・・・できたらいいな。

明「作者――(涙)」

第2話 バカの来訪 ピンチな時現れるのは正義の味方（前書き）

いよいよもう一人の主人公が登場。

綾「本当ならもっと早く出てたはずなのにプロローグに時間かけたらなあ〜。」

それは言わないで！すごく突き刺さるから！

明「取りあえず第2話スタートです。」

第2話 バカの来訪 ピンチな時現れるのは正義の味方

なんやかんやあってようやくブリッジに到着。さて、どんな風に入るのか？

「普通に入ればよからう。変な小細工などせずに。」

だから心を読むなよ。これだから狼モドキは。

「ケルベロスだ。」

「んなのはどうでもいいんだよ。問題はこの奥にいる怒れる修羅をどうやって鎮めるかだ。あれから結構時間経ってるからキレてる確率が高いんだよ。」

「それはお前の自業自得だろ。諦めて逝ってこい。」

「何か字が違うような気がするんだがまあいい。いいカルシエド、諦めたらそこで試合終了なんだ。だから俺は諦めず可能性に手を伸ばし続けるんだ。そう生還と言う名の可能性を掴むために。」

「いい心がけだが早くしなくていいのか？またあれから時間が経つ

ているぞ。」

何ですと!?!?ぐっマズい早く行かないと手遅れになってしまう。こ
こは一か八かだ!

「すみません ちょっと遅れちゃいまし…」

「このバカ弟子があああ!! (怒)」

ズゴオーーン!!

「たあああああ!?!」

ボタン ピク ピク

「……やはりこうなったか。」

……

「まったく何でお前はいつも通信いれてブリッジ到着まで30分以

「上も掛かる。」

「それは、その犬ところが妨害行動を。」

「我は一時間前にはもうブリッジに待機していた。お前を起こすようアルカール殿に頼まれ部屋に行つたまでだ。」

「……マジで?」

「だったらもうちょい早く起こせよ。」

「知らん」

「反省していないならもう一発いくぞ。」

「すみません!!反省しますからもう一発はご勘弁を。」(高速土下座)

「あんなもんもう一発喰らつたらマジでむこうに逝ってしまう。」

「はあ、もういい。全員揃つたからこれよりブリーフィングを始

める。」

実はこのキグナスの乗組員はここにいる2人＋一匹だけだ。二年前に起こった事件をサントアリオは事態をオモク視てヒーローを総動員して調査にあたらせている。異世界といってもその数は数千または数億と存在している。だから調査に割り当てられる人員も自然と少なくなるんだ。

「今から調査に向かうこの異世界にある組織が活動しているという情報が入った。その組織は活動パターンからすると俺達の追っている2つの組織のどちらかだということがわかった。」

「ということは、上手くいけばブラッククロスかオデッサのどちらかあるいは両方の目的も分かるということか。アルカールその情報の信憑性は？」

「照合した結果90%だ。今回は当たりかもしれん。」

「そうと分かれば早速調査に（WARNING
WARNING）てっ何だ！？いきなり？」

「今から調査に向かうエリアの周辺の次元湾曲線が乱れている。これは！？」

何かが転移して来るってことか。

「！まさかつ 綾人、アルカール、転移して来るのは特異点だ！」

「ルシエド間違いないのか？」

「この感じ間違いない。」

だとしたら急がないと

「綾人、ルシエド、今すぐこのエリアにいくぞ。転送の準備はできている。」

「了解」「心得た」

間に合ってくれよ。

side out

side ????

「ナンじゃここはぁー!?!?」

突然の出来事におもわず叫んでしまったがこれは仕方がない。だつて本当になにが起こったのか分からないからしょうがない。

「一体どうなってるの? 変な歪みに巻き込まれたと思ったら知らない土地になんか跳ばされてるし。」

そう僕は、学園からの帰りに変な歪みを見つけ何かなと思ひ少し近づいたら歪みに引き寄せられ、気づいたらこんな事になっていた。

「ここ本当にどこだろ? 携帯は圏外で連絡とれないし財布の中身もカラだし、はぁ〜。」

とりあえず考えても仕方がないのでとりあえず僕は歩き出した。歩いていればその内誰かにあえるだろう。そしたら事情を説明して知り合いに連絡を取れるようにしてもらおう。そう考えてたら、大きな爆発音が聞こえた。

「何!? 何の爆発!?!?」

音の感じからして結構近くだ。もしかしたら誰かいるかもしれぬ。闇雲に歩くよりはましかと思ひ僕はその場所に脚をはこんだ。

「あの人達なんなんだろ？何かの撮影かな？」

狼煙が上がっていた場所に着いてみるとそこには甲冑を纏った銀髪の男に全身黒タイツの人達が居た。

なんか怪しい集団見ただけと今はそんな事言ってられる状況ではないので僕は声をかけた。

「あの～すいません。」

「！？誰だ。」

「実は道に迷ってしまいました、ここってどの辺何ですか？」

「なるほど、そういうことか。いいだろう案内しよう。」

「ほんとですか！？ありがとうございます。いやぁ～助かりました。1人じゃ心細かったんで。」

いい人達で良かった。これで帰れるよ。

「あの世えな。」 ザシユッ！

.....えっ.....

「じはぁ!？」

何がどうなってるの? 何で僕は血を流してるの?

「まだ息があるか、すぐにトドメを刺してやる。安心して逝くが
いい。」

身体が痛くて動けない。当然だ。腹を刺されたんだ、動けるはずが
ない。

「この場に居た不幸を呪うんだな。」

そう言っつて銀髪の男は巨大な爪の着いた腕を僕に振ろそうとしたそ
の時

「シャイニングキック!」

突然黒い何かが銀髪の男をぶっ飛ばした。

「ぐっ、何者だ!？」

「私は正義の使者 アルカール。ブラッククロス四天王シュウザ私
が相手だ。」

助けが来た。その安心感からか僕の意識はそこで途絶えた。

side out

第2話 バカの来訪 ピンチな時現れるのは正義の味方（後書き）

明「ちょっと！？僕の出演これで終わり！」

そうだけど何か？

明「何か？じゃないよ！出てきて早々殺されるって僕とんだけ不幸なの！」

でもこれって内容は違っけど根本的な部分は同じなんだよ。

明「何と同じなの？」

元ネタ。つまりサガフロンティア。

綾「あく確かに。主人公の1人のシナリオの最初はこんな感じになるんだよな。」

アルカールが出てくるのも原作準拠だしねえ。明久とりあえず受けいれる。

明「受け入れられるかー！！！」

綾「取りあえず次回に続きます。」

第3話 ピンチをチャンスに。俺、参上！（前書き）

綾「今回はシユウザ達とバトルだな。」

そうだね…。はあゝ

綾「どうした作者？」

戦闘描写が難しい。どう書いたらいいか分からん。

綾「それに関してはこれからしただろ。ところで作者？」

何？

綾「明久はどこに居るんだ？さっきから見かけないが？」

ああ明久の奴はそこでふて寝している。

綾「なぜに？」

自分の扱いがひどいと言っていじけてこうなった。

綾「そうか。ならちょうどいい。作者、聞きたいことあんだけど。」

本編の後ならいいよゝ

綾「そんじゃ後で聞くか、それでは本編をどうぞ。」

第3話 ピンチをチャンスに。俺、参上！

キグナスから転送して来た俺達はルシエドの誘導により転移してきた特異点の元に急いでいた。特異点については近い内に作者が説明するはずだからここでは割愛する。あとなんでルシエドが特異点を感知できるのかは俺も知らない。本人が「時がきたら話す。」の一点張りで話してくれない。ただ特異点の身に何か遭ったら大変なことになるらしい。と、いろいろ考えていたら大きな爆発音が聞こえた。

「今の爆発は一体！？結構デカかったが何かの実験か？」

「恐らくな。事前に調べてみたがこのエリア周辺は無人地帯だ。兵器の実験場にはうってつけた。」

「だが今は特異点を優先する。早く見つけて保護を・・・！！まずいぞ、特異点がその実験場に向かって移動しているぞ！？」

「なっなんだってー！ー！？」 と、今はシリアスパートだからネタはこれぐらいにしとくか。」

「最悪な展開だな。このままじゃその特異点やられるぞ。」

「スピードを上げる。私とルシエドが先行する。ルシエド、誘導してくれ。」

「心得た。お前は私の気配を感知してついて来い。」

「分かってるよ。お前等の速さにはまだついていけないからな。」

それだけ会話を終えて俺達はペースをあげた。アルカールとルシエドに至ってはもう目の前からいなくなっていた。いやっだから速すぎだって。とりあえず俺も急いだ。

＼side out

＼side アルカール＼

ルシエド誘導のもと私達は先行していた。そして、例の実験場らしき場所に到着した直後目にしたのは少年が銀髪の男に刺され少年は血を流し倒れた場面だった。くっ遅かったか。

「アルカール殿。特異点の命の鼓動は止まっていない。」

そうルシエドが答えた。だが、ひと安心する暇もなく銀髪の男はトドメを刺そうとしていた。そうはさせん！

「シャイニングキック！」

私の繰り出したヒーロー技「シャイニングキック」を喰らい奴は後ずさった。私は奴の顔を見て思いだした。奴はブラッククロス四天王の1人シユウザだった。

「ぐっ、何者だ！？」

「私は正義の使者アルカール。ブラッククロス四天王の1人シユウザ、私が相手だ！」

「アルカールだと！サントアリオのヒーローか！？」

（ルシエド殿、その少年を頼む。）

（心得た。アルカール殿も気をつけてくれ。）

シユウザの注意を私に向けさせその隙にルシエド殿が特異点の少年を安全なところまで運ぶのが目的だ。

今は彼の保護を優先する。

「おっと。そのガキを助けようとしているみたいだがそれは無理だ。」

「気づかれた！？だが何が無理なのだ？」

「目撃者は始末する。そのガキだけではなくお前等全員をな！！」

その言葉が合図なのだろう。私達は戦闘員達に囲まれ逃げばを失った。

「まだ数がいたか。」

「伏兵は戦術の基本だ。切り札を用意していて当然だ。お前1人とその犬一匹だけでは死にかけのガキを守りながら俺達を相手にするなど無理な芸当だな。」

確かに。私とルシエド殿だけでは少年を守り通すことは難しいだろう。だがコイツはミスを犯した。

「フフフッ。」

「なにがおかしい？それともこの絶望的な状況に笑うしかなかった？」

「確かに絶望的に見えるかもしれんがお前は一つ勘違いをしている。」

「何？それはどういう（ドカッ バキッ）なっ何者だ！？」

突如、私達の後ろにいた戦闘員が倒された。そこにいるのは1人の少年。

「やっと来たか。」

「そういうなって。タイミング的には完璧だろ。」

そう言ってやつは例のアレをやる見たいだ。まったく、あいつはどんな状況でもお構いなしみたいだな。

「俺、参上！！！」

歌舞伎のようなポーズをとりバカ弟子は名乗りを挙げた。

side out

side 綾人

やっと追いついたと思ったら2人が黒タイツの戦闘員に囲まれていた。なんでいきなりピンチな状況になってんの!?! まあ落ち着こう。今は状況を把握するのが先だ。

見たところあいつらは俺の存在には気づいていない。このアドバンテージはかなり有利だ。奇襲を仕掛けるなら理想的な状況だ。あとは奴らの戦力がこれで最後なのかが重要だ。こっちが今使える策は俺の奇襲により敵戦力の攪乱しかない。奴らにまだ隠し玉が有る場合こっちが不利だ。だからまだ仕掛けるわけにはいかない。どうする?

「まだ数がいたか。」

「伏兵は戦術の基本だ。切り札を用意していて当然だ。・・・」

なるほど、それは言いことを聞いた。なら俺が取る行動は決まったな。

「それじゃ仕掛けますか。」

俺はアルカール達の後ろを囲んでいる戦闘員に狙いをだめる。数は3人。速攻でキメる。

ドカッ バキッ

「やっと追いついたか。」

「そういつなつて。タイミング的には完璧だろ。」

戦闘員は声をあげる暇もなく倒れた。全部急所に当ててるから当然だ。奇襲は成功。ようやく奴らは俺の存在に気づいた。だったら派手にやらせてもらうか。今回はこれでいくぜ！

「俺、参上！！」

……決まったー！！電王はやっぱりテンション上がってくるぜ！

「なんで歌舞伎の真似事などしているのだ綾人？理解しかねる。」

「何が歌舞伎だってクソ犬！今すぐ俺と東　と電王に謝罪しろ！！」

「知らんそんな事。さっさとこいつらを片づけるぞ。」

ぐっ　確かに今はこのシヨッカー戦闘員もどき共を片づける方が先だ。こいつら倒したらこの犬っころはシバく。そう判断した俺はベルトのホルダーに付けてある4つのパーツを組み立て始めた。

「キイツ！キキイツ！」

それをチャンスと見たのか戦闘員共が襲いかかろうとするが遅い。俺は組み立てたそれで奴らを斬り伏せた。そう、今使っている武器は仮面ライダー電王が使うデンガツシャーを使っている。勿論本物ではない。本物に限りなく近づけたデンガツシャーもどきだが完成度は本物と変わらない。

「また特撮の影響か？飽きないやつだ。」

「何言ってる？　どんな状況にも対応できる万能武器だぜ。」

ルシエドとそんな会話をしながら戦闘員を蹴散らしていく。んっ、

2人ほどシユウザの援護に行こうとしてるな。俺はすぐにデンガツシヤーを組み換えソードモードからガンモードに組み換え戦闘員を撃ち抜く。

「よそ見してると撃たれるぞ?」

「もう撃っているだろ。・・・とりあえず戦闘員は片づいたようだな。」

「おう。あとはシユウザだけだな。」

戦闘員を蹴散らした俺達はシユウザと戦っているアルカールの援護に向かおうとした時、アルカールがこっちに戻ってきた。どうやら逃げられたらしい。戦術は三流の癖に逃げ足は一流なやつだな。

「すまない。逃がしてしまった。」

「まあ仕方ないんじゃないか。特異点を助けられただけでも充分すぎるだろ。」

「その特異点だが非常にマズい状況だ。このままでは助からんぞ。」

うそー！？あいつら追っ払ったのにまた厄介な事になってる！？
そういえばその特異点で重傷だったけ？応急処置するの忘れてた！
――！！

「どうすんだよ！？今からキグナスに戻るにしてもここは次元境界
線が不安定で転送できないぞ。転送して来たポイントまで戻るに
しても距離があるぞ。」

「・・・一つだけだが助ける方法がある。」

「それってアレのことか？でもそれは委員会の許可がないとやっ
たらいけないんじゃないのか。」

「だが一刻を争う状況だ。現状これしか手が無い。責任は私がとる。
」

「わかった。なら状況報告は俺がやっつく。緊急性を強く主張して
な。」

「すまない。面倒を押しつけてしまって。」

「俺が同じ立場でも同じ事をするぜ。師匠。」

「そうか。」

そしてアルカールはそれを行い特異点は助かった。特異点をキグナスに収容し、一度報告のためにサントアリオに戻ることにした。

第3話 ピンチをチャンスに。俺、参上！（後書き）

綾「いや、電王は楽しかった。」

それは何よりだ。所で聞きたいことって？

綾「電王が楽しいもんですっかり忘れてた。そんじゃ作者質問。」

何かな？

綾「明久の世界つまりバカテスの世界が詳しく書かれてないけどなんでだ？」

ああ、それはちょっと理由があってそうしてるんだよ。

綾「その理由って？」

詳しくは次回の後書きで。

綾「って、先延ばすのかよ。まあいい。それでは次回をお楽しみに。」

「ご意見・ご感想などきてくれたら非常に嬉しいです。」

第4話 バカと邂逅そして決断（前書き）

今回の話は明久に起こった出来事とアルカールが行ったアレについての説明の話です。

綾「ところで前の後書きで言っていた理由は何なんだ？」

それはまた後で

綾「結局先延ばしかよ。」

第4話 バカと邂逅そして決断

俺達は今サントアリオのヒーロー委員会の本部にいる。先日の調査の時に起こった出来事についてとその時にアルカールが特異点に対してやった事への報告をするためだ。そして、今その報告を終え俺達は本部の医局に向かってる。先日保護した特異点が目覚ましたらしい。詳しい話を聞くためとアルカールが行ったアレについてを説明しなければならぬからだ。

「例の少年だが、目を覚ました直後は酷く混乱していたようだが今は落ち着いてるそうだ。」

「まあ混乱するのも無理ないだろう。いきなり訳の分からない土地に跳ばされて、マズい物見たからとりあえず死んで みたいな感じのノリでDSの甲冑野郎に殺されかけて、次に目が覚めれば「知らない天井だ。」と言ってまた訳分からん所に居るんだからな。しかたないだろ。」

「まあいろいろとツツコミたいところがあるが一つ聞きたい。」

「そうだな、我も聞きたいことがある。」

「何をだ？アルカール、ルシエド。」

「何故シユウザがドSだと分かるんだ？」

「えっ、だってあいつって見た感じ身体改造されてるっぽいだろ？それに自分の策がうまくいっただけでもう勝ったように態度デカくなつたしそういう奴の性格は大概ドSと相場が決まっている。」

（あくまでも個人の見解です。シユウザがSなのはホントですが、詳しくはWikipediaで）

つと、こんな感じな会話をしながら歩いていたら医局に到着した。受付で部屋を聞き手続きをして部屋の前に到着。さあ〜ってどんな奴何だろうな？

＼side out＼

＼side 明久＼

目を覚ましたら知らない天井があつた。ここはどこだろうか？それに僕はどうしてこんなところに居るんだろうか？思い出そうとしても何も思い出せない。分かっているのは自分の名前と頭がバカな事だけ。・・・自分で言つてて何か泣けてきた。最初は訳が解らず混

乱したが今は少し落ち着いてる。今日は調査員の人と話聞くために面会に来るらしい。なんでも瀕死の僕を発見して保護してくれた人達らしい。どんな人達だろう？まずはお礼が言いたい助けてくれてありがとう、って。そんなことを考えていたらドアの通信機が鳴りだした。

「ヒーロー委員会から聴取をとりに来た者だが入っても大丈夫だろうか？」

ヒーロー委員会？変わった名前だな。とりあえず返事をしないと。

「あっはい大丈夫です。ロックは掛かってないのでどうぞ。」

「そうか。それでは失礼する。」

そう言って入って来たのは黒ずくめの格好をした昔のヒーロー見たいな人と犬？と僕と同じくらいの年の男の人だった。

「ヒーローばいじゃなく正真正銘のヒーローだ。」

「犬ではない。ケルベロスだ。」

「人の心をいきなり読まないでください！？と言っか犬が喋ってる
——!？」

どうやら僕はとんでもなく変な所に来てしまったのかもしれない。

｝ s i d e o u t ｝

｝ s i d e 綾人 ｝

ある意味衝撃的なファーストコンタクトを終えた俺達は聴取をとり
そこから現状を整理している。まず、特異点の奴の名前は吉井
明久と言っらしいが厄介のことに自分の名前以外ほとんど覚えてい
ないらしい。医者が言うには精神的に強いショックを受けてしまい
記憶の一部を無くした所謂記憶喪失というやつだ。本人が何も覚え
ていないから何故あの世界に跳ばされ、実験場で何を見たのか分か
らずじまいだ。

「どうする？本人が何も覚えてないんじゃ元の世界に帰せないぞ？」

「それに関しては彼に話しがある。いいかな吉井 明久。」

「あっはい。何でしょうか？」

「君には二つの選択肢がある。一つはこのまま保護を受けて記憶が戻るのを待つ、もう一つは私達と共に強大な悪と戦うみちだ。」

「あのちょっと待ってください。一つは分かりますけどもう一つの戦うってどういうことですか？」

「それについて今から説明をする。」

明久にこの世界や異世界そして今起こっている事を説明した。この世界の外には超空間が広がりそこには別の世界が泡つぶのように無数に浮いているという。これを多次元世界マルチワールドと呼ばれるしているらしい。

そしてその多次元世界を行き来する「リージョンドライブ」という技術を使い多次元世界の平和を守り続けているのがこのサントアリオという世界である。

「えくと、つまり？」

明久のやつ話についていけず頭がショート寸前だな。

「簡単に例えるならここは光の国で、俺達はウルトラ警備隊見たいなものだ。」

「その説明ではわかるのはお前ぐらいだ。」

「そもそも別の世界の人間にそんな説明ではわかるはすが・・・」

「なぐんだ、そういう事わかりやすいね。」

「「そしてお前はその説明でわかるのか!?!?」」

何を驚いてるんだ、このオッサンと犬ころは。ウルトラマンは偉大なんだからわかって当然だ。

「ん、明久。お前ウルトラマンを知ってるのか?」

「うん。昔、テレビで再放送とかよく見てたからね。」

やっぱりウルトラマンは偉大だ。別の世界にも存在しているなんて。

「なあ、仮面ライダーも知っているか?」

「知ってるなにも毎週日曜は欠かさず見ているよ。」

仮面ライダーも偉大だった。特撮パネエ！！

「オホン。特撮談義はそれくらいにしてそろそろ答えを聞きたいんだが。」

おっと話が逸れてしまっていた。

「あのお、僕は見ての通り普通の人間なんですけど、一緒に戦える力なんてありませんよ。」

まあ、普通ならそうなのだが。実は明久は特別な力を持っているんだ。

「いや、君は力を持っている。正確には持たせてしまったというベキか。」

「えっ、どういうことですか？」

「君が重傷を負い瀕死状態だったという話は聞いているだろ？」

その質問に明久は首を縦に振った。

「君の命を救うにはその時の現状ではその方法しかなかった。」

「その方法ってなんですか？」

「君に我々と同じヒーローの力を与えることだ。」

そう、これがあの時アルカールがとった方法だ。本来ヒーローの力を与えるにはヒーローになる素質、資格があるのかを判断して最終的にヒーロー委員会が決定をくだし与えるか与えないかを決める。明久の場合は適正を調べる時間すらなく一刻の猶予もなかったからだ。

「だから君にも戦える力がある。決めるのは君だ。選んでくれ、力を捨て記憶が戻るまでここにいるか、力を使い強大な悪と戦うかを。」

明久は少し考えて結論が出た見たいだ。

「……僕も戦います。」

「それでいいのか？辛く厳しい茨の道だぞ。最悪の場合、命を落とすことなる。それでもいいのか。」

「はい。いつ記憶が戻るか分からないし、アナタ達について行った方が記憶が戻る可能性があると思うんです。それに、さっき言っていた組織たちがいるんな世界を襲っているなら僕のいた世界も襲われるかもしれない。戦える力があるなら僕はその力を使って世界を守りたいんです。」

「覚悟はあるようだな。わかった君の決断を尊重しよう。私達と一緒に戦ってくれるか。」

「はい！よろしくお願いします！」

「これから賑やかになるな、俺は神薙 綾人よろしく頼むぜ明久。」

「ルシエドだ。」

「こちらこそよろしく綾人、ルシエド。」

こうして新たな仲間が増えた。そして俺達の戦いは次のステップへ進んだ。

第4話 バカと邂逅そして決断（後書き）

明久が仲間になった。

綾「なんでRPG風にいつてんだ？にしてもなんで明久を記憶喪失なんて設定にしたんだ？」

ああそれはね、この話の中でのバカテスの世界は原作とは少し違う設定でいこうと思つて今ネタを構想中なんだよ。

綾「なる程。もしかして記憶喪失にしたのはいろいろ後づけしやすいようにする為の措置か？」

そゆこと、だから記憶失う前も細かく描写してないからね。

綾「理由はわかったが、その肝心なネタの方はどれくらいできてるんだ？」

それがさっぱり。

綾「ないのかよ！？よくそんなに書くきになつたな。」

仕方ないだろ。そのためのヒロインのオリキャラのアイデアが全然浮かばないんだから。

綾「そういえば明久の相手つて原作のあの2人じゃないんだよな。なんか理由でもあんのか？」

個人的な意見だがあの2人はあれが低いから。

綾「あれって？」

女子力

綾「言い切ったな。ファンを敵にまわすつもりか？」

あくまで個人の見解だけだね。確かにキャラは立っているけど他のヒロインと比べたら女子力が低いんだよね。

綾「ちなみに作者が女子力が高いと思うキャラって誰なんだ？」

歌姫とか紅の双子とかちいさい幼なじみ2人とか

綾「それって作者の大好きな作品のキャラじゃないか。」

ここに登録する前から見ている作品のキャラ達です。

綾「まあ、確かにこの人達はあの2人と比べると女子力高いな。わからんでもない。」

だろ。

第5話 新たな仲間と新たな展開（前書き）

今回は明久の使う武器を選びにある場所へ行きます。

明「それってどこなの？」

あれ？明久、くたばったんじゃないの？

明「ちよつと！？勝手に殺さないでよ！？」

ごめんごめん。冗談だよ。

明「まったくもう、何時までもいじけるわけにはいかないからね。とりあえず頑張ることにしたの。」

綾「あれ？明久なんで現世にいるんだ？あの世に逝く道から迷ったのか？」

明「2人とも嫌いだー！！！」

おーい明久、どこ行くんだ？

綾「やっぱり面白いやつだな明久。」

ほどほどにしときなよ

綾「わかってるって。そういや今回は新キャラが出るみたいだな。どんな奴？」

それは見てからの楽しみで。

綾「りょーかい。それでは本編スタート。」

第5話 新たな仲間と新たな展開

あれから3日がたった。明久もケガが治り医局を退院した。今日は新たに仲間になった明久が戦闘で使う武器を探すために俺達ははある工場に向かっていた。ちなみにアルカールは会議に出ているためここにはいない。

「ねえ綾人、今から行く工場はどんなところなの？」

「中島製作所といって色々なメカや武器の開発している工場で俺もよくお世話になっている所だ。」

俺の使っていたデンガツシャーもどきもその一つだ。最初に来たのはアルカールの弟子になってまだ間もない頃だった。俺が社長や社員の人達に電王の映像を見せて製作の依頼を頼んだところノリノリで製作を引き受けたことがキツカケでよくお世話になっている。

「社長も社員もいい人達ばかりだぜ。俺が技術を勉強したいって言った時も研修生として働きながら教えてくれたからな。おかげで色々なメカや武器の特徴とか整備も出来るようになったからな。」

「そうなんだ。ますます楽しんできてきたよ。」

明久のテンションも上がってきたな。俺達はワクワクしながら目的地を目指した。そして数分後、目的地に到着した。

「ここが中島製作所か。思っていたほど大きくはないね。」

「社長の意向で少数精鋭でやっているからな。けど技術力ならかなりの物だぜ。」

そう言っただ俺達は工場の中におじゃました。すぐに見知った顔を見つけたので俺は挨拶をしに行った。

「こんちわ正太郎さん。景気の方はどうですか？」

「おお綾人久しぶりだな。調査の方は終わったのか？」

この人はこの社長、中島正太郎さんだ。気さくな人で社員全員から信頼されている人だ。

「そつちの子は新入りかい？」

「あっ、はい。吉井 明久といます。よろしくお願いします。」

「はっはっはっ、そんなにかしまらなくてもいいよ。こちらこそ宜しくね。」

「はい。ありがとうございます。」

「ところで今日は何用だい？新人さんがいるから大体は読めるが？」

「ご名答。今日は、明久の使う武器を選びに来たのと、後は俺の私用でな。」

「また何か作るきか？特撮ものに影響されすぎだぞ綾人。」

「うお！？ビックリした。居たのかルシエド？」

「我は始めからいたぞ。」

そついや今回はコイツ一言も喋ってなかったからスッキリ存在を忘れてた。

「今回は違うよ。アイツの修理が終わったか確かめに来たんだ。」

「ああそれなら終わってるよ。後で起動確認を行う予定だったから問題がなかったら連れて帰ってもいいよ。」

「そうですか。なら先に明久の件を終わらして後から見に行きます。」

「そうすると良いだろう。じゃあまた後で。」

「はい。行くぞ明久、ルシエド。」

「あつ、うん。」

明久を連れて俺達は武器保管庫に足を運んだ。その途中、明久が俺に聞いてきた。

「ねえ、綾人の私用って何なの？」

「ああ、それは後のお楽しみ。ほら、着いたぞ。」

俺は保管庫のドアを開けて中に入る。保管庫の中はそこらじゅうに武器が飾られ保管されている。明久の奴を見てみたら口を大きく開けて驚いている。俺も初めて来た時はこんな感じに驚いたもんだ。

「いつまでも驚いてないで早く選んだらどうだ？」

「・・・はっ。ごめん。あまりに凄かったんでつい、でもいっぱいあってどれにするか迷うなあ。」

確かになここには剣やら銃はてはロケットランチャーまであるからな。俺の場合はオーダーメイドで色々造ってもらったからなあ。今では、自作がほとんどだが。

「剣もカッコイイし銃も棄てがたいなあ。どっちも使える武器って無いのかな？」

「えっ、あるぞ。そういう武器。」

「本当に！？ねえねえどれっどれ？」

「ひとまず落ち着けて、確かこの辺に・・・あった。これだ。」

そうやって俺が持ってきたのは「ハンドブラスター」という武器だ。光線兵器の1つだがこれは複合型兵器だ。遠距離の戦闘はレーザービームで、中、近距離での戦闘はレーザーブレードにモードチェン

ジでき、周囲の敵に対して強力な電撃を浴びせるパラライザーが搭載されている万能兵器だ。

「そうだな、俺がレクチャーしてやるからよく見てる。」

そして、俺が簡単に使い方を教えたら、明久はこいつを気に入り武器はこれにするみたいだ。

「綾人ありがとう。おかげでいいのが見つかったよ。」

「気にすんな。それより早く使いこなせるようなれよ。」

「もちろんさ。よし頑張るぞー。」

明久の武器選びが終わり、俺達はもう1つの用事の為に作業場へと向かった。そして作業場に着いたら一体のロボットがこちらに近づいてきた。

「お久しぶりです。マイスター綾人。RMI-A01リブアイブ、これより任務に復帰します。」

「すっかり直ったみたいだな、またよろしくなリブアイブ。」

このロボットはRMI A01リブアイブ。中島製作所が開発した医療用ロボットだ。俺をマイスターと呼んでいるのは俺がこいつの生みの親だからである。ここで研修をしていた時に俺がロボットを造ってみたいと設計図を書いたのが始まりでそれを中島製作所のみんなが見たらこの設計図を譲ってくれといってきたのだ。なんでも俺のアイデア全開の設計図はロボット業界の技術力を大きく向上させる代物らしい。

俺は設計図を譲る代わりに完成したコイツを貰うのを条件にしてリブアイブを完成させた。

「明久、紹介する。俺達の仲間メンバーのサポートをやってくれる医療用ロボットのリブアイブだ。」

「はじめまして吉井　　明久様。RMI A01リブアイブと申します。以後お見知りおきを。」

「うん、はじめまして。あと様はつけなくて明久でいいよりリブアイブ。」

「了解しました。改めてよろしく申し上げます明久。」

「うん。こちらこそよろしく。」

互いの自己紹介が終わり、リブアイブの引き取り手続きを終えた時、アルカールから通信がきた。

「こちら綾人。おっさん会議は終わったのか？」

「綾人、今すぐルシエド殿と明久を連れてすぐに戻ってこい。緊急事態だ。」

「何かあったのか？」

「詳しい事は後で話す。今は早くこちらに戻ってきてくれ。」

そして通信が切れた。アルカールの声から察するに結構ヤバい事態なっているかもしれない。

「明久、ルシエド、リブアイブ、アルカールから今連絡があった。すぐに戻ってきてくれって。」

「何かあったの？」

「詳しい事は戻ってから話すそうだが、急いで戻るぞ。リブアイブ復

「帰早々キツイ任務になるかもしれん。」

「問題ありませんマイスター綾人。」

「そつか。行くぞみんな。」

そして俺達はアルカールのもとに急いで戻るために走り出した。

第5話 新たな仲間と新たな展開（後書き）

今回は紹介を交えて新キャラのリブアイブに来てもらいました。

リ「はじめまして読者の皆さんR M I A 0 1リブアイブと申します。

」

そしてリブアイブの詳細はこちら

名前

R M I A 0 1リブアイブ

元になつたキャラ

サガフロのDr B J & a m p ; k

外見

元ネタと同じ（気になる方はニコ動やY O U T U B Eで検索を）

綾人が設計とA Iの構築を担当して中島製作所の全面協力のもと完成した医療用ロボット。完成した後は綾人達の調査メンバーに加わり任務を共にこなしてきたがとある任務で原住民の姉弟を助ける為に自分の身体を盾にして姉弟を守ったがそれが原因で一時機能停止状態になり修理の為に中島製作所に預けられた。

以上がリブアイブの紹介です。

綾「名前に関しては元ネタと変えてるみたいだけどなんでだ？」

元ネタの名前が呼びづらいんじゃないかと思って変えてみました。

明「確かにこっちの方が呼びやすいしね。医療用ロボットなんだしいんじゃないの。」

医療用だけドリブアイブは普通に戦闘力高いよ。

明「えっなんで。医療用なんだから回復しか出来ないんじゃないの？」

綾「それが出来るんだよ。ゲームでも結構強い部類に入ってるからな。」

（確かめる為にゲームをプレイする明久）

明「ちょっと待って！？これはいくら何でも強すぎでしょ！」

ガチで最終メンバーに組み込めるぐらいだからね。

綾「そんな意外と強いリブアイブも復帰して早々に次回からまた大変なことになりそうだな。」

明「一体何があったのか気になるね。」

そこんとも次回で分かるから。それでは次回をお楽しみに。

綾・明・リ「「「お楽しみに。」」」

第6話 ルシエド先生の特異点講座と旅立ちの時（前書き）

今回の話で特異点の説明が入ります。

綾「やつとかよ。プロローグから数えて8話めで説明入るって遅すぎるだろ。」

それは自分でもわかっているから言わないで！？色々突き刺さるから！

綾「今回はそれ以外にも何かあるらしいな。」

うん。いよいよ別世界に旅立ちます。

綾「だから旅立つまで遅すぎんだよ！この小説のタイトルなんだ？異世界道中記なのに全然旅立たないってダメ過ぎるだろ！！」

明「完全にタイトル詐欺でしょ。」

グツサリ グハッ！？ バタ！

綾「とりあえずくたばった作者は無視の方向で。」

明「それでは本編をお楽しみください。」

綾・明「本編スタートです。」

かつ勝手に殺さないで！

第6話 ルシエド先生の特異点講座と旅立ちの時

緊急事態だと言うことで急いで本部に戻った俺達はアルカールから何があったのか訪ねた。

「他の世界に入れなくなった？　どういう事だ？」

「何でも他の調査団が調査対象の世界に入ろうとしたら突然オーロラのような物が出てきたらしい。そのオーロラはバリアのような感じでリージョンシップの侵入を拒んだらしい。転移による侵入も試みたらしいが次元境界線が不安定過ぎてとても転移できる状態ではないらしい。」

「なるほどな。けどそれだけで緊急事態でおかしくないか？」

「どういう事なの綾人？」

「確かに変な現象かもしれないがそれだけで俺達が招集されるのはおかしい話なんだ。調査隊にもそれぞれ担当部署というものがある。基本は自分達の担当するエリアで起こった問題は自分達で解決するんだ。只でさえ人手不足なのに他の調査団をまわすなんて非効率だからな。それに俺達の担当は今ブラッククロスとオデッサの追跡調査だからな。その現象を聞いた限りでは奴らが絡んでいる可能性は低い。」

それはアルカールもわかっているはずだ。いくら二大テロ組織といってもそんな力があるとは考えずらいし、基本アイツらがやっていることは破壊活動やクスリの密売だ。ということは他に何かあるということだな。

「相変わらず鋭いな。確かにコレだけなら私達が招集される理由にはならない。本題に移ろう。さっき他の調査団の担当エリアにも同じような現象が確認された。私達のまだ調査予定のエリアも含めてな。」

やっぱりそういうことか。

また、面倒くさい事が起きたもんだ。

「そこで委員会はその原因を調べるための調査団を結成することにした。そのメンバーがお前たちだ。」

えっ？今なんて言った？

「おい。ちょっと待てオッサン。そういうのって経験や実力の高いヤツがメンバーになるもんだろ。俺はまだ2年ぐらいたし明久に関しては入ったばかりだ。それでメンバーに抜擢されるのはおかしくきるぞ。」

「そうだよ。アルカールさんならわかるけど経験がまだ浅い綾人や経験ゼロの僕が選ばれる訳がないよね。」

「それに関しては理由がある。それは……。」

「それについては我が説明するアルカール殿。」

なんでルシエドが説明するんだ？

「前に言っただろう時が来たら話すと。今回のこれはそれと関係している。」

「それって特異点のことか？」

「そうだ。そしてその時が今だ。そうだな、まずは特異点がどういうモノなのかから話そう。」

こうしてルシエドの説明が始まった。

特異点というのは全ての世界や宇宙を危機から救うためにアカシックレコードと呼ばれる存在が生み出す特殊な存在らしい。

特異点は様々な世界や宇宙に介入できその世界の力を自分に宿し行使できるらしい。

「今様々な世界で発生しているオーロラは世界に破滅の危機が迫っている予兆だ。このまま放っておけばその世界は滅びてしまう。そこでお前たち特異点の定番と言っわけだ。お前たちならあのオーロラを突破することができる。」

「そしてその世界でオーロラが発生する原因をつきとめ世界を破滅から救えということか。」

「そうだ。これは特異点にしか出来ないことだ。」

「ルシエド殿はいずれこういうことが起きるとヒーロー委員会に忠告していた。」

「だからこの事態を最初からわかっているって口振りだったのか。」

「説明は以上だ。何か質問はあるか？」

「それじゃ質問。メンバーはここにいる全員だけなのか？」

「いや、アルカール殿以外の全員だ。あのオーロラが発生した世界は特殊な力に守られている。特異点や我のような存在しか入ること

ができない。」

「だから私には別の任務が言い渡された。この異常事態でもブラッククロスやオデッサは活動を止めるとは思えないからな。ヤツらの追跡調査及び壊滅が私の任務だ。お前達の抜けた穴は補充に何人がキグナスに来る予定だ。」

「戦力的には厳しいが仕方ないか。でもキグナスはアルカール達が使うんなら俺達はどうやって別の世界にいくんだ？リージョンシップの空きはないだろ。」

「それについては問題ない。この時の為にヒーロー委員会が中島製作所に頼んで極秘に開発した船があるお前たちにはそれを使ってもらうことになる。」

マジで!?

面倒な任務押し付けられてやる気があんま出ない俺にとっては嬉しい情報だ。

新型のリージョンシップか、どんなんだろ？すっげー楽しみだ!!

「他に質問はないか？」

「もう一つ質問。何でルシエドは特異点の存在を感知できるんだ？」

「我もアカシツクレコードにより生み出された多次元世界を守護するガーディアンと呼ばれる存在だ。多次元世界に破滅の危機が迫った時に特異点を探し出す為にその存在を感知できるように創られた。共に戦い多次元世界を破滅から救うために。」

「なるほどな。そういう事情があったのか。教えてくれてサンキュー。質問はもう無いよ。」

「なら船の場所まで案内しよう。一応今は緊急事態だからな、準備が出来次第すぐに出発してくれ。」

こうして俺達は必要な物を各自準備してアルカールに案内され例の新型の船に向かった。

「これがお前たちが乗る新型のリージョンシップ「ロンバルディア」だ。」

案内された場所にあったのは白い船体に各所に青と橙のカラーリングが施された船だ。

ヤバいかッコ良すぎてまたテンションが上がってきたー！！
明久の方も目をキラキラさせて興奮している。

「よーし！早速これをバックに記念写真とるぞ。お前ら並べ」

「ラジャー」

「了解しました。マイスター綾人。」

ゴスッゴスツと俺と明久の頭に鉄拳が落ちてきた。痛い。

「お前達は何をやっている！？早く出発せんかバカモノ！！」

「いきなり何すんだクソジジイ！？最初に記念写真とるのは常識だろっが！！」

「そんな常識あるか！むしろ非常事態にそんなことしている奴の方が非常識だバカモノ！！」

そっつえば非常事態なのすっかり忘れていた。やっちゃったぜ

「その顔は忘れていたみたいだな。ならば思い出せるようもう一発いくぞ。」（ポキポキ）

「ちゃんとスツキリ思い出しました！！すぐに乗船します！！」

冗談じゃない!?

あんなのもう一発くらったら思い出すどころか記憶が全部吹き飛ばわ!!

初めてオッサンの拳骨を喰らった明久に至ってはあまりの威力に気絶してるからな。

今のでまた記憶喪失になってないだろうな?とりあえず気絶している明久を担いで俺は船に乗船した。

「やっと来たか。すぐに出発するぞ。早く自分の持ち場に着け。」

ルシエドに促されて俺は気絶している明久を空いている席に座らせ、俺も別の席に座る。

そつえば誰が操縦するんだこの船?操舵手がないが・・・

クルー全員の搭乗を確認しました。ロンバルディアこれより発進します。

「うおっ!?!何だ今の声?」

驚かせて申し訳ありません。ワタシはT260G。この船の管理を任されているAIです。この船の操縦はワタシが担当するようになっております。どうぞよろしくおねがいします神薙 綾人様

「どんだけ高性能なんだよこの船!？」

「キグナスでさえただのオートパイロットぐらいしか付いてないのに管制AI搭載の船だなんて豪華だな。」

「よろしくT260G。それじゃあ早速出発だ!！」

「了解。発進シーケンス開始します。3・・・2・・・1・・・ロンバルディア発進。」

そしてロンバルディアは多次元空間にむけて発進した。

第6話 ルシエド先生の特異点講座と旅立ちの時（後書き）

綾「異世界道中のはじまりだな。」

明「この段階に来るまで時間掛かりすぎだよな。」

言わないで、頼むから・・・

綾「作者？いや作者の皮を被ったクズか？」

誰がクズだ！？正真正銘の作者だよ！！

明「これは作者ですか？」

綾「いいえ、ただのクズ作者です。」

だからクズじゃないよ！？イジメか！？お前ら作者イジメて楽しいか！！

綾・明「うん。めっちゃ楽しい！！」

ふざけんなー！！！！

綾「まあ、ダメ作者イジメはこれぐらいにして今回の話に移るか。」

明「そうだね。ゴミ作者イジメはこれぐらいにしとこうか。」

グスン グスン

綾「今回も新しいやつが出てきたな。」

明「僕達の新しい船ロンバルディアとそれを管理するAIのT260Gだね。」

綾「ロンバルディアはワイルド勢でT260Gはサガ勢のキャラだが結構いじくられての登場だな。」

明「確かゲームだとロンバルディアはドラゴンでT260Gは主人公キャラの1人なんだよね。」

綾「作者なんでこんな感じで出したんだ？」

グスン 実は綾人達が乗る船のアイデアが浮かばなくてこんな感じにしました。

綾「結局そんなオチか。まあ仕方ないかダメ作者だし。」

もうやめて！作者のライフはとっくにゼロなの！？

綾「まあいいや。それで作者、次回は異世界に行くみたいだけどどんな世界にいくんだ？」

とりあえず仮面ライダーシリーズのどれかにしようかと検討中。

明「そうなんだ。他にはどんなところに行く予定なの？」

そうだね。候補はこんな感じかな。

- ・IZUMOシリーズ
- ・リトルバスターズEX
- ・Angel Beats
- ・fortissimoxa/Akkord:Bussvier
- ・FORTUNE ARTERIAL
- ・DOG DAYS
- ・リリカルなのはシリーズ
- ・とらいあんぐるハート3
- ・ギャラクシーエンジェル
- ・銀魂
- ・トリコ
- ・らきすた 陵桜学園(桜藤祭)
- ・スーパージョウキョウシリーズ
- ・スーパージョウキョウシリーズ
- ・サクラ大戦
- ・インフィニット・ストラトス
- ・勇者特急マイトガイン
- ・勇者王ガオガイガー
- ・バンブーブレード
- ・フルメタル・パニックふもっふ
- ・モンスターファーム
- ・咲-SAKI-
- ・中華一番

明「結構多いね。」

個人的には神楽学園記とIZUMOとリトバスとfortissimoxaは書いてみたいんだよね。

明「確か作者の好きなゲームだね。その4つは。」

そだよ。

綾「・・・おい作者、一つ質問。」

何でしょうか？

綾「候補の中に中華一番が入っているがどんな話にするきだ？あれって料理漫画だろ一応？」

あつ言い忘れてたけどこの小説はバトルオンリーものじゃなあから。

明「どゆこと？」

バトルオンリーだとクロスする作品が限られてバトル無縁な作品とはクロスしにくいからそういう作品の世界では違ったベクトルで勝負する予定だ。

綾「という事はこの場合は元ネタが料理漫画だから料理対決でもするの？」

まあそんな感じで。

綾「そういう理由があるなら中華一番があってもなんら不思議ではないな。」

そゆこと。名作はどれだけ時が流れても名作なのだよ。

明「綾人はこの中で行ってみたい世界と行きたくない世界ってある？」

綾「どっちともDOG DAYSの世界だな。」

明「どっちともていうと行きたいけど行きたくないって事だよねどゆ意味？」

綾「だってあんな小さくてモフモフした可愛くて丸い物体が大量にいるんだぞ！？もう夢の国じゃないか！俺の理性が持つ自信がない！」

明「ち、ちよつと興奮しすぎだよ！？少し落ち着いて。」

綾「作者。というわけで次の世界はDOG DAYSね。ハイ決定。」

あつそれは無理。

綾「なぜだ！？」

アニメこつちじゃ放送されてないし、DVDも持ってないしね。

綾「ふざけんなー！ー！！」

明「えーと、とりあえず次回をお楽しみに。」

戦闘能力 設定（前書き）

2人の主人公の能力についての設定です。

戦闘能力 設定

神薙 綾人

二年前の事件で焔の魔神ロード・ブレイザーと聖剣アガートラムをその身に宿したことにより身体能力が普通の人間よりも高くなっている。アルカールとゲンと呼ばれる人物から修行をつけてもらったことにより戦闘能力はかなりのものになっている。自作の武器を用いて戦う（そのほとんどがアニメや特撮に出てくる武器である）使う武器はその時の気分で変わる

剣技

- ・ 烈風剣（周囲の風を自身に集め風を纏いそれを剣撃にして飛ばす技）
- ・ 稲妻突き（雷を纏った剣で強力な突きを放つ技）
- ・ 二刀十字斬（二刀の剣で十字に斬る技）
- ・ かすみ青眼（敵の攻撃を紙一重で見切り二連の斬撃を切り返す技）
- ・ 濁流剣（5人に分身したかのような速さで標的を囲み一斉に切り抜ける技）
- ・ 無月散水（目にも止まらぬ速さで敵を切り刻み上空に切り上げ叩き落とす技）
- ・ 風雪即意付け（周囲に冷気を纏い標的を切り抜けその軌道に氷柱を発生させる技）

体術

- ・ スライディング（滑り込みけり抜く技）
- ・ バベルクランブル（標的を浮かし体位を変え身体を仰け反る感じ）

でホールドし空中から叩き落とす技)

- ・スープレックス(標的をホールドして頭から叩きつける技)
- ・ジャイアントスイング(標的をぶんまわし投げつける技)
- ・DSC(上記4つの複合技)
- ・当て身投げ(攻撃を受け流し相手を掴み投げ落とす技)

ナイトブレイザー

焰の魔神ロードブレイザーと聖剣アガートラムと人の心の力が合わさり奇跡的なバランスで均衡が取れたことにより誕生した。聖剣の力で抑制・制御された魔神の力と人の心を併せ持つ焰の黒騎士。人知を遥かに超えた絶対的な力と破壊の焰を秘めている。綾人が自分の中に眠る魔神の力とリンクして解放する事により変身する。

必殺技

・ナイトフェンサー(魔神と聖剣の力で形成した破壊剣。綾人の意志で自由に形成・分解が出来る。)

・バニシングバスター(魔神ロードブレイザーの焰の災厄の力の一端を解放する技。ただし体力を大量に消費し、使用した後は変身が解けてしまう諸刃の必殺技)

吉井 明久

綾人ほどではないが身体能力が高い。戦闘経験はあまりないが飲み込みが早く応用力もあり学習能力は高い。綾人曰わく修行と経験を積みれば化けるぐらいに強くなる可能性を秘めている。武器はハンドブラスターを使用する。

剣術

- ・飛燕剣（蒼い真空の斬撃を飛ばす技）
- ・天地二段（標的の頭上よりも高く跳び落下の勢いを利用した一撃を当て二撃目で切り返す技）
- ・神速三段突き（神速の速さで敵を突き抜け二撃目で上空に突き上げ三撃目で突き落とす技）
- ・月影の太刀（月が影で隠れるような軌道で斬る技）

体術

- ・爆碎鉄拳（渾身の力を込めた拳の二連撃を当てる技）
- ・金剛神掌（解放した気を手に集め接近し殴り気を標的の内部に放ち爆発させる技）
- ・鬼走り（地面を走るかのような強力な気を放つ技）
- ・ロコモーションG（標的に休みなく連続でスープレックスをかける技）
- ・スウェイバック（最小限の動きで攻撃をかわす技）
- ・スカイツイスター（天高く跳び身体を高速回転させ竜巻を起こし標的に突撃する技）

アルカイザー

アルカールより授けられたヒーローの力で明久が変身した姿。全身ツナギ型で青いマントを装着しユニコーンのような角がついた仮面を着けたヒーロースーツを装着している。このヒーロースーツにはサントアリオの超技術が詰まっており装着すると身体能力を大幅アップする。特殊な素材でできていてどんな攻撃を食らっても気絶しなくなり精神攻撃の類を一切受けなくなる。また、明久自身がポロボロ状態であっても変身してこのスーツを身に着ければ身体が全

快する機能も兼ね備えている。ただし、ヒーローの掟により人の前では変身できず正体がばれた時は記憶を消されるデメリットがあるが特異点の力によりデメリットは無くなっている。

武器

- ・レイブレード（所謂ビームサーベル）

ヒーロー技

- ・ブライトナツクル（強力なパンチ）
- ・スパークリングロール（上半身を半回させ右のパンチを当て素早く左のパンチを当てる技）
- ・フラッシュスクリュー（金剛神掌のヒーロー技バージョン）
- ・アルブラスター（強力な光弾を連続で放つ技）
- ・シャイニングキック（強力な飛び蹴り）
- ・ディフレクトランス（強力な三角蹴り）
- ・カイザーウイング（レイブレードを使うことで強化された飛燕剣）
- ・カイザースマッシュ（レイブレードを渾身の力で振り下ろす技）
- ・ファイナルクルセイド（ヒーローの力を解放し仲間を癒やす技）
- ・アルフェニックス（全身に炎を纏い特攻する必殺技）
- ・真・アルフェニックス（自信がフェニックスとなりターゲットの弱点を探して特攻する最強の必殺技）

戦闘能力 設定（後書き）

綾「見れば見るほどチートな能力だな。」

明「そうだよな。でもこれってゲーム通りなんでしょ？」

うん。この2人はそれぞれのゲームで反則的に強いからね。

綾「オマケに最強の剣術と体術も使えるっていいよチートだな。」

そう書いているけど君らこの中の技は殆ど使えないから。

綾「何でた？」

技はサガフロ形式で覚える予定だから。綾人はまだ烈風剣ぐらいしか使えない設定で、明久に関してはまだ戦闘経験ゼロだから何も使えない。

綾「ああ、それなら納得。」

明「僕って確か刺されただけで戦ってすらいなかったからね。あれ、目からしょっぱい何かが。」

まあこれから頑張れ。そうそう最初に行く世界決まったよ。

明「どこにしたの？」

仮面ライダーBLACKの世界。内容は構想中

綾「なつなんだってー！？こつしちやおれん今すぐ色々準備しなければ！？」

明「あつ、ちょっとそんなに慌ててどこ行くの？・・・って行っちゃったよ。」

あいつはBLACKメツチャファンだからね。

明「確か作者も好きだよね？」

うん。初めて見たライダーがBLACKだからね。今でも好きだけど。

第7話 訪問先は昭和の日本？悪と戦うブラックサン（前書き）

今回から仮面ライダーBLACK編に入ります。

明「いよいよ僕らも異世界デビューするんだね。」

そうなるな。・・・あれ綾人は？

明「そういえばいないねどこだろう?。」

まあ、その内来るでしょ。

明「そうだね。それでは異世界「仮面ライダーBLACK」編スタートです。」

第7話 訪問先は昭和の日本？悪と戦うブラックサン

多次元空間について俺達はこれから向かう世界についての情報があ
るか確認している。たがそこで意外な事がわかった。

「未開の世界？」

「ああ、そのオーロラが発生した世界だがまだ調査の手が届いてな
い世界みたいだ。」

サントアリオが総動員して色々な世界を調査しているがなにぶん数
が半端ないからな。未開の世界があってもおかしくはないんだが問
題は例のオーロラだ。

「ヒーロー委員会のデータベースにアクセスしてオーロラの発生し
ていた世界の座標を全部表示して見たんだがおかしなことがわかっ
た。」

「おかしな事？」

「オーロラが発生した世界は全部が調査の行き届いてない未開の世
界なんだ。」

そう。偶然なのか解らないが例のオーロラが発生した世界は未開の世界だけなんだ。
未開の世界だから当然情報は一つもない。だから用心して慎重に事を運ばなければならぬ。

「でもどの世界から行くの？発生した世界っていくつもあるんじゃないの？のんびりしていたら世界が大変なことになるんじゃないの？」

明久の疑問はもつともだ。俺も同じ考えだからな。

「それに関しては今は大丈夫だろ。我らが向かうのは今オーロラが発生している世界だ。」

ルシエドそう答えた。そう、今オーロラが発生している世界は3つだけなのだ。他の世界のオーロラは発生してからすぐに消えてしまったが調査団の船が入れない事実は変わらなかった。

「オーロラはあくまでも予兆にすぎん。オーロラがすぐに消えた世界はまだ消滅の危機に瀕してはいないだろう。」

「つまり、俺達は今オーロラが発生している世界に行くって事が。オーロラが消えなかったって事は危機が迫ってるって事になるからな。」

「そういう事だ。T260Gここから近いオーロラが発生している世界に向かってくれ。」

了解しました。ルシエド様。そのように進路を取ります。

こうして行き先も決まったので目的地に着くまで各自休むことにした。

俺と明久は俺の部屋で特撮鑑賞している。ふと明久が疑問に思い質問をしてきた。

「そういえばここにある物って全部地球の物だよね？綾人はどうやって手に入れてるの？」

「ああ、俺のいた世界の文化ってサントアリオには大人気らしくてな。調査団が長年に渡って色々データをコピーして持って帰っていたらしい。」

「それって完全に泥棒だよね。」

「俺もそう思った。まあ、今はそれに感謝してるがな。世界が無くなっててもこうやってまた見れるんだから。だが驚いたぞ、明久の世界が俺の居た世界とほとんど似ているって。」

そうあの日。聴取で明久が特撮を知っていて名前が俺と同じような名前の読みだったので俺はサントアリオにあった俺の世界の情報と映像データを見せた。結果は予想通り、明久はそれらを見て幾つか記憶を取り戻した。明久は地球の中にある国の日本に住んでいて学生生活を送っていたらしい。俺もそうだった。俺も地球に、日本に住んでいた。俺と明久の世界は限りなく似ていたのだ。

「でも、まだ大事なことを忘れているような気がするんだ。頑張っ
て思い出そうとしてるけどサツパリなんだよね。」

「ゆっくりでいいんじゃないか？そういうのは何かキツカケがあっ
てすぐに思い出すもんだろ。」

「それもそうだね。それに今から行く世界が僕の居た世界かもしれ
ないしね。」

それから少しして通信が入った。そろそろ目的地に到着するらしい
から俺達はブリッジに向かった。目的の世界の前にはオーロラが壁のよう
に立ち塞がっていたが、それにかまわず俺達は世界への突入を開始した。
ルシエドが言うには特異点の力で問題なく入れるらしい。

その結果、普通にオーロラを通過して侵入に成功した。目的の世界
の宇宙に侵入した俺たちはオーロラが発生している場所を発見した。

「どつやらあの場所に原因があるみたいだな。」

「でもどつやってあそこに転送するんだ？次元境界線が安定しないから無理なんじゃないか？。」

「いや、このまま転送して問題ない。転送する場所はこの世界が指定してくる。」

「えっ？それってどついう事なのルシエド？」

「それはあの場所に着いてから話す。時間が惜しい、行くぞ綾人、明久。」

「後でちゃんと話せよ。それじゃ船の方は任せたぞリブアイブ、T260G。」

「了解しました。マイスター達もお気をつけて。」

俺達は転移ポートに行き転送を開始した。ルシエドの言った通り座標が自動的に設定され俺達は転送された。

「どつやら無事に転送されたみたいだな。」

「ルシエドが大丈夫って言ったけど到着するまで怖かったよ。」

俺達はここかの林の中に転送された。身体にも異常はない。

「問題なくて当然だ。我々はこの世界にとってワクチンのような存在だ。転送を失敗させればこの世界が滅びの道を辿るのだからな。」

「なるほど。そういうことか。」

「????綾人どういう事?」

「つまりこういう事だ。この世界には破滅の象徴であるオーロラが現れた。それはなぜか?それはこの世界にとっての異物ようなものが侵入してきた。明久、人の身体の中に異物が入ってきたらどうなる?」

「えっ?それは身体が拒否反応を起こして病気とかに・・・あっ!？」

「気づいたようだな。今この世界はその謎の異物のせいで病気に掛

かった状態なんだろう。そして、病気を治すには薬が必要になる。その薬が俺達特異点ということだ。次元境界線が安定しないのはこれ以上外敵の侵入を許さない為だろう。答えは合ってるかルシエド？」

「それで正解だ。我々は世界を滅ぼすイレギュラーに対抗出来る唯一の存在だからな。」

「ところでそのイレギュラーはどうやって探すの？」

「ああ、それは……どうやって探すのルシエド先生？」

「イレギュラーはこの世界で強い力を持つ物を襲う。我々はその者を守りつつイレギュラーが出て来るのを待ちそれを討つのが我々のやるべき事だ。」

「どうしてイレギュラーはその強い力を持つ人を襲うの？」

「それは世界を滅ぼすのに一番の障害になるからだ。」

「なるほどな。でも守るにしてもそれが誰なのか分からないし、それに俺達はこの世界の事を知らなすぎる。まずは情報を集めた方がいいだろう。」

「無論そのつもりだ。この先の道を行けば街がある。そこで情報を集めよう。」

「どうしてそんなことわかるのルシエド？」

「我は欲望を司るガーディアンだ。欲望を探知するなど造作もない。この先から様々な欲望が入り混じっている気配を感じた。そこに人間が群がっているという事だ。」

「それじゃあ出発するか。」

俺達は移動を開始した。少し進んだ辺りで出口が見えてその先に進んだら街があった。だが俺達は驚愕したそあった街の造りは俺と明久がよく知る街に似ていたのだ。あのそびえ立つ電波塔は

「えっつそ。」

「ここは・・・」

そうここは

「日本！？しかも東京！？」

.....

あまりの衝撃に動揺した俺と明久だがなんとか落ち着き街で情報収集を開始した。もしかしたら明久の世界かと思ったが情報収集をしている内にある出来事がわかり、この世界ではないと判断した。

「最初見た時はもしかしたらと思ったが違うなここは。」

「.....うん。ここではないね。」

「この世界は似ているのだから？なぜ違つとわかるのだ？」

「いやっ確かにここは日本だけど違つんだよ決定的に。」

「うん。そうだね。だってこの日本.....」

そうこの日本は

「昭和の日本だもん。」

そう、昭和なんだよね。落ちている新聞拾って見てみたら昭和63年て書いてあった。それによく見たらなんか家や店の造りが微妙に古いし最近のニュースがドラクエ？発売で社会現象に発展だもんな。

「でもまあタイムスリップしたみたいな感じで結構楽しいな。」

「僕ら平成生まれだしね。昭和の時代を体験できるなんてまずないからね。」

「そんなものか？それよりも気になることをさっき耳にした。」

「最近起こっている児童連続誘拐事件のことか？」

「そうだ。ただの誘拐事件なら我々が干渉しなくても問題はないが、この事件だけは何かを感じる。」

「そうだな記事を見る限り明らかに手口が人間技じゃない。」

「どついう事なの二人とも？」

「ただ一人一人誘拐するなら誰にでも出来るかもしれないが、この誘拐犯は一夜に家にいた子供を家族や身内に姿を見られる事なく六人以上も誘拐している。それにさっきテレビで流れたニュースでは日が明るい内なのにもかかわらず子供が誘拐されている。犯人が人間で正気ならこんな事は絶対にしない。誰かに見られる可能性が高いからだ。なのに子供達を誘拐し続けている。」

「確かにそんな事は人間には出来ないよね。」

「これは調べてみる価値はあるかもしれない事件だ。とりあえず昨日誘拐事件のあった現場付近を調べてみよう。なにかわかるかもしれない。」

「了解。いつちょやりますかー。」

「それに攫われた子供達の親御さん達も不安がっているだろうし、子供達もいきなり攫われて怖い思いをしている。絶対に解決しよう。」

「そして俺達は事件のあった現場周辺を別行動で調べる事にした。俺は現場近くの港の倉庫を調べていた。」

「何もないな。ここはハズレかな？」

そう思い俺は移動を開始しようとした時突如何かが俺に向かってきた。

「！！っと、あぶねえ。誰だ！？」

「ほうただの人間のクセに今のを避けたか。」

それを回避した俺は声の聞こえた方向を向いて攻撃を仕掛けた奴の姿を見て内心驚愕した。俺に攻撃を仕掛けて来たのは人間じゃなかった。全身緑色で白い袋を持ったカメレオンの頭をした奴だった。だがそれだけでは俺が驚く理由にはならない。二年前のあの日から今日に至るまで異形や化け物の類いと戦ってきた俺には今更そんなもので驚く常識はなかった。だが目の前の奴には驚かざるをえない。俺はこいつを知っている。俺はそれを確かめるために内心驚いているのがバレないように平静を装い訪ねた。

「お前は何者だ？」

「俺様はゴルゴムにより生み出された怪人。カメレオン怪人だ。」

俺は奴の言葉に耳を疑った。だがそれが隙となりカメレオン怪人は口から長い舌を出し俺の身体に、巻きつけ拘束した。くっ、油断し

た。

「そうだな。貴様も捕らえる事にしよう。貴様は強力な怪人になり
そうだ。」

なんとか脱出を試みるがかなり強い力で絞められている。このまま
じゃマズいと判断した俺は内に眠る魔神の魂にリンクしようとした
時、何かがこちらに猛スピードで向かってきた。緑色でバツタの形
をしたバイクとそれに跨がる黒い身体で赤い瞳をした仮面を着けた
それはカメレオン怪人に突撃した。カメレオン怪人は避けようとす
るが完全には避けきれず掠ってしまふ。だがそれにより俺を縛って
いた舌の力が緩み俺は脱出に成功した。そして、俺の元にその人は
駆け寄ってきた。

「大丈夫？怪我はないか？」

「あっあなたは!？」

そう聞かずにはいられなかった。カメレオン怪人から俺をかばうよ
うに立ち俺のその言葉にその人は答えた。そして俺の頭の中でバラ
バラだったピースの欠片がすべて繋がり確信した。そうこの人は、
そしてこの世界は・・・

「仮面ライダーBLACK!!！」

そこには、人々の平和を守る為に秘密結社ゴルゴムと戦い続ける
仮面の戦士の世界

「仮面ライダーBLACK」の世界だと。

第7話 訪問先は昭和の日本？悪と戦うブラックサン（後書き）

明「やっぱり仮面ライダーは格好いいね。」

だよ。平成、昭和に関係なく格好いいよね。

綾「そうだ！！あれこそがヒーローの姿だ！！」

明「うわあ！？ビックリした。いきなり出て来ないですよ。」

さっきから居なかったけどどこ行ってたの？

綾「部屋で仮面ライダーBLACKを全話見て復習して来た。これでゴルゴムのヤツらの手口や相手の怪人の弱点、戦い方もわかるからこれでこの世界の戦いは楽勝だぜ！」

そんなことしてたのかお前は。

明「それに目のしたにクマできてるし、一体どんだけ見たのさ？」

綾「別にたつたの5往復だ。」

明「いや、見過ぎでしょ！？いくら何でも。」

全部で51話あるからそれを5往復つまり一つの話しを5回見たと言っただから全部で255話見た事になるな。

明「よくそれで死なないね。一睡もしてないんですよ？」

綾「ふつ問題ない。」

でも勉強してもらったとこ悪いんだけど、この話ではTVシリーズの話は書かないよ。

綾「……………はい？」

明「どゆこと作者？」

あんまり一つの世界に力入れていたら他の作品とのクロスが遅くなるから今回は早く終わらせられる劇場版の話にしたんだ。

明「劇場版あったんだ。」

平成シリーズはともかく昭和シリーズは余り知られてないからね。

綾「……………。」

明「どうしたの綾人？」

急に黙ってどうしたの？

綾「……………」バタッ ブクブク

明「うわあ！？綾人気をしっかり持って！」

どうやら劇場版はノーチェックだったらしいな。

明「そんな冷静に状況分析してないで早くなんとかしてよ！」

徹夜の反動がきて寝たんだろ。次回には起きてるだろ……

明「自信ないの！？どうするの起きなかったら！？」

その時はあの人を呼ぶ。それではまた次回。

明「あの人って誰だろう？」

第8話 現れるイレギュラー。参上、焔の黒騎士（前書き）

断空我様、感想ありがとうございます！？

綾「よかったな。たしか作者は二人の騎士シリーズの最初の方からファンだったんだろ？」

うん。見てくれたうえに感想までいただいたからもう感激なのよ。

綾「そうか。ところで今回の話はどう言った感じになるんだ？」

基本は劇場版と変わらず進む。そんでオリジナル入れてイレギュラー登場。

綾「もうイレギュラー出て来るのか。少し早くないか？」

大丈夫。後々の布石になるから。そして今回で綾人が変身します。

綾「えっマジで！？俺の時代がやってきたぞー！？」

明「気合い入って来たみたいだね。それでは本編スタートです。」

第8話 現れるイレギュラー。参上、焔の黒騎士

俺は目の前で起こっている光景をにわかには信じられなかった。俺の中で仮面ライダーは空想上の物でしかなかったし、それが普通であつた。

だが、俺の目の前にいるのはその仮面ライダーだ。

夢や幻ではなく真正正銘の仮面ライダーBLACKだ。

「君、ここは危ない！早く逃げるんだ！！」

「あつ。はっはい！？」

カメレオン怪人に向き合ったままのBLACKに突然声をかけられ我に返つた俺は、ついその場から離れて近くのコンテナに隠れてしまった。

離れたのを感じとつたのかBLACKはカメレオン怪人との戦闘を再開した。

・・・って俺隠れちゃダメじゃん！

＼side out＼

＼side BLACK＼

「とあつ！」

カメレオン怪人に襲われた少年が離れたのを確認し、俺はカメレオン怪人に攻撃を仕掛けた。

カメレオン怪人はその一撃をよけ俺を弾き飛ばすがコンテナの上に着地した。

「お前だな、子供達を攫ったのは？」

「左様、俺様だ。」

そういつて奴は持っていた白い袋から透明の玉を取り出した。その玉の中には攫われた子供が入っていた。

「まだまだあるぞ。」

奴はさらに袋から玉を取り出した。

その中にも子供達が入られていた。

くっ！なんて事を！？

「とあつ！」

カメレオン怪人に飛びかかりパンチを放つ。

だがカメレオン怪人はその攻撃に対応はせず急にしゃがみこんだ。当たる、そう思った。

だがパンチは弾かれ、俺の身体は弾き飛ばされた。

なんとか体制を立て直そうしたが、目の前から突如巨大な岩が襲いかかってきた。

その岩を辛くも避けるが、岩は軌道を変えてぶつかってきた。

俺は避けられずその直撃を受け吹き飛ばされ、近くに停まっていたトラックのコンテナに叩きつけられた。

なんとか立ち上がり岩を見たが、その岩は光り出しカメレオン怪人へと姿を変えた。

そう、あの岩の正体はカメレオン怪人だった。

「せっかく攫ってきた可愛い子供達だ。」

そういつて奴は子供達の入った玉を自分の中に呑み込んだ。

「カメレオン怪人の中に子供達が!？」

これでは奴を倒したら中の子供達も道ずれにしてしまう。これでは戦えない。

俺が何も出来ない事を好機とみたカメレオン怪人は、舌を俺の身体に巻きつけた。

何とか抜け出そうと試みるが強力に絞めつけられていて脱出できない

い。

このままではやられる。そう思ったとき突如光の玉のような物が奴の舌を切り裂いた。

舌が切られ事により拘束していた力は無くなり舌を振り払った。

そして謎の光の玉はその正体を現した。

「ビルゲニア!?!」

俺を助けた光の玉の正体はゴルゴムの怪人「剣聖ビルゲニア」だった。

やつは俺を倒し、キングストーンを奪い世紀王の座を奪おうとする怪人だ。

「仮面ライダーは俺が始末する。不服か!?!」

ビルゲニアはそう言ってカメレオン怪人に剣を向ける。

焦ったカメレオン怪人はその場から立ち去ろうとした。まずい!?!?

「待てっ!」

カメレオン怪人を追いかける為に俺はバトルホッパーに飛び乗りカメレオン怪人を追った。

「今日こそ決着を着けてやる。」

そう言つてビルゲニアは光の玉になり攻撃を仕掛けてきた。

俺は避けられず近くの倉庫の中に飛ばされる立ち上がった直後、光の玉が襲いかかりその一撃をくらい怯んでしまう。

そして元に戻つたビルゲニアが切りかかつてくるがなんとかそれを回避する。

奴の剣は近くにあつた鉄柱を切り裂いた。あれをマトモにくらつたらマズい。

「貴様を倒せば俺はゴルゴムの最高幹部になれる。」

ビルゲニアが切りかかるが俺は剣を避けつつ反撃するが奴の持は盾でそれを防ぐ。

距離を保ちながら戦い隙を見て反撃するがすべて不発に終わつてしまふ。

「リニューセイバー、ダークストーム!!」

光を帯びた剣をビルゲニアは振るい 字の形で光が集まっていく。撃たせまいと飛びかかるが間に合わず直撃を受けてしまい吹き飛ばされる。

「トドメだ!!」

ダメージが大きく動きが鈍くなった俺に切りかかるうとした時、バトルホッパーがビルゲニアに体当たりを仕掛けてきた。

「はっ！」

ビルゲニアは体当たりを避けすれ違い様にバトルホッパーのボディを切った。

「バトルホッパー！？」

バトルホッパーは力なく倒れ、切られた後から煙が漏れていた。

「よくもバトルホッパーを！！とあっ！」

反撃をするも奴に防がれてしまう。このままではマズい。
俺はもう一人の仲間を呼んだ。

「ロードゼクター！」

開いている窓に飛び込み脱出して、こちらに走ってきたロードゼク

ターに飛び乗った。
俺を追いかけてきたビルゲニアに向かって全速力で突っ込む。

「アタックシールド!!」

前屈みの体制になりロードゼクター上部にシールドが装着されロードゼクターはさらに速度をあげる。

ビルゲニアが先ほどの技で待ちかまえるが、かまわずさらにスピードをあげ突撃する。

ビルゲニアはそれを跳んで避けコンテナの上に着地した。

ロードゼクターから降りて構えるが奴は剣を鞘に納めマントを翻しその場から消え去った。

どうやら逃げたらしい。

俺は負傷したバトルホッパーのもとに向かおうとしたが、突如禍々しい黒い球体が落ちてきた。

「何だあれは？」

そして黒い球体はその姿を変えた。

紫色の巨体に両腕に二本の鋭い金色の爪をもち背中に大きいクリスタルのような二本の角を生やした甲羅がありコウモリのようなアタマをした怪物になったのだ。

そしてその怪物はいきなりこちらに襲いかかってきた。

「くっ!?!とあっ!!」

なんとか奴の振るった攻撃を跳んで避け、すかさずパンチで奴の甲羅に攻撃するがこの怪物の甲羅は予想以上に硬くパンチは弾かれその勢いで吹き飛ばされてしまう。

「くっ、なんて硬さだ。腕がまだ痺れている。」

そして怪物は背中の中の二本の角をミサイルのように飛ばしてきた。

俺は何とか避けようとするがミサイルが爆発し、その爆風で吹き飛ばされる。

なんて怪物だ、強すぎる。怪物がこちらに近づいてくる。

だが俺の身体は先ほどの戦闘のダメージが残っているため立ち上がる事すらできない。

ここまでかとそう思った時、

「烈風剣!!」

怪物の頭に何かが直撃して後ずさった。そして後ろから声が聞こえてきた。

「あれがイレギュラーか。見た目以上に硬いようだな。」

その声の主はこちらに近づき俺を庇うように立っていた。

その声の主はさっき助けた少年だった。

side out

side 綾人

倉庫に隠れなが俺は仮面ライダーの戦いを見ていた。不謹慎だが俺は感動していた。

特撮の撮影などではなく本物の仮面ライダーと怪人の戦いが生で見れた。

俺生きてて良かった！！アルカール、ルシエド助けてくれてありがとう！！

そしてビルゲニアが退却していき戦いが終わった時、急に何かがある嫌な感じがした。

その予感が残念ながら当たり、突如BLACKの前に現れた。

現れたその禍々しい黒い球体は形を変え怪物のような姿になった。

そしてその怪物はBLACKに襲いかかった。

俺はすぐにルシエド達に通信を入れた。

「こちら綾人、こっちに変な怪物が現れた。多分例のイレギュラーだ。」

「了解した。すぐにそちらに向かう。」

通信を切った瞬間、爆発が起きた。

BLACKがやつのみサイルのような兵器でぶっ飛ばされていた。俺は腰のデンガツシャーもどきを急いで組み立てた。

ソードモードのデンガツシャーもどきを構え意識を集中させた。

頭の中に浮かべるのは風が集まるイメージ、その集まった風を剣に纏い斬り放つ。いくぞ！

「烈風剣！！」

俺の放った風の剣撃はヤツの頭に直撃した。突然のダメージに怪物は後ずさった。

だがヤツの頭は無傷だった。

「あれがイレギュラーか。見た目以上に硬いな。」

近づきながらそう言って俺はBLACKを庇うようにして立った。さっきと立場が逆になったな。

「君はさっきの。ここは危ない、早く逃げるんだ！」

どんなピンチな状況でも自分よりも他人の身を案じる。やっぱり仮面ライダーだ。俺が目指し憧れる姿だ。

「大丈夫ですよ。こいつを倒すのが目的ですから。」

「えっ？」

「だから見ててください。俺の・・・変身！」

そして俺は内なる魔神の魂とリンクする。この二年の修行で力の制御はモノにした。

右手を上げ拳を握り俺は叫ぶ。その言葉を・・・

「変身！！！」

そして俺の身体は光だしその姿を変えていく。

全身に黒い鎧を身に纏い、細部には赤く光、首に赤いマフラーをかけた姿へと変わった。

「君は・・・一体？」

その言葉に俺は答えた。

焔の魔神の力と聖剣アガートラムの力。

そして人の心の力が合わさり生まれた奇跡の力により誕生した焔の黒騎士。

その名は・・・

「ナイトブレイザー!!」

異世界に焔の黒騎士が参上した。

第8話 現れるイレギュラー。参上、焔の黒騎士（後書き）

明「変身はしたけど結局戦闘は次回に持ち越したね。」

綾「別に構わん。変身できただけで俺は嬉しい。」

明「それならいいけど。ところで作者どこ？」

呼んだ？

明「さつきから居なかったけどどこ行ってたの？」

ある人にちよつと頼みに出掛けてた。

綾「何をだ？」

今度、出張バカテストをやらうと思って

明「出張バカテスト？何それ？どう違うの？」

今いる世界の人を含めて綾人と明久にバカテストを受けてもらう。

綾「なるほどな。それなら色々な解答がでそうだな。」

そのテストの作成と採点役をアルカールに頼みに出掛けてたんだ。

綾「なるほど。アルカールに……はあ！？アイツに頼んだだと！」

明「どうしたのそんなに驚いて？」

綾「冗談じゃねえぞ！あのオッサン難しい問題作るうえに、もしその答えを間違えでもしたら！」

明「間違えでもしたら？」

綾「罰として地獄の特訓と12時間の補習が待っている。」

明「何それ！？それじゃ間違えたら命が無いじゃん！」

アルカールは引き受けたよ。

綾・明「イヤアアアア！」

二人が壊れだしたので今日はこの辺で次回をお楽しみに。

明「……ところで地獄の特訓でなにされるの？」

綾「……ジープに追いかける。」

第9話 怒りを力に。鬼ヶ島に急行せよ！（前書き）

断空我様、感想と指摘ありがとうございました。

こんかいは前半は綾人が、後半は明久が少し活躍します。

綾「それよりも早く戦闘させろ！」

どうしたの、なんか興奮してるけど？

明「本物のBLACKに会えたからテンション上がりまくってるみたい。」

楽しそうだからそつとしいてやるう。

明「それでは本編をどうぞ。」

第9話 怒りを力に。鬼ヶ島に急行せよ！

ナイトブレイザーに変身した俺をイレギュラーが危険と判断したのが俺に向かってパンチを繰り出してきたが慌てずやつを片手で止める。

イレギュラーは慌てて腕を抜こうとするが俺はその隙を狙いやつの懐に潜り込みやつの腹にブローを喰らわした。

ブローを喰らったやつは巨体は宙に浮きメートルぐらい吹き飛び倒れた。

普段の俺にはこんなことはできないがナイトブレイザーに変身した今の俺の身体能力は爆発的に上がっている。

さしずめ仮面ライダーレベル、いやそれ以上に。

さらに俺達特異点の力はイレギュラーにとっては天敵らしい。だからこちらの攻撃がかなり効くらしい。

「どつした。これで終わりか？」

俺の挑発に反応したイレギュラーは立ち上がり背中のクリスタルの角からミサイルを発射するがそれを避けず手に力を結集させて剣を形成。その剣でミサイルを叩き斬る。

そして奴の背後に周り背中の角を剣で破壊した。

「破壊剣ナイトフェンサー」この剣は魔神と聖剣の力で形成されている。

こいつは確かに硬いのもかもしれないが、この程度の硬さではナイトフェンサーを砕くことなどできない。

むしろ逆に砕かれるのは奴の方だ。角を壊されたイレギュラーは叫び声をあげて苦しんでいる。

「そんなじゃトドメと逝きますか。」

ナイトフェンサーを奴に向けて構えるがイレギュラーは突然黒い玉に戻りその場から消え去った。

もしかして逃げられた？俺は周囲の警戒をするが何の気配も感じれなかった。

やはり逃げられたようだ。

俺は変身を解いてBLACKに駆け寄り肩を貸そうとしたがどうやらダメージはある程度回復したみたいで一人で立てるみたいだ。

それにビルゲニアの攻撃で負傷したバトルホッパーがこちらに走ってきた。

どうやら傷は再生したようだな。

「大丈夫ですか。仮面ライダーBLACK、それにバトルホッパーも。」

「ありがとう。君のおかげで助かった。しかし君は一体何者なんだ？それにあの姿。まさか君もゴルゴムに！」

「それについてもちゃんと説明しますので・・・どうやら俺の仲間も来たみたいなんです。」

明久とルシエドがこちらに向かって来るのを確認した。

とりあえずルシエド達と合流した俺達は変身を解いた南 光太郎さんに説明を始めた。

俺の予想どおり明久はかなり驚いていた。

まさか本物の仮面ライダーに会えるとは夢にも思ってたからな。

それに光太郎さんもルシエドが声を発した時にビックリしてたからな。

とりあえず俺達はこの世界とは別の世界からあの黒い玉の存在を追って来た存在であれを倒さないとこの世界が滅びの危機にあること、そして光太郎さんが狙われていることを話した。

「話はこれで全部です。信じてもらえないかもしれませんが本当の事なんです。」

「いやっ信じるさ。実際にあんな怪物が目の前に現れたんだ。それに君達の目は嘘を言っている奴の目をしていない。」

光太郎さんはそう言って俺達の話の信じてくれた。なんてイイ人なんだ!!

「だが今は攫われた子供達をゴルゴムから助けないといけない。もしよければ君達の力を貸してはくれないだろうか？」

「俺達なんかで良ければいくらでも力を貸しますよ。」

「うん。ゴルゴムのヤツらに攫われた子供達を早く家族の元に戻してあげなきゃ。」

「話は決まったようだな。では早速・・・」

そう、早速。

「光太郎さん！サインください！！」

そしてみんなが一斉にずっこけた。何で？

「いきなり何をバカなことを言っているお前は！？」

「そつだよ！今はそんなこと言う場面じゃないでしょ！」

「目の前に仮面ライダーが居るんだぞ！サイン貰おうとするのは当然だろうが！あっ、紙とペンはこっちで用意してるんで。」

「知るか！そんな事！」

「ち、ちよつと君達落ち着いて!? サインなら後で書いてあげるからケンカはダメだよ。」

何とかその場は光太郎さんが治めてくれた。

そして俺達は子供達の行方を知るために再び調査に乗り出した。

調査の途中で俺達は攫われた子供達の家族がテレビで訴えていた。

「お金でも家でも何でも渡すから子供を返してください!!」と泣きながら必死に訴えていた。

それを見て俺は拳を強く握りしめた。

「・・・綾人。」

「・・・その怒りはまだ取っつけ。」

明久も同じく拳を握りしめていた。ゴルゴム、お前等は俺がいや俺達が・・・

「絶対つぶつ潰す!!」

しばらくして光太郎さんから連絡が入った。

何でも「安全の為に子供達にサバイバルの知識を教えるためのコスモスサバイバルスクール」というビラを撒き散らしながら走っている怪しいバスを見かけたらしい。

光太郎さんはそのバスを追跡している。

俺達はそのコスモスサバイバルスクールを企画したという業者を調べる事にした。

結果は大当たり。そんなことを企画した業者など存在しなかった。ゴルゴムのヤツら一体何を企んでいる？

そして光太郎さんから連絡がきた。バスを見失ったが行き先は分かっただけらしい。

何でも地元の人のお話では鬼ヶ島と呼ばれているらしい。

俺達は光太郎さんと合流して島に向かうための船の上で作戦会議を行っていた。

「確認します。島の周りは潮の流れが速いらしくて船が近づけないらしい。だから行けるとこまでは船で行きそこから潜水して島に上陸する。そして子供達を救出する。これでいいですか？」

「ああそれで大丈夫だ。かなりの距離を泳ぐことになるが君達は体力の方は大丈夫かい？」

「大丈夫です。鍛えてますから。」

「僕も体力には自信があります。」

「我は霊体になれるから問題ない。」

・・・一瞬犬かきで島まで泳ぐ絵を想像してしまった。

「何か変なことを考えなかったか？」

「イヤベツニ。」

相変わらず鋭い犬だ。

「よし、ここからは泳いで行く。みんな準備は良いか？」

「『問題ありません（ない）』」

そして俺達は泳いで鬼ヶ島まで目指した。

side out

side ???

鬼ヶ島にある洞窟の奥深くそこには様々な機械と連れ去られた子供達、それを監視するゴルゴム怪人と三神官がそこにいた。子供達は

何かのテストを受けさせられていた。

そして一人の子供がそのテストを受けていたら機械が音を鳴らした。

「体力テスト不合格。お前は怪人のエサになるがいい。」

神官のひとりがそう言うつと怪人がその子供を牢屋のある部屋まで落とすとした。

子供が落とされた牢屋の部屋には自分と同じように不合格の烙印を押され怪獣のエサになることを余儀なくされた子供たちがいた。

そして上の部屋では子供達がベットに拘束されていた。

「今からお前達を改造手術する。」

その言葉に子供達が悲鳴をあげる。だがその悲鳴は無情にも洞窟内を響き渡るだけに終わる。

「いいかよく聞くのだ、太陽の光でゴルゴム神の目が光る。その時お前達は栄光ある怪人となるのだ。」

そう言うつて神官がてをかざすと奥からゴルゴム神の石像がでてきた。これまで仮面ライダーが戦ってきた怪人達は今から5万年前に古代人の頭脳と動物の肉体を合体させて造られた物だ。

そして20世紀末の今日、ゴルゴムは子供を使って新しい怪人造りを始める為に子供達を攫ったのだ。

「これより手術を始める。」

神官の言葉に子供達は絶望をいだいた。

「助けて！助けてくれ！助けてくれ！！」

子供達の悲痛の叫びは誰かに届くことはない。
しかし、三神官達はこの島に何かが上陸したのを感じた。

＼side out

＼side 綾人＼

鬼ヶ島に上陸した俺達は島の奥へと走った。そこには地下に続いて
いる古い洞窟があった。

警戒しながら奥へと進んでいくと目の前に怪人の影が現れた。

俺達は怪人がどこにいるのかを確かめるために岩陰に隠れた。

ふと光太郎さんの方を見ると後ろの岩2つがカメレオン怪人へと姿
を変え光太郎さんを取り押さえようとした。

「光太郎さん！？」

俺は予めデンガツシャーをガンモードに組んでいたのでそれを構えてカメレオン怪人2体を狙い撃つ。

怪人が怯んだ隙に光太郎さんはその場から離れて俺達は一箇所に集まった。

後ろのほうからもカメレオン怪人が3体やって来て俺達は周りを囲まれた。

「明久！怪人の攻撃を生身で一発でもくらったら致命傷は避けられないぞ。気をつける！」

「わっわかったよ。」

俺はまだ戦闘経験の少ない明久に注意を促した。

明久もそれを肌で感じとりハンドブラスターを掴む力を強くした。

そしてカメレオン怪人達が襲い掛かってきた。

俺達は攻撃をかわしながらやつらに反撃した。

ルシエドがスピードを生かして怪人達を翻弄しているうちに俺はデンガツシャーをパワータイプのアックスモードに組み換えた。

こいつらは体を岩に変化させ攻撃を防ぐから他のモードではダメージを与えられないがアックスモードの破壊力ならこいつらの装甲を突破できる。結果は見事的中した。

カメレオン怪人が俺の攻撃を防御しようと岩に変化させるがアックスの破壊力がやつらの防御を突破してダメージを与えた。

アックスをくらったカメレオン怪人は怯んだが、攻撃したこちらの腕も少し痺れた。

ダメージは与えられても硬いもんは硬い。その時カメレオン怪人2体が舌を出して光太郎さんの手足を拘束した。くっ、援護に向かいたいが他のカメレオン怪人が俺の邪魔をする。けど。

「でやああああ！」

ハンドブラスターをブレードモードにした明久がやつらの舌を切り裂いた。それにより光太郎さんの拘束は外れた。

「明久。ナイスアシスト。」

「僕も負けてはいられないからね。」

カメレオン怪人達は標的を明久に変更して一斉に襲いかかるがその判断は大きなミスだ。明久もそれをまっていたと言わんばかりにハンドブラスターを變形させた。

「くられえ！パラライザー！！」

ハンドブラスターの特殊武装「パラライザー」は広範囲の敵に攻撃

できるうえに麻痺の特性も持っているためくらった敵は麻痺により体が痺れ動きが鈍くなる。

だがこの武装は敵との距離が離れていてはダメージと効果は薄くなってしまう。

明久は自分を囮にして襲い掛かってきたカメレオン怪人達を一網打尽にした。結果は上々。

大きなダメージはないが麻痺が効いているためやつらは痺れて動きが鈍くなっている。チャンスだ！

「光太郎さん。ここは俺達が引き受けます。先に行ってください！」

「だが、君達は！？」

「僕達なら大丈夫です。それよりも早く子供達を！」

「早く行け光太郎殿。手遅れになる前に。」

光太郎さんは最初は躊躇したが明久たちの言葉を聞いて覚悟を決め構えた。

拳を強く握り右腕を円を描くように動かし右腕をまげ左腕を上げ叫んだ。

「変身！」

すると光太郎さんの腰にベルトが現れ赤と白の光を放ち光太郎さんの身体が変化する。

一瞬バツタの様な姿になるがすぐにその姿は変わり胸にゴルゴムのマークが現れ全身が黒色に変化した。光が消えるとそこには黒い仮面の戦士「仮面ライダーBLACK」が立っていた。

俺は今心の中で感動のあまり泣いている。生で変身が見れた！やっぱり生きててよかったー！！

「とあつ！」

変身を終えたBLACKは奥へと進んだ。

カメレオン怪人達は追いかけようにもまだパラライザーのダメージが抜けておらずうまく動けないでいた。

奥へと続く道に俺達は立ち塞がり武器を構えた。

ここから先には通さない！！子供達を頼みます光太郎さん。

side out

side ????

太陽の光を浴びゴルゴム神の目が赤く輝き始め、拘束されている子供に光が集まっていく。

そして神官の爪が子供の頬まで近づき改造手術を始めようとした。

「「「やめろ(て)!!!」」」

子供達が必死に叫んだその時、突如壁が壊れて何かがやってきた。それを見た三神官は驚愕の表情を浮かべた。

「仮面ライダーBLACK!？」

「許さん。ゴルゴム!!!」

子供達を助けるために仮面ライダーBLACKが駆けつけたのだ。

＼side out＼

第9話 怒りを力に。鬼ヶ島に急行せよ！（後書き）

綾「とうとうここまで来たな。」

明「次くらいで終わりそうだね。」

うん。BLACKの世界は次で終わる予定だよ。

綾「次の世界の予定は決まっているのか？」

とりあえず前に挙げた候補の中から選ぶ予定だけど他からリクエストがあるならそれをやってみるつもり。

綾「個人的には違うライダーの世界に行きたいんだがその予定は？」

すこし間を置いてからだね。ライダー系の話書くならコラボとかやってみたい。

明「その場合どんな感じになるの？」

本編とは関係なく劇場版みたいなノリで書くつもり。

綾「でもこの作品はまだ書き始めたばかりだからそういつ話はまだ来ないだろ。むしろきたら奇跡だ。」

それぐらいはわかってるよ。今は文章力鍛えないといけないからね。

明「ところでバカテストはいつやるの？」

次の前書きでやる予定だよ。アルカールも問題作ってスタンバイしてる。

綾「次の更新が運命の時だな。」

明「間違えればジープだからね。正解するしか生きる道はない。」

まっがんばってくれや。それではまた次回に。

今度は更新が少し遅れるかもしれません。

第10話 最後に勝つのは光、戦うダブルブラック（前書き）

問題

『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題とマグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を一つあげなさい』

アル「記念すべき一問目だから難しくない問題を用意した。」

ルシエドの解答

『問題点・・・マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応するため危険であると言う点

合金の例・・・ジエラルミン』

アル「アル先生のコメント

正解だ。合金なので鉄ではダメと言うひっかけ問題なのだが、さすがはルシエド殿

神雑 綾人の解答

『問題点・・・マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応するため危険であると言う点

合金の例・・・ジエラルミン』

アル「アル先生のコメント

中島製作所で研修生をしてただけわあるな正解だ。

綾「どんなもんだい。」

吉井 明久の答え

『合金の例……未来合金（ すごく強い）

アルカール先生のコメント

ジープは用意してある。逝くぞ明久。

明「イヤアアアア！！」

綾「……骨は拾ってやるよ。」

南 光太郎の解答

『問題点……ゴルゴムの仕業。』

アルカール先生のコメント

何でもかんでもさすがにゴルゴムのせいにしてはいけないうと思っただが。

綾「この人の場合はそれが許されるんだよ。」

なぞの釣り人の解答

『問題点・・・鬼ヶ島じゃ、』

アルカール先生のコメント

この解答は誰のだ？

綾「知る人ぞ知るあの人のだな」

断空我様、まみむメテオ様、感想ありがとうございます。

綾「今回でBLACKの世界も終わりだな。」

今回は終わらせるためにいつもより長くなりました。何卒ご勘弁を。

綾「それでは本編スタート！」

ところで明久は？

綾「・・・生きてまた会えたらいいな。」

第10話 最後に勝つのは光、戦うダブルブラック

Side

明久

光太郎さんが先行したのを確認した僕達はカメレオン怪人達との戦いを再開した。

この戦いはこいつらを足止めする為の戦いだ。倒すに越したことはないが優先すべきは子供達の救出だ。

僕はハンドブラスターをブレードモードにしてカメレオン怪人を斬りかかる。

カメレオン怪人は岩に変化して防御するみたいだ。けど

「無駄だよ！」

普通の攻撃なら防げるかもしれないけどレーザーブレードには意味をなさない。

僕はレーザーブレードでカメレオン怪人を斬りつける。斬撃をくらった怪人は地面に転がり倒れる。

ただど大きなダメージにはならずすぐに体制を立て直す。

このままじゃジリ貧だよ。何とか大ダメージを与えられる方法はなにかと考えていた時、

「はあああつ、烈風剣！」

綾人が風の斬撃を放った。カメレオン怪人達はそれをくらいその内
1体が倒れ消滅した。

すごい威力だ。あれぐらいの攻撃でないと決定打にはならないのか。
だったらちよつと試してみるかな。

僕はレーザーブレードを構え直し意識を集中させあの時の事を思い
出す。

.....

「ねえ綾人、今の技ってどうやってやったの？」

ある日僕はサントアリオの訓練室で修行をしていた綾人を見学して
いた。

その時僕は綾人が使った烈風剣という技についてたずねた。

「うーん、言葉にするのは難しいな。ゲンさんが大雑把にしか教え
てくれなかったから細かくは説明できないな。」

「誰なのゲンさんて？アルカールさんから教わったんじゃないの？」

「ゲンさんは俺の剣の師匠だ。アルカールが「剣術だったら私が教
えるよりも彼が教えた方がいいだろう。」と言って紹介してくれた

んだ。」

「どんな人なの？」

「一言で言うなら飲んだくれだな。けど、剣の腕は超一流だ。アルカールが紹介したのも肯ける。」

「すごい人なんだね。どういう風に教えてもらったのその技？」

「まずは気を剣に集めるように意識する。そして頭の中に周りの風が集まっていく姿をイメージさせる。イメージどおりに自分の周りに風が発生したらその風を剣に纏う。そんでおもいきり剣を振るう。たったこれだけだ。」

「えらくシンプルだね。」

「だが難易度はかなり高いぞ。俺も習得するのに半年以上もかかった。」

「半年も！？それじゃあ今から覚えようとしてもそれぐらいはかかるの？」

「個人の能力にもよるがお前の場合戦闘経験が少ないからな、半年以上は覚悟しといた方がいいな。」

「そんなー。半年もかかるんじゃないよ。」

諦めるしかないのかな。そう思ったとき綾人が少し考えてから僕に話しかけた。

「烈風剣は無理だが頑張りしだいではすぐに覚えられる技が一つだけあるが、明久挑戦してみるか？」

「そんな技があるの！？うんやるやる。挑戦してみたい。」

「よし、なら決まりだな。俺が一通り手ほどきと実演をやってやるからその後は自分でやってみる。」

「ありがとう。よーしいつちよ頑張るぞー！」

そして綾人がやり方を一通り教えてくれた後、僕はこの世界に着くまで合間を見てはロンバルディアの訓練室で練習をしていた。一日でも早く習得するために。

.....

綾人から教えてもらったことを頭の中で思い出す。まずは自分の気を武器に流し込むように意識を集中させる。

「はああああああつー!!」

イメージする。今から放つは宙を飛び交う飛燕の二連撃。そして僕は気を集中させたレーザーブレードを振るう。

「必殺！飛燕剣！！」

放たれたのは二つの蒼き斬撃。それはカメレオン怪人の1体に直撃した。

そしてそのカメレオン怪人は倒れ消滅した。できた。僕にもできた！やったー！

＼side out＼

＼side 綾人＼

明久の放った飛燕剣によりカメレオン怪人1体が消滅した。明久のやつ、どうやら物にしたようだな。

飛燕剣は烈風剣を習得するための最初のステップで覚える剣技だ。だから烈風剣を習得するには飛燕剣をマスターしなければならない。だが飛燕剣自体も難易度の高い技だ。普通なら早くても三ヶ月以上は掛かるが明久はそれを一週間足らずで習得した。あいつの学習能力は半端ないな。

カメレオン怪人は残り3体。このままの勢いで全部駆逐して光太郎さんの援護にいかなければ。

そう思った矢先にカメレオン怪人達は慌てるように姿と気配が消えた。

どうやら透明になって逃げたようだな。

「どうやら戦況を不利と見て逃げたようだな。」

「これからどうするの？あいつらを探して退治する？」

「いや、それは後回しだ。俺達の目的は子供達を助け出すことだ。まずは彼らの安全を確保しないとイケない。だから、明久とルシエドは子供達が捕まっている部屋を探し出してここから避難させてくれ。俺は光太郎さんの援護に向かう。」

「それだつたら僕も一緒に。」

「それはだめだ。逃げたカメレオン怪人達がいつ襲ってくるかも分からない状況だ。1人になったところをカメレオン怪人達が襲い掛かってきて各個撃破されるのが関の山だ。俺やルシエドは問題ない

が、まだお前は力を使えてないだろ。それにルシエドだけじゃ子供達を避難させられない」

俺の指摘に明久は顔をしかめた。事実だから仕方ないがな。

「・・・わかった。子供達の方は僕達に任せて。綾人、気をつけてね。」

「後でまた会おう。行くぞ明久。」

明久とルシエドは子供達に救助に向かい、俺は光太郎さんのもとに急いだ。

＼side out＼

＼side 光太郎＼

カメレオン怪人達の相手を彼等に任せて奥に進んだ。

そして、壁の向こうから子供達の助けを呼ぶ声が聞こえる。

俺は壁を破壊して部屋に転がり込んだ。部屋には三神官と拘束された子供達がいた。

「仮面ライダーBLACK!？」

「許さん。ゴルゴム!！」

子供達の拘束をはずしながら三神官たちに近づこうとしたが突然足元の床がはずれて俺の身体は落下していき落ちた先の岩のベツトの上に拘束されてしまう。

必死に抜け出そうとするがびくともしない。

そして近くから声が聞こえた。

「『仮面ライダーBLACK!仮面ライダーBLACK!』」

声のする方に目を向けるとそこには、牢屋の中から助けを求める子供達がいた。

「ハアツハツハツハツ。見事に罠に嵌ったな仮面ライダー。」

「罠!？」

ゴルゴム三神官が改造手術を行おうとした子供達を引き連れて現れた。罠とはどういうことだ!？」

「子供達を攫ったのは貴様をおびき寄せせる為、見ろ!ゴルゴム神の

目を。」

やつが指差した場所にゴルゴム神の像が落ちてくる。

「貴様是最凶の怪人となるのだ。貴様の後にこの小童どもも続く。賑やかになるぞ。フハハハハッ。」

そして先程の子供達も牢屋の中に入れられる。

「『『『仮面ライダーBLACK!?!?!?!』』』」

「フッフッフッ。手術開始。」

子供達が不安そうに見つめている。

ここで負けるわけにはいかない!子供達はどうなる!?

力を振り絞り拘束を外そうとするがびくともしない。神官が俺の身体をスキャンし始めた。

このままでは誰も救えない。キングストーンよ、神の石よ俺に力を貸してくれ。

俺の声に応えてくれ。

「神よー!?!?!」

その時不思議な出来事が起こった。
ベルトの中のキングストーンが輝き辺りを白い光で照らします。
ベルトからパワーが送られてくる。
俺は力を込めて一気に拘束を外すし立ち上がりゴルゴム神の場所まで跳び立ち構える。

「仮面ライダーBLACK!!」

そう言い放つとさっきのカメレオン怪人が三神官を守るように突然現れた。

先程は5体だったのが3体にまで減っている。おそらく彼等が2体倒したのだろう。

俺も頑張らないといけないな。

「闇のゴルゴムに負けてたまるか！最後に勝つのは光、正義だ!!」

「その通り。いつ聞いてもいい言葉だぜ！」

カメレオン怪人達が襲いかかって来ようとするが、突如現れた黒騎士に殴り飛ばされる。

「綾人君！無事だったんだな。」

「あんな奴等に遅れをとるような鍛え方はしてませんよ。それよりもゴルゴム神の像を！」

そうだな。まずはこの像を破壊する！

「ライダーパンチ！！」

ライダーパンチをゴルゴム神の像めがけて当てる。パンチを食らった像は爆発した。

「くっ！おのれ！！」

状況を不利とみた三神官はその場から逃げ出した。あいつらは後回しだ。

今は子供達を助けなければ。

牢屋の扉を破壊して子供達を逃がす。この基地が崩壊を始め周りが揺れだしている。

「早く逃げるんだみんな！さあっ早く、みんな早く！」

「俺が誘導します。すでに脱出ルートは確保しています。他の場所に閉じ込められている子供達も明久達が避難をさせています。みんな

「な俺について来てくれ。」

彼の誘導で俺達は崩壊するアジトから脱出した。

〈side out〉

〈side 綾人〉

途中、明久達とも合流して子供達を誘導して崩壊するアジトから脱出した。

だが、地上に出た直後に近くの森の中から何かが飛び出しBLACK Kの首に巻きつく。

そのままBLACKは森の中まで引き寄せられる。

「あつ！仮面ライダー！」

「俺が行く！お前らは子供達を安全な場所まで避難させるんだ。」

明久達に指示を送った俺は森の中に入りBLACKの後を追った。森の中ではBLACKがカメレオン怪人3体と戦っていた。BLACKの元に駆けつけた俺はカメレオン怪人1体に跳び蹴りを当て近くにあった広い荒野まで蹴り飛ばす。

BLACKも残り2体のカメレオン怪人に腕を捕まれながらもその状態から荒野まで跳躍して怪人達を振り払う。これだけ広ければ思いつきりやれる。

俺とBLACKがカメレオン怪人達に攻撃を仕掛けようとした時、空中に黒い玉が現れる。

「あれは！？イレギュラー！！」

「だが様子がおかしい。何をする気だ？」

突然現れたイレギュラーに警戒していると、いきなり黒い玉から触手の様なものが飛び出しカメレオン怪人達を縛りつけ自分の中に取り込んだ。

俺達はイレギュラーのいきなりの行動に戦慄を覚えた。

怪人たちを取り込んだ黒い玉はその姿を変えていく。

外見はあの時とあまり変わらないが大きく違うところが二つある。

身体の色は虹色に煌めき首がキングギドラみたいに三つになり頭がカメレオン怪人のそれになっていた。

・・・戦闘中に不謹慎かもしれないが一言言いたい。

「気持ち悪っ！？いくらカメレオンの様な奴取り込んだとしてもその姿は無いだろ！劣化版キングギドラとかそんなレベルじゃないだろ！！いくらなんでもひどすぎる！それに何で体色が虹色なんだよ！？さつきから目がチカチカして痛いんだよ！！」

「綾人君、落ち着くんのだ！・・・気持ちは分かるが今は落ち着くんのだ！」

イレギュラーの変化に対して俺はツッコミまくった。

BLACKも同じことを考えていたっばいがツッコミを我慢したよ
うだ。

光太郎さん、あんたすごいよ。

「キシヤアアアア！！」

イレギュラーが突然叫びだし、三つの口から舌を吐き出し俺とBLACKの身体に巻きつけた。

ツッコミをしていたせいで反応するのが遅れてまんまと動きを拘束されてしまった。

すぐに抜け出そうとしたが絞めつける力が予想外にも強力で振り払うことが出来ない。

そしてイレギュラーが舌から電流を俺達に流しだした。電流も加わったおかげで脱出が困難になってしまった。

ヤバイ、かなりピンチだ。

同じく拘束されているBLACKの方を見たら腰に拳を構えていた。
あれは、まさか！？

「キングストーンフラッシュュ！！」

BLACKのベルトから強力な光が放出された。

その光にイレギュラーが苦しみだしたことで拘束が解けた。
イレギュラーが怯んでいる隙にBLACKは力を溜めイレギュラーに飛びかかった。

「ライダーキック!!」

必殺技のライダーキックを繰り出すとその攻撃は見えない何かで弾かれた。バリア能力まであるのか!?イレギュラーは苦しみながらも背中の中角からミサイルを乱射した。
ミサイルの爆風で俺達は吹き飛ばされ地面に転がり落ちた。だけど俺達はすぐに立ち上がる。

「見た目の割にはかなりパワーアップしてやがる。結構ヤバイかな。」

「だとしても俺達は負けない。たとえどんな強い奴が相手でも最後に勝つのは……」

「そうだ。最後に勝つのは……」

「俺たち光だっ!!」

そう叫んだとき、俺の身体が輝きだした。

輝きはすぐに治まったが俺は何か力をもらった感じがした。

「仮面ライダーBLACK。ロードゼクターのパワーであのバリアを突破できますか？」

「さっきの攻撃した時に感じたが正直すこしパワーが足りない。」

「なら問題ないです。ロードゼクターで仕掛けましょう。」

「何か手があるみたいだね。分かった君を信じる。」

俺の作戦を信じてくれたBLACKはすぐに仲間を呼んだ。

「ロードゼクター!!」

遠くからロードゼクターが走って来る音が聞こえた。

BLACKはロードゼクターに飛び乗りイレギュラーに向けて走り出す。

俺も自分の役割を果たすために行動を開始した。

この世界からもらった力、使わせてもらっぜ!

「来い!ロードゼクター!!」

俺の声に応えるかのように異次元空間から黒いロードゼクターが現れた。

ロードゼクターに飛び乗りBLACKの隣を走る。

「そのロードゼクターは一体？」

「この世界が俺にくれた力です。BLACK、一気に決めましょう！」

「よしわかった！いくぞナイトブレイザー！」

「はい！！！」

2台のロードゼクターは縦一直線に並び走り出すことによりスリッドブストリームを発生させて通常よりもスピードが高まる。

「アタックシールド！！！」

BLACKとナイトブレイザーは同時に前屈みの体制になり、2台のロードゼクターの上部にシールドが展開されさらにそのスピードを上げる。

「いくぞイレギュラー！」

「これが俺達の方だ！！」

直線状に並びながら走る2つの光は大きな1つの光となってイレギュラーに突貫した。

光が走り抜けた跡には、大きな風穴を空けたイレギュラーが立っていた。

だがイレギュラーはまだ生きていた。

俺とBLACKはロードゼクターから飛び降りた。

これでとどめだ！

「ライダー！」

「ダブル！」

「キック！！」

俺達のキックがイレギュラーに直撃し、奴の巨体を吹っ飛ばした。

「ギヤアアアアッ！！」

そして奴は大きな叫び声を上げ爆発した。

.....

島の海岸まで戻ると子供達がこちらに走りながらやってきた。
子供達は仮面ライダーBLACKの周りに集まりお礼を言っていた。
その様子を俺達は少し離れた場所で見っていた。

「よかった。みんな無事で。」

「だな。イレギュラーの奴も倒したしこれで一件落着だな。」

「ロンバルディアから連絡が入った。つい先程この世界を包むオー
ロラが消えたそうだ。」

「それじゃあこの世界は破滅の危機から救われたんだね。」

「そうなるな。だが、この世界から敵が消えたわけではない。」

ルシエドがそう言ったとき大きな爆発がした。
さっきまでいたゴルゴムのアジトがあった場所から次々と爆発が起
こった。

「ゴルゴムはまだ存在しているからな。けど、大丈夫だ。」

そうやって、子供達に囲まれている仮面ライダーBLACKに視線
を向けた。

「ちゃんとこの世界には正義のヒーローがいるんだからな。」

.....

「そうか。もう行ってしまっただね。」

俺達は次の世界に行くためにロンバルディアに戻るところだったが、
光太郎さんが見送りに着てくれた。

「はい。破滅の危機が迫っている世界はまだたくさんありますから
ね。」

「君達の旅の無事を祈ってるよ。」

「ありがとうございます。光太郎さんもゴルゴムとの戦い頑張ってください。」

「ああ、お互い頑張ろう。」

最後に俺達は握手を交わし、次の世界に旅立った。
さして今度はどんな世界かな？

仮面ライダーと異世界よりの来訪者達の活躍により、ゴルゴムの恐ろしい怪人製造計画と世界の破滅を砕くことが出来た。

仮面ライダーは君達の味方だ。人間の平和を守るための戦士なのだ。そして来訪者達は世界を破滅の危機から救う旅に出るのだった。

仮面ライダーBLACK編END

第10話 最後に勝つのは光、戦うダブルブラック（後書き）

というわけで仮面ライダーBLACK編が終わりました。

綾「新しい力も手に入れたし、何より仮面ライダーと一緒に戦えたから満足だ。ところで次の世界の予定はどうなっているんだ？」

とりあえず考えている候補はこんな感じ

- ・リトバスの世界
- ・ISの世界
- ・fortissimoの世界

綾「三つもあるのか。どれに行くかは次回明らかにするつもりか？」

次の話まだ書き始めてないからね。決まったら書く予定。

綾「まあこの小説自体行き当たりばったりで始めたようなもんだからな。」

とりあえず次回をお楽しみに。

・・・一方その頃明久は

アル「逃げるな！逃げずに立ち向かえ！！」

明「誰か助けてええええええつ！！」

第11話 奇跡の集団。その名はリトルバスターズ！（前書き）

次の世界はタイトル見ても分かるようにリトルバスターズにしました。

綾「仮面ライダー系からいきなりジャンルが変わったな。どんな風にこいつらと絡ませるんだ？」

詳しくは後書きで話すよ。

明「……………ただ、いま。」ボロツボロツ

お帰り明久。訓練と補習終わったんだね。

綾「いやあれは訓練じゃねーからそんなレベルじゃねーから。それにジープで散々追い掛け回されたあげく補習されても体力できにも精神的にも限界で内容が頭に入んねーよ。」

明「……………もう、ゴールしてもいいよね？」

綾「よせ明久！？そのゴールだけはするな！！」

それじゃありトルバスターズ編スタートです。

第11話 奇跡の集団。その名はリトルバスターズ！

side ????

あの日修学旅行で僕達の乗っていたバスが起こした交通事故。意識を失くした僕達は不思議な体験をした。みんなの心が作り出した虚構の世界、永遠に繰り返される一学期。そこで僕、直枝理樹は様々な想いに触れ心の絆とそして強さを手に入れたんだ。あれから数ヶ月、リトルバスターズの間みなも全員無事退院し僕達は再び穏やかな日常を取り戻していた。

「うおおおおつ！筋肉さんがこうむらかーえつた！！」

「うおつ！？貴様！今のフェイントは卑怯だろ！！」

真人と謙吾が謎の遊びをしているが無視しよう。

「棗 鈴！今日こそ決着を着けますわよ！」

「それはこっちのセリフじゃボケ！理樹のバッテリー役は誰にも渡さん！！」

グラウンドの方では鈴と笹瀬川さんがいつもの様に勝負をしている。

「鈴ちゃんもさーちゃんもがんばれ〜。」

「ふぁいとですよお二方。ふれ〜ふれ〜。」

そんな二人を応援する小毬さんとクド。

「必死になって応援するコマリマックスやクドリヤフカ君もカワイイな。あ〜お持ち帰りしたい。」

「……ですがやはり直枝さんを奪い去る役は恭介さんでないと。」

そんな二人を危ない目で見る来ヶ谷さんと何かを呟いてる西園さん。
……何か寒気がした。

「イエーイ 悔しかったらこのはるちんを捕まえてみるがいい。」

「待ちなさい葉留佳！いつもイタズラばかりして、今すぐお縄につきなさい！！」

今日もイタズラに精を出す妹の葉留佳さんを追いかける姉の二木さ

ん。

「（ジーーーーーッ。）」

大きい樽に隠れてこちらを見つめる自称エリートスパイ？の朱鷺戸さん。

「はあくまた落ちた……。」

最近就活の旅から帰ってきたリトルバスターズのリーダーである恭介。
そんなみんなと騒がしくも充実した毎日を送っている。

「理樹くんもこっちに来て二人の応援しようよ。」

「うるかむですりキ。」

「わかった。今行くよ。」

小毬さん達に呼ばれた僕はみんなの所に向かって歩き出した。
すると突然グラウンドの方に大きな光の塊が現れた。

「なんじゃあれは!？」

「何なんですの一体!？」

「はわわ!？」

「何なんですかあれは!？」

光の近くにいた鈴達はいきなりのごとでパニック状態になっている。僕もすごく驚いているけど今は冷静になってみんなに指示をださいと!

「鈴達は今すぐそこから離れて!？他のみんなも一カ所に集まるんだ!」

他のみんなも動揺していたが僕の声で我に返り指示通りに動いてくれた。僕達は離れた場所に一カ所に集まり光の様子を見ていた。そしてその光はさらに輝きを増しグラウンドを包み込んだ。あまりの眩しさに目を閉じてしまう。

それから恐る恐る目を開け謎の光が消えたのと全員無事かを確認するとみんなにもう大丈夫だと言う。

「みんな、もう光は消えたみたいだから目を開けても大丈夫だよ。」

「そうか。しかし今の光は何……！」

「どうしたの恭介？」

何だったんだ。そう言おうとした恭介がその光があつた場所を見て驚いた表情をした。

それにつられて僕や他のみんなも見るとそこには二人の男と一匹の犬（？）がいた。

〈side out〉

〈side 綾人〉

BLACKの世界に別れを告げ旅立った俺達はオーロラが発生している次の世界に向かった。

そしてその世界を見つけてすぐに転送した。転送された場所はどこかのグラウンドだった。

「ここが次の世界か。パッと見たところ、ここも前の世界と同じで日本みたいだな。」

「ここグラウンドみたいだけど、どこかの学校にでも転送されたのかな。」

「まずは情報収集からだ。世界がこの場所に導いたのには恐らく何か意味があるだろう。」

「そうかもな。前もすぐに仮面ライダーと接触できたからな。この場所になにかある可能性は高いな。」

方針も決まったからいざ出発しよう。と思つたら複数の視線を感じたので振り返るとそこには学生の集団がこちらを見ていた。この学生か？と思ひながら俺達はグラウンドから出発・・・じゃねーよ！！

もしかして転送されるとこ見られた？いや十中八九見られてるだろう。現にメツチャ見られている。

「（どうするのさ綾人。あの人達、さつきからこっちを見ているけどこれってまずいんじゃない？）」

「（非常にまずいな。あの視線の感じは何か異様なものを見る目だ。こままだとイレギュラーの搜索に影響が出るかもしれないな。何とかしないと。）」

この状況をどうしたもんかと考えていたらルシエドが学生の集団に向かって歩き始めた。何か策があるのかルシエド？

「その者達、最近この辺りで黒く光る玉を見たりしなかったか？」

うおおおおおい！？何いきなりナチュラルに会話始めてんのあの犬コロ！！まず今の状況と自分の姿考えろよ！いきなり喋る犬に話しかけられて答える奴なんていないだろ普通！

「あっはい！？見たこたないですけど・・・て！？」

「ooooooooooooo犬が喋ったoooooooooooo！！！！！！」

「そして答えた上でツツコムんかいお前等は！？」

これが俺達とリトルバスターズのファーストコンタクトだった。

来訪者達が次に訪れた世界。そこは悲しい結末を変え、みんなが笑える結末に変えるための奇跡を起こした少年少女達がいる世界。

「リトルバスターズ」の世界である。

第11話 奇跡の集団。その名はリトルバスターズ！（後書き）

いきなりピンチだね。

綾「ルシエドのアホのせいだな。あの犬コロ後で絶対しばく。」

ところで明久は？

綾「精神的に危険な状態だったからそこに寝かしつけたが、さつきから「ジープが来る」てうなされてるんだよ。」

そつとう怖かったみたいだね。

綾「そうなくても仕方がない。ところで今回の世界はどうやって進むんだ？内容見たら本編クリア後みたいだけど。それに追加ヒロイン達がリトルバスターズに入ってることになってるが？」

そつちの方が個人的にはおもしろいと思ったから。シナリオの都合上約二名はメンバーにならないかね。こっちの方がメンバー達との絡みも増やせるからね。

綾「なるほど。でもこの世界で戦闘なんて出来るのか？そついうのとは無縁な世界と思うが。」

それについてはある方法で戦闘を書くから。それゆえに今回はギャグだらけになるけどね。

綾「まあ、たまにはいいんじゃないか？それと次回はややこしくなったあの状況を何とかしないと。」

そうだね。 まだ考えてないけど。

綾「作者――――！！」

第12話 容赦なき脅迫。これから始まる学園生活。(前書き)

問題

以下の意味を持つことわざを答えなさい

- (1) 得意な事でも失敗してしまう事
- (2) 悪い事があつたうえに、更に悪い事が起きる喩え

ルシエド・二木 佳奈多・直枝 理樹・神薙 綾人の答え

- (1) 弘法も筆の誤り
- (2) 泣きつ面に蜂

アルカール先生のコメント

正解だ。他にも(1)なら“河童の川流れ”、“猿も木から落ちる”、(2)なら“踏んだり蹴ったり”や“弱り目に祟り目”などがある。

朱鷺戸 沙耶の答え

- (1) サルを木から撃ち落とす
- (2) 泣きつ面に集中砲火

棗 鈴の答え

- (1) バカ兄貴を窓から蹴り落とす
- (2) 泣きつ面をネコに引掻かせる

三枝 葉留佳の答え

- (1) 道にビー玉を仕掛ける
- (2) こけたところで追加の仕掛け

アルカール先生のコメント
君達は鬼か。

来ヶ谷 唯湖の答え

(2) こけたコマリマックスのパンツを拝見する。

アルカール先生のコメント
それはセクハラだ。

小「う、うあああんっ！みられたあああっ！」

棗 恭介の答え

(1) 誤爆してミッションに失敗

(2) 面接におちて今だに就職が決まらない

アルカール先生のコメント

(2) の方の答えの近くに何か濡れた後があるのだが？

井ノ原 真人の答え

(1) 答えを宇宙人がビームで焼き払いました

(2) 答えを関西人がビームで焼き払いました

アルカール先生のコメント

・・・見なかったことにしよう。

綾「確かゲームでもこの言い訳してたな。」

吉井 明久の答え

(1) 河童の川流れ

(2) 弱り目に祟り目

アルカール先生のコメント

正解だ。やればできるじゃないか。

明「もうジープはイヤだ!!」

綾「それで勉強頑張ったんだな。」

第12話 容赦なき脅迫。これから始まる学園生活。

ルシエドのアホのせいにより俺達は現在の状況を打破すべく例の学生集団に事情を話した。頭がイカれているやつ等という第一印象を埋め込まれるのは仕方ないと思ったが意外にも返ってきた返事は意外なものだった。

「すごいな。まさか異世界なんてものがあるとか夢が広がるとかそんなレベルじゃないぞ。」

「ねえねえ、他の世界にはおいしいお菓子とかあるのかな？」

「異世界か。そこにはネコ耳やイヌ耳をリアルに生やした美少女達も存在するのか？考えただけでたまらん！」

「フツ異世界のヤツだろうと俺の筋肉に敵うヤツは誰もいないぜ。」

「お前はまたそれなのか。他に何かないのか。」

何かあっさりと受け入れられているんだがどういうことだ？普通ならもっと疑いの視線や疑問をぶつけるはずなのに。

「なんかみんな普通に信じてくれたけど、どういうことなのかな？」

「そんなの俺が聞きたい。いくらなんでもこれは予想外すぎる。」

ルシエドの方を見るとなんか犬や猫見たいな女子達が集まってきた。
いる。

「お前犬の癖に喋れるなんてたいしたヤツなんだな。」

「棗さん。普通犬は喋ったりしませんわよ。」

「わふうー。喋れる犬に会えるなんて感激ですう。るしえど、お手
」です。」

「だから貴様等は何度言えば分かる。我は犬ではなくケルベロスだ。
」

とりあえずあの駄犬は無視だ、この状況作った元凶だし。とりあえず俺と明久はこの中でまともそうな男子生徒に話しかけた。

「おい、どういうことだ？こんな話をされたらこの反応は普通にありえない。お前達は何なんだ？」

「確かに普通だったら誰も信じないかもしれない。僕も半信半疑だしね。でも、僕達も普通ならありえない不思議な体験を何度か経験しているからね。異世界があってもおかしくはないよ。」

「どういうことなの？不思議な体験をしたって？」

「そうだね。君達も話してくれたんだから僕達も話したほうがいいよね。」

そして男子生徒、直枝 理樹は自分達に起こった出来事を話した。繰り返される世界の中で来るべき悲劇の未来を変えるために強くなり奇跡を起こし今の平穩に帰ってきたと。その話を聞いて俺はこいつらはすごいと思った。

「こんなことがあったから僕達は驚いたり疑ったりはしないんです。」

「強いなお前は、いやお前達は。」

とりあえず互いに起こった不思議な体験について話していると一人の女子が急に質問をしてきた。

「はいはい。はるちん質問があるんですがいいでしょうかー」

「えーと確か三枝だったか？何だ質問て？」

「綾人君たちって異世界を旅しているんだよね？」

「そうだがそれがどうかしたのか？」

「さっきの光の中から出てきたみたいに他には何か出来ないの？」

その質問の答えはYESだが、それをわざわざ言っつもりはない。
だから答えは・・・

「な」ちなみに喋らないという選択肢はないぞ少年。「いつていきなり誰だ！？」

俺がNOと答えようとしたら突然会話に乱入してきた女子がいた。
来ヶ谷とか言ったな。どういうことだ一体？

「」どうもこころも君達はまだ我々に隠していることがあるだろ？こちらら全部喋ったのにそっちが話さないのはフェアではないからな。」

こいつも人の考えを読めるのか!? そのうえ用心深い上に言っていることも正論だ。厄介な奴が居たもんだ。だが、そうだとしても話す訳にはいかないから明久の方にも絶対喋るなと視線で釘をさすようにするが・・・

「喋ってはくれないか少年。」プルン

「グハアツ!!!!」ブシャー!!!!!!

この女自分の胸を利用して明久を色仕掛けやがった!? 明久はそのまま鼻血を出して倒れた。なんて卑怯な。とにかく今はこの状況の打破を。

「おとなしく観念するといい。事情はどうであれ君達はこの学校の施設に無断で入り込んでいるんだ。この事を学校の教師達に通報することが出来る。・・・二木君。」

「はあーわかりましたよ。・・・もしもし先生ですか?」

「包み隠さず全てお話しします!」

「ふむ。素直でよろしい。」

チクショー！本当にこの人何者だよ！？こっちの逃げ道完全に防いだ上での脅迫って。いくらなんでも手際良過ぎるだろ！！

「あきらめなさい。この人こっぴうの得意だから。」

「なんかごめんね。でも来ヶ谷さん相手にはあきらめたほうがいいよ。」

直枝と二木の同情に少し泣けた。その口ぶりから察するにお前等も被害者だったんだな。

観念した俺はリトルバスターズの前で力を使うことになった。本来こっぴうのはダメなんだがやるしかない。

「一回しかやらないから良く見とけ。」

右手を上げスナップをきかせて拳を握り叫ぶ。

「変身！！」

そして俺の身体は光だしその姿をナイトブレイザーへと変えた。

「わふうー。私にもお願いしマス！」

「はるちゃんにもサイン頂戴！」

「大人気だね綾人。・・・？綾人どうしたの？」

「俺変身ヒーローって呼ばれた。そのうえサインまで、俺変身できて良かった。」グスン、グスン。

俺はあまりにも感動して泣いてしまった。ナイトブレイザーやって良かったー！！

・・・・・・・・・・・・・・・・

それから何とか落ち着いた俺達は今後のについて検討していた。この世界が俺達特異点をここに転送してきたという事を前の世界の経験で踏まえる、とこの付近にイレギュラーが潜伏している可能性が高い。それに奴等はその世界の中で強い力を持つ奴をターゲットにして襲う。俺の勘だがイレギュラーがターゲットにするのはこいつらリトルバスターズだと思う。だからその護衛とイレギュラーの探索を同時に行う方法を摸索していた。その時恭介が1つの提案をしてきた。

「だったらこの学校の生徒になればいいんじゃないか？それなら俺達の護衛にそのイレギュラーの捜索ができる、それに学校の寮を調査本部にできるから一石二鳥いや三丁になるぞ。」

「その案は俺も考えた。けど難しいんだよこれの作戦は。」

「難しい？どうしてなの綾人。」

「俺達はこの世界の住人じゃない。つまりこの世界に俺達の戸籍はない。学校とか国の経営する公共機関とくに教育機関ともなるとそれが必要になる。戸籍もなければ学歴もない。この世界でそれを持たない俺達にはその作戦は無理があるんだ。」

「いや、それでもない。その案で行こう。」

俺が作戦の困難さを説明していたら、ルシエドが話しかけてきた。それでもないってどういふことだ？

「戸籍と過去がないならこの世界に頼んで造ってもらえばいい。世界のほうも喜んで協力してくれるだろうからな。」

「この世界に造らせるって、どういうことだ？」

「言葉の通りだ。この世界は我々特異点達にイレギュラーという異物を取り除いて欲しくてこの世界に招き入れたんだ。その作業に支障をきたすことで見つけ出すのが遅れて破滅が起これば困るのはこの世界だ。だからこちらへの協力は惜しまないだろう。」

「なるほどな。それなら早速この世界に協力してもらおうか。ルシエドどうすればいいんだ？」

「我が思念でこの世界の意思にコンタクトをとって事情を説明する。了承したらすぐにでもそれは行われる。・・・それでは始めるぞ。」

そう言つてルシエドは目を閉じて黙りこむ。それからすこしして目を開けた。

「どうやら終わったらしい。」

「もうか？やけに早いな。けど何も変わったところは無いが本当に大丈夫なのか？」

俺達が疑問に思っていると、学校の校舎側からこちらに向かって歩いてくる人を見かけた。格好からしてこの教師だろう。そして教

師は俺達を見つけるとこっちに向かって歩いてきて二木と直枝に話しかけている。すこしして会話が終わり教師が去っていくと二人はこっちに向かって驚いたような表情をしてこちらに向かってきた。

「おい、二人ともそんな驚いた顔をしてどうしたんだ？」

「……あなた達ここに明日から転入してくる生徒になってるわよ。」

「はい？」

二木の言った言葉を俺達は処理するのに時間をかけた。そして・

「「うそ——————！！？」」

と、思わず叫んでしまったがこれぐらいは許して欲しい。だっていきなりすぎてビックリしたから。つうか世界の力パネエ。

こうして俺達のイレギュラーを探し出す学園生活が始まるのだった。

第12話 容赦なき脅迫。これから始まる学園生活。（後書き）

そんなこんなで学校に潜伏成功。

綾「変な言い方をするな。これは作戦なんだからな。」

分かっているよ。次回はリトバス名物のアレがあるよ。

綾「あーあの名物か。誰が生贄になるんだ？」

とりあえずゲームのアレを再現したいから真人になってもらう。それとは別に明久と理樹には不幸が待っています。

明・理「「ちょっと作者！それどうということ！？」」

それではまた次回。

明・理「「話を聞け—————！！」」

第13話 称号と女装と敗者の末路（前書き）

今回はリトバス名物のアレをやります。

綾「たしか作者が好きなシーンも書くんだろ。」

そだよ。あれはどうしても書きたかったからね。

綾「それとあの二人に迫る不幸って何なんだ？」

それも踏まえて本編をどうぞ。

第13話 称号と女装と敗者の末路

あれから俺達がこの学校の転入生としてやってきてから3日がたった。学年とクラスは理樹達と同じになったのでクラスに馴染むのにそう時間はかからなかった。とりあえずは調査を進めながら学生ライフを満喫していた。そんなある日、恭介が俺達を部室に集めた。何でも重大な話があるらしい。

「恭介のヤツ、自分から呼び出しといてまだ来てないって何様だよ。それに重大な話って？」

「リトルバスターズのみんなもいるけどみんなは何か知っているの？」

「いや、僕達も恭介に呼び出されたんだけど何も聞かされてないんだ。」

「気にするだけ無駄だと思うぞ。アイツのこれは今に始まったことではない。」

「恭介の突拍子な行動はいつもの事だからな。」

「あのバカ兄貴は何も考えてない。」

理樹達と恭介への愚痴を語っているとようやく恭介が現れた。

「諸君、遅れてしまつてすまなかつたな。」

「謝罪はいいから用件を早く言え。俺と明久は調査で忙しいんだ。」

「そうか、なら発表しよう。諸君！俺はここに第2回ランキングバトル大会の開催をここに宣言する！！」

「「ランキングバトル大会？」」

何だそれ？ランキングバトルってなんのランキングだ？と俺と明久が疑問に思っていると恭介が説明を始めた。

「綾人達は最近ここに来ただけだから何かわからないだろうから説明しよう。」

そして恭介の説明が始まった。キツカケは真人と謙吾のケンカから始まつたらしい。本気の二人がケンカしたらどちらもただじゃすまなくなるから恭介がルールを決めたらしい。そのルールは恭介が集めた野次馬達が武器になりそんなものを適当に投げ入れ、その中か

ら掴み取ったものを武器にして戦うというルールだ。ただし一度掴んだ武器は変更する事はできず、また武器は本来の使用方法で使用しなければならぬ。

このルールがこうをそうしたのかりトルバスターズのバトルは生徒達の娯楽名物となりそれを盛り上げるためにランキング制にしたらしい。

「へえ、そんなことみんなやってたんだ。何だか面白そうだね。」

「武器を投げる側としてギャラリーも参加できる。そのルールが娯楽浸透に一役買ったんだろな。そしてそれを説明するということは大方俺達も参加メンバーに入ってるってことだろ。違うか？恭介。」

「話が早くて助かる。そうだ、俺達リトルバスターズに綾人と明久を含めた総勢15人でやる。一学期の時よりも人数が多いからバトルの方も盛り上がること間違いなしだ。どうだおもしろそうだろ？」

「ちょっと待ってよ恭介。ダメだよ勝手にそんなこと決めちゃ。神雑君達は調査で忙しいのにそんな理由で邪魔しちゃダメだよ。」

「別にいいぞ。」

「そうだね。」

「えっ？」

恭介の発案に理樹がストップをかけようとするが、俺はそれを了承した。即決した俺達を理樹は驚いたような顔で見た。

「本当にいいの？イレギュラーを早く探さないと大変なことになるんじゃないの？」

「確かにそうだが、焦って探したら見つかるものも見つからないからな。息抜きには丁度いい。」

「話を聞いたら僕もやってみたくなっちゃったよ。」

「でも、本当にいいの？」

「心配すんな。参加することで調査を疎かにはしねえよ。(それにこんな面白そうなイベントに参加しないなんてあり得ないからな。)

「

「そう言ってくれると思ってたぜ。それじゃ早速エキシビジョンバトルをやるか。」

「エキシビジョンバトル？」

謎のワードに俺と明久がハモった。どうやら初参加の俺達の為にバトルがどんなモノなのか見せてくれるらしい。恭介は携帯でどこかに連絡した。すると、すぐに学校の生徒達が集まってきた。

「バトルは鈴と真人にやってもらおう。2人とも準備はいいか!？」

「おう。俺の筋肉が唸りを上げるぜ!！」

「イヤだ。めんどくさい。」

やる気のある真人に対してやる気のない鈴。これじゃバトルにならないんじゃないか?と思っていたら恭介が鈴に何かを囁いている。

「(理樹にいいところを見せるチャンスだぞ。)」

「やる!」

恭介の囁きで急にやる気を出した鈴。恭介の口の動きから察するに

内容は大体わかった。
いや〜乙女だね〜。

「これよりバトルを開始する！お前等、適当に武器を投げてください！」

その合図をかわきりにギャラリーがいろんな物を投げ入れた。鈴と真人はそれぞれ武器を掴んだ。さて2人ともどんな武器で戦うんだ？

「むん。」

そうやって鈴は自分の武器を構える。鈴の武器は……三節棍！
？なんであんなもんが学校に、
しかも一般生徒が持っているんだ？
対して真人の武器は……へっ？

「……………」

掴んだ本人も開いた口が塞がらないといった状態だった。
無理もないな。真人の武器は……

「またうなぎパイかよー！ー！ー！？」

そう。掴んだ本人が叫んだように真人の武器はうなぎパイだ。これでバトルって無理があるだろ。」

「なんか最初の時と同じシチュエーションになっている。」

「前にも同じ事あったんだ!?!」

「それでまたって言っているのか。」

理樹の言葉に驚愕する明久と冷静に分析する俺。両者に武器が渡つたのを確認した恭介が始まりを告げる言葉を叫ぶ。

「それじゃあ、バトルスタート!!」カーン!!

どこからともなくゴングが鳴りバトルが始まった。

なかなか人に懐かない気高き仔猫 棗 鈴

VS

憎めない筋肉馬鹿一直線 井ノ原 真人

「しねっ。」

鈴の先制攻撃。鈴は三節棍を振り回し真人の死角から攻撃する。

「うおっ！」

真人はそれをくらい怯む。負けじと真人もうなぎパイを構える。

「今度はこっちからいくぜー！」

真人の反撃。勢いをつけてうなぎパイで叩く。しかし結果は……ポキン！と音が鳴りうなぎパイが折れてしまった。

「うああああー！ー！つ！またうなぎパイがあああー！つ！」

わかっていた事だとしてもやっぱり真人はショックを受けた。てかやっぱり前の時も折れたんだなうなぎパイ。

「しねっ。」

その隙を見逃すはずもなく鈴の三節棍が真人の後頭部に直撃。それをまともにくらった真人はその場で倒れ勝負がついた。

「勝者、鈴！」

周りからうおおーっ！と歓声がどつと湧く。まあ、普通にうなぎパイで三節棍に勝てるわけないわな。

「では鈴様、あの負け犬めに称号をどうぞ。」

男子生徒の1人がそんなことを言った。何だ称号って？

「おつと説明を忘れていたな。バトルの勝者は敗者に好きな称号を付けられるんだ。」

「それはわかったんだが、称号を付けられたらどうなるんだ？」

「バトルに勝って他の称号を手に入れない限りその称号が付いて回る。それだけだ。」

「なんだ、だったらそんなに大した事じゃないね。」

そのルールに明久は安堵しているが俺はなにかいやな予感がした。

「それじゃ、前と同じやつでクス。」

「真人はクズの称号を手に入れた」

「うおおおーっ、またその称号かよおおおーっ!!」

真人が頭を抱えて叫ぶ。つまり新しい称号を手に入れるまで真人は学校の生徒からクス呼ばわりされると言うことか。というかクスって前にも付けられてたみたいだな。

「前言撤回。恐ろしいルールだ。」

明久がさっきの言葉を撤回した。まあ当然だろうな。

「ルールも分かったことだしお前達どっちかやってみるか？」

恭介がいきなり提案してきた。見てる側は楽しいが、バトルする側は必死になって勝たなければいけない。明久の方を見るとさっきとは明らかに態度が変わっていたが無理もないな。目の前でクラスメイトがクスになってしまったんだ。もし負けたりしたらあれの二の舞になるかもしれないからな。

「こっちは理樹を出そう。」

「ちよつと恭介！勝手に決めないでよ！」

「幼馴染二人が身体を張ったんだ。同じ幼馴染として次期リーダーとしてお前が出なくてどうする？」

いきなりの指名に反論する理樹だが恭介の話術で丸め込まれ最終的に渋々了承した。さて相手が決まったのでこちらはもちろん

「明久（綾人）が行くよ。」

俺と明久の声が被った。こいつ俺を生贖にするつもりか。だが、こちらも生贖になるつもりはない！

「ならじゃんけんで決めるか？心理戦ありで。」

「ふっふーん、望むところだよ。だったら僕はグーを出すよ！」

「そうか、なら俺はお前がグーを出さないなら・・・ジープで追い掛け回す。」

「へっ？へっ？」

「じゃんけんポン！」

動揺している明久に俺はパーを出す。明久は慌ててグーを出し勝負が決まった。

「俺の勝ち。ハイ決定！」

「絶対にイヤだ！！やり直しを要求する！」

「おい恭介。こっちは明久が出ることになった。」

「無視すんなーっ！っ！」

知るか、これも心理戦だろうが。そして明久は恭介に引きづられてバトルフィールドに連行された。その姿はドナドナをイメージさせた。

「なんだってこんなことにチクショー綾人のヤツ！」

「こうなったら仕方ないよ吉井君。とりあえず始めようか。」

強制的に駆り出された2人は互いの身の不幸に同情していた。そしてバトル開始の合図が告げられる。

「それじゃあ、バトルスタート!!」 カーーン!!

バトルが始まり再びギャラリーがいろんな物を投げ入れた。理樹と明久は飛んでくる武器を手についた、が2人が掴んだ物とはとんでもない物だった。

「……制服？」

理樹が掴んだのはこの学校の制服だ……女子用の。

「なんじゃこりゃーっ!!」

そして明久が掴んだのは……オーソドックスなメイド服。

「なんでこんなのが混ぜてるの!？」

2人の声がハモツた。確かに服を投げ入れるなんて投げたヤツはど

ういう神経してんだ？見る分にはおもしろいが。だがこの場合どうやって戦うんだ？恭介に聞きに行ってみるか。

「恭介、この場合はどうやって戦うんだ？」

「本来の使い方です。戦うのがルールだからな・・・服なら着て戦うべきだろう。」

「「えー！そんなのイヤだよ！」」

理樹と明久が抗議をしているとこちらに来る足音が聞こえた。小毬と葉瑠佳と来ヶ谷がこちらに来た。

「理樹君、このリボンもつけてほしいな。」

「このしましまニーソもきつと似合うデスよ！」

「吉井少年にはこのカチューシャを。」

どうやら2人の味方はいない様だ。あきらめた2人は仕方なく更衣室に行き替えてきた。

出てきたのは2人の男ではなく美少女だった。

「うう・・・またこれを着ることになるなんて・・・」

そう言った理樹の姿は、頭に星のリボンを付け、女子の制服を纏い、しましまニーソを履いた状態だ。はっきり言おう。どこから見ても女子生徒にしか見えない。女装のレベル高いな、それにまたって事は過去に着た事があるのか？

「なんで僕がこんな格好を・・・」

明久の方は古き良きメイドになっていた。こっちもレベルが高い。

「リキーベリーきゅーとですっ」

「明久君もかわいい〜」

「お2人から百合の花が見えます。」

「2人とも本当は女の子じゃないですか？」

「「違うよ!!! 正真正銘の男だよ!!!」」

「お前達！もうよめにいけないな！」

「「ほつといてよ！なんか違うし！」」

女性陣からは絶賛されている。周りのギャラリ―も股間を押さえるヤツやなにか敗北感を感じているやつ等もいる。それと鈴、それは言ってるな。

「準備もできたことだし早く始めたらどうだね。・・はあはあ」「ぼたぼた

そんな2人を見て来ヶ谷が鼻血を出しながら見ていた。ひよつとして服投げ入れたのこいつか？

「2人とも。」

「ちょっと神雑君からも何とか言ってよ！」

「そつだよ！こんなの絶対おかしいよね！」

「諦めて受け入れる。そうしないと周りがみんな敵になるぞ。」

「「イヤーーーーーッ!!!」」

結局このバトルは両者が戦意喪失ということでも無効試合となった。だが二人の心には大きなダメージを残したことには間違いない。よし、戦う時はちゃんと武器を見て選ぶ。俺は心に固くそう誓った。そしてその夜、俺達は敗者の末路を目撃した。それは食堂でのこと。

「悪いクズ、ソース取ってくれ。」

「ほらよ……」

「まさ……あ、いや、クズはマヨネーズいらんのか?」

「もらじよ……」

「うわぁ、そんなにかけるの?」

「わりいかよ……」

「次あたし使うから早くしろクズ。」

「うあああああーっ！こんな耐えられるかあああーっ！イジメかああーっ！てめえらやっぱり筋肉イジメて楽しんでんだろおおーっ！」

「いや、ルールだし。」

「だったら今すぐ誰か勝負しろ！」

「うっさいクズ」

「言い忘れたが開催は明日からだ。よって今日はバトルはできない。」

「じゃあ、明日になるまでこの称号のまんまじゃねえかよーっっ！」

「だまれボケ。」

「ああん？鈴、今ボケって言ったよな？ボケってなんだよっ、そんな呼び方許可してねえよっ！」

「じゃ、だまれクス。」

「うああああーっ！そっちのほづが傷つくことに今気づいたああーっ！」

「……これが敗者の末路か。惨すぎる。」

「……絶対負けられないね。」

この日俺達は負けられない戦いへの参加をすこし後悔した。

第13話 称号と女装と敗者の末路（後書き）

ということでもランキングバトルを書きました。

綾「確かにこれは名物だな。ゲームでも真人はここでさらにいいキヤラしているってわかるとこだしな。」

リトバスに真人は不可欠でしょ。

綾「そして来ヶ谷の策略により女子生徒にされた理樹と別の世界に
来てまで女装された明久。」

この二人がそ揃うんならこれは必要かと思つて。

綾「俺に被害が来ないならいい。」

理・明「「よくない!!!」」

何か聞こえるけどとりあえず無視で。次回はあの人と一緒にダンジ
ョン探索。

綾「ゲームやってる人はその時点で誰か分かるな。それではまた次
回。」

第14話 ダンジョンと怪物と賢には「注意を。」（前書き）

やっと書きあがった。

綾「最近リアルが忙しかったからな。あまりパソコンの前に立って
なかつたんだろ？」

そうなんだよね。携帯で打つにもスマートフォンはかなり打ちづら
いから全然進まないのよこれが。

綾「そうか。とりあえず気を取り直して本編をどうぞ」

第14話 ダンジョンと怪物と賢には「注意を。」

夜、調査を始めようとした時、朱鷺戸から連絡があった。何でも怪しい場所に心当たりがあるらしい。俺達は朱鷺戸が待っているという教室に赴いた。

「それで朱鷺戸、怪しい場所ってのはどこだ？」

「見たところ普通の教室だけどここに何かあるの？」

「それを説明するからあなた達、ちょっと協力しなさい。」

そう言われたのでとりあえず朱鷺戸の指示のもと教室にあった机と椅子をピラミッドのような形に積み上げる。最後の机と椅子を頂に載せた時、ゴトリと音がした。

「何？今の音？」

「後ろの黒板から聞こえたようだが何あるのか？」

「じじいじじいよ。」

朱鷺戸が黒板に近づいていき、それを両手で押し上げた。そこにはコンクリートの壁に人1人が這いながら通れそうな狭い穴があった。

「何でこんなもんが学校にあるんだ？それに何でお前みたいな一般生徒がこんなことを知っているんだ？」

「それについても説明するわ。あたしが何者なのかも含めてね。」

そして朱鷺戸の説明が始まった。朱鷺戸はどこかの国の秘密機関の諜報員いわゆるスパイらしい。目的はなんでもこの学校に隠された秘宝を探し出すことらしい。秘宝は埋蔵金とかそういう単純な金銀などではなく革命的な何からしい。その秘宝を狙って朱鷺戸以外にもいくつもの機関からスパイが送り込まれているらしい。なんとも胡散臭い話だ。

「それでそれを俺達に教えたということはその秘法探しに協力しろってことか？」

「話が早くて助かるわ。それにあなた達にとっても悪くない話だと思っただけど。」

「どづいづいことなの朱鷺戸さん？」

「あなた達はこの世界にいるイレギュラーという存在を探しているんでしょ？いろいろ調査をしているみたいだけど、そのイレギュラーのいる場所とかの見当はついたの？」

「それはまだだけどそれとその秘宝がどう関係するの？」

「はあ、俺が説明する。いいかイレギュラーはその世界で力の強いものを狙うと前にルシエドが言っただろ。そんでそのターゲットはリトルバスターズの面々だと俺達にはらんだ。そして前の世界ではイレギュラーは近くに潜伏していて襲ってきた。前と同じならイレギュラーはこの学校の付近、もしくは学校内に潜伏しているということだ。それに調査では今言った二つの場所からはイレギュラーが見つかることはなかった。」

「それは近くにいないからなんじゃ？」

「だとしたらターゲットを襲えないだろ。前回の戦いでイレギュラーは何気に用心深いターゲットの近くにいて監視しているかもしれない、じゃないと体力を消耗した直後の光太郎さんに奇襲をかけるなんてタイミングが良すぎるからな、かなりの高確率で近くに潜んでいると思う。そして今から行く場所は学校の地下だ。地上にいないなら地下に潜伏している可能性もあるからな。」

「そうか！地下なら確かに近い場所に当てはまるね。それに僕達が

調査したのって地上だけだしね。」

「理解したようね。そうあたしは秘宝のため、あなた達はイレギュラーを探すため、目的は違えど探す場所は同じなんだから手を組んだ方が効率がいいのよ。それに中には闇の執行部の奴等がうようよしている上に侵入者用のトラップが仕掛けられている。こっちも戦力が必要になるのよ。」

「トラップの存在はわかっていたがその闇の執行部ってのは何だ？何かの部活動か？」

「闇の執行部はこの学園の秩序を守る存在よ。なにか問題が起きたら人知れず問題ごとになかったことにするの。手段を選ばずに。当然秘宝も奴等がまもっているわ。」

「そうか。それでその闇の執行部の奴等は人間なのか？話を聞いた限りじゃただの人間にはそんなことはできないぞ。」

「奴等は一応この学校の生徒、あるいはOBと言われているわ。奴等は自分達の影を飛ばして常に学校を監視したり侵入者を排除しているわ。けど最近になって奴等の影に異変が起こったの。」

「異変？なにかあったの？」

「奴等の影が突然その姿を怪物に変えたのよ。そのせいなのか戦闘力が格段に上がって対処しにくくなったの。これってあなた達に探しているイレギュラーの影響かしら？」

「そう見て間違いないな。イレギュラーは様々なものに影響を及ぼす。闇の執行部は恐らくイレギュラーに取り込まれたかもしれないな。そうなったらこの世界の人間の力だけじゃ対処は難しいからな。」

「そういう事だからあなた達に協力を頼んでるの。あんな怪物達と戦う専門家なんだから戦力としては申し分ないからね。それに私はこの地下をある程度は調べているし戦闘もできるわ。どう、協力してくれない？」

思っていたよりも厄介な状況になっているな。この提案は受けた方がよさそうだ。

「わかった。協力しよう。」

「いいの綾人？ルシエドにも相談しないで。というか今気づいたけどルシエドがいないね。」

「そうするのが最良の手だからな。俺達は力を持っているとはいえ

万能じゃない。この地下の構造や闇の執行部については何も情報を持っていない。それならその道のエキスパートに頼んだ方が効率がいいからな。それとルシエドは地上に残ってあいつ等の護衛をしている。全員で地下を探索している時にイレギュラーがあいつ等を襲ってくる可能性もあるからな地上をがら空きにするのはアウトだ。それにルシエドがこの場においても俺と同じ判断をしてただろうしな。

「

というかルシエドが最近空気になりかけているのは気のせいだろうか？

「それに朱鷺戸もイレギュラー搜索の方にも手を貸してくれるんだろ？」

「ええ、そうよ。協力関係になるんだからそれぐらいは手伝うわ。怪物達との戦闘はともかく得体の知れないイレギュラーとの戦闘は勘弁だけ。」

「それでいい。それじゃこれで交渉成立だな。よろしく頼むぞ朱鷺戸。」

「「こちらこそよろしくね。」

俺達は互いに握手をして協力関係を結んだ。そしてに穴に潜りこみ

這って進むと梯子が見えそれを下っていき地下へと侵入した。朱鷺戸が持ってきたライトを照らすと、中は地下室の言葉に相応しい感じでコンクリートで固められた部屋だった。奥に扉がひとつあり俺達はその扉をくぐると通路があり、そのまま進むとまたしても扉があった。その前まで歩いていくと朱鷺戸が待ったをかけた。

「この向こうには、入り組んだ地下迷宮が広がっているの。恐らく迷宮の奥深くに秘宝が眠っていると思うわ。イレギュラーがどこにいるかは分からないけど。」

「中の構造がどうなっているか分かれば十分だ。イレギュラーに関してはそのうち見つかる気持ちで探せばいい。神経を張り詰めすぎても碌な事にはならないからな。」

「わかったわ。それでこの扉の向こうに多分何体かいるはずよ。二人とも戦闘準備は出来てる?」

朱鷺戸の言葉に俺達は互いの武器を構えて肯定を伝える。

「綾人そのベルトは?それにデンガツシャーはどうしたの?」

「デンガツシャーは前の世界で結構無理させすぎて今整備中で使えないんだ。だから別の武器を持ってきたんだ。」

今俺がつけているベルトは仮面ライダーXが使っていたベルトの「ライドル」モドキだが原作どおりに使える代物だ。俺はライドルのグリップ部分についているL・R・S・Hのボタンの中でSのボタンを押しスティックモードにして引き抜く。

「そんじゃ戦闘開始と行きますか。」

俺達は扉を開き中に入った。なかはすこし広い部屋であり中には朱鷺戸の言っていた怪物達がいた。

数は青いボロマントを着た骸骨兵士3体だ。1体に明久はブラスタ―をソードモードにして切りかかり、朱鷺戸はハンドガンで明久の援護射撃を行う。俺はライドルスティックで残り2体との戦闘を開始した。

「ふっ、よつと、くらいな！」

骸骨兵士1体が自分の武器であるレイピアで切りかかってくるが、ライドルでそれを弾きカウンターで突きをくらわせヤツの身体に挟ませる。

「おーらよっ！」

ライドルで挟んだ骸骨を勢いよくもう1体の骸骨兵士めがけて投げ

落とす。骸骨2体はおしくら状態になり身動きができず一箇所に固まっている。トドメをさすためにグリップのHのボタンを押し、ステイクモードから短鞭とフェンシングを掛け合わせたようなデザインのホイップモードにチェンジする。

「必殺！ライドルX斬りモードキ！！」

ライドルホイップで2体まとめてX字に切り裂さいた。それをくらった骸骨兵士2体は塵のように消滅した。

「飛燕剣！！」

蒼い2つの斬撃が骸骨兵士を切り裂き消滅させた。明久達の方も終わったようだ。

「あなた達予想以上にやるわね。あたしはあの骸骨1体だけでも倒すのに苦労するのにあっさり倒しちゃうなんてすごすぎね。」

「これぐらいのレベルなら余裕だな、」

「そうだね。まだカメレオン怪人の方が手強かったよ。」

「この部屋の敵は片付いたようだから先に進みましょう。この奥の部屋にはトラップがあったけど前の探索の時に解除しておいたから先に進めるはずよ。この先も頼りにさせてもらおうわ。」

部屋の扉から先に進んみ、行き着いた部屋の中で下に続く階段を見つければ降り地下二階の部屋へと到着したが案の定骸骨共がいたが難なく駆逐する。先に進み奥の部屋に着くとそこには約幅3メートルぐらいのおにぎり型の岩が部屋の端に置いてある。

「なんか岩があるよ・・・」

「いかにも下に入り口がありますよっていいたげに置いてあるわね・・・」

「ちよつと調べる。」

俺はそう言って岩に慎重に近づきそれにふれて硬さと強度、重量を肌で確かめる。

「朱鷺戸の言うとおり多分この下に入り口があるな。」

「じゃ、この岩をどかすか壊せばいいんだよね。どうするの?」

「初めは壊そうかと思ったがブービートラップの可能性もあるから無しにする。けど、動かそうにもこの岩予想以上に重いんだ。変身しても動かせられるか微妙だな。それに変身は結構疲れるから体力はなるべく温存したい。とりあえず仕掛けがないか手分けして探そう。」

そして俺達は何か仕掛けがないか部屋の辺りを調べ始めた。

｝side out｝

｝side 明久｝

岩をどかすための仕掛けを探すために僕達は部屋の辺りを調べ始めた。綾人と朱鷺戸さんは部屋の中を調べているので僕は部屋の外に出てみることにした。

「あんまり遠くにいかないのよっ、危険だから。」

「遠くに行き過ぎて迷子にはなるなよ。」

2人から子供のようなことを言われる。失礼な、危険なのは確かだ

けどそこまで子供じゃない。外に出ると部屋の入り口の横の壁から丸い石が出っ張っているのに気づく。後付されたみたいな物のよう
で動きそうだ。持っていたライトを一度おいて、僕は両手で端を持
ち、力を込め回し始める。ごごご・・・と石が擦れ合う音をたてな
がらそれを勢いよく回していく。一周したところで最後にゴトリと
部屋の中から音がした。もしかして！

「やったー！二人とも仕掛けが解けたよ！」

「え？こっちは何も変わりないんだけど。」

「特に何も変わってないぞ。本当に解けたのか明久？」

部屋の中から2人の声が聞こえる。あれ？へんだな・・・と思った
直後、突然地震が起きた。

「ひやあああ！！！」

「のわっ！何だいきなり!？」

2人の悲鳴が聞こえた。部屋の中で何かが起こったんだ！僕はライ
トを持つと、部屋の中を照らした。
そこには信じられない状況があった。

「部屋が回転してる!!」

床が天井になり、天上が床になり・・・

「止めてええええー!!」

(ごろんごろん・・・)

「マジで死ぬっ!!」

(ごろんごろん・・・)

やがて一回転して部屋は止まった。僕は急いで部屋に飛び込みライトで2人の姿を探す。2人は部屋の隅に突っ伏していた。それがむくりと起き上がる。

「慎重に取り扱うべき正体不明の仕掛けをいきなり大胆に一回転もさせるなあっ!!」

「おい!バカ久!!お前の頭の中に慎重という言葉はないのか!!」

2人から非難の声が飛んでくる。

「え、ああ、そうだね・・・ちよつとだけ動かすつもりがつい思いつきり動かしちゃった。えーと無事？」

「ええ！奇跡的なことに無傷よっ！」

「あんなでかい岩にこねくり合わされてな！」

「それは不幸中の幸い・・・」

「明久、ちよつとOHANASIするか？肉体言語で。」（ポキポキ）

「それだけのご勘弁を！ほ、ほら、そこに入り口があるよ。だから抑えて。」

僕は必死で岩が元あった場所を指さす。

「たくつ。次はないぞ。」（ギロツ）

「次やったら風穴あけるわよ。」（ギロツ）

2人に睨まれながらも何とかこの場は回避できた。危ない危ない。ここでくたばるところだった。

「とりあえず先に進むわよ・・・っ!？」

突然朱鷺戸さんがその場に崩れ落ちる。もしかして怪我!？綾人が駆け寄り怪我の具合を見る。

「軽い捻挫だな。さっきのアレで挫いたんだろうな。」

「じゃあ今日は戻る?」

「その方がいいな。医療道具もないし、このまま進むと容態が悪化してしまうからな。朱鷺戸もそれでいいか?」

「悔しいけどそうするしかないわ。こんな状態で怪物達とも戦えないしね。戻りましょ。」

僕は今日の探索を切り上げ地上に戻った。怪我したんじゃしょうがないからね。

「誰のせいだと思っている!!」「」

「ごめんなさい!!」「(全力土下座)

第14話 ダンジョンと怪物と罠には「注意を。」（後書き）

というわけでダンジョンから一時撤退だね。

綾「さてバカ久。言い残す言葉はあるか。十秒やる。」

バカ「ホントに悪かったと思っているし反省もしているからOHANASSIは勘弁してー！」

綾「安心しろ。OHANASSIはしない。」

バカ「えっそうなの！許してくれたんでね。」

綾「何を言っている？俺は何もしないその代わり・・・」

アル先生「ジープの準備ができたぞ。お前の希望どおり強化も終わっている。」

綾「というわけだバカ久。安心して逝って来い。」（サムズアップ）

バカ「だが断る！」（逃走）

綾「逃がすか！ライドロープー！」

（そしてバカはグルグル巻きにされ電流を流される。）

バカ「あばばばばばばばっー！！」（ビリビリ）

綾「捕獲完了。アルカール後はやっといてくれ。」

アル先生「うむ、わかった。いくぞ明久。」

（そしてバカはアルカーン先生に連れて行かれる）

綾「あゝスッキリした。」（爽やかな笑顔）

明久大丈夫かな？

第15話 ジャンケンと生け贄と自虐スパイ（前書き）

何とか書き上げられた。

綾「といつても今回はそんなに進まないんだろ？」

どれぐらい載せていいかわからないからね。基本この小説下書き無
いから。

明「大丈夫なの？こんな調子で？」

とりあえず頑張るよ。つか明久、何でいるの？ジープは？

明「……必死に土下座してなんとか回避したよ。」

綾「そうか。それはざんね……苦勞したな……チッ！」

明「今残念で言おうとした上に舌打ちしなかった？」

綾「そうだが。それが何か？」

明「あっさり白状した!？」

第15話 ジャンケンと生け贄と自虐スパイ

ダンジョン探索から帰ってきた俺達は、教室の机を元の配置に戻して解散した。俺と明久は寮に戻る前にルシエドのどこに行きさつきまでのことを話した。

「そうか、そんなことがあったのか。我も協力関係には賛成だ。その道のエキスパートが居た方が調査もはかどるうえに戦力も増強されるからな。だが明久よ、お前は無用心すぎだ。」

「ルシエドもそう言わないでよ、ちゃんと反省してるんだから。明日はちゃんとやるよ。」

「そうでなくては困る。……そして貴様はさつきから話も聞かずに何をやっている綾人？」

「お前達も大変だなストレルカ、ヴェルカ。あんな駄犬と同じ小屋なんてホントごめんな。明日おやつ持ってくるから楽しみにしとけよ。……なんか言ったかルシエド？」

「貴様は報告に来たのではないのか。それよりも誰が駄犬だ。」

「そんなのは二次だ。俺は駄犬と一緒に小屋に住むストレルカと

ヴェルカに労いと詫びと愛でに来たんだ。全くお前のせいでこの超可愛い二匹が肩身の狭い思いをしてるんだ、二匹に申し訳ないとは思わんのか駄犬。」

「だから誰が駄犬だ！それに貴様は報告を明久におしつけて何を下らんことをしている。」

「ざけんなつ！こいつ等を愛でる事は当然の行為なんだよ！駄犬に報告するよりも重要なことなんだよ！！」

俺は最優先事項を実行しているだけだ。失礼な犬め！

「・・・あのサルシエド。綾人が人が変わったみたいになっているけど何で？」

「・・・あいつは可愛い生物を見たら愛でずにはいられない性癖を持っているんだ。人間には反応しないが動物などにはああなってしまう。」

「綾人は常識人かと思っていただけそんな弱点があったなんて。」

「普段は問題ないんだ。やつが可愛いと判断したものを目にするとこうなる。それにこれはまだマシな方だ。これで対象が小さいなら

理性が崩壊して愛でるところだ。」

明久達がなんか言っているけど気にしない。それよりも明日この二匹に持つてくるおやつを考えなければ。クドリヤフカに相談してみるか。この後寮に帰りその日は終わった。

そして次の日の夜になり俺と明久は例の教室で朱鷺戸と合流してダンジョンに入る。前回解除したトラップの部屋まで到着し階段を下りた。

「地下3階に到着つと。色々準備してきたから今日で最下層まで目指すが問題ないな?」

「ええ、かまわないわ。」

「僕も早く終わらせたいから賛成。」

目標も決まり俺達は歩き出した。この階は分かれ道が多くて結構な長さだった。そしてトラップのある部屋に到着した。

「またあからさまに仕掛けのありそうな石像があるわね……。」

部屋にあったのは人間の形を模した石像で巨像とも言えるほど大きく脇の部分は胴と一体化しているが、肘から先は可動部分となっているのか組んだ跡が見える。
申し訳程度に作られた無機質な表情が寒々しさを感じさせた。

「その手前にも何かあるね……。」

俺達は寄って行って、それぞれを調べる。

「何か四つの手が仕掛けて降りてくるみたい。」

「こっちはヘルメットと石か何かで作られた固いバットみたいな棒が備えてあるみたいに置かれてるよ。」

「俺……なんかこれ見たことあるんだが。」

「奇遇だね……僕もだよ……。」

「右に同じくよ。三つの手はグー、チョキ、パーよね？」

「そうだな。それらが左手。右手にはそれと同じ棒を持つてるな。」

「ねえ二人とも、言ってもいいかな？」

「「どひぞ。」」

「これって・・・叩いてかぶってジャンケンぽん・・・だよね!？」

「「・・・そうだな。(そうね)」」

何でトラップがいきなり珍妙なやつになるんだ？

｝ s i d e o u t ｝

｝ s i d e 明久 ｝

僕は目の前のトラップに啞然としていた。

「トラップ自体はあんなに恐ろしいのに、下に降りる仕掛けにこんな遊び感覚・・・訳が分からない!」

「「そうだな(そうね)」。」」

「でも、こいつに石の棒で殴られたら死ぬよね……。」

「ヘルメットなんて意味あるのかしら？」

「置いてあるんだからあるんじゃないのか？」

そう言ってる2人の視線は僕に向いている。……まさか!?

「え、ちょっと待って!？僕がやるの!？」

「もしかして吉井くんはあたしにやらせるの？あんなのに殴られたら、頭割れちゃうじゃない。」

「明久……女性にやらせようだなんて最低だな。」

「そんなこと言ってないよね!？それに僕も殴られたら頭割れちゃうよ……!？」

「ヘルメットかぶったら大丈夫だろ。」

「いやいやいや、さつきヘルメットの意味ないって2人とも言ってたよね！」

「ないとは言っていないわよ、あるのかしら？って訊いただけよ。」

「あるかもしれないだろ。」

「じゃあ、ないよ！それにこんなのに殴られたら大惨事だよっ！」

「ジャンケンに勝てばいいだろ（いいじゃない）。」「」

「そりゃそうだけど・・・勝ち負けなんてどういうシステムで判断されるんだろっ・・・。」

何か場に不釣り合いな箱形のセンサーのようなものが床に埋め込まれているけど。このままでは僕がコレの餌食になってしまう。何とかして押しつけないと。

「綾人がやりなよ。朱鷺戸さんは女の子だからやらせる訳にはいかないし、綾人の中で一番強いんだから一番安全だろ。」

「だが断る。つべこべ言わずにさっさと生けに・・・解除してこい。」

「今生け贖って言おうとしたよね！そんなのお断りだよ！！やっぱり綾人が行きなよ。ほら、このヘルメットだって綾人にピッタリだし、僕なんかよりもぜんぜん似合うしだから・・・。」

「つべこべ言わずにさっさとやれ！それとも昨日の事でOHANASSIしてやるうか！！」

「はい！直ちにやります！！」

僕はOHANASSIされるまえに瞬時に座る。

「頑張つてね。あなたのこと忘れないから。」

「骨は拾ってやるから安心して逝け。」

「僕が死ぬこと確定してるの！？・・・うう、なんで僕だけそんな役回りなの。」

僕は意を決して巨像と向かい合うようにして膝をつく。

『叩いてかぶって』

なんか音楽が流れ出した。

「この仕掛けを作った人のセンスがわからないわ・・・」

「・・・その場のノリかなんかで作ったんじゃないのか？」

『ジャーンケーン』

『ぼん!』

僕はグーを出した。相手は・・・パー。

負けた！ヘルメットを！！すかさずそれで頭を隠す。その上から・・・

・どごん!!と衝撃が走る。

・・・・

・・・・。

・・・・。

・・・・

・・・・あきひさっ・・・

「吉井くんってばっ。」

「起きろ明久。」

ん……。目の前で2人が呼んでいる。僕はようやく身を起こす。

「僕……。どうしたんだっけ……」

僕のぼーっとした視界にあの巨像が映る。

「あ……。そうか、あいつに殴られて気絶してたのか……」

「「「そうだ（そうよ）、だから早く2回戦にのぞめ（のぞんでよ）。」」」

「……はい？」

「「第2回戦」「」

「誰が？」

「「「お前あなたが。勝つまでやるぞ（やるのよ）」「」」

2人は僕を引きずり出す。・・・はい？

「うわーっ！？意識失ってた人にそんなむち打たないでよっっ！」

「だって勝つまで足止めじゃない。」

「早く生け贄になれ。（この役目はお前にしかできないんだ）」

「せめて交互にしてよっ！あと綾人は建前と本音が逆だよっ！！！」

「あなたねえ・・・わかつたわ。百歩譲ってジャンケンだけはしてあげる。任して、ジャンケンは強いだよ。」

「それ殴られるの僕じゃないか！！それに、そんなに自信があるなら全部やってよっ！！！」

「なら俺は勝った時に殴る役をやるっ。」

「結局殴られるの僕のままじゃないかっ！！！！！」

「「いいから、いいから」

『叩いてかぶって』

『ジャーンケーン』

『ぼん!』

朱鷺戸さんは・・・グー。相手は・・・パー。

負けた！ヘルメットを！！すかさずそれで頭を隠す。その上から・・・
どごん！！とまた衝撃が走る。

・・・。。。

・・・。

・・・くん・・・

・・・あきひさっ・・・

「吉井くんってばっ。」

「起きろ明久。」

ん・・・。目の前で2人が呼んでいる。僕はようやく身を起す。

「僕……どうしたんだっけ……」

僕のぼーっとした視界にあの巨像が映る。

「あ……そうか、またあいつに殴られて気絶してたのか……」

「「そうだ（そうよ）、だから早く3回戦にのぞめ（のぞんでよ）。」

「」

「……はい？」

「「第3回戦。さあ、ともに戦おう（戦いましょう）」」

「それまた僕が殴られ役つてことですよね!？」

「ジャンケン強いほうよ。」

「たった今負けたよね!？」

「あれでよく覚えていたな。」

「そんな危険な気絶の仕方してたの僕!？」

「いや、長かったなあ……と。」

「次やったら絶対死ぬよ、僕っ!!」

「次は勝つ……多分。」

「多分って何だよ!せめて対策とか練ろうよっ!」

「対策……そうね。生けに……頭を使うのはあなたの役目ね。違う意味で頭は使いまくったけど。」

「砕け散るぐらいね。それと朱鷺戸さんも生け贄って言おうとしたよねっ!……せめて負けた時に飛び退いて避けるとかどうだろうか……あるいは代わりに重しを置いておくとかさ……」

「そういう『ルール違反』って、なんか恐くない?」

「確かにな。トラップが発動して、あの巨像ごと倒れてきたりしたら想像するだけでも恐怖だな。」

「じゃあ、ジャンケンの法則性を考えてみようよ。」

最初はパー。2回戦は、パー……っ

「これってパーしか出さないんじゃないの!？」

「え? あー、そうか。」

「そんな適当に相づち打たないでよ! こっちは命がかかってるんですけど!!」

「明久(吉井くん)、あんなに殴られたのにツッコム気力はあるんだな(あるのね)。」

「そんなどうでもいいところに食いついてこないですよ!……っ
まりこいつはパーしか出さない。だからチヨキでいくよ。」

『叩いてかぶって』

『 ジャーンケーン 』

『 ぽん！ 』

チヨキ！相手はやっぱりパー！勝った！！・・・スパーンツ！！
次の瞬間、巨像に縦線が入りそれは真つ二つな破片となって落ちて
ゴトリ。と仕掛けが解けた音がする。綾人がライドルで真つ二つに
したようだ。

「今回はいいチームプレーだったんじゃない？」

「そうだな。それぞれ役目を立派に果たしたな。」

「どっがっ！？逆に致命的なヒビが生じたよ！！」

「なにそれ？冗談？」

「2人に対しての愚痴だよっ！」

「そんな事より次に行くぞ生け贄・・・明久（吉井くん）。」

「今2人とも生け贄って隠さずに宣言したね!？」

「ソンカコトナイ。」

「こつち見て言えー!!！」

こうして僕達は次の階に向かった。

＼side out＼

＼side 綾人＼

生け贄（明久）を駆使して地下4階に辿り着いた俺達。入って早々また骸骨兵士共が襲い掛かってきたが、これを返り討ちにする。通路はやはり下に降りる度にどんどん広く入り組んでいるようだ。通路の奥の部屋まで辿り着き中に入る。部屋の中には岩で囲まれた池があった。よく見たら湯気が上がっているのにも気づいた。

「これはもしかして温泉か？」

「そうみたいだね。湯加減もいい感じそうだし、なんていうか普通の岩風呂だね……」

「へえ温泉か。上が空だったらよかったのにね。」

「朱鷺戸さんは露天風呂に入りたいの？」

「そういうのもいいかなって。あたしってそういう生活とは無縁だから。同じ組織で慰安旅行ぐらい行ってもバチは当たらないでしょうにねえ。」

「そういえば朱鷺戸はどっかの組織のスパイだったな。やっぱり普通の生活に憧れているんだな。」

「でもそこを狙われたら組織壊滅しちゃうね。」

「っ……」

「明久がそんなことを言うと、朱鷺戸の様子がおかしくなった。何か早口で喋っているな。」

「ああそうよ、あなたの言う通りよ、社会の裏側でひっそり暗躍を

続ける組織がかきぴーとかビールとか飲みながら『いやあこの間の銃撃戦、死にそうでしたよー』とかお喋りしながら慰安旅行とかしてたら、そりゃ隙だらけの危機感0で一網打尽だわっ、あー間抜けね、とても間抜けね、滑稽でしょ、笑うがいいわっ！あーっはっはっはっ！」

すごい早口で自虐を始めた。朱鷺戸って墓穴をほつたらこんな感じになるヤツだったんだな。明久がその急変ぶりにおろおろしているが、こっちは無視して温泉の方を調べる。よく見たら湯の底につき目があることに気づく。どうやらそこが抜ける仕組みのようだならばっ！

「ライドルロングポール！」

グリップ部分のLのボタンを押してライドルを引き抜く。ライドルスティックと形状は似ているが高飛びの棒ほどの長さに伸びたロングポールとなる。俺は底のつなぎ目に狙いを定めライドルで思い切り突く。すると底が抜け、できた穴に温泉が流れていく。少しして温泉はなくなり、次の階へ行けるようになった。

「・・・なんかあっさりクリアしたわね。」

「前の階とは難易度が違いすぎるよ。」

自虐モードから戻った朱鷺戸と明久がこちらに来た。とりあえず大丈夫そうだな。この勢いで俺達は最下層を目指すべく次の階に下りた。

第15話 ジャンケンと生け贄と自虐スパイ（後書き）

地下4階もクリアして次は5階へ。

綾「この時点でBLACKの世界より話数が長くなったな。」

色々ネタを詰めた結果こうなった。反省はしているが後悔はしていない。

綾「まあ、いさぎのよい事。それで今回は生け贄の活躍と朱鷺戸の性格が出たな。」

朱鷺戸さん書くならアレは絶対必要でしょ。

生け贄「というより僕の扱いかなり酷くない！ていうか名前が生け贄になってる!？」

綾「前回あれだけの事やつといてよくそんな事がいえるな生け贄。別にOHANASIしてやってもいいんだぞ。」（ゴゴゴゴゴッ!）

生け贄「すいませんでした!」（ジャンピング土下座）

哀れだ明久。あっそうそう、綾人のヒロイン候補のオリキャラができたよ。

綾「何だつてー！そいつはうれしいな。んでいつ出てくるんだ。」

いつ出すかはまだ決まってないけど、近いうちに出す予定。

生け贄「ちなみに僕の方は？」

いやーそれがまったく。

生け贄「だから僕の扱い酷すぎるよね。なんで綾人は決まって僕の方は全然なの!？」

仕方ないだろ。浮かばないものは浮かばないんだから。

綾「いつそのこと募集かヒロインのレンタルを頼んでみるか？」

できたらそうしたいけど、こんな駄文に募集してくれる人いるかな？

綾「・・・それではまた次回。」

ちよっと!?!何とか言ってよ!

第16話 クライムとハリセンとケツバット（前書き）

月光閃火様、GAU様、オリキャラの投稿と貸し出し許可ありがとうございます！

綾「これで明久にも春が来るな。いや〜めでたい。」

明「ホントだよ、誰になるのかな？」

まだ決める気はないよ。

綾・明「……………はい？」

とりあえずは候補だからね。投稿されたキャラや貸し出してもらったキャラにはもちろんフラグ立てるように書くけど、本決まりは当分先だよ。

明「なんでわざわざそんなことするの？」

それは君が上条さん程ではないがフラグメーカーだからね。無自覚にフラグを立てていき、四苦八苦する様を書いてみたいと思って。

明「貴様！僕に不幸なれというのか！？」

少なくとも姫路や島田のような暴力アプローチはないから安心しろ。候補は全員女子力高いから。

綾「それに世界設定もおもしろいな。確か候補の1人の世界に行くことは確定しているんだろ？」

そだよ。第3の世界に行った後、べつのお話を挟んで5、6番目ぐら
いに行く予定。

綾「その間に俺のヒロイン候補も出るわけだ。」

IS編やるとしたらその子をメインにして綾人達は裏方で書くつも
りだよ。オリジナルISも考えてあるし。

綾「でもまずは本編進めないとな。」

そだね。それではスタートです。

第16話 クライムとハリセンとケツバット

ジャンケンと温泉トラップをクリアした俺達は地下5階に到着。降りた部屋の中には扉が二つあった。

「前と左に扉があるね。どっちにするの？」

「二手に別れて行く・・・はないわね。どこに骸骨部員がいるかわからないし戦力の分散はNGね。」

「その通りだな。とりあえず左から行ってみるか。」

左の扉を開け通路を進む。左のルートは真っ直ぐの一本道のようにだ歩いていたら扉を見つけた。慎重に扉を開け部屋に入った。部屋の中は寒く、冷気のようなものを感じる。俺はライトを高く構え、奥が見えるように照らした。深いところまではよくわからないが、床が光を鈍く反射させている。これは・・・

「床が凍ってる・・・。」

「今度は氷か・・・トラップなのかな？」

「わからないわ・・・ちょっと調べて・・・ひゃあああああああ
あー!?!?」

朱鷺戸の悲鳴が遠ざかっていく・・・まさか!?

「「朱鷺戸さん!」」

「うう・・・大丈夫よ・・・」

遠くで朱鷺戸の声がした。下のほうから聞こえてきたな。

「床が斜面になってるのよ・・・あなた達は絶対動かないで。3人で落ちたら上がる方法がなくなるから慎重に行動して。」

「登山用ロープとスパイクがある、そっちに投げ入れるぞ。」

俺と明久はロープの片方を持ち、引きずられないように足場をしっかりと固定して朱鷺戸を引き上げ、朱鷺戸がスロープを登りきる。

「おかえり。怪我はない?」

「なんとかね。この部屋はハズレみたいだし早く出ましょつ。」

明久と朱鷺戸は来た道を引き返していく。俺も続こうとしたが、ふと斜面の奥に光る何かを見つけたが、とりあえず保留にして2人の後を追いかける。最初の地点まで戻りもう1つの扉の先を進む。こちらは分岐路と敵の数が多かった。通路の奥の部屋まで到着し中を覗いたら、これみよがしに仕掛けが置いてあった。部屋の中心に、一抱えもある真四角な氷が据え付けられていて、そのすぐ隣には鋼鉄製の彫り物があった。

「龍ね。」

「「龍だな(ね)。」」

細身の蛇のような体をくねらせた日本風の龍で細かく鱗まで彫り込まれてある。いい仕事してるな。

「で、対するようはこちらは氷、しかも龍の彫像がちょうどすっぽり収まるような直方体よ。どう思う?」

「これなら仕掛けを解く方法は一発でわかったよ。」

「これと同じ形の龍を氷細工で再現する。かつ?」

「うん。それぞれ、その方法。」

「でも、それってかなり難儀じゃない？同じ形なら細かいとこまで再現しないとダメなんじゃないの？」

「そうだな。龍を見たが、あれはかなりの職人業で作られている。それを氷細工で再現なんて無理がある。氷だから時間が経つにつれて溶けていく、それこそ神業じゃないとできないぞ。」

「それでこの氷ってなくなったらどうなるのかしら？」

「うーん、それは……」

「その時点でゲームオーバーって可能性もあるな。何にせよ急いで仕掛けを解かないと。」

とりあえず俺達は龍と氷の周辺を調べ始める。よく見たら氷のほうに何かを刺す穴のようなものを見つけた。俺はふとさっきの部屋でこのことを思い出す。奥深くに光る何か、神業でないと作れない龍の氷細工、これが意味することは……もしかしたら！？

「2人ともさっきの氷の部屋まで戻るぞ。もしかしたら仕掛けが解けるかもしれない。」

「ホントに！」

俺達は急いで氷の斜面がある部屋まで戻った。そして、部屋に到着した俺は急いで下に下りる準備を始める。

「さっきこの奥に何か光るものを見た気がした。俺の予想が間違っていないければそれで仕掛けが解けるはずだ。」

「何がなんだかわからないけど、とりあえずは何をしたらいいの？下に下りるんなら私がやった方がよくない？」

「いや、朱鷺戸はそれを見てないから位置がわからないだろ、俺は大体の位置なら覚えているから俺が行ったほうがいい。」

「それに朱鷺戸さんがまた、ひやああああって、叫ぶことになるかもしれないしね。」

「っ！・・・何それ、嫌味？」

「明久！その発言はまずい！」

「えっ、ああ！」

「何よ、そうよ、あなたの言うとおりよっ、驚いたら、ひやああああーって大声で叫ぶ間抜けなスパイよ、すでにあなたのほうが熟練者というわけね、なら笑いなさいよ、あざ笑うがいいわっ、ほら笑いなさいよ、あーっはっはっはっ！って笑っちゃいなさいよっ、あーはっはっはっ！」

明久が自分の発言に気づいたが時すでに遅く、例のごとくまた自虐モードになってしまった朱鷺戸。元に戻るまで時間かかるなこりゃ。

「明久、そのロープをしっかりと持っていてくれ。巻き込まれないように自分の足場も固定してな。」

「うん、了解。」

俺は慎重に氷の斜面の下の大きな穴の中を降りていく。結構深いところまで降りると、近くに光る何かを見つけそれを手で掴む。俺の予想は……大当たりだ！それを懐に入れ、明久に引き上げてもらうように叫ぶ。

「おい、明久！引き上げてくれー！」

「りょーかい！」

明久に引き上げられながら上を目指して上っていく。あと少しで到着という時にトラブルが発生した。

「よし、あと少しで（ブチッ！）・・・はい？」

ロープが長時間の重さに耐え切れず切れてしまった。・・・って、マズイ！？

「「綾人（神薙くん）！！！」

「ハイヤー！！！」

明久と正気の戻った朱鷺戸がこちらに向かって叫ぶ。俺は咄嗟にベルトのグリップ部分についてあるRのボタンを押して引き抜く。ライドルは長いロープ形態の「ライドロープ」となり、それを勢いよく上に向かって振るつ。

ヒュルルルル・・・パシッ！とライドルは巻きついた・・・
明久の首に・・・

「くっ苦しっ！しっ死ぬうー！！」

「吉井くーん！何とか頑張ってー！」

ライドルが首に巻きついた明久の腕を朱鷺戸が力いっぱい引っ張る。明久が苦しみながらも俺は上に引っ張り上げられ生還を果たす。

「ふう、危なかった。助かったぞ朱鷺戸。……生きてるか明久？」

「ぜえ、ぜえ、危うく死ぬところだったよ！何で首に巻きつけるのさ！！」

「悪かった、だが首に巻きついたのは事故だ。それにこんなことやってるのは俺だけじゃない。サイボーグ・クロちゃんでも鈴木が教え子と同じ事やっていたから初犯ではない。わかってくれたか？」

「わかるかああああっ！！」

とりあえず怒れる明久に謝りながら抑えつつ、俺は穴の奥で手に入れたものを二人に見せる。

「これって、氷いや水晶でできた龍？」

「あの部屋にあったのと同じ形だね、もしかしてこれって・・・」

「あの氷には何かを刺すための謎の穴があった。そこに刺す何かがこの階層のどこかにあると予想した。そして、あの部屋の奥深くにある謎の光る物体。そこで調べたらこれがあつたわけだ。これで解けるはずだ。」

急いで奥の部屋まで行く。氷の穴の中に手に入れた水晶の龍を刺す。すると、近くの床が開き階段が出てくる。

「これで進めるな。二人とも準備はいいか。」

「大丈夫だよ（問題なしよ）」

そいて地下6階に下りる。6階は今までの階と比べて広くはなく少し歩いたらT字路があり、左右に二つの扉を見つけた。二つの部屋の中を調べたらどの部屋にも同じものが置いてあつた。

「これは・・・棺か？」

「そうみたいね。中にミイラでも入っているのかしら？」

「普通なら怖いと思うのに今までの仕掛けと比べたらやっとなしな物が来たって思うのは何でだろ？」

「同感だな。おふざけがやっとなくなったか。・・・どうする開けるか？」

「開けなきゃ何も起こらないし、それ以外の選択肢がないわよ。」

「それもそうだな。・・・それじゃあ開けるぞ。2人とも気をつける。」

2人に警戒するよう促し慎重に棺のふたを開けていく。開け終わると棺の中から『それ』がむくりと起きた。俺は明久達の近くまで下がりいつでもライドルを抜けるように構える。

「うわぁっ!」

突然現れたそれに驚いてる明久。ぼろぼろになった包帯で全身を巻いたミイラは腕を上げなぜか朱鷺戸を指差した。とりあえず朱鷺戸はうつんと首を横に振る。するとミイラは隠し持っていた『何か』

を取り出し、俺と明久に近づき持っていたそれで俺達を・・・スパ
ーシューッ!と引っぱたいた。

「「・・・はあ!?!」」

予想外の行動に俺達は固まり、ミイラは徒歩ですたすたと何事もな
かったかのように俺達の前から立ち去った。

「「何が起きたんだ(の)・・・?」」

「・・・ミイラがハリセンであなた達を引っぱたいて出て行ったわ
ね・・・多分トラップのひとつよ。」

「「嘘だろっ(でしょっ)!?!」」

「でも一応あなた達、ダメージを負ったじゃない。」

「「いやいやいや、このダメージはシユールすぎる展開についてい
けない精神的ダメージですからっ」」

「でも、一応はダメージなんじゃない?」

「「ていうか、誰？今の誰！？」」

「ミイラだったけど……こういう不可思議なことも起こりえるのよ、ここでは……」

「「そんな神妙な面持ちでいられるシーンじゃないですから！追いかけたらまだその辺に居るよあいつ！？」」

「まあ落ち着きなさいよ。気持ちはわかるけど、そいつを追ったところで何か得られるわけでもないでしょ。」

「「いや、尋問とかしたら何か言うよっ！バイトでやってるとかつ」」

「「じゃ、おっきのやつ探す？」」

「「……いや、やめとこつ。あまりにシユールな展開に取り乱してしまった。」

「「……とりあえずもつひとつの棺を開けにい」」。

何とか冷静さを取り戻した俺達は、もうひとつに棺を開けた。すると床から階段が出てきて、俺達はそれを降りて地下7階に到着した。歩きながらこの階を調べたが下に降りるような仕掛けがどこにもなかった。今までなら何かしらわかりやすく置いていたがこの階ではそれがない。正直手詰まりだ。

「この階の仕掛けってなんなのかしら？」

「どこかに何かあるのは確かなんだが、見つからないな。」

「2人とも！こっちに来て！！」

俺と朱鷺戸がどうしたものかと考えていると、明久が大声でこっちに来るように呼んだ。その場所に行ってみると何かのスイッチがあった。とりあえず押してみるとどこどこに赤外線が発生し、壁の方を見ると進行方向に矢印ができていた。

「・・・何か今度は派手になったね。」

「見た目にだまされるな・・・多分壁に映っている矢印の通りに赤外線を避けて進んでいけば仕掛けが解けるみたいな感じだな。」

「今度こそまともな仕掛けみたいね。2人とも慎重に行くわよ。」

赤外線に触れないように慎重に進んでいく俺達。そろそろこの階を一周するとこまで近づいた時、それは起こった。

「この調子ならいけそう（ツルツ）だねって・・・アレ？」

「って、急に押すな！バランスが崩れる！」

なぜか落ちてあったバナナの皮に明久が引つ掛かってしまい、俺を巻き込んで倒れてしまう。その結果赤外線に引つ掛かりそして、ブー……。と音が鳴った。

「今の音は？」

「いつもの、ごとり、とした音じゃなかったわね・・・」

「何か残念です、みたいな・・・って、どわ！」

突如隣の壁が開いて先程のミイラが2体現れ、俺と明久に近づいてきた。今度はハリセンではなく、手にバットを持っている。そして倒れている俺達になんかケツ出せみたいなジエスチャ-を始めた。

「「えっ、どういう意味？」」

ミイラ達は無言で俺達を無理やり四つんばいの体勢にした。突然の出来事にまたしても俺達は固まりなすがままにされる。ミイラ達は背後に回り込み、心の準備のできていない俺と明久のケツをバツトで思い切り殴った。

「「イツツツ！」」

俺達はその場に倒れこみ、ミイラはまた何事もなかったかのように壁の中に入りその場から出て行った。

「・・・大丈夫？」

「精神的ダメージで言うことやばいよ・・・」

「なんかかなり屈辱的なんだが・・・つか一目散に俺と明久のほうに来たし。」

「それは多分あなた達が赤外線に引っ掛かったからじゃないの、あたしの方には来なかったし。」

「つか、ホント誰！？なんなの！？あいつらはあれを仕事でやっているのー？」「」

「適材適所ってヤツじゃない？あ、これだつ、てある口見つけたんじゃないの？」「」

「ミイラやってみたら、あれ？案外俺達ミイラいけるじゃん？みたいに？そこに至るまでの経緯がわからないよ！？」」「」

「まあ屈辱なのはわかるけど、引っ掛かった罰じゃないの、それにミイラになる以前の彼等（？）のことを考えるより、最初からやり直して仕掛けを解いた方が建設的じゃないの？」「」

朱鷺戸の意見はもつともなので渋々立ち上がり、スイッチのある部屋まで戻った。浅い階のトラップはすぐトラップぽかったのに、このグダグダ感はなんだ。

初めからやり直し、今度は赤外線に触れることなく一周した。すると、ゴトリツと近くで音が鳴った。行ってみると下への階段が現れおり、俺達は次の階へと向かった。

第16話 クライムとハリセンとケツバット（後書き）

後2話ぐらいでリトバス編も終了するね。

綾「ぐらいってことは最悪あと3話もかかる可能性もあるって事か。」

「

書きたいネタ詰めていたらなぜかそうなった。反省している。

明「BLACK編より長いしね。ところで次の世界の予定は？」

こんな感じ

- ・王ドロボーJIN
- ・fortissimo/EXA
- ・イナズマイレブン
- ・リリカルなのはSTRIKERS?

とりあえずは予定だけだね。読者の方々から世界の要望があるなら、なるべくそつちを書くようにするけどね。

綾「ところで、なんでなのはこのに？が付いているんだ。」

なのはに関してはA'S以降の話は原作無視で書く予定だから。

明「どんな感じになるの？」

とりあえずメインはスバル達やヴィヴィオ、トーマ等のの新主人公達をメインにしてなのは、フェイト、はやて等はそこまで出番がな

い。ストライカーズはこんなノリで作る。

「ストライカー2、スバル・ナカジマ！」

「ストライカー3、ティアナ・ランスター！」

「ストライカー4、エリオ・モンディアル！」

「ストライカー5、キャロ・R・ルシエ！」

「世界を守るが魔導師の使命！」

「……我等、ストライカー電撃隊！！！！」

てな感じで、

綾「ちょっと待て！これ確実に苦情来るだろ！」

明「どこのスーパー戦隊！」

ちなみにギンガは6番目のポジション予定なんだけどもまだストライカー1が決まらないからテコ入れて組み込もうか迷ってるんだよね。その場合はこうなる。

「ギンガレット、ギンガ！」

「ギンガブルー、スバル！」

「ギンガイエロー、ティアナ！」

「ギンガグリーン、エリオ！」

「ギンガピンク、キャロ！」

「黒騎士、ルーテシア！」

「銀河を貫く伝説の刃！」

「『『『『『魔導師戦隊 ギンガマン！』』』』』」

になる。

綾「もうそれただのギンガマンじゃねえかよ！ギンガつながりだからか！？」

明「それにルーテシアがいつの間にか追加されているし！」

こついうノリになるがいいかな？

綾・明「『いいわけあるかー！』」

第17話 戦う為の力。覚醒する正義。（前書き）

リトバス編クライマックス前編です。

綾「という事は次くらいで終わるのか。BLACK編よりも長かったな。」

ノープランで進んだ結果こうなった。反省はしている。

明「それで今回はイレギュラーとの対決かな？」

そうだよ。そしてとうとう明久の力が覚醒するよ。

明「えっ、ホントに！？やったー！！」

それでは本編をどうぞ。

第17話 戦う為の力。覚醒する正義。

シユールなトラップをクリアして地下8階に到着した。着いてそうそう骸骨部員共が攻撃を仕掛けてきた。襲撃の予測はしていたので難なく駆逐はできたが不可解なことに気づく。

「ねえ、今戦った骸骨達何か強くなかった？弾があんまり効かなかつただけだ。」

「朱鷺戸も気づいたか、どうやら敵さんも本気になったようだな。」

「だね。ここにきて強くなったって事はこの先に行かれたら不味いんだよ。つまりこの先に」

「秘宝、もしくはイレギュラーがいるということだな。だとしたら一旦休憩にするか、消耗戦になるかもしれない。」

「そうね、ここまで休み無しで降りてきたし、それに装備の確認もやっておきましょう。」

周囲を警戒しながら俺達はこの部屋で一時休憩を取る。下の階層になることにトラップや迷路は複雑になっていたが敵の戦闘力が上がっていることはなかった。それがこの階で起こったということは目

的に近づけているのかもしれない。けど、このまま戦い続けていたらこっちが不利になる。相手の数はまだどれぐらいなのかはわかっていないし、ここが最下層かもわからない。そこで、作戦を立てることにした。

「2人とも、このままだと消耗戦になる。だからここは一転突破で行かないか？」

「奇遇ね、あたしもそうしようかと思ってたところよ。いろいろと準備してきたとはいえこのまま戦っていたらすぐに尽きてしまうわね。」

「つまり、骸骨は無視して最下層を目指すって事？」

「そういう事。今までの戦いでわかったんだが、あの骸骨どもは部屋の中にしか居ない。しかも向こうから俺達を襲ってくるのがなかった。数が上ならそうした方が効率がいいのにしないという事は・
・・」

「それができないってことになるわね。あいつ等もトラップのひとつというわけね。それが確かなら部屋を突っ切れば追っ手が来ることはないってことになるわね。今のところそれしか手が無いんだしやってみる？」

「そうしたほうがいいかもね。さすがに疲れてきたよ。」

「なら決まりだな。」

方針が決まり、俺達は休憩を終了して立ち上がり部屋を出る。入り組んだ通路を進み部屋を見つけ入る。骸骨共がいたが優先すべきは扉の位置だ。すばやく位置を把握してこいつらとの余計な戦闘を避けなければいけない。扉は……奥にある！

「2人共、突破するぞ！遅れるなよ！」

「了解！！！」

俺達は一斉に走り出し、奥の扉へと急ぐ。骸骨共がこちらに向かってくるが無視だ。牽制攻撃をしつつ突破しその部屋から出る。追っ手は……来ない。どうやら最初の賭けには勝ったな。

この作戦で俺達は戦闘を回避しながら進んだ。いくつか安全な部屋もあつたのでそこで休憩を挟みながら進んだ。しばらくして長い一本道に出た。奥には今までとは違う扉があつた。

「いかにもって感じね。どうやらここが最下層かもね。」

「準備は良いか？それじゃ……いくぜー！」

勢いよく扉を蹴り開けて部屋に入る。部屋の中には黒い煙の塊が漂っていた。見つけたぜイレギュラー！

「あれがあなた達の探していたイレギュラー・・・なんか煙みたいだけど？」

「油断するな。イレギュラーは様々な形で存在している。それにあれは真の姿じゃない。前と同じなら・・・」

そう思っていたら、黒い煙はその形を変えた。頭と体は丸く細い手足をして、頭頂部に3本の毛を生やし体色を毒々しい色に染めた姿になった。

「・・・あれって本当に強いのか？なんか幼児向けの教育ビデオでばい菌役として出演してそうな姿なんだけど。」

「・・・ノーコメントで。前のヤツは怪獣見たいなヤツで強かったんだが、大きくはあるがさすがにこの姿は予想外だ。」

「・・・イレギュラーって何を基準に姿を変えているんだろう？」

イレギュラーとの戦いなのに敵の姿のせいで空気が締まらない。そ

んな俺達を気にもとめずイレギュラーが口から毒々しい液体を吐き出してきた。

「！2人共避ける！？」

「「！？」」

呆けていた2人に指示を飛ばす。正気の戻った2人は素早く回避行動に移った。標的を失った液体は床にかかり床をぶつぶつと音をたてて溶かした。

「戦闘力は高いみたいね。あんな姿だから油断したわ。」

「どんな形でもイレギュラーはイレギュラーって事だね。」

「お前ら気を引き締めていくぞ。朱鷺戸は後方から援護射撃頼む、行くぞ明久！」

「「了解！！」」

Hのボタンを押してライドルスティックを抜き、バイキンマンモードキに向かって走る。ヤツは俺に狙いをつけたようで、右腕でパンチ

を放ってきたが、俺はそのパンチを跳んで避ける。その際に右側面に回った明久がブラスターをヤツの頭に放つ。攻撃をくらったヤツはターゲットを明久に変更して放った右腕を払うように明久に向けて振るうが。

「足元がお留守だぜ！」

足元に回りこんだ俺がライドルを渾身の力で振りヤツの足を殴る。アキレス腱の部分を狙ったのが効いたのかヤツはバランスを崩した。その結果、振った右腕は空を切る結果に終わった。

「サンキュー綾人、助かったよ。」

「こいつ、デカイくせにやけに素早いな。とにかく翻弄しながら攻撃を仕掛けるぞ。」

武器を構え直した俺達は、倒れているヤツに向かって再度攻撃を仕掛けるために突撃した。起き上がろうとしたヤツに素早く接近した明久は至近距離でパラライザーを放ち怯ませた。俺はライドルをホイップモードに変え、ヤツの腹めがけて攻撃を放つ。

「ライドルX斬り版烈風剣!!!」

風を纏ったX字の斬撃が直撃し爆煙が発生する。煙でヤツの姿はま
だ見えない、

「やったの!？」

「バカ!そのセリフは・・・」

煙が晴れるとそこには、バイキンマンモドキが立っていた。

「朱鷺戸!、お前そのセリフ生存フラグだぞ!」

「何やってんの朱鷺戸さん!僕だってガマンして言わなかったのに、

」

「えっ?これってあたしのせいなの!？」

「生存フラグなめんな!そのセリフ言ったら生存どころか敗北フラ
グまで立っちまう恐れがあんだぞ!」

「そんなの知るかー!」

「っ！ちよつと2人共ケンカはストップ！アイツなんか様子がおかしい。」

明久の言葉に従いヤツの方を見る。起き上がったヤツの体はほとんどその姿を煙に変えて天井の隙間から上へと逃げていった。

「ヤバイ！アイツ、上の連中を襲う気だ！」

「それってまずくない！？ルシエドが警護しているけど1人じゃアイツには勝てないよ！」

「急いで戻りましょ、理樹君たちが危ない！」

俺達は急いで地上に戻ろうとするが、それを許すまいと突如、部屋全体に黒い霧が発生してその姿を骸骨の怪物に変える。

「こいつら、今までのやつ等と姿が少し違う。かなり強そうよ。」

「今までの怪物が兵士なら、今度のは騎士みたいなやつ等だね。」

確かに。骸骨なのは変わりないが今までのヤツとは違い王国騎士がつけているような鎧を纏っているうえに殺気が違う。こいつらを

相手にしていたら間に合わなくなる。なら、とる手は一つ

「明久、朱鷺戸、お前達は先に行け。ここは俺が引き受ける。」

「何言ってるんだよ!? 綾人1人を置いていけるわけないだろ!」

「そうよ! それにこいつ等を1人で相手するなんて無茶よ!」

「それでもやるしかないんだ。ルシエド1人だけじゃアイツの相手は無理だ。幸い俺にはナイトブレイザーの力があるからこの場はど
うにかできる。」

「だからって!」

「早く行け! そうしないと俺達がここに来た意味がなくなる、この
世界を救うためにも逃げ!」

「……わかった。でも、絶対に後から追いかけてきてよ!」

「絶対だからね! ……吉井くん急ぐわよ。」

2人は出口目指して走った。骸骨騎士たちはそれをさせまいと立ち

はだかるが俺がそれを阻止する。

「ライドルX斬り版烈風剣!!」

烈風剣を放ち骸骨騎士たちを吹っ飛ばし突破口を作り、そこを2人が通過してこの部屋からの脱出に成功して上へと向かう。幸い朱鷺戸が今までの道を覚えていたため最短ルートで上を目指せる。なら俺のやるべきことは・・・

「お前達の相手はこっちだぜ。・・・それじゃ始めるか。」

俺は一旦両腕を腰に構え、そこから両腕を突き上げ叫ぶ。今回はこのポーズでいくぜ。

「大変身!!」

そして、俺は焰の黒騎士ナイトブレイザーへと姿を変えた。

「それじゃ、行くぜ行くぜ行くぜええええええええええええつ!!」

電王風に叫びながら俺は骸骨共に突撃する。

side out

side 理樹

僕は突然目を覚ました。時間は深夜の3時くらいだ。再び寝ようかと思ったがやめることにした。よくわからないけど何かすごくいやな予感がする。ここに居ては危険だと、そんな予感がした。そんな時ベランダからガラス戸を割って何かが飛び出してきた。

「うわあ！？一体誰！？……てルシエドさん？どうしたんですかこんな時間に、しかもベランダから。」

「直江 理樹よ起きていたか。ならちようどいい、今すぐこの寮に居る生徒をこの周辺から避難させる、敵が来る。」

「えっ、どういうことですか？それに敵って……」

「たった今イレギュラーの気配を感じた、どうやら地下に潜んでいたらしく今この寮を目指して上昇してきている。狙いはお前達リトルバスターズだ。もうじきここは戦場になる、そうなれば他の生徒達も被害に遭ってしまう。そこで寝ている井ノ原 真人を早く起こしてこの場から避難しろ。我が時間を稼ぐ」

「そんな、危険ですよルシエドさん!？」

「だがやるしかない。調査に行った綾人達も急いでこちらに向かっているだろう。それにお前達が命を落としたらこの世界が破滅してしまつかもしれないのだ。早くしろ。」

「……わかりました。真人起きて！緊急事態だよ！」

「……ふああ、なんだよ理樹まだ夜じゃねえかよ、どうしんだよおい。」

「いいから早く起きて手伝って！早くみんなを起こして寮から避難させないと危険なんだ。」

「何だかよくわからんが、マジなようだな。」

「起きたのなら逃げ！もう時間がな……来たか!？」

ルシエドさんがそう言ったのと同時に学校の方角から凄いい音がした。ルシエドさんは音の発生地帯に向かって素早く走り去った。今の音で完全に目が覚めた真人に他のみんなを起こして学校から避難させるように指示を出して、僕は他のメンバーに急いで連絡を取った。今の音で起きていたのが幸いして他のメンバーにもルシエドさんの

話を伝えて避難誘導を始めた。

side out

side 明久

綾人にしんがりをやってもらい僕達は全速力で地上に向かっている。朱鷺戸さんが地下の構造を全部覚えていたから最短ルートで向かっている。けど、地下8階から上っているから最短ルートで目指してもまだ地上まで遠く、今地下3階に到着したとこだ。

「はあ、はあ、・・・骸骨を倒した部屋は安全なのがラッキーだったわね。足止めの心配がないから安心して地上をを目指せるわ。」

「ぜえ、ぜえ、けどまだ3階だよ、急がないとみんなが・・・」

そして僕達は再び走り出し地上を目指すが、突然進行方向に黒い霧が現れその姿を骸骨騎士に変えた。ここにきて待ち伏せ!?

「どうやら二段構えだったようね。敵もあながちバカじゃないって事ね。」

「くそっ！こっちは急いでいるのに！」

「……吉井くん、ここから先の道順覚えている。」

「えっ、一応覚えているけど……まさか朱鷺戸さん!？」

「ここはあたしが引き受けるわ。吉井くんは先に行つて。」

「ダメだよ！朱鷺戸さんひとりであいつ等を相手にするのは危険すぎる！僕が残つて戦つよ。」

「危険なのは言われなくてもわかつているわ、けどね、それが今できる最善策なのよ。あのイレギュラーに対抗できるのは今は吉井くんだけなのよ。あたしが行つたところでアイツを倒すことはできない。その力を持っていてみんなを助けに行けるのはあなただけなの。大丈夫、あいつらを倒すつもりはないわ。できるだけ時間を稼ぐから、だから、みんなを助けに行つて！」

「……朱鷺戸さん、ごめん！」

「謝らなくて良いわよ、その代わり、あのバイキンマンモドキを倒しなさいよ。」

その言葉に僕は首を縦に振る。そして走りだす、地上を目指して。骸骨達が僕に向かって剣を振おうとする。

「やらせないわよ!!」

後ろから朱鷺戸さんの声が聞こえたと同時に、骸骨達の剣が銃弾で弾かれる。その隙に僕は骸骨達を突破して地上を目指す。

「さあ、行くわよ。ミッション……スタート!!」

朱鷺戸さんのその言葉と共に銃声が鳴り響いた。けど、振り返ってはいけないんだ。僕は前だけを見て走るんだ、地上を目指して。そして、ようやく僕は地上に到着した。全速力で走ってきたからかなりの体力を消耗しているけど休んでいる暇はない。

早くイレギュラーを探さないと。そう思っていたら何か崩れる音が聞こえた。僕は急いで音のした場所に向かった。そこには、あのイレギュラーと戦闘でぼろぼろになっているルシエドの姿があった。

「ルシエド!大丈夫!？」

「……明久か、まだお前だけし来てないのか？」

「・・・他の2人はしんがり役やって、それで僕だけ・・・」

「気に病むな、あいつ等の判断は正しい。それよりも早くこいつを倒さないとこの学校が完全に破壊されてしまう。」

学校の方は半壊とまではいかないがイレギュラーの攻撃で被害を受けていた。いくつかの教室が破壊されている。それに、地下に居た時よりも明らかに大きくなっている。6メートルぐらいだったのが、20メートルぐらいにまでなっていた。

「準備はいいな・・・行くぞ明久！」

「了解！」

僕はハンドブラスターを連射させながら接近する。ルシエドは素早く背後に回りこみ爪で攻撃を仕掛けて素早く離脱するヒット&アウェイで攻撃している。これ以上校舎を破壊させないためにも人が居ない近くの土手の方に誘導しようとしたが、イレギュラーの足元の近くに倒れている動物を発見する。

「あれは・・・棗さんの飼っていた子ネコ!? あんなところに居たら危ない! ルシエド!」

「どうした！？・・・そういうことか、我が注意を引くその隙に助け出せ！」

「わかった！任せて。」

ルシエドがイレギュラーのかく乱を始めた。僕は子ネコの元に走り、抱きかかえる。

「・・・大丈夫。気を失っているだけみたいだね。急いでここから離れ「逃げる！明久！！」えっ？」

子ネコを抱きかかえずぐにその場を離れようとしたが、上からイレギュラーの足が降って来た。僕は全力でその場から飛び出し直撃は避けるが、落ちてきた足の衝撃をくらってしまいその場に倒れてしまう。

イレギュラーはトドメといわんばかりに僕目掛けてパンチを放ってくる。

さっきのダメージでまともに動けない。ここまでののか僕は、この世界も、リトルバスターズのみんなも、この子ネコも、何も守れずに終わるのか。

記憶を取り戻すこともできずにここで死ぬのか。そう思った時、僕は恐怖を感じた。

死にたくない、死にたくない、死んだらもう誰にも会えなくなる。

綾人にも、ルシエドにも、アルカールさんにも、リトルバスターズのみんなにも、誰にも会えなくなる。そんなのはイヤだ。そんなの間違っている。僕はまだ何もやり遂げてないんだ。こんなところで死ぬわけにはいかない。

「僕は、僕は……生きたいんだー!!」

そう叫んだ時、何かが弾け僕の体から光があふれ出した。

「この光……どうやら力が覚醒したようだな。アルカール殿より授かりしヒーローの力が。」

そして光が収まった。上から降ってきた巨大な拳を僕は片手で受け止めそれを掴み投げ飛ばす。イレギュラーはその巨体を空中に浮かせ倒れ落ちる。

何が起こったのかわからない。けど、わかっていることがひとつだけある。それは……

「正義を貫く力を宿した新たなヒーロー。光の戦士」アルカイザ
ー「よ。」

僕が戦える力を手に入れたことだ。

第17話 戦う為の力。覚醒する正義。（後書き）

ということの前編はここまでです。

綾「いい所で引き伸ばしたな。何か理由でもあんのか？」

いや、たんに疲れただけ。

綾「よし、今すぐ面かせ！その腐った性根を矯正してやる！！」

冗談だよ、少しリアルの方がまた忙しくなりそうだからここまでし
かできなかったの。

明「そうなんだ。それで今回は最後に僕が変身したけど、これって
本来ならゲームでナイトブレイザーに始めて変身した時の状況と同
じなんだよね。」

セカンドイグニッションのやつだね。綾人はBLACKの世界で普
通にナイトブレイザーに変身したからね。明久はまだだったからこ
っちに使ってみた。

綾「なるほどね。ところでここが終わったら次いく世界が決まった
のか。」

次は多分fortissimoEXAになると思う。その前にリト
バス編の番外編を書くかもしれないけどね。あと綾人のヒロイン候
補はそれが終わった後に出すよ。

綾「そうか。さすがにあの戦隊なのはSTRIKERSは書かない

か。
」

えっ、書くき满满ですけど何か？

明「アレ本気だったの！？やばいって、原作ファンから苦情来ちゃ
うよ。」

それも覚悟のうえだ。そのために交渉しにいく準備もしているし。

綾「準備？なんのだ？」

ストライカー電撃隊（仮）のストライカー1になるキャラクターの
スカウトという名のレンタル交渉の準備。

綾「また交渉かよ！？だが当てはあるのか？」

とりあえず自分的にはあのキャラしかストライカー1にはなれない
と思っている。

明「誰なのそれ？」

交渉がうまくいったら話す。次回は明久無双になるかも。

それではまた次回！

第18話 迎える決着、暗躍する闇。(前書き)

問題

世界の歴史上の偉人が残した名言を一つ書き、またそれを言った人物の名前も答えよ。

ルシエド・直枝 理樹の答え

名言 困難あり、便法あり、希望あり。

人物 毛沢東

アルカール先生のコメント

この言葉は困難なことがあれば、それに対処する方法があり、希望があるという名言だな。正解だ。

神北 小毬の答え

名言 やさしい言葉は、たとえ簡単な言葉でも、ずっとずっと心にこだまする。

人物 マザー・テレサ

アルカール先生のコメント

簡単な一言でも、思いやりのある言葉は、ずっと忘れずに憶えているもので、ちよっとした言葉でも、誰かを幸せにすることができる。という名言だな。正解だ。

能美 クドリヤフカの答え

名言 地球は青かった。

人物 ユーレイ・アレクセーエヴィチ・ガガーリン

アルカール先生のコメント

1961年に世界初の宇宙飛行を成功させて帰還後に語った言葉だな。君は宇宙飛行士を目指しているみたいだね。その夢を諦めなければきつとなれると私は思うぞ。

西園 美魚の答え

名言 少年よ男子を抱け

人物 ウィリアム・スミス・クラーク

アルカール先生のコメント

・・・何か間違っていないか？

井ノ原 真人の答え

名言 猫も棒から落ちる

アルカール先生のコメント

それはことわざだ、しかも間違っているぞ。

宮沢 謙吾の答え

名言 こいつ馬鹿だ！（旧友・井ノ原 真人を仰ぎ見て）

人物 棗 鈴

アルカール先生のコメント

彼の解答を見た後だから気持ちはわかるが友達は大事にしよう。

棗 鈴の答え

名言 んまっ・・・つぁ・・・ちよぎっ！

人物 井ノ原 真人（己の人生を振り返りながら）

アルカール先生のコメント

・・・彼の人生に何があったんだ？

棗 恭介の答え

名言 んまっ・・・っあ・・・ちよぎっ！（対訳 マヨネーズを
お持ちしました！）

人物 井ノ原 真人（空を仰ぎ見て）

アルカール先生のコメント

地味な内容の割に軽快だ、しかし彼にとってマヨネーズを空に向けて差し出しすという状況はどんな状況だ？

真「シャーペンで脇腹つつかれただけだよっ！！」

神薙 綾人の答え

名言 認めたくないものだな、自分自身の若さゆえの過ちというものを・・・

人物 シヤア・アズナブル

アルカール先生の答え

・・・正解でいいだろう。

綾「正解で当たり前だ。大佐の名言だぞ。」

吉井 明久の答え

名言 俺は！スペシャルで！2000回で！模擬戦なんだよオ！
人物 パトリック・コーラサワー

アルカール先生の答え

今度は00か！・・・まあ正解にしようとやる。

明「死亡フラグはこの人の前では意味を持たないね。」

第18話 迎える決着、暗躍する闇。

Side 理樹

みんなに緊急事態だと連絡を取り、真人と一緒に寮にいる生徒達を起こし避難誘導を始めた。さっきした大きな音で大半の生徒が起きていたのが救いだ。パニック状態の人たちもいたけど、なんとか落ち着かせて今は安全な場所までの誘導を行っている。

「直枝、新館の方の生徒達の誘導は終わったわ。旧館の方は？」

「こっちももうすぐ終わるよ。それよりも全員いるのか確認しないと。二木さん達女子は確認の方をして。僕達はまだ誰か残っていないか見てくるから。付いて来てくれる真人、謙吾。」

「おうよ！筋肉の出番のようだな！！」

「心得た！だが急ぐぞ。早くしないとこちらも巻き込まれるからな。」

寮に戻り逃げ遅れた人が居ないか探した。しばらくして全部の部屋を回り終え誰も居ないことを確認したので僕達も急いで寮から出て避難場所にいるみんなと合流した。

「どうやら全員無事のようだな。・・・しかし、何が起きているんだ理樹君。」

「うん。さっきルシエドさんが僕の部屋に来て警告したんだ。イレギュラーが僕達を襲いに来るって。さっきの音もそのイレギュラーが現れて学校を破壊した音だと思う。」

リトルバスターズみんなに説明していると、また大きな破壊音が聞こえた。みんなが音のした方向を振り返るとそこには、全長20メートルほどの大きさの怪物が学校を破壊している光景だった。

「何だよアレ!?!」

「本物の怪獣!?!」

その光景を見た他の生徒達が未知の恐怖に戸惑い怯えている。しかたがないよね。事情を知っている僕達でさえも今起こっている光景が信じられないんだから。でも、だからといって僕達まで取り乱すわけにはいかない。事情を知っているからこそ冷静になって対処しなければならぬ。パニックを起こしている生徒達を冷静にさせるためにも僕達が気丈に立ち振るわなければいけないんだ。」

「みんなー、落ち着いてー！」

「ここで騒いだって何もなんないんだから落ち着けー！」

「落ち着くのです！くーるになるのです！」

小毬さん達が必死にみんなを説得している。僕達も加勢しようとした時、鈴が慌てた状態で僕のところに走って来た。

「理樹！あいつが、レノンがいない！ほかのやつらは居るのに。」

「えっ！？一緒じゃなかったの！一体どこに……まさか!？」

僕は学校の方を見る。もしかしたら学校に取り残されているかもしれない。けど今行くのは危険すぎる。けど鈴は学校に向かって走り出した。僕は鈴の腕を掴んで止める。

「鈴ダメだ！危ないよ!!！」

「離せ理樹！あいつを置いていけるわけないだろ！」

「そうだけど向こうに行ったら鈴まで危ない目に遭っちゃっよ!」

「ふかーーーーー!!」

鈴は僕の腕に噛み付いてきた。突然の痛みには僕は掴んでいた腕を離してしまった。そして鈴はその隙に学校の方へ走り出した。早く追いかけないと!

「みんな、そっちはお願い。僕は鈴を追いかけるから!」

みんなにそう言って僕は鈴を追いかけた。けど僕はここでおかしなことに気づいた。恭介がいない。さっきまでみんなと一緒に避難を手伝っていたのにいつの間にか居なくなっていた。けど今は鈴を放つてはおけない。恭介ならきっと無事だと信じて鈴の元に向かった。学校に着いた僕はレノンを探していた鈴と合流して一緒に探し始めた。さっきから衝撃で地面が揺れている。急いで見つけないと。

「鈴、レノンが行きそうなところに心当たりはある?」

「……多分中庭にいると思う。あいつは昼でも夜でもあそこに居ることが多い。」

僕達は中庭を目指し走り出した。中庭に着いた僕達はレノンを抱い

て倒れている吉井君とそれをパンチで潰そうとする怪物の姿を見つけた。あまりにも衝撃的な光景に僕達は足を止めてしまう。無常にも怪物の拳は止まることなく吉井君を狙う。

「僕は、僕は……生きたいんだー!!」

もうだめだ。そう思った時吉井君が叫んだ。すると、突如吉井君から光が発生した。眩しすぎて思わず僕達は目を瞑ってしまふ。そして何かが倒れるような凄まじい音が聞こえ、目を開けた。そこには倒れた怪物とレノンを優しく抱きかかえている黄金の騎士がいた。

〈side out〉

〈side 明久〉

イレギュラーを投げ飛ばし僕は自分の姿を確認する。赤いツナギの全身に黄金の鎧が装着されていて、頭は仮面をつけているようだ。ふと後ろに人の気配を感じて振り向くと、直枝君と棗さんが驚いた表情でこっちを見ていた。僕は彼等の元に行き、抱きかかえている仔猫を託した。

「レノン!? 無事だったんだな!」

「今は気絶しているけどケガとかはないよ。それより2人は何でこんな所に居るの？」

「レノンだけ居ないことに気づいて探していたんだ。鈴が中庭の方に居るかもしれないって言ったからここまで来たんだ。それよりも吉井君、その姿は一体……」

「話は後。今はイレギュラーを何とかしないといけないから2人はここから離れて避難するんだ。大丈夫すぐに終わるから。」

そう言っただけは投げ飛ばしたイレギュラーの元に向かった。アイツは立ち上がり僕を睨みつける。けど僕はそれに動じることはない。さっきから全身に力が湧き上がってくる。敵は巨大で凶悪なのに負ける気がしない。

「ブフオオオオオツッ！」

イレギュラーはその巨大な腕でパンチを放ってくる。僕はヤツに向かってジャンプしてそれを回避する。頭の中に力の使い方のイメージが流れ込んでくる。僕は拳に力を溜めるイメージをする。そうしたら拳に力が溜まり光り輝いていく。懐に跳び込みヤツの体に渾身の光が集まった拳を放つ。

「ブライトナツクル!!」

それをくらったイレギュラーは後ずさり口から紫色の液体を吐き出し咳き込む。吐き出したものを見てみたら液体以外にも何かの瓦礫や机、椅子などもあった。

「(何でこんなものがアイツの口から出てきたんだ?)」

疑問に思いイレギュラーを見ると変化があった。さっきよりもほんの少しだけだが小さくなっていた。

「もしかしたらアイツが地下の時よりも大きかったのは学校の一部を食べたからなのかもしれない。だったら、食べた分全部吐き出させてやる!」

僕はイレギュラーに向かい走り出す。イレギュラーは近づけさせまいと口から毒々しい液体を吐き出すが遅い。ヤツが狙った場所に僕はもういない。僕は頭部めがけて跳躍してヤツの顎にブライトナツクルを打ち込む。それによりヤツはバランスを崩して仰向けに倒れる。倒れたヤツの腹の上に着地して、そこに連続でパンチを放つ。

「オラオラオラオラオラ!!」

強烈なパンチがヤツの腹にどんどん打ち込まれる。イレギュラーは叫び声みたいなものを上げながら口から食べた物を吐き出していき、その体は徐々に小さくなっていく。最後に強力な一撃を入れて離れる。

するとイレギュラーは口を膨らませ一気に吐き出した。周りは吐き出された瓦礫と紫色の液体まみれになっている。ヤツは食べた物意外も吐き出したのか地下の時よりも小さくなっており、2メートルぐらいの大きさになっていた。

「これで決める！レイブレード！！」

僕は腰から刃のない柄を抜き取り力を集中させる。柄から蒼く光る刃が現れそれを構えヤツに接近して貫く。刺したレイブレードからイレギュラーの内部にエネルギーを流し込み引き抜く。

「ブフオオオオオツ！！！！」

レイブレードを振り下ろし終わると同時にイレギュラーは倒れ爆発した。

終わった。そう思っていたら急に体から力が抜ける。変身もとけて倒れそうになる。

「はあっ、はあっ、倒したの・・・僕がアイツを・・・」

イレギュラーがいた場所を見る。そこには爆発の跡と煙が上がっていた。それを見て本当に僕が倒したんだと確信できた瞬間、僕の意識はそこで途絶えた。

side out

side 沙耶

吉井くんを先に行かせたあたしは時間を稼ぐために骸骨騎士達に銃撃を行っていた。弾は当たってはいるものの奴等は怯むこともなくこっちに近づいてくる。

「あーっもう！しつこいのよ！」

あたしは服の中に戻っておいた手榴弾のピンを抜いてタイミングを見計らい投げつけ爆発させた。この地下の壁は結構厚いので大抵の爆発には耐えられるはずだから生き埋めになるような心配はない。煙が晴れるとそこにはピンピンしている骸骨騎士達がいた。

「あれをくらって無傷って・・・」

手榴弾が効かないとなると今の私の装備ではこいつらには勝てない。

逃げようにもこの先は行き止まりで逃げ道がない。焦ってあいつ等を誘導する道を間違えてしまっていたのだ。

「かなり不味い状況ね。・・・けど、諦めるつもりはないわ。」

弾薬も底をついており使える武器はサバイバルナイフ一本だけ。でも、それでも守りたいものがある。やっと手に入れた青春と日常。小さい頃に死んでしまったあたしが願っていた物、奇跡と強い想いによって手に入れた青春と平穏な日常。こんなあたしを迎え入れてくれた理樹君とリトルバスターズみんな。それをこんなやつ等に奪われてたまるもんか！

「あたしは絶対に守ってみせる！！」

「よく言った。それでこそ朱鷺戸 沙耶だ。」

すると突然強烈な黒い風が吹きあたしの目の前に集まっていく。風を腕で防ぎながら風が集まった場所を見ると、そこには一人の男が立っていた。

「・・・あなたは闇の執行部部长、時風 瞬！？」

「何を驚いている、俺がここにいるのがおかしいか？」

「闇の執行部はあのイレギュラーに取り込まれたんじゃないの？」

「それは少し違うな。理樹達が奇跡を起こしたことで俺達はあの世界を作り出すことはできなくなった。それによりこのダンジョンも闇の執行部も消滅したはずだった。だが最近になってそれが復活した、これは俺の想像だが、恐らくこの世界にやってきたイレギュラーがあの世界の記憶を取り込みこのダンジョンと闇の執行部を創り出した。目的は自分の手駒を増やし俺達を消滅させるために。」

「あんたは生きた人間、他の執行部の部員は世界が創り出した産物にすぎない。だからあんたは取り込まれなかったのね。けど、今の風はどうやって起こしたの？もうあなたにはそんなことはできないはずなのに。」

「俺にもよくわからん。あのイレギュラーが突然地上に現れてまさかと思つてこの地下の入り口に入ったら使えていた。元々ここは俺が漫画の影響で作った世界だからな。イレギュラーに取り込まれてもマスター権限ということで使えるのかも知れんな。」

「すごい偶然ね。・・・でもあたしを助けに来てくれたみたいだけどうどつするつもり？こっちはもう使える銃も爆弾もないわよ。」

「心配するな。そのためにこれを持ってきたんだからな。」

そう言つて時風が出したのは機関銃だった。・・・ちよつと!?今どこからこれ出したのよこいつは!

けど、そんな事言つてられる状況じゃないしありがたく使わせてもらうわよ。

「支えは俺がやる。お前が引き金を引け。」

「言われなくても!うおおおつ!くらいやがれ骸骨野郎共!」

あたしは機関銃をやつ等に向けて乱射しまくった。さすがのあいつ等もこれには耐え切れずどんどん碎け散つて消滅していく。しばらくして弾がなくなり辺りを見渡すとそこに骸骨達はいなかった。どうやら全部倒せたみたいね。

「さすがは自称一流のスパイだな。見事な腕前だ。」

「自称じゃなくて本物よ!けど正直助かったわ、あんたが来てくれなかったらやられていただろうし。」

互いに労っているとふと足元から音が聞こえてきた。その音はどん

どん近いてくる。すると、

「だっしやああああ！！」(バコーーン！！)

突如、目の前の道が砕け散り下から何かが出てきた。警戒しながら覗いてみるとそれは変身した神薙君だった。

「神薙君、無事だったようね。」

「なんとかかな。お前も無事のような朱鷺戸、それと……何で仮面なんか被っているんだお前？」

「人違いだ。俺は闇の執行部部长時風 瞬。決して棗 恭介などではない。」

「いや、俺は棗 恭介なんて一言も言っていないんだが……」

そして場に微妙な空気が流れた。自分から正体ばらすなんてとんだドジね。

「……てっ、今はこんなことしてる場合じゃないわよ！早く地上に戻らないと。」

「そうだった！早く戻んねーと上の奴等が危ない！」

「急ごう。それと貴様にドジといわれる筋合いはないぞ。」

なんでこいつあたしの思ったことがわかったのかしら。

＼side out＼

＼side 綾人＼

朱鷺戸と恭介（本人は時風 瞬だと言い張っているが）と合流して地上に急いだ。着いた時に何かが発する音が聞こえたのでその場所に向かった。そこにはリトルバスターズのみんなと戦闘ですこしポロボロになっているルシエドと気絶している明久がいた。

「ルシエド、この状況の説明を頼む。」

「明久のヒーローの力が覚醒してイレギュラーを倒した。気絶しているのは恐らく力を使った影響だろう。初めてだからまだうまく力の制御ができていないんだろう。だがそれも時間の問題だと思うが

な。
」

「お前のその口ぶりからするに明久のやつ初めてにしては結構使いこなしていたようだな。」

それなら少し訓練するだけで問題ないだろ。明久の適応力と学習力は半端ないからな。けど、今はこの世界を救えたことを喜ぶべきだな。

・・・そしてそれからしばらくして明久が目を覚ます。起きた時はイレギュラーはどうなったって騒いでいたが事の顛末を伝えたら落ち着き安心した表情に戻った。すぐに次の世界に行こうと思ったが、この世界で受けたダメージがあるからそれを回復させるために2日ぐらい滞在した。その間に色々あったがその内容は番外編で。そして、この世界を離れる時が来た。

「みんな世話になったな。ありがとう。」

「とんでもないよ。君達のおかげでみんな無事だしこの世界も救われたんだからお礼を言うのはこっちの方だよ、ありがとう神薙君、吉井君、ルシエドさん。」

「一週間ぐらいしかいなかったのにもう何ヶ月も居たような感じがするよ。」

「それだけ濃い一週間だったてことだろ。けどお前らがいなくなるのは寂しくなるな。」

「うむ。吉井少年の女装がもう見れないのは非常に残念だ・・・頼む。行く前にもう一度女装を！」

「さあ行こう！今すぐ行こう！ほら綾人達も早く逃げるよ！！」

「あいつら別の世界に行くんじゃないのか？一体何から逃げるんだ？」

「鈴、それは言わないお約束だよ。」

「もう、せつかくのお別れなのにそんなこと言っちゃダメだよゆいちゃん。」

「・・・だからゆいちゃんはやめてくれコマリマックス。」

「みなさん、またいつか会いましょうね。ストレルカ達もみなさんにあえる日を待っていますよ。」

「ああ、俺もだ。あいつらにまた会おうなって伝えといてくれ。」

「そろそろ行くぞお前達。では達者でな。」

「わかった。それじゃまたな、リトルバスターズ！」

そして俺達は次の世界に旅立った。次の世界でも暴れまくるぜ！

side ????

「そうか、別の世界に送り込んだアレがまた1体やられたようだな。」

「これで2体目ですね。まあ、こいつの方は失敗作だったからどうでもいいんですがね。」

これはどこかの世界のある場所でおこなわれている会話である。

「我等が創り出した怪獣タラスクとオリヴィエル。そして彼等の改造怪人。このどちらもが何者かによって倒された。そいつらは一体何者なんでしょうかね。ぜひとも殺り合いたいものですねえ・・・」

おつといけない、あまりの楽しみに思わずメガネがはずれるところだった。」

「お前は相変わらずだなジユデツカ。しかし、戦ってみたいというのは俺も賛成だな。」

「・・・トロメアあなたもですか。2人共我々の目的を忘れていませんか？」

「だがその謎の集団が邪魔なものには変わりないな。いかがなさいますかヴィンスフェルト様。」

「それに関しては問題ないアンテノーラ。あのお方が彼等のうちの1人を世界のひとつに送り込んだらしい。」

「その彼とは一体？」

「ブラッククロス四天王の1人シユウザ。お前達も奴の実力は知っているだろ？この問題はすぐに終わる。我々は自分達の目的の準備をしていればいい。」

そこで会話は終わった。この会話が意味することとは一体・・・

第18話 迎える決着、暗躍する闇。（後書き）

これでリトバス編は終了です。

綾「ようやく終わったな。リトバス編だけで8話もあるぞ。」

明「BLACKの倍だね。」

けどなんとか終わらせれたから一息つける。

明「この世界で僕も変身したね。戦闘力高いような気がするけど

初登場ということでごうした。大概は初登場は強くて階が進むにつれて弱体化するから次に変身した時はこうはならない。

綾「特撮系の避けては通れない道だな。ところでアルカイザーの必殺技をなんでレイブレードにしたんだ？」

かっこいい武器なのにゲームじゃ不遇な扱いだったからRXのリップルゲインみたいな必殺技にしたの。

綾「どっかで見たことある使い方だと思ったらそういうことか。」

まあ世界救えたんだからいいじゃないか

綾「でも何か最後の方に黒幕みたいな奴等が出てきたな。」

明「シユウザの名前もね。あの人から刺された記憶しかないんだけど。」

とりあえず敵の正体を少しずつ明かしていこうかと思って

綾「ゲームやっている人は会話している5人が誰なのか一発でわかるな。それでイレギュラーだがゲームのボスモンスターを参考に書いてたんだな。」

骸骨の方はサガフロンティアのモンスターを参考にしている。

明「そうだったんだ。これに関しては種類増やすの?」

行った世界に特定の敵がいなければね。仮面ライダーとかは色々いるからこいつ等出す意味がないからね。」

明「んでリトバスにはそれがなからこうしたと?」

うん。闇の執行部だけじゃ押しが弱いと思って。」

綾「その結果がグダグダな駄文というわけか。」

言わないで。まだ番外編書かなきゃいけないから。」

綾「そういえば番外編書くんだったな。」

うん。書かなきゃいけない状況になった。」

明「どうしたの作者?」

いや次の世界fortissimo EXAって決めてた矢先にホームページ見たら続編出るらしいんだよね。」

綾「作者は確かこの世界の話は原作のクリア後から書く予定だったんだよな。それが一気に破綻したな。次の世界どうするんだ？」

このまま原作？なにそれおいしいの？状態で書くか、原作の途中から書くか、別の作品の世界に行くかのどれかだね。

明「アンケートでもとる？」

いやなんとか自分で決める。

綾「だから番外編で時間稼ぎということか。」

番外編 キモ試してホラー・NO・RYO!大会(前書き)

やっと書きあげました番外編です。

綾「遅いぞ、もうちょっと早くできないのか？」

3番目の世界についていろいろ検討していて書くのが遅くなっちゃって。

明「結局どうするの？」

それは後書きの方で

番外編 キモ試してホラー・NO・RYO!大会

ルシエドの提案で俺達のダメージが回復するまでこの世界に滞在することになった。

ルシエドがこの世界にイレギュラーの反応がもうないか確かめてもらった。

結果はいないとのことと安心して回復に努めることが出来る。

イレギュラーに壊された校舎のほうだが、幸いにも被害はそこまでなく数週間もすれば完全に直るそうだ。

ルシエドがなるべく壊されないように陽動してくれたのと明久が速攻で倒してくれたおかげだな。

校舎が直るまでは休校となってしまう生徒達は暇を持て余していた。それはリトルバスターズも同じだった。

そんなある日の夜、寮の理樹の部屋でだべっていた俺達の所に恭介がいきなり押しかけた。

何でも今から何かあるらしい。

「今から納涼肝試し大会を行うことをここに宣言する!!」

恭介が勢いよく宣言するが、ツッコミどころが満載なのでとりあえず質問した。

「質問、なんで肝試しなんだ？この世界の今の季節は秋だろ。夏は終わっているぞ。」

「気にするな。実はもうすでに準備は進めてある。」

もう進めてるんかい。そんな俺達の心情を無視するかのようによ恭介の説明が始まった。

「舞台は夜の校舎、参加者はチームを組んで回ってもらおう。」

「おい、校舎はイレギュラー騒動で今は立ち入り禁止だろ。大丈夫なのか？そんなことしても。」

「問題ない。被害のあった教室の近くとかは無理だが、そうでない所は危険が無いから警備が厳重じゃないんだ。それにちゃんと許可はもらっている。やりすぎなければいいそうさ。」

「寛大だなここの責任者。」

肝試しと聞いて鈴がその場から逃げ出そうとしたが恭介に捕まった。

「お前も参加。」

「いやだっ、殺されるっ！」

「何にだ？この学校に怪談でもあるのか？」

あるとしてもさすがに殺されるようなことは無いと思うのだが。

「俺の知っている怪談では普通に殺されてたぞ。」

そう発言した真人にみんなの注目が集まる。えっ、マジで？

「夜の校舎の2階、女子トイレの右から2番目のドアを叩くとどだな・・・聞こえて来るんだよ、声が・・・赤い衣着せましょ・・・青い衣着せましょ・・・黄色い衣着せましょ・・・そう、低くすすり泣くような女の声でな・・・」

331

鈴がプルプル震えている。しかし、真人の話は続く

「赤い衣と、と答えると全身血まみれに、青い衣、と答えると血を抜かれて全身真っ青にされて殺されるんだそうだ・・・」

「き、きいろは・・・!？」

「黄色？」

真人に尋ねる、怖いけど続きが気になるみたいだな。一方聞かれた真人は少し考えている。

自分で言っておいてその先は知らないんだな。そして、何か閃いたようだ。

「大量のバナナを食わされて、全身が黄色に・・・」

「なるかああーっ!」（ばきい!）

鈴のハイキックが真人の側頭部に炸裂した。それをくらった真人は倒れた。

「まあ、さっきも言ったが別にひとりで行けてわけじゃない。俺を覗いてメンバーは11人だ。」

「それってバスターズと神薙君と吉井君も全員参加ってこと?それだとメンバーの数が合わないんだけど。」

「新入り3人は今回は不参加だ。あいつらとの親睦も含めてこれを行うことを事前に言ったんだが用事があるらしく参加できないとのことだ。んじゃ、ほかのみんなにメール出さず。30分後渡り廊下に集合な。」

「なんか洒落にならなそうなんだけど。思いっただけでもこういうの苦手そうなのは、メンバーの半数近くを占めているんだけど。」

「いまさら考えたってしょうがないと思うぞ。とりあえず30分後に渡り廊下に行くぞ。」

そして30分後、参加者が渡り廊下に集まった。揃ったのを確認した恭介は11人の前に立つ。すると、小毬から質問が飛んできた。

「はいっ、恭介さん、質問ですっ。」

「何だ、小毬。」

「私なんで集まったのか聞いてないのです。」

「まあ、そのほうが色々盛り上がるだろ。」

「うーん?。」

小毬が恭介の回答を唸りながら考えている。

恭介の方は理樹を呼び寄せて巻物のような布を取り出しそれを持たせた。

理樹はそれをだー、と走って広げる。

「リトルバスターズキモ試しでホラー・NO・RYO!大会〜!!
はい拍手〜」

「ヒヤッホウ!」

恭介が宣言してパラパラと拍手が上がリ、何故か謙吾が飛び上がるほどテンションが高い。

「はい、恭介さん私も質問ですつ。」

「なんだねクドくん。」

「キモ試しとは何でしょうか?」

そこから分かってなかったのか。そんなクドに小毬が説明するみたいだ。

「クーちゃんそれはあれだよ。こつ、キリで指の間をだんだん
つてつついて見たり、タバコの火を目にどれだけ近づけられるか試
すんだよ……って恭介さんそんなのやるんですかー!？」

「やるですかー!？」

「いや……やらんが……」

小毬が自分で言うておいて勘違いしているな。確かにキモは試せる
がそれは何の罰ゲームだ。

「まあ俺が色々校舎内に仕掛けたから、ちよいと回ってもらってキ
モを試すのが今回の趣旨だ。」

「有り体に言つてオバケ屋敷みたいなもんだね。なんか面白そうだ
ね。」

「そういうこと。各階のチェックポイントに俺が札を用意してるか
らそれを探して出ること、ゴールはここな。俺はここで待機してい
る。」

「おおお〜なんか本格的で楽しそうじゃんかつ。」

明久やバスターズのみんなもやる気が出ているな。けど、そんなにか西園がおずおずと手を上げた。

「あ、あの・・・夜の校舎を歩き回るんですか？わたし、怖いんですが・・・」

趣旨を理解していない人がいたな。

「そりゃあまあ、怖がつてくれなきゃ困るが。」

「そ、そういうものなんですか・・・」

果たしてこの集まりは、まともにキモ試しという体裁を守ることが出来るのか・・・。

「・・・まあ、そういうわけでメンバー編成を・・・あ、わりい決め方考えてなかった。」

「お前、必ずなんか忘れてるよな。」

「数は11人、3人1組で分けたら、1人足りなくて2人の所が1

組できちやうけどどうするの?」

「それならアイツを呼ぶか。おーい駄犬。」

俺がそう言ってアイツを呼んだ。

「・・・こんな夜遅くに何のようだ、それに誰が駄犬だ。」

やってきたルシエドに説明したら呆れながらも参加を了承した。

「これで12人になったから4チーム作れるが、組み合わせはどうするんだ?」

「まずは男5人がジャンケンをする。勝った4人がリーダーで・・・順番にアミダくじで2人選んでいく方式でいこう。」

そしてジャンケンを行いリーダーが決定。アミダを引き組み合わせが決まった。

- ・理樹チーム 鈴、小毬
- ・真人チーム クド、来ヶ谷
- ・綾人チーム ルシエド、葉留佳
- ・謙吾チーム 明久、西園

「まずは理樹達から中に入ってくれ。それから5分おきに真人、綾人、謙吾の順番で行ってくれ。じゃあ、俺ゴールで待ってっから。」

そう言っつて恭介は別の道からゴールまで回り道をして向かった。そして、理樹チームがスタートした。

｝side out｝

｝side 理樹｝

・・・というわけで探索開始。真っ暗な校舎内に侵入するが、足元が心許さないほどの暗闇。

僕は恭介から受け取った懐中電灯のスイッチを入れてついてくる2人に声をかける。

「んじゃ、行こうか2人共。」

「おっけーごーですよ。」

てつきり怖がりまくりだと思っつていた小毬さんが、何かやる気モードに。

「小毬さん、平気なの？」

「うん、りんちゃんにくつついてるからだいじょうぶ。そしたら私も怖くないし、私が怖くないからりんちゃんも怖くないよね。」

・・・またなんかよく解からない理論だ。

「・・・あたし怖い。」

「ほわあっ！！じゃあ私も怖いっ！！」

変な連鎖反応が起こった。

「いやまあ・・・」

なんか、僕が先導していくしかなさそうだ・・・。

まずは、特別教室棟の1階へ行くと、恭介からメールが来た。

メールには『1個目は理科室。後は札にヒントが書いてある』と書かれていた。

「なるほど、理科室かぁ・・・。なんか、怪しげな場所の定番だな

あ……。」

そして、理科室のドアの前に立つ。

「まずはここからだ。」

「……理樹、入って探して来い。」

「やっぱり僕なんだね……。」

「ううん、私いきますっ。理樹君はりんちゃんのそばにいてあげて
」。

「いや、別に無理しなくていいよ小穂さん。恭介のことだから、洒
落にならない仕掛けとか準備してそうだし。」

「ううん、たぶんだいじょうぶだから。」

「ちつともだいじょうぶに思えないんだけどさ……。」

どこから出てくるのかわからない根拠の無い自信。ホントに大丈夫

かな？

「じゃあ、行きますっ。」

ドアの前に立ち深呼吸をする。そして彼女はドアを開けた。僕も中を覗き込む。

「・・・別に変なのは置いてないみたいだね。」

「うーん、どっかに隠してあるのかな？」

小穂さんが理科室の中へと入っていく。

「・・・ほんとにだいじょうぶ？」

「へいきへいき。」

瞬間。がたああっ！！と音が鳴る。

「ひいやああああああああああっ！！？」

ロッカーから飛び出してきた骸骨に小毬さんがものすごい声を上げる。

「がたたっ！！ばたん！！」

・・・小毬さん、瞬時に失神。

骸骨はゆっくりとロッカーの中に戻っていく。

「理樹っ、小毬ちゃんが死んだっ！！」

「いや死んでないと思うけどさ・・・」

えげつないな、これ・・・。ひとまず小毬さんを救出に向かう。

「小毬さん、大丈夫？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・返事が無い、ただの屍のようだ。

「小毬ちゃん、死ぬなっ、生きろっ！」

ばしばしとほっぺたを張る鈴。先が思いやられる・・・。

それからなんとか札を取り2階のチェックポイントの音楽室に行く
がそこでも・・・。

「ほわっ！？なんかきこえるよっ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！！」

「ら、ラジカセだよ。だから鈴、僕の後ろに隠れなくてもいいから・
。。。」

ピアノのフタの裏にあった札を手に入れた。
次のチェックポイントの3階にある美術室では・・・

「！？？」

デッサン用のブルータスの目が光る・・・！！

「ほわぁーっ！！！」

またしても小毬さんが倒れた！！

「・・・・・・・・・・・・・・・・!!」

「ちょ、ちょっと鈴逃げないでっ!？」

4階のチエックポイントは恭介の教室だった。

多分、自分の机の中に隠していると思い探してみると、すぐに札は見つかった。

ぴちゃ・・・・・・・・。

「ん？」

天井から何か落ちる音が聞こえたので振り向いてみると、
ぴちゃ・・・・・・・・ぴちゃ・・・・・・・・と、天井から赤い液体が垂れてきた・
・!!

見れば、天井には人の手がぶら下がっている・・・・・・・・!!

「ほわああーっ!!」

小毬さん、またしても失神・・・・。

「・・・・・・・・あう・・・・・・・・」

鈴は泣きそうな声を上げるが、必死に耐えているようだ……。

「とりあえずアイテムは手に入れたから急いでここを出よう！」

2人の手を掴んで全力でダッシュして出口に向かった。

「お、意外と早かったな。」

「はあっ、はあっ、まあね……。」

「……もう二度とやりたくない……。」

鈴と小毬さんはもうこりこりといった状態みたいだ。そして、すぐに2組目が来る音が聞こえた。

「お、もう来たのか……って謙吾達じゃないか。お前等相当早いな。」

「ん、どういうことだ……理樹たちしか着ていないのか？」

「僕達も着いたばかりだけど、何かおかしくない？謙吾達の前に真人と神薙君のチームが来るはずなのに。」

「もしかして、仕掛けに時間をくっているのかな？」

「どうだろう？綾人はそういうのに関しては得意分野だからそれは無いと思うけど。」

2チームとも一体どうしたんだろ？

＼side out＼

＼side 綾人＼

真人チームが発射してから5分後、俺達は校舎に侵入した。もらった懐中電灯とて手に進んでいく。

「やっぱり夜の学校は雰囲気出ているな。」

「そうですね。ところで最初はどこに行くの綾人君？」

「携帯とかに恭介からメールとか来ていないか？無ければノーヒントで進めって事になるぞ。」

「……来てないですね……。」

「そんじゃ適当に勘を頼りに進んでみるか。」

ノーヒントらしいので俺達は勘を頼りに校舎の中を移動した。まずは理科室で、次は音楽室、その次は美術室と次々に札をゲットして行った。

「……綾人君の勘って相当すごいですね……。トラップの位置と仕掛けも先読みしますし。」

「そうか？トラップを見極めるぐらいなら鍛え方しだいで誰でもできるようになるぞ。」

こんな感じの会話をしながら進んでいたら途中、校長室の扉の前で真人チームと鉢合わせた。

「何だお前達、もう追いついたのかよ。はえーな。」

「わふう。すごいです。」

「イヤーそれほどでも。」

「大方、神薙少年の勘でここまでスムーズに来たと見るが。」

「正解だ、来ケ谷嬢。」

この人やっぱリエスパーだろ絶対。

「とにかくこの札を取ってちゃっちゃとゴールしようぜ。」

真人チームを伴って校長室に入る。室内を探索していると机の裏から札を発見した。

「ゲットと。後はゴールを目指すだけだな。」

そう言った瞬間、ボタン！と扉が閉じられた。

「わふうー！ー！ー！ー！？」

「なんだなんだー！！？」

クドと三枝はびっくりして俺と真人の後ろに隠れ、来ヶ谷と真人は2人を庇うように立つ。

「今回ののは結構本格的だな。今のどうやって閉めたんだろうな。」

「ふむ、興味深いな。後で恭介氏に聞いてみるとしよう。」

「あ、あのー・・・お二方は怖くないんですか・・・！？わふうー！！！！」

クドがビビッていない俺達に質問しようとしたら、いきなり叫んで失神した。

周りを見ると、影という影の中から大量の人の右腕が現われ俺達に襲い掛かってきた。

「これ程までに凝っているなんてな。」

「恭介の奴、またえげつないもん仕掛けてやがるぜ。」

「この仕掛けもどろいう仕組みなのだ。」

「いや、お前達これは・・・」

俺と真人と来ヶ谷はそんな会話をしながら、襲い掛かる右腕たちをパンチや蹴りでなぎ払う。

ルシエドの奴が何か言っているが今は聞いている暇が無いから無視。右腕たちは影からどんどん大量発生しているので尽きることが無い。マジでどんな仕掛けだ？

「札は取ったんだ、長居は無用だ。私と葉留佳君が右腕を何とかするから少年2人は扉を開けて出口を確保してくれたまえ。」

「わかった。行くぞ真人。」

「おう！筋肉の出番だな、まかせろ！」

「では行くぞ、葉留佳君。」

「オツケー姉御！」

来ヶ谷は模造刀、三枝はビー玉を構える。・・・いつの間を持ったんだ？特に来ヶ谷。

「ビー玉スプラッシュ！」

2人の合体技？見たいな物が炸裂して、右腕どもを吹き飛ばし扉までの突破口ができる。

俺と真人は扉に向かって同時にとび蹴りを放つ。

「ライダーキック！」

「筋肉キック！」

二発のキックに耐え切れず扉が壊れ出口ができ、俺達はダッシュで脱出した。

気絶しているクドはルシエドが背負って運んでくれたようだ。

「今ので結構時間食ったな、急いでゴールまで向かうか。」

「今からじゃドベかよ。くそー謙吾の奴に負けた。」

「まあいいではないか、それなりには楽しめた。」

「そうっすよ。それよりもクド公がまだ目を覚ましてないんですが・
・・。」

「ゴールに着く頃には目が覚めているだろ。さて恭介からトラップの種を聞き出さないと。」

「いや、だからお前達あれは・・。」

ひとまずゴールを目指して移動を開始した。ルシエドのヤツ、さっきから何を言いたがってんだ？
途中クドも目を覚まして俺達はゴールに到着した。そこには理樹チームと謙吾チームに恭介がいた。
やっぱり謙吾たちに抜かれていたか。

「お、来たか。お前達が最後だぞ。同時に来たから2チームともビ
リな。」

「んなこと言ってたてよお・・。」

「そういえば、俺達がおまえらを抜かしたはずなのに、全く気配が無かったな。」

「あ？そりゃあおめえ、校長室のトラップで手間取っちゃったんだよ。」

「恭介も凝ったトラップ作ったもんだな。あれってどうやったんだ？」

「……は？」

「いや、は？じゃないだろ。閉じ込められて影という影から右腕が大量に生えてくるヤツだよ。あれが一番ビビッたぜ。」

「あれだけ完成度高かったよな。」

俺と真人がさっきのトラップの感想を言っていると、何故か恭介の顔が青ざめ始めた。

「……」

「……どうしたの恭介、顔が青ざめているけど。」

「俺……そんなとこに何も仕掛けてないんだが……」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

その一言に全員が言葉を失い沈黙した。

「・・・・・・・・ならこのお札はなんだ？」

「焼いた方がいいと思いますよ。」

「西園嬢の言う通りだな。しかし、お前達は気づいていなかったのか？」

ルシエドの爆弾発言でさらに場の空気が凍った。

「えっ、お前知っていたの。あれが何なのか。」

「当然だ。あの右腕たちはこの土地で志半ばで死んでいった者達の魂だ。腕の形で出てきたのは生きているこの世の命をあの世に連れて行くこうとするためのものだ。」

「・・・・・・・・なんでルシエドさんはそんなことわかるの・・・・・・・・」

「我は欲望のガーディアンだ。生者と死者の欲望の見分けなど造作も無い。我は警告していたがこいつらは聞かずに進んで接触してしまつたのだ。」

この話はその場全員の一致で深く考えないことにした・・・。

「」「」・・・。「」「」

その話を聞いていた約3名が気絶していた。

番外編 キモ試してホラー・NO・RYO!大会(後書き)

いろいろ書きたいネタがあったが夏ということでのイベントを書いてみた。

綾「ゲームで謎を残し深く語られることの無かった校長室のトラブルがズームされているな。」

とりあえず自分なりに解釈してみた。

明「校長室に行かなくて良かった。」

チームメンバーに関しては適当に選んだので特に他意はない。

綾「ところで3番目の世界は結局どこになったんだ？」

検討した結果こうなった。

・IS

・リリなのSTRIKERS

・fortissimo

綾「ISに関しては俺等って裏方の予定だったよな。」

とりあえずスケジュールを繰り上げて先にやるのも手かと。

明「リリなのの方は何で？」

ラモン様からハヤトのレンタル許可ももらったからレットポジション

のキャラが決まったからね。あとはどうやってキャラを壊さずに書けるかな。

綾「あく確かにもらったな。俺個人としてはハヤトと絡めるのは嬉しいことだな。」

とりあえずこの3つの中から選ぶことにします。次回の更新で判明されますので何卒御了承ください。

第19話 到着したら即戦闘？次の世界は女尊男碑（前書き）

いよいよ第3の世界です。

綾「次はどこなんだよ？」

タイトル見たら一発でわかるでしょ。

明「なんでこっちにしたの？」

詳しくは後書きで話すよ。

綾「それでは3番目の世界IS編スタートです。」

第19話 到着したら即戦闘？次の世界は女尊男碑

side ????

クラス対抗戦の試合で鈴と戦っていた。

俺は隙を突いてイグニッションブーストを使い鈴に急接近する。

鈴は反応できていない。もらった！

「うおおおおおおっ！！」

鈴に斬りかかろうとした直後、上空から何かがシールドを突き破って落ちてきた。

落下地点に大きな爆発が起こり爆煙が舞っている。

「ああ……。」

「な、何……。」

突然のことで俺達は動揺してその光景を啞然と見ていた。

『なに？……攻撃がそれなの？それとも地震？』

観客席にいる生徒達の方にも動揺が広がっている。

「試合中止。織斑、鳳、直ちに退避しろ！」

千冬姉から退避しろと通信が入る。観客席もシェルターで閉じられた。

「な、何だ？何が起きているんだ……。」

「一夏、試合は中止よ。すぐピットに戻って……。」

鈴から通信が入るが、モニターに警告の文字が出てきた。

「所属不明のIS？……ロックされている！？あいつに俺がロックされているのか。」

「一夏、早くピットに……。」

「お前はどつするんだよ。」

「あたしが時間を稼ぐからその間に逃げなさいよ。」

「逃げるって・・・女を置いてそんなことできるか。」

「バカ！あなたの方が弱いんだからしょうがないでしょ！」

その言葉にグウの音も出なくなる。くやしいが確かにその通りだ。

「・・・別にあたしも最後までやり合うつもりはないわよ。こんな事態、すぐ学園の先生達が収拾に・・・」

突如、言葉をさえぎるかのように煙の中からビームが鈴に向かって発射された。

「あっ！？」

「危ない！」

俺は鈴に向かって飛び出し抱きかかえる形でそれを回避する。

「ビーム兵器かよ。しかもセシリアのISより出力が上だ。」

「／／／ち、ちよつとバカ！離しなさいよ／／／」

「ちょ！？おい暴れるな」「うるさい／／うるさい／／うるさい／／
／」って待て、殴るな。・・・来るぞ！」

鈴がいきなり暴れすが、そんなことはお構い無しにとビームがこちらに飛んできたそれを回避する。

そして煙が晴れて中から何かが出てきた。

「「！？」」

それは長く太い両手を持った黒い全身装甲フル・スキンのISだった。

「何なんだこいつ、これでもISなのか・・・お前、何者だ。答えろ！お前は何者だ。何が目的だ！」

ダメ元で聞いてみるがああ黒いISは何も答えはしなかった。
そして、山田先生から通信が入ってきた。

「織斑くん。鳳さん。今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生達がISで静圧に行きます。」

「いや、みんなが逃げるまで食い止めないと。」

「そ、それはそうですね。でも、いけません織斑君！」

「「一夏！（さん）」

みんなが声を上げるが、それでも今はやるしかない。

「いいな、鈴。」

「だ、誰に言ってるんよ／＼それより離しなさいってばあ／＼動けないじゃない。」

「あ、悪い。」

抱きかかえていた鈴を解放するが、直後にビームがこちらに飛んできた。

それを回避して、あのISの動きに警戒する。

ヤツは俺達に向かって飛び立ち攻撃を仕掛けてくる。

「ふっ！向こうはやる気満々みたいね！」

「みただいな。」

「一夏、あたしが援護するから突っ込みなさいよ。武器それしかないんだよ。」

「その通りだ。じゃあ、それで行くか！」

俺達は黒いESに向かって攻撃を仕掛ける。

けど有効な一撃を与えられずにこっちのシールドエネルギーだけがじわじわ削られていく。

「一夏！今のうちに・・・」

「うおおおおお！！！」

鈴がヤツの体勢を崩して俺が雪片式型で斬りかかるが避けられてしまふ。

「くっ！」

「一夏バカ、ちゃんと狙いなさいよ！これで4回目じゃない！」

「狙ってるっつーの！」

さっきから同じ感じで攻撃を仕掛けているがヤツには一発も当たっていない。

シールドエネルギーの残量が残り少なくなってきた。

やばい、バリア無効化攻撃は後1回ぐらいしか使えない。

「一夏離脱！」

「お、おう。」

黒いISは俺達に向かってビームを連射してくる。

「どうすんのよ！何か作戦が無くちゃこいつには勝てないわよ！」

「逃げたきゃ逃げてもいいぜ。」

「誰が逃げるってのよ、あたしはこれでも代表候補生よ！」

「そうか、じゃあ俺もお前の背中ぐらいは守って見せる。」

「えっ、・・・あっ／＼／＼あ、ありがたいい！」

「集中しろ！」

「わ、わかってるわよ！／＼／＼」

攻撃を回避した俺達は距離をとってヤツの出方を見る。

ふとあることに気づいてそれを言おうとしたが、突然俺達の近くに光の塊みたいなのが出現した。

「い、一夏、な、何あれ！」

「お、俺に聞くなよ！」

光の塊の出現に俺達は動揺を隠しきれないでいた。そして、光が弾ける。

あまりの輝きに視界をガードする。

光が消えたのを確認して視界を戻すと、そこには2人の男と犬？がいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そして黒いISがそいつらに向けてビームを発射した。しまった！突然のことでポーっとしてた！

「危ない!!」

今から助けに行くのは間に合わない。俺は大声でそいつ等に訴えた。男の1人が俺の声に気づいて他の1人と1匹を突き飛ばして距離を取らせる。

だが、突き飛ばした男は飛んでくるビームを避けるすべはない。ビームが直撃して当たりに砂塵が舞う。

「「綾人!!」」

「うそでしょ・・・」

「そんな・・・」

俺達は目の前で起こった状況を受け入れられずにいた。

目の前で人が死んだ。その事実を簡単に受け入れられるほど俺と鈴は人間ができていない。

俺達は最悪の展開に絶望していた。

「っつー。何なんだいきなり！」

「「「「「!?!?!?!?!」」」」」

砂塵の中から声が聞こえた。俺と鈴は驚きながら声のした所を見た。砂塵が晴れたその場所には、黒い騎士のような姿をした何かがそこにいた。

side out

side 綾人

リトルバスターズに別れを告げて次の世界に旅立った俺達。ロンバルディアから転送してきてみれば、降り立った場所は何かの競技場みたいなどだった。

「どこだここ？それになんか目の前にでかい煙が上がっているんだが。」

「そうだね。それに観客席？なのあれって、何か全部しまっているように見えるけど……。」

「まずはここから移動したほうがいいだろう。」

各々がこの場所の感想を述べていざ出発!と思った直後、近くから危ないという声が聞こえてきた。
何かと思い振り返ろうとするが、こっちに向かって何か飛んでくる音が聞こえた。

「!?!ちい!?!」

「うわぁ!」

「ぬう!」

咄嗟に明久とルシエドを突き飛ばす。その直後に飛んできた何かを直撃してき辺りに砂塵が舞った。

「「綾人!?!」」

「うそでしょ……」

「そんな……」

周りからなんか声が聞こえ、砂塵が晴れていく。

「っつー。何なんだいきなり！」

「『『『『！！？？』』』』」

晴れた砂塵の中から俺参上。咄嗟に変身したおかげでなんとか防御に成功した。

「綾人！無事だったんだね。」

「結構危なかったがな。明久、ルシエド、いきなり戦闘のようだぜ。」

「そのようだな。」

状況を把握した明久とルシエドは戦闘準備に入る。

俺はビームを撃ってきたゴリラのような太い腕をした黒いメカに向かって走り出す。

ゴリラメカはビームを連射してくるがそれをジグザグに走りながら

回避して接近する。

「はあああああ!!」

黒メカを破壊するために全力のパンチを放つが、ヤツはそれを腕でガードした。

パンチがガードされた時ヤツから何か違和感を感じた。

反撃といわんばかりに剛腕を振ってくるが、それを後退しながら回避して距離をとる。

俺がヤツから離れたところで明久がハンドブラスターを発射するが、その攻撃は見えない何かによって弾かれる。

「嘘!?何今の!」

「恐らくあいつはバリア機能を持っていると思う。しかも、かなり強力なやつだ。」

さっき感じた違和感は多分それだろう。何かに弾かれた感触がしたからな。

黒メカのヤツは空中に飛んで俺に向かってビームを連射する。

「あの形で飛べるって反則だろ!しかも速い!」

相手が空中にいるので反撃の術がない俺は、発射されるビームを避け続けるしかない。

「綾人、なんかいい手は無いの!？」

「あつたら苦労しない!相手はバリア機能持っている上に飛行機能付だ、しかもスピードが速い。こっちは誰も飛べないうえにあのバリアを突破できるだけの火力が無い。」

「じゃあどうするの!このままじゃやばいよ!」

「・・・少し確かめたいことがあるから攻撃をやめてアイツから距離をとってくれ。」

「えっ、どっいじこと?」

「とりあえず言う通りにしてくれ。ルシエドもそれでいいな。」

「何か思い当たることがあるようだな、わかった。」

明久とルシエドが攻撃をやめて距離をとった。さて、これからどうするか。

明久の言う通りこのままじゃ確かにヤバイ、一応あのバリアを突破できる方法は二つある。

1つはナイトフェンサーでぶった切ることだ。

あれの斬れ味ならバリアごと叩き切ることが出来るかもしれない。

だが、ヤツは空を飛んでいる。

空中に、しかもあの速さの標的に当てるのはかなり難しい。

2つめはバニシングバスターを使うのだが、これはリスクが高すぎる。

当たればヤツを消滅させることぐらいは簡単だが、この辺り一面が焼け野原になってしまう。

それに、俺の中のロードブレイザーが暴走してしまう危険もある。

そうなればこの世界が減びてしまう。

「とにかく今は我慢しろ！何かいい作戦が思いついたら実行するぞ！」

「ならいい作戦があるぞ。」

そうやってきたのは白い機体色に丸みを帯びた二機のスラスタ―翼と手足に装甲を装備した男だった。

「……どちらさまでしようか？それにいつからそこにいたんだ？」

「ちょっと待て、さっきから居ただろ！そりゃ確かにいきなりのこととポーっとして空気になっていたけど！」

「じゃあ空気、いい作戦てのは何だ？」

「空気じゃねえ！俺には織斑　一夏って名前が・・・って今はどうでもいいな。とにかく作戦があることは確かだ。」

「聞こうじゃないか。」

「ちょっと一夏正気！そんなわけわからないヤツと一緒に戦う気なの！」

今度は赤黒い装甲を身に纏い、肩の近くに大型のスラスタを二基装備して頭に龍を模しているヘッドギアと付けた女の子が来た。

見た目はツインテールの髪に小柄な体格をした可愛らしい女の子だ。

「けどあのISに問答無用で攻撃されているんだ、少なくとも敵じゃないと思っぜ。」

「けどISとがちに戦える人間なのよ！それに何かさっきと姿が変

わっているし、なんかのトリック？」

「相談と質問を同時にするな。質問なら後で答えてやるから今はアイツを倒すことだけ考えた方がいいぞ。」

「この人の言うとおりだ鈴。今はあのISを倒すことを優先すべきだろ。」

「・・・わかったわよ。」

俺と白い男・・・織斑 一夏の正論に鈴という女の子の方が折れたようだ。

「それじゃあ作戦を説明してくれ。俺は何をすればいい。」

「ああ、作戦は・・・」

作戦はこうだ。一夏が合図を出したら鈴が衝撃砲というのを最大出力であいつに向かって放つ。

最後に一夏が霊落白夜というバリア無効化攻撃でアイツを叩き切ると言う実にシンプルな作戦だ。

「けど、それを食らってあのISのパイロットは無事なの？」

「問題はそこだ。これはアイツが無人機であることが条件なんだが・
・。。」

「何言ってるんだ？アイツは無人機だぞ。」

「「えっ？」」

俺の言葉に2人が驚いた表情をしている。何か変な事言ったか俺？

「ち、ちょっと！なんであんなことわかるのよ！何か証拠でもあるの。」

「まず1つは動きが機械じみている。状況を分析してみたが俺達がここに来る前からお前達2人はアイツと戦っていた。にも関わらずアイツの動きに疲れが見えない。違うか？」

「そうだ。それに機械じみているのは俺も思った。」

「2つめはこっちが一定のアクションを行わない限りはヤツは攻撃を仕掛けてはこない。大声を出してアピールするか、こっちから攻

撃を仕掛けたら反撃行動をとるだろう。さつきから俺達は普通に会話しているのに攻撃がこないのがその証拠だ。」

「・・・確かにさつきからあたし達が会話している時は攻撃をしてこないわね。まるで興味があるみたいに聞いているような。」

「確かに。」

「・・・ううん。でも、無人機なんてありえない。ISは人が乗らないと絶対に動かない、そういう物だもの。」

「けど現に今動いてるだろ。常識を持つのはいいことだが、時にはそれを捨てるのも大事なことだ。それで一夏、この作戦はお前が攻撃をはずせば終わりだがアイツに当てれる自身はあるか。」

「当ててやるさ、次は当てる。」

「はあ、言い切ったわね。じゃあそんなことありえないけど、あれが無人機だと仮定して責めましょうか。」

「決まりだな。それじゃあ早速・・・。」

「一夏！！」

作戦を決行しようとしたら、後ろからこの場所全体に響くかのよう
な大声がした。

振り返るとそこには息を切らせたポニーテールの子が居た。

「男なら、男ならそのくらいの敵に勝てなくてなんとする！！」

一夏を叱咤するためにわざわざこんな危険地帯に来たみたいだが、
今はその行動はNGだ。

その証拠に黒メカがあの子にビームの照準を向けている。

「まずい、筈逃げろ！」

一夏が叫ぶが筈と呼ばれた子は逃げようとはしなかった。

「おい今すぐ作戦決行だ！」

「わかってる、鈴やれええ！」

「うん、わかった！」

鈴が肩のキャノン方をチャージして砲撃の体勢に入る。
その斜線の目の前に一夏が入り、背中で鈴に立ちふさがる形になる。

「ち、ちよつとバカ、何してんのよ!?!どきなさいよ!」

「いいから撃て!」

「うあああもうっ、どうなっても知らないわよ!」

衝撃砲が放たれ一夏に命中する。しかし、ダメージにはなっていないようだ。

「どうやら足りないエネルギーをあの砲撃でチャージしているようだな。無茶苦茶だが、こういうのは嫌いじゃないな。」

エネルギーが溜まったのか、持っていたビームサーベルのような刀身が伸び、一夏が後光を浴びたかのように光輝きヤツに突撃する。迎撃するためにヤツはパンチを放つが、一夏の剣がその腕ごと叩き斬る。

右腕は切断され、切られた箇所からオイルが吹き零れるが、左腕による攻撃で一夏は殴り飛ばされ地面に倒れる。

「「一夏!」」

トドメをさすために残った左腕を一夏に向けて構えビームを発射しようとするが、この作戦はまだ終わりじゃない。

「悪いが終わりなのはお前だ。」

瞬間、ヤツの左腕が切り落とされる。そう、俺がナイトフェンサーで斬った。

一夏に狙いを絞ってくれたおかげで簡単に当てることが出来た。突然のことで反応しきれない黒メカは飛行体勢に入ろうとするが遅い。

ヤツの上空からもう1人がすでに攻撃の態勢に入っている。

「シャイニングキック!」

アルカイザーのシャイニングキックはヤツを貫きその体に風穴を開ける。

黒メカはゆっくりと倒れ、その機能を停止した。とりあえず再起動の心配はないようだな。

「今回はさすがに疲れたぞ。にしても明久、作戦を教えてないのによくあんな行動がとれたな。しかも自分の意思で変身できるようになったのか。」

「綾人達が絶対何かすると思っただからいつでも攻撃できるように準備してたんだ。変身の方は出来るようにはなっただけですぐに疲れちゃうけどね。」

そう言って変身を解く明久。俺も変身を解いて一夏のもとに向かう。

「あんた達のおかげで助かった。けどあんた達って何者だ？」

「それを今から説明するが、そこで見ている人たちにもした方がいだらうな。」

俺はピットの方に向けてそう言う。そして、返事が返ってくる。

「気づいていたか。そこにいる生徒達の担任だが君達について詳しく話を聞きたい。諸君等は不法侵入の疑ういあるが先のISを止めてくれた協力者でもある。身の安全は保障しよう。こちらの場所はそこにいる織斑と凰に案内させる。」

「だそうだ。とりあえず案内してくれないか。」

「わかった。ついて来てくれ。」

「やっと落ち着けるね。」

「この世界の情報を聞くにはいい機会だな。」

「この世界ってどういう意味……」

「そうよ、それって……って、」

「「犬が喋った!」」

「……何かどこかでこんな光景を見た気がするんだけど。」

「……どの世界でも最初にツッコまれるのは犬が喋ることなんだな。」

綾人達が次についた世界。そこは女性にしか反応しない世界最強の兵器「インフィニット・ストラトス（IS）」の出現後、男女の社会的パワーバランスが一変し女尊男卑が当たり前になってしまった世界。

IS
インフニット・ストラトスの世界である。

第19話 到着したら即戦闘？次の世界は女尊男碑（後書き）

という訳で次の世界はISです。

綾「当初はfortissimoの予定だったな。続編が出るから見送ったのか？」

それもあるけど、もう少し内容固めて書こうかと思って。

綾人達があの世界に行ったら普通にお亡くなりコースだからね。

明「そこまですごいんだfortissimotte。」

綾「出てくるキャラはチートだらけだからな。戦闘になったらまず勝ち目が無いな。変身する暇もなく瞬殺される。」

だからもう少し内容固めようかと。

綾「そう言えばこの世界で俺達はIS使ったりするのか？」

そうだよ。それにはちゃんと理由もつけるから。

明「ISの方は考えているの？」

それは結構早く思いついたんだよね。趣味全開のISだから期待しててくれ。

綾・明「不安以外の何物でもないんだが。」

ひびっ！

第20話 転校生になりました？IS新世紀スラッシュユゼロ（前書き）

今回は綾人のISが登場します。

綾「お前の妄想全開のIS乗らされるこっちの身にもなれよ。」

まあまあ、とりあえず本編をどうぞ！

第20話 転校生になりました？IS新世紀スラッシュゼロ

一夏と鈴に案内されてピットの中の管制室まで案内された。そこには4人の女性がいて、一夏がそのうちの1人に話しかけた。

「千冬姉、言われたとおり連れて来たぜ。」

そう言った瞬間、女性が一夏の頭頂部に出席簿を叩き込んだ。良い打ち込みだな、あれは痛そうだ。

「織斑先生だ。・・・これは恥ずかしい所を見せてしまったな。私はこのIS学園で教師をしている織斑千冬だ。そこに居る織斑のクラスの担任でもある。そしてこちらが副担任の山田先生だ。」

「どうも、副担任の山田摩耶です。この度はご協力と生徒達を助けていただきありがとうございます。」

黒服スーツで黒髪ロングな女性、織斑 千冬さんと緑髪のショートカットで黄色いワンピースにメガネをつけた女性、山田 摩耶さんが紹介をした。

「いえ、成り行きでそうなっただけですからお礼はいいですよ。自

分は神薙 綾人です。」

「吉井 明久です。よろしく願いします。」

「ルシエドと申す。早速だが聞きたいことがあるのだが……」

「「「犬が喋った！！！」」」

摩耶さんとさつきの子と縦ロールの子と縦ロールのある長い金髪に透き通った碧眼の子が驚いている。

千冬さんも声は上げてはいないがかなり驚いている様子だ。

「……その前にこっちの事情を説明した方がいいですね。」

「……すまん、そうしてもらった方が助かる。」

そして、その場に居る人達に事情を説明した。

話を聞いた人達の反応は微妙なものだがこれはしょうがないな。

いきなり異世界から来たとか、この世界が消滅してしまうとか突拍子も無い事だからな。

「……それで、今の話を我々に信じろと？」

「信じる信じないかはあなた達に任せます。こんな話をされていきなり信じろってのが無理ですしね。」

「だが事実でもある。この世界にいるイレギュラーを倒さなければ世界は消滅する。」

「だが、喋る犬が居る時点で信憑性もあることには間違いない。そうだな、何か我々を信じさせる何かを見せてくれれば良いが……。」

「だが、そんな方法なんてあるのか？」

「そうですね……！だったらISを機動できるか試してみたらどうでしょうか？」

「えーっと、君達は？」

「まだ紹介をしていませんでしたわねこれは失礼を。わたくしはセシリア・オルコットと申します。」

「篠ノ之 篁だ。」

さっき驚いていた子達が自己紹介をした。そういえばさっきから出てくるISって何だ？

「先にそれから説明しようISというのは……。」

千冬さんが俺の表情を読み取ってくれたのか、ISの説明をしてくれた。

正式名称「インフィニット・ストラトス」。宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツらしく、しかもISは女性にしか動かせないらしくその原因も不明らしい。

唯一の例外が織斑 一夏だ。男性なのにISを動かした事でそれは世界中を震撼させたらしい。

そしてその搭乗者を育成・教育するのがここIS学園らしい。

「……と説明は以上だ。」

千冬さんの説明が終わった。

今で俺とルシエドは大体的ことがわかったが約1名頭から煙を出している奴がいる。

「明久、今の話はどれくらい理解できた？」

「・・・・・・・・・・言わないで・・・・。」

「それで話を戻すが、君達にISを動かせるかどうか試して欲しい。本来ISは女性しか扱えない、その織斑を除いてな。君達の特異点という力ならそれができるのではないか？」

「それで起動できたら俺達の話しが眉唾物ではない証明になるって事か、こっちは別に構いませんよ。」

「決まりだな。早速だが試してみよう、ついて来てくれ。」

織斑先生についていきある部屋に到着した。

そこにはISがぞろりと並んでいた。

「ここには訓練用に生徒に貸し出すISがある。君達2人にはどれでもいいからISに触れてくれ。力が本当ならコアが起動する。」

まずは明久がISに触った、そしたら普通に起動した。

みんなは声を上げなかったがかなり驚いている。

俺の方もISに触ろうとしたが、奥のほうに1つだけポツリと置かれたISを見つけた。

「織斑先生、あのISだけ何であそこに置かれているんですか？」

「あれか。あのラファール・リヴァイブは欠陥品だ。誰が触れても起動しなくてな、いろいろと調べたが原因がわからずあのままの状態なんだ。もつともISそのものが欠陥品なのだな。」

「そうなんですか・・・よし、起動できるか俺があいつで試してみる。」

そうやって俺は欠陥品の烙印を押されたISに近づきそれに触れた。すると、ISが光だし起動し始めた。

「『『『動いた!』』』」

「まさか!?!」

「動かしたというのか欠陥品を!?!」

さすがにこれにはみんなが声を出して驚いている。けど、1つだけ訂正しないと。

「織斑先生、起動したんだからもうこいつは欠陥品じゃないですよ。」

俺の言葉に織斑先生が面食らいやれやれといった表情になった。こうしてISを起動したことにより俺達の話に信憑性が証明された。今後の対策を相談した結果あることが決まった。翌日、俺達はある教室に居た。

「それではみなさんに転校生を紹介します。」

摩耶さん・・・山田先生の言葉で、IS学園の制服を着た俺と明久が教室に入る。

教室の中は見渡す限り女子、女子、女子つと見事なまでに女子しか居ない。

前の席に座っている一夏を除いて。

「・・・神薙 綾人です。何故か転校生になりましたがよろしくお願います。」

「・・・吉井 明久です。同じく何故か転校生にされました。」

俺と明久は何故こんなことになってしまったのかと心の中で思う。教室の女子達の視線が集まりすごく突き刺さる。

「男？」

「とりあえずY染色体を保持しているから男ですけど、それが何か」
「？」

「き、」

「「き？」」

『きゃあああああ！！！』

突如クラス中大喝采した。な、何だいきなり！？

「男子！それに2人も！！」

「しかもうちのクラス！！」

「美形！守ってもらいたい系と守ってあげたい系！！」

「騒ぐな、静かにしろ。」

織斑先生の一言で静まる女子達。織斑先生すげー！

「今日は授業の内容を変更して転校生の神薙と吉井のために模擬戦をする。2人の相手は織斑とオルコットにやってもらおう。」

「ちょっと待ってください！そんなこと一言も聞いてないんですけどー！！」

織斑先生の爆弾発言に俺達の言葉がシンクロする。

「こちらで決めた。ISに慣れるのにはいい機会だと思ってな。」

「「だとしても事前に本人達に通達ぐらいはするでしょ普通！！」」

「・・・以上だ、各人は第2アリーナに集合。それから織斑は転校生2人を更衣室まで案内してやれ以上だ。解散！」

「「無視しないでください！！」」

俺達の叫びは織斑先生に届くことはなかった。

一夏が俺達の肩にポンっと手を置いてあきらめると言った。

一夏に案内されて第2アリーナのピットに来た俺と明久。
俺は緑の装甲をしたISを装着した状態でカタパルトに居る。
ちなみに俺の装着しているのはあの欠陥品のラファール・リヴァイ
ブだ。

「神薙聞こえるか、今から織斑と戦ってもらうが1つだけ言う事がある。」

「何ですか？まさかこいつには武器がないとかそんな冗談ですか？」

「よくわかったな、そいつは他のやつと違って拡張領域がゼロで武器が搭載できない。」

えっ、冗談で言ったのにマジかよ!？

「残念ながらマジだ。武器無しでの戦闘になるがまあ・・・頑張つて逝って来い。」

「こっちはIS素人なのに素手で戦えと!？陸奥圓明流じゃあるまいし、それに行って来いの字が違っんですけど!！」

「つべこべ言わずに早く逃げ、今後の対策のためにISを使いたい

といたたのはお前達だろ。こちらがお前達のデータを採らせてもらうことでお前達に貴重なISを提供しているんだ。ガマンしろ。」

「欠陥機を押し付けた人が何言ってるんだ！この鬼—————！！」

「……綾人、ドンマイ。」

反論も空しく俺は武器無しで戦うことになった。なんのイジメだこれ！？

｝side out

｝side 一夏

白式を展開してアリーナで待機していると、ピットからISを装着した綾人が出てきた。

なんか泣いている様に見えるが……

「……綾人、何かあったのか？」

「……教師から武装もないIS押し付けられて、今から刀持った

ISと素手で戦って逝って来いって言われた。」

「どんな無茶振りだそれ!？」

千冬姉、さすがにこれは綾人がかわいそすぎるだろ。

戦闘経験者といってもISは操縦するのが初めてなのに……

「……もういや、とりあえず始めるか一夏。」

「そうか、手加減はするから」しなくていい。むしろするな。「って何でだ?」

「今思ってみれば武器が無いで戦う状況なんてことは珍しくないからな。それに、ISに慣れるのにそれぐらいの緊張感があったほうが良さそうだしな。だからお前は手加減とかするな。」

「……どうやら本気みたいだな。いいぜ、それじゃあ行くぜー!」

俺が叫んだと同時にスタートの合図が鳴った。

綾人に接近して雪片式型を振うが、アイツはそれを上空に上がって回避。

勢いづいているところを見ると、まだISの操縦に慣れていないの

がわかる。

「こつというのは弱いものいじめしているみたいで気が進まないが、手加減無しって言われたから思いっきり行くぜー！」

そのまま追撃して連続で雪片を振う。

細かい動作ができないアイツはオーバーアクションで避けるしかない。

だから俺はアイツの次の行動を先読みできる。

「もらった！」

「やばっ！」

俺の攻撃がヒットして綾人が勢いよく地面に落ちて、砂煙が舞う。

白式の霊落白夜はバリアを無効化して相手のシールドエネルギーを削ることができる。

アイツは当たる直前シールドでガードしてダメージを軽減させようとした。

けど、俺はそれごと切り裂いたのでアイツの行動は無駄に終わる。

「終わったか」「残念だが、まだ終わってないぜ。」「なっ!?!」

終わったと思っていた矢先にアイツの声が聞こえ砂煙が晴れる。
そこには先程とは違う姿のISを装着した綾人がいた。

side out

side 綾人

一夏の攻撃をシールドで防ごうとしたがそれごと斬られて勢いよく地上に落ちた俺。

ギリギリ体を後方にさがったことで直撃は避けられたがシールドエ
ネルギーをかなり持っていた。いかれた。

どうしようかと考えていた時に目の前に小さな画面が出てきてラフ
アールがその姿を変えた。

「フォーマット・フィッティング完了。ってことはこいつは俺の専
用機になったって事か。」

俺が色々と確認していると一夏が何かほざいているから反論するこ
とにした。

「残念だがまだ終わってないぜ。」

砂煙が晴れて俺の姿が現われる。

ギャラリーのクラスメートと目の前の一夏が驚いている。

改めて今の姿を確認してみる。

装甲全体は白くなって、両足の先端は金色の爪に変わり両腕にも同じヤツが折りたたまれていてバックパックにはイオンブースターが2基装備されていた。

「これどっかで見たことあるんだが、てか、どこのライオーゼロ仕様だよ!？」

思わずツツコンだ俺は悪くないと思う。いきなり自分のISがZOIDS見たいになっただから。

けどまあさつきよりも体が馴染むし、何より動かし方は大体わかった、だから・・・

「反撃開始といきますかー!!」

イオンブースターを吹かせ一夏めがけて突っ込み、右腕のクローを展開、装備して切り込む。

一夏はハツとして反応するもクローの攻撃を受けてしまう。

形状変化したことでラファールのスピードが先程よりも速くなっていたため防御をする時間が無かったのだ。

「今のはただ速いだけじゃない、綾人お前まさか・・・」

「とりあえず動かし方はさつきボコられている時に大体わかった。それに、最適化されてから体に馴染んできている、だから・・・この勝負勝たせてもらうぜ一夏!!」

「おもしれー！こつちも負けねえぞ!!」

俺達は再び戦闘を再開し空中を舞う。

さつきまで攻撃を避けるのにオーバーアクションをしていたが、今は最小限の動きで回避。

隙ができる瞬間まで一夏の攻撃をかわし続ける。

「くそつ、当たれ！」

焦った一夏が大振りで斬りかかって来たのを好機と見て仕掛ける。

一夏の持ち手を左手で押さえ刀剣を止める。いきなりの行動に目を大きく開き驚いている一夏の鳩尾を右腕で突き、仰け反ったところで回し蹴りをかまして叩き落とす。

一夏はそのまま地上にダイブして地面とキスする事になった。これでさつきの借りは返したぜ。

「まさか最適化しただけでこんなになるなんて・・・すごいな。」

「そう言いながら今の蹴りをガードしたヤツの方がすごいよ、入ったと思ったのによ。」

そう、一夏は今の蹴りを寸前で防御していた。こいつ・・・かなり強い。

このまま戦っていてもギリ貧でこっちのシールドエネルギーが先に0になる、何か言い手は無いか？

そう思っていたら、また目の前に画面が出てきた。えーと、ワンオファビリティー？

「・・・ようは必殺技ってことか、内容もゼロと同じだし。・・・お前の名前決めた、お前は今日からラファール・ゼロだ！」

こいつの名前も決まったし、後はこの必殺技をどうやって当てるかだが。

「一夏、次の攻撃で決めるぜ。」

「だったら逆に俺が決めてやるよ。」

互いの言葉に笑みを浮かべる。こういうノリは大好きだ、テンションが上がってくるぜ。

一夏と罅迫り合いを続けながらタイミングを覗う。

そして、一夏がスピードを急激に上げて奇襲のように一気に近づいてき斬りかかって来た。

速い！？けど、ただそれだけで避けられないことはない！

「もらったああああっ!!」

「ところがギッチョン!!」

一夏の切込みをサイドステップの要領で回避する。

今の一撃を避けられたことで一夏の顔が動揺を隠せないでいるが、すぐに俺から離れ距離をとった。

俺は一夏を追撃しながらワンオフアビリティーの発動を行う。

すると、アーマーが展開してそこから金色の光があふれ出し、腕に装着したクローが光を纏う。

「何かヤバイのが来る!!」

危険を察知した一夏はひたすら逃げようとする。そうだが、一夏がさつきやった動き、やってみるか。

「一夏の回避コース予測、そしてトップスピードで一気に近づく!!」

さつき見た要領で試してみたら見事に成功し一夏を捉える。

「まさか、イグニッションブースト!？」

「いつけええええええ！ストライクレーザークロー！！」

光を纏った爪は白式の片翼を切り落とす。

するとそこで試合終了のブザーが鳴る。結果は・・・

「両者引き分け。」

「「・・・はっ？」」

その結果に俺と一夏は同時に声を漏らす。

「お前達、自分の残りのエネルギー残量を見ろ。」

「「えーと、残量は・・・0!？」」

こうして俺達の戦いは引き分けに終わった・・・何で!?

第20話 転校生になりました？IS新世紀スラッシュゼロ（後書き）

勝負の結果は引き分けに終わりました。

綾「何で引き分けにしたんだよ、せつかくTVさながらの叫びで使ったのに！」

いきなりお前に勝ち星を与えるのも癪だし、負けてないだけありがたいと思えよ。

綾「このクソ作者……！！」

明「それで綾人のISだけどこれの元ネタってZOIDSだよな。」

そう、ライガーゼロが元になっているんだよね。

綾「作者の妄想全開のISだと聞いて不安だったが意外とまともなので安心した。」

明久の方も似た様なやつになるから

明「僕のもZOIDS仕様になるの！？」

綾「けどIS使うのってこの世界だけだよな、今後使えないのが勿体無く思うんだが。」

新規連載でIS小説書く予定も無いしね。他の作者さんが使いたいて言うなら喜んで貸し出すけど。

明「太っ腹だね。」

そうでもないさ。基本自分のところはキャラとかのレンタルはフリーだし、それに他の作者様達からキャラを借りっぱなしなんて失礼だしね。

綾「そうだな、それには同感だ。」

次回は明久のISが登場します。

第21話 鬼先生によるイジメ？切り開くは大刀のライガー（前書き）

龍夜Mk2様、断空我様、感想ありがとうございます。
今回で2人のIS体験が終了します。

綾「体験と言うなのイジメだろこれは。」

明「そうだよね、欠陥機を平然と押し付けられたしね。運が悪かったね綾人。」

他人事のように言っているがお前もだぞ。

明「ちよつと！？？どついう事それ！」

それでは本編スタートです。

明「ちよつと！？？聞いているの作者ー！ー！！」

第21話 鬼先生によるイジメ？切り開くは大刀のライガー

試合を終えてピットに帰ってきた俺は何で引き分けになったのか織斑先生に原因を聞いてみる。

「恐らくさっきの攻撃が原因だろうな、あれはバリア無効化攻撃の一種だろう。」

「バリア無効化攻撃・・・それってもしかしてISのバリアを突破して本体に直接攻撃できるってやつですか？」

「そうだ。自分のシールドエネルギーをもち攻撃に添加する機能のことだ。織斑の白式にも同じ機能がある。だが、お前のは白式のそれとは少し違うな。」

「と言うと？」

「エネルギー消費量の差と射程範囲だ。お前のラファール・ゼロのストライクレーザークローの消費エネルギーは白式の零落白夜の半分以下だが、最大出力を出してもその範囲は爪だけだ。一方白式は最大出力時なら刀身が通常機動状態よりも長くなるエネルギー関係の攻撃を対消滅させる機能はどちらも同じだがな。」

「なるほど。でも普通に使う分ではあまり問題ないですね、てかかなり卑怯な機能ですね。」

「その通りだ。従来のバリア無効化攻撃の消費エネルギーの半分以下でそれと同等かもしくはそれ以上の威力を引き出せる機能など現時点での技術力では不可能だ。さっきはエネルギー残量が僅かだった為にエネルギー切れしたが、残量がまだあつたなら試合は勝つていただろうな。そいつは異常なまでに規格外のISだ。」

織斑先生とそんな談義をしながらゼロの機能をチェックしていると知らない項目が増えているのに気づいた。

「・・・先生、たしかワンオフアビリティーってかなり稀にしか発生しない能力ですよね。」

「そうだが、それがどうしたんだ？」

「・・・なんかもう1個出てきてるんですけど。しかもすごい内容のヤツ。」

「何だと？データをこちらに・・・これは!?!?・・・そのISはとことん規格外の物のようだな。」

新しく増えた内容を見てこいつは本気でライガーゼロを目指しているんじゃないかと思った。

とりあえずISを解除するために待機状態にした。

待機状態はブレスレットになったがこれじゃあ一夏と被っているな、別の形にはできないのか？例えば指輪とか。

そう思っていたら、腕輪が光だし形を変えた。

「・・・指輪になった。もしかしてこいつの待機状態って俺が想像した物の形になるのか？」

だとしたら・・・めっちゃ面白い！

「・・・あのー、そろそろ僕の試合なのに何かないんですか先生、それに綾人も。」

「そうだったな、まあ頑張れ。」

「明久・・・お前いつから居たんだ？」

「最初から居たよ！一緒にここに入ったじゃないのさ、そりゃあ前回は綾人メインで話し進んでいたからちよっと空気になっていたけど。」

「そういえばそうだったな。で、今から何しに行くんだ？」

「だから試合だよ！！ていうか2人共ワザとやってない？」

「「よくわかったな。」」

「2人なんか嫌いだー！ー！！」

そう言っただけで明久は泣きながら発進した。いや〜ついつい弄ってしまった。

しかしどんな試合になるのか楽しみだな。

「むっ、しまった。吉井に言うことがあったのをつい忘れていた。」

「明久に・・・どんなことですか？」

「あいつのISもお前のヤツと同じで起動しなかった欠陥品の打鉄だと言うことをな。」

「この学園どんだけ欠陥品あるんですか！？てか、またあんたはそれを平然と人に押し付けたんかい！！」

やっぱりこの人鬼だ。明久のやつ本当に大丈夫だろうか。

＼side out＼

＼side 明久＼

覚束無い操縦でピットから発進した僕の前に青い装甲のISにスナイパーライフルのような武器を持ったオルコットさんが待っていた。あのISはブルー・ティアーズと言う名前らしい。

「この状況、一夏さんと代表候補を巡って戦った時のことを思い出しますわ。」

「そうなんだ。その時の勝負ってどうなったの？」

「一応はわたくしの勝ちでしたが、IS初心者の一夏さんに対してすこし大人気ないと思ったので代表の方は一夏さんに譲ってさしあげたのです。」

「そうなんだ。なら少しは手加減してくれるとありがたいんだけど、僕も初心者なんだし。」

「それは無理ですわ。手加減はするなと織斑先生から釘を刺されていますし。それに一夏さんは神薙さんに手加減をしてませんわ、それなのにわたくしだけそんな事をするなんて失礼だと思うのです。」

「いや、僕は全然気にしないので手加減してください！」

「けど神薙さんはその条件で引き分けに持ち込んだんですよ、一緒に旅をしているあなたも同じことができるんではなくて？」

「無理だから！僕は綾人見たいな規格外とは違うから！」

「それじゃあ、行きますわよ！！！」

「話を聞いてー！！！」

ライフルからビームを発射したオルコットさんから必死で逃げる僕。何でこの世界の女性は好戦的なの！？
とりあえず何とかしないと、こっちの武器は・・・あつた！とりあえず転送。

「武器は・・・刀一本だけで銃火器とかがない！？銃持っている相手には不利すぎるでしょこれ！？」

「どうしたんですの？余所見をしてると当たりますわよ！」

「とにかくやるしかない、いつくぞー！！」

刀を構えブルー・ティアーズに向けて突撃するけど、なぜか僕のISのスピードがあまり出ていない。

というか、なんかすごく重いんだけど何で

.....

「ところで明久のISはどこが欠陥何ですか、俺の時とは違ってちゃんと武器もあるのに。」

「吉井の打鉄のデータを見たんだが、あのISはなぜかパワーバランサーの機能が働かないんだ。」

「パワーバランサー・・・それってどういう機能なんですか？」

「この機能が働いてない場合、搭乗者にISの全重量がのしかかるというものだ。」

「つまり今の明久の状態は支える補助が無いことで自分の力だけでISを担いでいるようなものだ？」

「そうだ。しかし、何故そのような欠陥機をしかも2機も置いているのだこの学園は？」

「それを平然と生徒に押し付けるあんたがどうなってんだよ！？あんた絶対人の皮を被った鬼だろ！！」

.....

何か今すごい理不尽な事をされたような感じがしたけど、今はとにかく攻撃あるのみ。

「でやー！ー！！」

「遠距離射撃型のわたくしに近距離格闘装備で挑むなんて正気ですの？」

「仕方ないでしょ！？これしかないんだから！！」

「そうですね、でも手加減はしませんわよ！さあ、踊りなさい。わたくしセシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でるワルツ

で!」

オルコットさんがガンガンとライフルを撃ちまくってくるため近づけない。

回避しようとしてもまだ操縦になれていないから思うように避けられない、それに体が重くて動きが鈍いから何発かは当たってしまう。

「何だかんだ言って結構持ちこたえていますわね。なら、これでフイナールですわ!」

ブルー・ティアーズから4つの装甲がはずれ、それらはビームを出しながら僕に迫ってきた。

「追い討ちでファンネルなんて出さないでよ!」

「そんな事を言っている余裕がまだあるんですわね。」

余裕なんて全くないよ、けどツッコんでも悪くないと思う。
刀でビームを弾いたりして防いでいるけど、それでも何発かは当たっている。

エネルギーが少なくなってきた、何とかしないと!

「これでトドメですわ!」

「へ？」

そうオルコットさんが宣言してミサイルを発射した。

避けようとしたけど、やっぱり重くてスピードが出ないため無理だった。

僕はそのミサイルの直撃を覚悟したその時、変化が起きた。

急に体が軽くなって無我夢中で飛んでくるミサイルを斬り落とす。

「またこのパターンですよ!？」

「それってどういう・・・てこれは!？」

僕のISが突如その姿を変えていく。

装甲は青くなり手足は綾人のISと同じ形になり、持っていた刀が消え、背中に大刀が装備され僕の頭にライオンの鬣の様な金色のオブリエが装着される。

「ファーストシフト・・・あなたも初期設定で戦ってたんですね。」

「それだけじゃないぞ。」

オルコットさんが何か言っている時にスピーカーから綾人の声が聞こえた。

『明久のISはパワーバランスの機能がないから全重量背負って戦ってたんだぞ。』

「なっ!? 無茶苦茶にも程がありますわ! パワーバランスがないISなんて聞いたことありませんの!」

『今日の前にあるだろ。もっとも、フィッティングが完了したことでそれも解決したみたいだし。』

「えーと、つまりどういうことなの?」

『お前は俺と同じく欠陥機を押し付けられていたと言っことだ。あの意味俺のよりもたちの悪い欠陥機をな。』

「先生――――!! 何ですかそれ!? これって何かのイジメですか!」

『もう解決したんだ、過ぎた事を一々愚痴るな。』

「『あんたつて人は――！』」

僕とピットに居る綾人の声が重なった。この世界の女性は怖すぎる。

「でも、これでやっとまともに戦えるみたいだね。」

「そのようですわね。けど、負けませんわー!!」

またファンネルが飛んでくるけど、僕は不思議と落ち着いていた。さっきまでとは違い身体が軽くなっている。しかもISが馴染んだのか思うように動ける。

それいこのファンネルが攻撃している時はオルコットさんは攻撃を
してこないことにも気づいた。

それだけ操作に集中しているってことだろう。

「それに攻撃方法もパターンがあるから避けれる!!」

「まさか、全部避けられるなんて・・・。」

僕はすぐに武装の確認をした。持っていた刀が消えちゃったから、
今は素手の状態だ。

すると、モニターが後ろの大刀を表示した。

僕はそれを抜いて構える。大刀には何か文字のようなものが刻まれ

ている。

「姿が変わっても近接型には変わりないようですね、ならまだこちらが有利！」

確かにそうだ。さっきからこちらの攻撃は1つも当たっていない。軽くなってスピードが上がったとしても当てられる可能性は低い。

「残りエネルギーも少ないし、どうしようか？」

「だったらこれで終わりですわ!!！」

ブルー・ティアーズからミサイルが発射される。けど、それによって動きが止まった。

僕はそれを好機と見て突撃するがミサイルが目の前まで迫ってきた。だが、それは一瞬のことだった。今僕の目の前にはミサイルではなくブルー・ティアーズだ。

「!?!? 一体何が!!！」

「チエストオオオオオ!!！」

突然のことで反応できなかったオルコットさんは僕の大刀の一撃を受け地上にすごい勢いで落ちていく。
そして、試合終了のブザーが鳴る。

『勝者、吉井 明久。』

僕はその事実をすぐには認識することができなかった。それは見ていた生徒達もそうだ。
たった一撃でオルコットさんのシールドエネルギーを0にしたのだから。

＼ side end 〵

＼ side 綾人 〵

明久の試合が終わり、ピットから出た俺は観客席にいる一夏のところに向かった。

見つけた時には案の定ポカーンとしていたがな。

「おい、いつまで呆けてるんだ。」

「あつ綾人・・・今、何が起こったんだ。いきなり明久が消えて、それからセシリアの目の前まで来て攻撃した。セシリアはまだエネ

ルギーが1も減っていなかったのに、それが一気に0に……」

「明久が消えた理由だが、アイツがやったのはイグニッションブーストだ。ただ、目にも止まらない速さのな。」

「嘘だろ！？いくらなんでも速過ぎるぞ！！」

「恐らく途中からパワーバランスが働いたことで負担がなくなっただから動きが軽くなったんだろ。それにあのISの瞬間最高速度がかなりあるんだろ。」

「それじゃあ、セシリアが一発で負けたのは……」

「あの大刀、多分あれ自体がバリア無効化攻撃みたいなもんなんだろう。それもエネルギー消費をしないな。」

「そんな反則武器ありかよ……」

「別に不思議なことでもないだろ、名匠に鍛えられた剣や刀は何でも切れるらしいしな。けどまさか……ライガーゼロの次はムラサメライガーかよ。」

こうして欠陥機を押し付けられた俺達のIS初体験&模擬戦は終了した。
結果は・・・ライガーISが二つ誕生した。

第21話 鬼先生によるイジメ？切り開くは大刀のライガー（後書き）

と言う訳で明久のISはムラサメライガーをベースにしました。

綾「確か候補はあと二つあったんだろ。」

うん、シャドウフォックスとライトニングサイクスの二つ。

明「けど何でムラサメにしたの？」

この2体は打鉄でするよりもラファールの方がいいと思ったから、この二つは銃火器とか使いまくるし。

綾「打鉄って見た目は射撃武器ついてなさそうだしな、それならムラサメライガーの方がやりやすいつてことか。」

そうだね。ちなみに名前は打鉄・村雨ね。

明「それで、何か勝負の方は最後一瞬で決着ついたけど何で？」

ムラサメライガーって他のライガーと違ってブースターとかついてないけど機体重量はメッチャ軽いんだよね。だから俊敏な動きができるわけ。

綾「だとしても速すぎると思うがな、あと攻撃力が高いの？」

TVだとも何でも斬っている描写が多かったからね、それにこういう強力な武器ってISにはないから逆に新鮮だと思って。

明「ところでムラサメライガーをベースにしているなら、ゼロ同様アレとかになれるの?」

次回の前にIS紹介出すから詳細はそっちの方で書くよ。

ちなみにパワーバランサーはGAU様の作品の設定を参考にしています。

それではこのへんで。感想など待っています!

IS設定(前書き)

綾人達の使うISの設定です。

IS設定

ラファール・ゼロ

操縦者 神薙 綾人

誰も起動できなかつた欠陥機のラファール・リヴァイブを綾人が起動させ最適化された綾人専用のIS。

普通のラファール・リヴァイブとは違い拡張領域が無く一切の武装が無かつたが最適化によって自ら武装を作り出す。

その能力と性能は現在のIS世界では実現不可能の代物であり第2世代でありながら第4世代ISをも超える可能性を秘めている。

さらに、ワンオフアビリティにより武装を変化する事で高速特化型のイエーガー、格闘特化型のシュナイダー、重装甲砲撃特化型のパンツァー の3タイプにチェンジできる。

ワンオフアビリティー

- ・ストライクレーザークロー
- ・チェンジングアーマーシステム(CAS)
- ・バスタースラッシュ(シュナイダー専用)
- ・バーニング・ビックバン(パンツァー専用)

武装

- ・ストライククロー×4
- ・イオンターボブースター×2
- ・2連装シヨックカノン

ラファール・ゼロイエーガー

ラファール・ゼロの高速戦闘形態。カラーリングはネイビー。高速特化のCASで、可変式大型イオンブースターは上下左右に自在に可動、単に直線スピードの速いISとは比べ物にならない運動性能を誇る。しかし、高速性能に追求するあまり軽量化したため、防御面では素体よりはまじだがタイプゼロに劣る。攻撃力の面でも他の換装機に比べると芳しくない。

必殺技はタイプゼロ同様「ストライクレーザークロウ」

武装

- ・大型イオンブースター×2
- ・バルカンポッド×2
- ・エアロフェアリング×4
- ・サイドスラスター×2
- ・フライングバルカンポッド
- ・ストライククロー×4

ラファール・ゼロシユナイダー

ラファール・ゼロの格闘戦用形態。カラーリングはオレンジ色。翼の形をした7本のレーザブレードと5基のシールドジェネレーターにより絶大な攻撃力と防御力を持つ。これらの武装で重量は増加したものの、全身にスラスターが装備されたことで最高速度も上昇している。しかし、膨大なエネルギーを消費するため稼働時間は短く、火力は貧弱である。

7本のレーザブレードは翼だけではなくソードビットとしても機能し、それを手に持って攻撃することも可能。

必殺技は5本のブレードを前面に展開し、突撃体制になって標的に突貫する「バスタースラッシュ」

武装

- ・レーザーブレードビット×7
- ・シールドジエネレーター×5
- ・高出力イオンターボブースター×2
- ・高機動スラスタ×4
- ・肩部高機動スラスタ×2
- ・ストライククロー×4

ラファール・ゼロパンツァー

ラファール・ゼロの重装甲砲撃形態。カラーリングはグリーン。圧倒的な火力と装甲を持つが、ISの特性を無視した重武装から飛ぶこともままならない欠陥装備でもある。

全身に数多くのミサイルを満載し、背中にはIS常識では考えられない重砲・ハイブリッドキャノンを装備。

必殺技は全身から大量のミサイルを一斉発射する「バーニング・ビツグバン」

武装

- ・ハイブリッドキャノン×2
- ・6連装マイクロホーミングミサイルポッド×4
- ・3連装マイクロホーミングミサイルポッド×2
- ・2連装マイクロホーミングミサイルポッド×2
- ・2連装ミサイルポッド×4
- ・バルカンポッド×2
- ・3連装グレネードランチャー

打鉄・村雨

操縦者 吉井 明久

千冬から無理やり押し付けられた欠陥機の打鉄が明久ように最適化された明久専用のIS。

パワーバランスが無いためISの全重量を抱えながらしか戦闘できなかつたが最適化されたことで解決。

武装の方も大刀ムラサメブレードに変わる。

このISもラファール・ゼロ同様、ワンオフアビリティーによる武装変化能力を持ち、

高速特化型の疾風、格闘特化型の無限の2タイプにチェンジできる。

ワンオフアビリティー

・エヴォルト

武装（村雨）

・ムラサメブレード

・2連装ソードキャノン

・ストライククロー×4

打鉄・疾風

打鉄・村雨が高速特化型にエヴォルト形態。高速戦闘に特化した形態で火器を一切搭載していない。

ムラサメブレードがムラサメデイバスターとムラサメナイフという二振りの小太刀へと変化し、腰の左右に鞘に納まった状態で装備している。ハヤテブースターを装備したことでスピードはかなりの速さになっている。

しかし一撃の攻撃力は村雨より劣っており、「速さだけが取柄」のISでもある。

武装

- ・ムラサメディバイダー
- ・ムラサメナイフ
- ・ストライククロー×4
- ・ハヤテブースター
- ・メインフィン×2
- ・サブフィン×4

打鉄・無限

打鉄・村雨の格闘特化型のエヴォルト形態。

機動力特化の疾風と反対に機動力を犠牲に攻撃力・防御力に特化した形態。装甲は零落白夜などの強力な攻撃の直撃にも耐える。パワーも3形態中最高。

ムラサメブレードを越えるムゲンブレードと、一回り小さなムラサメブレイカーの二刀の大刀を装備している。

武装

- ・ムゲンブレード
- ・ムラサメブレイカー
- ・ストライククロー×4

IS設定(後書き)

こんな感じになります。

第22話 フラグ成立？そして新たなる転校生（前書き）

うちの綾人がOOO・JANIKELU様の【バカと恋愛と召喚獣】に出演しました！

綾「宣伝遅いぞ！いくら更新が遅いとはいえOOO・JANIKELU様に失礼だろ。」

すごく反省してるから言わないで・・・

明「けどそこだと綾人は彼女居るんだよね。あのさ、殺していい？」

綾「いきなり物騒な発言はやめろ！？いきなりどうした？」

明「なんで僕はさっぱりなのに他作品とはいえ綾人だけいい思いしてんだよ！」

綾「本編の俺はそういったことが無いんだから落ち着け！」

果たしてそうかな。

綾「おい、どういふことだ？」

それでは本編スタートです！

第22話 フラグ成立？そして新たなる転校生

俺達は試合を終えてピットに戻った明久に合流して変化した打鉄について話していた。

「やはり吉井のISも規格外だな。しかし、今まで動かなかった欠陥機2つがまさかこれほど化けるとはな。」

「そうですね、2機とも第2世代の量産型ISなのに性能に関してはデータ上第3世代に匹敵しますしね。けど織斑先生、さすがに欠陥機を押し付けるのはダメだと思っんですけど。」

「押し付けてはいないぞ山田先生、試しに乗せてみただけだ。」

「……それを世間では押し付けてるって言うんだよ!!!（言うんです）」「」「」

織斑先生の発言にツッコミを入れる被害者2人と山田先生。山田先生、あんたいい先生だよ。

「千冬姉……さすがに俺もそれはないと思っぜ。」

「わたくしも同じくですわ。」

戦った2人も味方してくれた。この世界に来て初めての感動だ。

「だが高性能のISを使えるんだ、結果的によかったではないか。」

「結果だけですがね！・・・けど何で2つともZOIDSがベースになってるんだ？しかもライガー系。」

「能力とかもそれと同じだしね。僕の方にもそのワンオフアビリティーってやつあったし。」

「・・・一応聞くがそのアビリティーの名前ってエヴォルトか？」

「・・・正解。」

「データを見たがこれも神羅のISと似たような物だった。しかし、この2機は何の目的で作られたのか見当がつかんな。」

「開発者が趣味で作ったとかじゃないですか？その結果、余りのスペックの高さから常人では動かせないから封印指定でもしたとか？」

「……そうかもしれないな、あの開発者の性格ならやり兼ねん。」

「開発者の性格って、もしかして知り合いなんですか？」

「残念ながら、とにかくこの話は終わりだ。まだ授業が残っているから全員教室に速やかに戻れ。」

この場はこれで解散し俺達は教室に戻り授業を受けた。

その日の夜、俺達2人と一匹はイレギュラー調査のための作戦会議を開いた。

ルシエドはこのメンバーの中で自由に動きやすい存在だから俺達が授業を受けている間に色々調べてもらっていた。

ちなみにルシエドは学園の敷地の中に小屋を建てられそこに住んでいる。

「それで何かわかったかルシエド。」

「……いや、これと言った情報は手に入らなかったな。やはり現状では後手に回るしかないな。」

「……つまり一夏達の護衛に徹してイレギュラーの襲撃に備えろってこと？」

「・・・我々がこの場に転送された事を考えたらそうなるな。イレギュラーのターゲットは織斑 一夏とその仲間達だろうからな、千冬殿や摩耶殿が色々と調べてくれているとはいえイレギュラーの足取りを掴むためにもその方がいいだろう。」

「それしかないか。あの黒いISは恐らくイレギュラーじゃないと思う、今までの奴等と比べてみたら戦闘力は高いが怪物や怪獣の姿をしてないからな。」

「・・・結局は現状維持ってこと？」

「そういうことだ。・・・ところでお前達はさっきから何故俺の方をじろじろと見ている。何かおかしいか？」

「・・・ルシエド、これはツッコんでもいいってことなのかな・・・」

「・・・ならばそう取らせてもらおう。貴様、それは何のつもりだ？」

「言っている意味がわからんのだが？」

「その格好についてだ！貴様、何故そんなわけのわからん物を着用している！！」

「そうだよ！シリアスな感じで話し進めていこうと思っててもその人が着ぐるみのようなアニマルパジャマ着ていたんじゃギャグになっちゃうだろ！！」

2人は俺の今の姿にツツコミをした。

今の俺の格好は青いキツネのような着ぐるみ型のパジャマを着用している。

てか、

「おい駄犬！この格好のどこがわけがわからないんだよ、こんな愛くるしい物を着るのは当然だろうが！！」

「くっ、まさかこいつの性癖がここまでのものとは。」

「可愛い物なら生きているものじゃなくてもいいんだね・・・てか、そんなもので手に入れたの？」

「友からもらった大事なものだ。」

「友って、一体誰なの？」

「同じクラスの布仏 本音からだ。いやー、いい物もらったよ。」

「そうなんだ・・・って、いつの間に仲良くなったの!？」

「ついさっきだ。実はな・・・」

俺は先程の事を語りだす。

作戦会議の時間までどこかで暇を潰そうと寮の中を歩いていた時ある物体を見つけた。

そこには何故かキツネの着ぐるみがあるのそのそと歩いていた。

俺は何でこんな所に着ぐるみがあるのか？とか、そんな事を考えるもなく無意識に行動を起こしていた。

「そのキツネ！モフモフさせてもらっぞ!!」

「え？」

可愛い物体を目の当たりにした俺に理性はなく、気づいた時にはキツネに向かってルパンダイブのような感じで突撃して抱きつく。

「はわわー！！／／／／」

「このモフモフ感サイコーだ！まさかこれほどの着ぐるみに・・・いやこの感触はパジャマか。まさかこれほどのモフモフ感を完備したパジャマに出会えるとは。」

抱きついて頬ずりしてモフモフ感を堪能していると着ぐるみから声が聞こえた。

「／／／あ、あのー神薙君？だよー。ど、どうしたの急にー／／／」

「どうしたもこうしたも可愛い物体に抱きついてモフモフするのは人として当然の行動だ。これをやらずして何を・・・へっ？」

可愛い物を見たときにやる行動について熱く語っていた俺は呼びかけられた声で正気に戻り現在の状況を確認する。

現在の状況：俺がパジャマを着た布仏の体に抱きつき頬ずりをしている。

この場を他の誰かが見たら明らかに誤解をしてしまう状況である。そしてこの場に近づいてくる複数の足音、さつき布仏が悲鳴を上げたのが原因だろう。

このままではこの場を他の女子に見られるというお約束のパターンが待っている。

「まずい！？この場をなんとかしなくては明日から学園中から節操無の変態という烙印を押されてしまう！！」

どうするべきか必死で脳を回転させて考える。

何、既に変態だろうがだと？んわけあるか！可愛い物を見たら愛でるのは当然の行動だ！！

そんな時、救世主が現われた。

「神薙君ー、とりあえずこの部屋に隠れてー。」

「えっ、いや隠れるためとはいえ勝手に人の部屋に入るの……」

「大丈夫ー、ここ私の部屋だからー。」

布仏の提案に戸惑ったものの瀬に腹は帰られないので部屋に隠れてやり過ごすことにした。

『今なにか聞こえなかった？』

『気のせいかな叫び声が聞こえたような気がしたんだけど？』

足音が去っていくのを確認して大きく息を吐く。
危ねえ危ねえ、あやうく地獄の学園生活を送る羽目になりそうだった。

「大丈夫ー？なんかすごく疲れたような顔しているけどー？」

「ああ大丈夫、それよりも助かった。ありがとう。」

「お礼はいいよー／／困った時はお互い様だよー／／」

「そう言ってもらえると助かる。けど・・・ごめん！」

俺は布仏に土下座をして謝る。突然の事で布仏は混乱する。

「どどどうしたのー！？急に謝ったりして？」

「いきなり抱きついたうえにセクハラ紛いのことしたんだ、その気がないとはいえさすがにこれは謝らないといけないだろ。」

「／／わ、私は気にしてないからいいよ／／」

さっきの事を思い出した所為なのか顔を赤くする布仏だが許してくれるらしい。

すごくいい子だよこの子。

「でもなぎーって男の子なのに可愛い物が好きなんだねー、すごく意外だよー。」

「好きなものは好きだからしょうがない。それに男だからと言っ理由で我慢するのもなんか違うし・・・てかなぎーッて?」

「神雑だからなぎー!もしかしていや?」

「全然、むしろそういう風に愛称とかで呼ばれたことないからなんか嬉しい、ありがとな布仏。」

「どついたしましたー、あと別に私の事も本音でいいよー。」

「なら改めてよろしくな本音。」

「ノノノん、よろしくねーなぎーノノノ」

それから時間が来るまで本音と談笑しながらすごした。

途中、本音と仲のいい女子2人も部屋に来て4人で楽しく過ごして親睦を深めた。

部屋を出るときに友情の証と言って本音がこのパジャマをくれた。何故か顔が赤かったが気のせいだろうか？

「と言う事があったんだ・・・てどうしたんだルシエド、何で呆れているんだ？それに明久は何故ハンドブラスターを俺に向けてる！？」

「・・・いや、なんでもない。」

「くたばれ！何で綾人だけそんないい思いしてるんだ！普通は嫌われるよね、なのにそんな事になるなんて不公平だよ！！」

「友達作るの不公平も何もあるか、だったらお前も作ればいいだろ友達。」

「話の内容を聞いた限りでは明らかにフラグ立ってるよね！布仏さんに立てたよね！おのれは他の作品に出演してる上に彼女居るのに本編でも作る気か！もうガマンできない、くたばれー！！」

「そんなの知るか！てかメタ発言はやめろ！！」

その後、明久が暴走し怒り狂ったことでこの場はお開きとなる。

ちなみに明久はこの騒動を知った血冬さんにより鎮圧された。まさか一撃で仕留めるとは、血冬さん・・・恐ろしい人！！

「おい明久、生きてるか・・・ってこりゃダメだな、完全に気絶している。」

気絶した明久をベットに移動しようとしたら大きな声と共にドアが閉まる音が聞こえた。

気になって様子を見に行ったら、そこには一夏がぼつりと立っていた。

「一夏、何があつたんだ？何か大きな声が聞こえたが。」

「ああ、別にたいした事じゃないんだ。実は・・・」

事の顛末を聞いた。

何でも一夏と箒は同室だったらしく、つい先程山田先生から部屋の調整がついたからお引越しと宣告されたらしい。

箒はその事で渋っていたが一夏が箒がいなくてもキチンと1人でやれると言ったら急に怒り出して出てっいたらしい。

「けど箒のヤツ、何で怒ってたんだ？アイツも男が同室なんて嫌だろつに。それにいつまでも年頃の男女が同じ部屋なんてダメだろ。」

「・・・そうだな、普通の男とかなら拒否するだろうな。」

「?どづいうことだ?」

「いや、何でもない。・・・この場合鈍感と言いたところだが一夏の主張も間違っではないからな。この調子じゃ筈も大変だな。いや、セシリアと鈴もか。」

俺の言葉に一夏は?を浮かべるような顔をしていた。

ちなみに俺が去った後、この部屋の前で一夏がある約束を持ちかけられていた。

そして次の日。

「ねえ、あの噂聞いた?」

「何、この間のISの事?」

「あれは実験中の機体が暴走したって話でしょ。」

「じゃなくて今月のトーナメントで勝つと・・・」

「織斑君と付き合えるんだって。」

「えっ、私は神薙君と付き合えるって聞いたよ。」

「私は吉井君と付き合えるって聞いたわよ。」

「そうなの！？けど3人のうち誰と付き合えるの？」

「それはどうでもいいの、つまりこのトーナメントで優勝したら男子と付き合えるって話には変わりないんだから。」

「みなさん何の話で盛り上がっていらっしやいますの？」

「いや、私にもサツパリ。」

「・・・何か話が歪んで広まってる。」

「あんだ、またテキストな事言ったんじゃないの。」

「うー、そんなことないと思うけどなー・・・」

教室の女子達がこんな会話をしているとは露知らず、俺達男3人は教室に入る。

「おはよう。何盛り上がったんだ？」

「朝から賑やかなようだが何かあったのか？」

「それに何かそわそわしてない？」

『な、何でもないよ！』

一夏、俺、明久の順で聞いたら女子達は口を揃えて何でもないと云った。

どうしたんだ？と思っていると鬼斑先生がやってきたので全員着席した。

えっ、読み方が違う？これであってるだろ。

「今日はなんとまたまたみなさんに転校生を紹介します。」

山田先生がそう言うと入り口から誰かが入ってくる。

中性的な顔立ちで金髪を首の後ろで束ねておりスマートな体型をしていて男子の制服を着ていた。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。みなさん、よろしく願いします。」

俺と明久を除いてIS学園に2人目の男子がやってきた。

第22話 フラグ成立？そして新たなる転校生（後書き）

と言うわけで綾人が布仏 本音さん、通称のほほんさんにフラグを立てました。

綾「どうしてこうなった!？」

この作品ってまだそういうことやっていなかったから試しにやってみた。

綾「そんなお試し感覚でするなよ!てかよく立ったな、普通なら通報されてもおかしくないぞ。」

それがオリキャラクオリティーというものだ。

綾「そんなものいらん!何でこんな・・・はっ殺気!」

明「綾人!!貴様は絶対殺す!!」

綾「落ち着け!お前にもちゃんとフラグ立てる女子がいるから落ち着け、そうだろ作者。」

龍夜Mk2 様から頂いたオリキャラの事だな。
けどそれには少し問題があつて。

綾「何かあつたのか?」

その子は簪のクラスメートって設定なんだけど、自分は原作持って

ないから簪がどんなキャラかわからないのよ。

明「クラスメイトだから出さないのはおかしいしね、だから難しいの？」

簪のキャラとか喋り方がわかれば何とかね。

Wikipediaだけじゃ限界あるの。

綾「このIS編もアニメ知識で書いてるからな。せめて2期でもあったらな」

OVAは出るらしいけど、そこまで待てないしね。

明「確か出せるなら出してみたいキャラなんだよね。」

うん、Wikipedia見た限りでは綾人と凄く気の合うキャラだしね。

フラグ立てる候補だったんだ。

明「死ね綾人！！」

綾「その話を蒸し返すなー！！」

とりあえず次回もお楽しみに。

第23話 疑惑だらけの転校生と第3の性別秀吉（前書き）

今回はそんなに話が進みません。

綾「この調子だとホントに20話超えそうだなIS編。」

明「こんななら新規連載で書いた方がよかつたんじゃない？」

ちゃんと反省はしている。

それでは本編をどうぞ。

第23話 疑惑だらけの転校生と第3の性別秀吉

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。みなさん、よろしく願います。」

「お、男？」

「はい、こちらに僕と同じ境遇の方が居ると聞いて本国より転入を・・・」

『きゃあああああ！！』

「えっ？」

IS学園にまたしても男の転校生がやってきたことでクラス中の女子達が騒ぎ出した。
転校生のシャルルはそれに呆気をとられたような表情をしている。

「男子！4人目の男子！」

「しかもまたうちのクラス！」

「美形、吉井君と同じ守ってあげたくなる系の！」

「騒ぐな、静かにしろ。」

鬼斑先生の一言で静まる女子達。さすがはこのクラスの首領、見事な恐怖政治だ。

「神薙、今何か失礼な事を言わなかったか？」

「イイエナンデモ。」

この人も心を読むタイプか！

「今日は2組と合同でIS実習を行う。各人は着替えてグラウンドに集合、それから織斑、神薙、吉井。」

「はい。」

「デュノアの面倒を見てやれ、同じ男子同士だ。以上だ解散！」

そう言つて鬼斑先生が退室する。そしてこっちにデュノアが近づいてくる。

「君が織斑君、それに君達も男子みたいだけど・・・」

「いいからいいから、とにかく移動が先だ。」

「そうだな、女子達が着替えを始めるから急ぐぞ。明久、デュノアを誘導してやれ。」

「わかったよ。とりあえずこっち。」

そう言つて明久がシャルルの手を掴み俺達は移動を始める。

けど、シャルルのやつは明久が手を掴んだら急に顔を赤くしたが何でだ？

もしかして女子。いや、まさかな・・・

そんな事を考えていると一夏がシャルルに説明を始める。

「俺達はアリーナの更衣室で着替えるんだ。実習の度にこの移動だから早めに慣れてくれよな。」

「僕と綾人は昨日転校して来たからまだ慣れてないんだ、一緒に頑張ろうね。」

「う、うん。」

「どっしたのそわそわして?」

「う、うん何でもないよ・・・」

「とりあえず急ぐぞ早くしないと女子達に取り囲まれる。」

その証拠に複数の足音が聞こえてくるからな。
俺達はダッシュで更衣室に向かった。

「そっいえば何でみんな騒いでいるの?」

「そりゃあISを操縦できる男って今のところ俺達だけしかないからだろ。」

「・・・あつ、そ、そうだね。」

俺と明久は例外だがな、けどシャルルの今の間は何だ?

一夏の話どおりISを操縦できる男は特異点の俺たちを除いて2人

しかいないから珍しがるやつは大量にいる。

しかもそれが転入してきたとなると大騒ぎになるのは当然だが、シヤルルのやつは今それに気づいたような態度だった。

「ごめんね、いきなり迷惑かけちゃって。」

「いって、それより助かったよまた男子生徒が入ってきてくれて。学園に男1人は辛かったからな。」

「そうなの？あつ、そう言えば君達もここの学生なんだよね？」

「制服見ればわかるだろつと言ってても昨日転校したばかりなんだけどな。」

「そうなんだ。でも、ISを動かせる男子がまた出てきたなら世間が大騒ぎになっているはずなのにどこもそういったニュースとかやってないけどどうして？」

「一昨日ぐらいにわかって昨日急遽転入したんだ。いきなりの事だったからこの学園の外にはその事が伝わってないんだ。」

正確には鬼斑先生に頼んでもらって学園の上層部に情報の漏洩を防いでもらってるんだがな。

「これからよろしくな。俺は織斑 一夏。」

「神薙 綾人だ。呼び方は好きに呼んでくれて構わない。」

「僕は吉井 明久。僕の方も好きに呼んでいいよ、これからよろしく。」

「うんよろしく。それじゃあイチカ、アヤト、アキヒサって呼ぶね。僕の事はシャルルでいいよ。」

互いの自己紹介を終えた所で時間を確認してみると結構ヤバイ時間だった。

「うわぁ、時間やべーな。すぐに着替えちまおうぜ。」

「う、うわっ！」

そう言って一夏が着替えですが、シャルルは突然手で顔を隠して体ごと後ろに向けた。

俺達はその行動に疑問を感じた。

「?早くしないと遅れるぞ、うちの担任はそれはもう時間につるさい人で・・・」

「かなりのスパルタなうえに鬼のような・・・いや、一夏には悪いがあれば人の皮を被った鬼だ。」

「気にするな、あんなことされればそう思っても仕方ないしな。あれに関しては身内の俺でもそう思う。」

「そ、そうなんだ、けどちゃんと着替えるよ。でもそのあっちむいてて、ねっ。」

「いやまあ、着替えをジロジロ見るつもりはないが・・・」

「そっだよ、女の子の着替えを見たら犯罪になっちゃっし。」

「「そっだな、犯罪に・・・って、はああっ!?!」」

「えええええ!?!」

明久のとんでも発言に俺達は驚きの声を上げた。

シャルルに至っては顔を真っ赤にして驚いてる。

「おい明久！どこをどうしたらそんな結論になるんだ！？」

「さっきクラスで男って本人も言ってただろ、それに仮にシャルルが女子なら鬼斑先生が俺達に任せるはず無いだろ。」

「違うよ、シャルルは第3の性別秀吉を持つ女の子の筈だ！じゃないとこんな可愛いのに男子の制服を着ている筈が無い！」

可愛いと言われてシャルルの顔の赤みが増した。

一夏が興奮して明久の発言に疑問を述べているのに対して俺は冷静に意見を述べながらシャルルの方を見ている。

それは、明久の言っている事が的を得ていると思ったからだ。

先程からのシャルルの不可解な行動がその信憑性を上げている。

第3の性別秀吉ってのはわからんが、てか何だ秀吉って？

「男子だから普通に男子用の制服着るのは当たり前だろ！てか第3の性別秀吉って何だよ！」

「そんなの決まってるじゃないか！それは・・・何だろう？」

「ええ！？自分で言っておいてわからないのアキヒサ！」

「何故かシャルルを見ていたら不思議とそれが頭の中に浮かんできたんだけど・・・」

「もしかして、お前の失った記憶なんじゃないのか？」

「・・・そうかもしれないね。だとしたら少し複雑かな。」

「そうだな、思い出したことが割りとどうでもいいことだしな。」

「どういうことだ？」

「その話は後だ。早くしないと本当に遅刻になるぞ、そうだったら鬼斑先生の説教コースだぞ。」

そう言ったら一夏と明久が慌てて着替え始めた。

シャルルには隠れて着替えるように言って俺の方も着替えた。着替え終えてダッシュでアリーナに向かう途中で一夏がISスーツの着にくさについて愚痴っていたが、それを聞いたシャルルはまた顔を真っ赤にしていた。

「本日より実習を開始する。まずは戦闘を実演してもらおう、鳳、

オルコット。」

「はい！」

「専用機持ちならすぐに始められるだろ、前に出る。」

そう言われて前に出る2人だが、やる気が無く渋った表情をしている。

まあ、見世物みたいな感じだしな。

けど、鬼斑先生が2人にしか聞こえない声で何かを言っている。それを聞いた瞬間、態度が急変して2人はやる気満々になった。その変化に生徒一同が汗をたらした。

「今先生何言ったの？」

「俺が知るかよ。」

「あの2人にやる気を出させるワードを言ったただけだ。」

俺は鬼斑先生の口の動きで内容は把握している。

その原因の方は気づいていないがな。2人共、こいつ（一夏）を攻略するのは至難の業だぞ。

先生が墜落してきた。
あいつって不幸属性でもあるのか？

「おーい一夏、生きてるか・・・」

墜落した場所の様子を見に近づいてみたらそこには、山田先生の身体を押し倒してその胸に手を当てている一夏の姿があった。
前言撤回。こいつが持っているのはラッキースケベの属性だ。

「あ、あのー／／／織斑君／／／」

「う、うーん。えっ！？／／／」

「そ、そのですね／／／困りますこんな／／／あつても、このままいけば織斑先生が義理のお姉さんってことでそれはそれでとても魅力的な・・・／／／」

「う、うわあぁっ！？」ピシューーン！

自体を把握した一夏が急いで起き上がったがその直後、目の前を2本の青いビームが横切った。

恐る恐る飛んできた方向を見ると、ISを展開していて顔は笑っているが明らかに怒っているセシリアがいた。

「残念です、外してしまいましたわ！」

「一夏あああああ！！」

その後方では鈴が双天牙月を合体させて一夏に向かって投げつけていた。

だがそれは一夏に当たることなく銃撃により落とされた。撃ち落としたのはなんと山田先生だった。

「山田先生は元代表候補だ、今くらいの射撃は造作も無い。」

「鬼斑先生、嘘はいけませんよ。射撃はともかく最初のアレで説得力が0に近いですよ。むしろ生徒と一緒に練習する側だと思いますけど。」

「神薙、お前は言いにくい事をはつきり言つな。それよりも織斑先生と呼べ。」

「そ、そんなー！ ホントなんですっ！神薙君、信じてください！」

「山田先生は嘘つくような人じゃないと思いますけど、最初のあれ

を見た後では……」

「そう思うなら私から目を逸らさないでくださいー！」

うん、それは無理。

「まあ今を見て山田先生の実力を信じられないのは仕方ない。」

鬼斑先生もこれでは説得力が皆無と分かっているらしくここは認めた。

その代わり山田先生がへこんだ、しかもその事に気づいてる。この人はやっぱり鬼だ。

「さて小娘共、さつさと始めるぞ。」

「えっ！あ、あのー2対1で？」

「いや、さすがにそれは……」

「安心しろ。今のお前達なら山田先生が墜落さえしなければすぐ負ける。」

前提条件がおかしいけど鬼斑先生の口ぶりからするに相当の自信のようだな。

それで二人は不満そうにしつつも頷いた。

「では、始め！」

そして三人は練習場上空へと浮上していく。

ある程度高度を取った上で、山田先生は両手でアサルトライフルを取り出す。

それを見計らったようにセシリアと鈴は散開してそれぞれ距離を取り、まずはセシリアが動く。

後退しつつブルーティアーズを射出し山田先生の周囲に配置して次々とビームを放っていく。

でも山田先生は特に苦勞する事もなく空中で身を捻り後退しつつビームを回避する。

「ねえ綾人、なんか山田先生がさっきと別人何だけど!？」

「ああ。空中での機動も安定している、とてもさっき墜落した人の動きではないな。」

ビームをすれすれであちらこちらに移動しつつ避ける。それも本当にあっさりと。

回避先を読む形で鈴が衝撃砲を放つが、その動きを察した山田先生

は左にローリングして1撃目を回避して左肩のシールドで2撃目を受け止める。

「デユノア、山田先生が使っているISの解説をしてみせる」

「あ、はい。」

鬼斑先生の指示でシャルルによるISの解説が始まったがここは割愛で。

そして解説をしている間に山田先生がグレネードランチャーで2人を撃墜した。

2人は爆煙に包まれながら練習場に墜落した。

爆煙が晴れて折り重なるように墜落している二人の姿が見えるのでそっちに視線を向けた。

「アンタねえ、なに面白いように回避先読まれてんのよっ！」

「鈴さんこそ無駄にバカスカと撃つからいけないのですわっ！」

「あの二人はどうしますか。際限なく罵り合いが始まりそうですけど。」

「安心しろ、すぐに止めて授業に入る」

鬼斑先生が言葉通りに2人をしばいて止めると、上から山田先生が照れ気味に降りてきた。

「さて、これで諸君にも教員の実力は理解出来ただろう。以後は敬意を持って接するようにな。」

「山田先生凄いですね。俺はずっと信じてましたよ。というより誰だ、この人に疑いを持ったのは？」

「はい、ありがとうございます……って、ちょっとっ!？」

「「いの一番に疑ってたのはお前だろうが！ ちょっとここまでの話読み返せっ!！」」

一夏と明久ににツッコまれた。

「ならば神薙、お前がやれ。」

「えっ、まあいいですけど。ISに慣れるにはいい機会ですし。」

「そうか。ならすぐに展開して準備しろ。」

鬼斑先生に言われ準備を始めるためにベーターカプセルの形で待機状態になっているゼロを取り出して天に掲げ赤いスイッチを押す。するとゼロから眩しいぐらいの光を放たれその光からISを装着した俺が右腕を突き上げながら出てくる。

その直後、鬼斑先生の竹刀が飛んできた。

「いたっ！？何するんですかいきなり！！」

「まじめにやらんか。何だ今のは。」

「普通にIS展開しただけですよ。どこか問題でも？」

「・・・綾人、何でウルトラマンみたいな登場の仕方なの？」

「なんかこいつの待機状態は俺が想像した形になるんだよ。けど、ウルトラマンの何がいけないんですか！」

「神薙、もう1回やり直せ。」

やり直しを要求されたので渋々解除して待機状態に戻した。

形はさつきとは違うがな、そんなじゃあ気を取り直して。
右手のオーラギャザーを垂直に立てた左手のオーラスプレッダーに
差し込んで叫ぶ。

「気力転身！オーラチェンジャー！！」

俺の身体が光だしISを装着、そして。

「ラファール・ゼロ！天零星 綾人！！」

リュウレンジャーのようなポーズをとりながら名乗り上げる。
そしてまた鬼斑先生の竹刀が飛んでくるが、今度はそれを白羽取る。

「またですか鬼斑先生！ダイレンジャーの何がいけないんですか！
！」

「織斑先生だ！それに無駄なアクションをやめると言っているんだ
！神薙、お前はもしかしたら知らないかも知れんが、世の中には瞬
間装着というものがあってだな。」

「それならもうとっくにマスターしてますけど。」

「だったら始めからやれ！では無駄なアクションは省け。」

「だが断る。鬼斑先生、様式美って知ってますか？これは必要な事ですよ。」

「省け。」

「断る。」

「綾人のやつすげーな。てか千冬姉相手にあそこまで我を通す奴をオレは初めて見たぞ。」

「綾人はこだわりは意地でも通すからね。」

「すごくマイペースなんだねアヤトって。」

「夏達がそんな会話をしていたらしいが、俺と先生の耳には入ることとは無く口論を続けていた。」

「その結果、授業の時間がなくなると言うことなので実戦披露は無しになった。」

第23話 疑惑だらけの転校生と第3の性別秀吉（後書き）

次回からは少し端折りながら書いていこうかと思えます。

綾「そうしないとダメだろ。」

第24話 お姫様抱っこ、またまた転校生の登場（前書き）

やっと完成しました。

綾「最近仕事が忙しくて執筆できなかつたしな。」

感想の方は携帯で書けるんだけど執筆はちょっと無理があるんだよね。

明「休憩時間の合間しか書ける時間無いみたいだったしね。」

とりあえず本編をどうぞ。

第24話 お姫様抱っこ、またまた転校生の登場

俺と山田先生の実戦演習が無しになった事で授業が再開された。

「次にグループになって実習を行う、リーダーは専用機持ちがやる事。」

「鬼斑先生質問、俺と明久は専用気持ちでもISの知識や仕組みについてはまだ理解してないんですけど。特に明久が。」

「ちょっと！？なんて事言うつのさ！」

「事実だろうが。」

「お前達、昨日渡した参考書の内容はどのくらい理解している？」

「俺は昨日のうちに内容は全部覚えましたが。」

「ええっ！？お前あの参考書の中身一晩で覚えたのかよ！」

「こつこつというのは大好きなんだ。それに自分の知らない知識や技術を

知る事は楽しいからな。」

「織斑、貴様も見習え。お前の様にいらぬ電話帳と間違えて捨てるという愚かな行動をしていないのだからな。」

「一夏・・・お前そんな事したのか？」

「やめてくれ千冬姉！あれは俺の黒歴史なんだー！！」

トラウマスイッチでも入ったのか、一夏は頭を抱えて始めた。

「それで吉井、お前の方はどうなんだ？」

「・・・聞かないでください。」

「では吉井以外の専用機持ちがリーダーをやれ。では別れる。」

その言葉を皮切りに俺と一夏とシャルルの周りに女子生徒が集まる。これに関しては予想どおりだったのか鬼斑先生が女子を一喝してそれぞれのグループにわけさせた。

セシリアと鈴は時々一夏に視線を向けていた。エリートという立場が裏目に出たようだ。

しばらくすると一夏の方でトラブルが発生した。
そうやらESを起動したままにしたことで筈がコクピットに届かないようだ。

「織斑君、白式を展開して篠ノ之さんに乗せてあげてください。」

「えっ？あーっはい。」

「な、何！／＼／＼」

山田先生の衝撃？発言にとりあえず従い白式を展開する一夏。
筈の方はかなり動揺しているが。

「そ、それで私をどうするつもりだ。／＼／」

「もちろん運んでもらうんですよ、コックピットまで。」

『えええええええっ！！』

「は、運ぶ……のか／＼／＼……私を／＼／」

山田先生の本日も二度目の衝撃発言によりさらに動揺して恥ずかしがる筈とそれに対してブーイングの悲鳴を上げる女子達。そんな状況でも一夏はしょうがないと言いなながら筈をお姫様抱っこする。

「「ああっ!」」

セシリアと鈴もこれには声を上げた。

筈に関しては今の状況に満足したのか悦な表情をしている。お姫様抱っこに憧れでも持っていたのか？

「ねえねえなぎー。」

「ん?どうした本音・・・ってもしかしてお前もか？」

「うん。届かないからコックピットまで運んで。」

一夏達の様子を見ていたら同じグループに居た本音が声をかけてきた。どうやらこっちも展開したままにしてしまったようだ。

「あのさ、できればおりむー達と同じのでいい?／＼／」

「しょうがないな、それじゃあしっかり？まれよ。」

俺はゼロを展開して一夏達と同じように本音をお姫様抱っこして「
ツクピットに運ぶ。」

いざやってみると恥ずかしいな／＼

それに他の女子達からの視線をすごく感じるし。けど・・・

「
／／／」

楽しそうにしている本音を見たら、こういうのも悪くはないと思っ
た。

そして現在は昼休み、俺達はIS学園の屋上に来ている。

授業が終わった時に一夏から親睦を深めるために一緒に昼食をとら
ないかと誘われたからだ。

俺と明久とシャルルは特に断る理由もなかったのでその提案に乗っ
た。

だが、今それをすごく後悔していた。なぜなら・・・

「・・・どう言う事だ。」

「大勢で食ったほうがうまいだろ。それに綾人達とシャルルは転校

してきたばかりで右も左もわからないだろうし、親睦を深めるのはちょうどいいだろ。」

「そ、それはそうだが・・・」

箒がすごく不機嫌な顔で一夏に問い詰めるが、一夏はそれに気づかずあっけらかんと答える。

もしかしてと思い、こそつと俺は一夏に確認を取ってみる。

「おい一夏、この昼食会はお前の立案じゃないのか？」

「いや箒が授業中に一緒に食べないかって誘われたんだがどうせなら大勢で食べようって事にしたんだ。」

「・・・そのことを箒には言ったのか？」

「いんや。けど、箒も賛成すると思っていたからな。」

こいつやらかしやがった！？箒の精一杯のアプローチぶっ壊しやがったよー！！

だからさつきから箒の機嫌が悪いんだな。

しかも一夏のやつ、セシリアと鈴も誘っていたらしく2人もこの場に居る。

「んんんんんー！！」 (バチバチバチバチ！！)

「え、えーっと、本当に僕達が同席してもよかったのかな・・・」

「僕も明らかに場違いだと思っただけど・・・」

「いやいや、男子同士仲良くしようぜ。いや、筈にはマジ感謝だよ。シャルルにも早く学校に慣れて欲しいし、こういうのは必要だろ。」

3人の女子が弁当片手に火花を散らしているが一夏は全く気づかない。

こいつはどんだけ鈍感なんだよ！いや、鈍感だからこそこの空気の中を平然としているのか。

シャルルと明久もなんとなく気づいてるから居心地悪そうだし。てか正直今すぐこの場から逃げたいんだが。

「(とりあえず3人も、邪魔をする気は無いから頑張っで一夏にアピールしろ。俺達はなるべく空気に徹するよう努力するから。)」

「感謝する！(しますわ！)(するわ！)」

一夏にバレないように3人に俺達は無害に徹する事を伝えると、3人は自分達の作った弁当を一夏にアピールし始めた。その隙に俺は明久とシャルルを連れてこっそりと一夏達から距離を置く。

「やっぱり僕達ってここにいない方が・・・」

「シャルル、もう何も言うな。俺達に出来る事はただ1つ、あの3人の邪魔をしない事だ。」

「そうだね。今は昼休みのはずなのに戦闘中の空気と変わらなくてリラックスできないよ。」

俺達は俺達で昼食を取り始める。

IS学園の食堂では生徒に厨房を貸してくれるので俺と明久は自分で弁当を作って持参してきた。

シャルルと分けながらそれを食している。

「このお弁当2つともすごくおいしいね。これって2人が作ったの？」

「そうだよ。シャルルの口に合ったみたいでよかったよ。けど、まさか僕って料理が出来たんだね。」

「普通にテキパキと動いて作っていたからな、おそらく体が覚えて
いるんだろうな。」

「どづいづいと?」

「それについては一夏達にも話していた方がいいだろ。」

俺は一夏達も集めて明久が記憶喪失だという事を教えた。
事情を知らないシャルルに異世界や特異点の事は隠してな。

「そうだったのか。明久、お前は不安じゃないのか?」

「不安だよ。でも、失くした事は仕方ないし悔やんで戻ってくるわ
けでもないからね。とりあえず今は自然に記憶が戻るのを待つ事に
しているんだ。」

「そつか。お前ってすごいんだな、そんな風に前向きに考えられる
なんて。」

「そ、そつかな?」

「うん。僕も応援するよ、早く記憶が戻るといいね。」

「ありがとう、一夏、シャルル。」

ちなみにこの後シャルルの提案でみんなの弁当を食べあった。箸と鈴の料理はうまくいったがセシリアについてはノーコメントで・・・
女子3人は俺と明久の弁当を食べてかなり落ち込んでいた。

「ところでお前達の中で一番料理がうまいのは誰なんだ？」

一夏が旅のメンバーで誰が料理がうまいのか質問してきた。

「ランキングをつけるなら1位ルシエド、2位明久、3位俺と言ったところか。」

「・・・ちよつと待て、今ルシエドが入ってなかったか？」

「奇遇だね一夏、僕もそう聞こえたよ。綾人・・・冗談だよね。」

「そつえば明久はまだ見たことがなつかたな。言つとくがマジだぞ。」

「・・・何で犬が1番料理うまいんだ。てか、どうやって作ってるんだ？」

「普通に2本足で立って器用に調理していた。初めて見たときはあまりに珍妙な光景に言葉を失った。」

あの光景はある意味ホラーだぞ。

あの手で器用に包丁持って料理するからなあ。あの犬は。てか、どんな骨格してんだよ。

「・・・犬に負けた!!」

そして自分達の料理の腕がまさか犬に負けていたという事実。3人はショックを受けていた。

事情を知らないシャルルはその光景を？を出しながら見ていた。

そこで次の日、また新たな風が1年1組に吹いた。

「え、えーつと・・・今日も嬉しいお知らせがあります。また1人クラスにお友達が増えました。ドイツから来た転校生のラウラ・ボ―デヴィツヒさんです。」

山田先生の言うようにまたしてもこのクラスに転校生がやってきた。

『どっぴりいう事？』

『3日連続で転校生なんて。』

『いくらなんでも変じゃない？』

「み、みなさんお静かに！まだ自己紹介が終わってませんから。」

山田先生が女子達を静ませる。けど、女子達の疑問は当然だがな。シャルルの時は男の転校生という事で嬉しさのあまり連日による転校ラッシュに疑問を持つものがいなかったが、ここにきてまた連続で転校生が入ってきた事でこの奇妙な感じに気づき始めたんだろう。

「挨拶をしるラウラ。」

「はい、教官。……ラウラ・ボーデヴィツヒだ。」

見た目は髪は少しボサついてる感じのロングの銀髪に左目に黒の眼帯。肌は透き通るような白。

制服はスカートを少し改造して裾をロングブーツの中に入れて軍服
みたいな感じになっている。
けど、何で鬼斑先生を教官って呼んでるんだ？

「あ、あのー・・・以上ですか？」

「以上だ。」

何ともまあシンプルな自己紹介だ。

「貴様が」

すると、ラウラは明久の事を睨みつけながら足音を高く鳴らしなが
ら近づき勢いよく右手を振るう。

「じぶあつー!？」

その一撃で明久は意識を失った・・・って、いきなりなんだ!？
他のみんなも今の出来事に驚いている。

「認めない、貴様があの人の弟であるなど……認めるものか。」

一瞬だけ鬼斑先生の方を見て気絶している明久にラウラはそう宣言した。

・・・これってまさか・・・

「おい、ボーデヴィツヒとやら明久に何か恨みでもあるのか？」

「明久？バカを言うな。こいつは織斑一夏、そしてその姉は織斑千冬だろうが。私はこいつを認めん。」

一瞬、場が固まった。やっぱりか・・・

「あの、ボーデヴィツヒさん。」

「騒がせたな。宣戦布告は済ませたのでもういい」

「いえ、そうではなくて……その子は吉井 明久くんですっ！ 織斑一夏くんではありませんっ！」

山田先生の発言でその瞬間、更に場の空気が凍りついた。そしてラウラ・ボーデヴィツヒの頬から一筋の汗が流れる。

「おい、生きてるか明久……ってダメだ、完全に気絶してやがる。どんだけ強力だったんだ今の一撃。ちなみに織斑一夏はあいっ
な。」

俺はそう言つて一夏を指差す。

まさか人違いで気絶させられるとは、どんだけ運が悪いんだ明久よ。

第24話 お姫様抱っこと、またまた転校生の登場（後書き）

今回は区切りをつけるためにここで終わらせました。

綾「だからそこまで進行してないんだな。」

とりあえず原作立ち読みして情報収集する予定だ。

簪と本音がどんな風に互いを呼んでいるのかも確認しないと本編に出せないしね。

明「もう原作買ったら？」

今月はヴァンガードに使いすぎてもう余裕ないんだよね。

綾「どの位使ったんだ？」

とりあえず第3弾のブースター3箱。

綾「けっこう使ったな。」

けど欲しいレアが全然でないときた・・・orz

明「運無いね作者。」

・・・まあ、いつもの事だけだね。

綾「そういえばフラグ関係を少し変えるらしいな。」

そうだよ。実は現時点で明久はシャルルにフラグは立ててないんだ

よね。

だから一夏とフラグメイカー対決でもしようかと。

明「ちなみに勝者はどう決めるの？」

投票か自分の独断で決める。

綾「投票か・・・来るといいな。」

ちなみにお前は勝負に関係なく簪にフラグ立てさせる予定だから。

綾「既に決定事項かよ!？」

第25話 因縁と過去とばれる正体（前書き）

やっと投稿できました！

綾「最近突発の仕事が多かったから殆ど休め無かったらしいな。」

盆休みも見事につぶれたしね・・・チクショー！

明「それで今回もそこまで話は進んでないんだよね。」

書く時間が無い上に何故か細かく書こうとしてしまっただよね。

綾「とりあえず本編をどうぞ。」

第25話 因縁と過去とばれる正体

Side 一夏

ラウラの勘違いによる攻撃で明久が気絶した日の放課後、俺達はいつものようにISの訓練をしている。
ちなみにあの後ラウラは千冬姉に説教されていた。

「こう、ズバツとやってからガキツ、ドカンという感じだ！」

「何となくわかるでしょ感覚よ感覚。はあ！？何でわからないのよバカ！」

「防御の時は右半身を斜め上前方へ5度、回避の時は後方へ20度ですわ！」

3人が教えてくれているが、箒と鈴は主観的且つ抽象的な教え方でセシリアは理論的過ぎる教え方だ。
だから・・・

「率直に言わせてもらおう・・・全然わからん！！！」

「何故わからん！」

「ちゃんと聞きなさいよちゃんと！」

「もう一回説明して差し上げますわ、つまり斜め上……」

「だからわからねえよ！！！」

1度に擬音混じりで不明瞭な教え方と理論的過ぎる教え方されても頭に入るわけないだろ。

今の俺にそこまでの経験値はないってのに……自分で言ってるなんか悲しくなった。

この状況にため息をついているとシャルルが声をかけてきた。

「イチカ、ちょっと相手してくれる。白式と戦ってみたいんだ。」

「わかった。という訳だからまた後でな3人共。」

シャルルの提案に乗っかりこの状況を脱出する。

3人は不機嫌な顔をしていたがわからん教え方をされるよりはマシだ。

「あと・・・あの2人は止めなくていいの？」

そう言つてシャルルは困つた顔をして同じアリーナで訓練をしている綾人と明久の方を見る。

見ないふりをしていた俺達も同じく困つた顔をする。

だつてあいつらのやつている訓練で・・・

「逃げるな明久！逃げずに立ち向かえ！！」

「無茶言つなーーーー！！」

何故かジープに乗つた綾人がISも展開してない明久を追い掛け回していた。

あれつて何の訓練だよ！？他の生徒も若干引いてるしよ！

とりあえず綾人を止めて明久を救出した。

「おい綾人、これつて何の訓練だ！？何でISの訓練なのにジープに追いかけられてんだよ！」

「体力づくりと恐怖心を無くす訓練だ。」

恐怖心無くすどころか植えつけられてないか？

現に明久のやつさつきからぶるぶる震えて泣きながら救出してくれ

たシャルルにしがみついているし。

「あゝりがどおおしやるるううう!!」

「ふえ／＼／あ、あのアキヒサ、もう大丈夫だから。と、とりあえず落ち着いて／＼」

そして明久を落ち着かせて俺とシャルルの模擬戦を開始した。

＼side out＼

＼side 綾人＼

俺が明久にウルトラマンレオのジープ訓練をやっていたが一夏達に止められて渋々やめる事にした。

鬼斑先生からは許可もらったのに。とりあえず今は一夏とシャルルの模擬戦を観戦している。

一夏は果敢に攻めるがシャルルに攻撃は当たらず逆に反撃されている。

「じりゃ一夏の負けだな。」

「どうしてそう思うの綾人？まだ逆転できるかもしれないよ。」

「その可能性は限りなく低いな。現にさっきからシャルルに攻撃がヒットしていないだろ。」

「そう言えば確かに。」

「シャルルは一夏の攻撃パターンを読んだ上で距離をとっての射撃戦闘で確実にSEを削っている。それに一夏は射撃武器の回避がなっていない。急接近して距離を詰めようとしているがすぐに逃げられている。あれじゃ自分から当たりに行っている様なもんだ。」

「そうなんだ。あ、どうやら終わったみたいだね。」

俺が明久に説明していると模擬戦が終わったようだ。結果は俺の予想通りだった。

戦闘を終えて一夏達がこちらに降りてくる。そして今の戦闘の反省会を始めた。

「来るってわかっているのに何で避けられなかったんだろ俺。」

「つまりね、イチカが勝てないのは単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ。」

「うーん、一応わかってるつもりだったんだが。」

「お前、とにかく動いて避けるって考えていなかったか？」

「え、違うのか？」

「違わなくはないがお前の場合は経験が不足しているせいかわ避の仕方と軌道コースが単純なんだ。それ故に先読みしやすいんだ。現にシャルルの撃った弾にガンガン当たっていただろ。」

「なるほど。」

「この白式ってイコライザが無いんだよね？」

「ああ、拡張領域が空いてないらしい。」

「多分だけれど、それってワンオフアビリティーの方に容量を使っているからだよ。」

「ワンオフ？」

「お前、鬼斑先生も言っていただろ。ワンオフアビリティーはISが操縦者と最高状態の相性になった時に自然発生する能力でお前の白式の場合は零落白夜、俺のラファール・ゼロはストライクレーザークローとCAS、明久の打鉄・村雨はエヴォルトがそれに該当する。」

「なるほど。お前達の説明ってわかりやすいな。」

一夏がそう言うと、後ろに隠れている3人娘から非難の音が聞こえてくるが無視だ。

とりあえずシャルルの武器を使って一夏に射撃武器を体験させて経験を積ませる事にした。

一夏をシャルルが後ろから抱きつく感じで支えている光景を見て3人娘が今度は嫉妬の声を上げていた。

「ねえ、ちよつとあれ。」

ふと他の生徒が声が聞こえたのでふと上の方を見たら、ビットの上に黒く重装甲なISを装着したボーデヴィツヒが居た。どうやらあれはドイツの第3世代型ISのようだ。

「織斑一夏。」

「何だよ？」

「貴様も専用機持ちだそうだな。なら話が早い、私と戦え。」

「あ、今度は相手を間違えなかったねボーデヴィツヒさん。」

緊迫した空気なろうとしたが明久の発した一言でその場の空気が凍った。

「・・・織斑一夏の前にまずは貴様の口を黙らせる方が先か。」

「へ？」

そう言つてボーデヴィツヒは肩のキャノンの照準を明久に向けて発射したが、シャルルがすぐにそれに反応してシールドを展開して明久を守る。

飛んできた弾はシールドに弾かれて上空に消えていった。

「シャルル！？」

「いきなり戦いをしかけようとした上にISを展開してない無防備

な人を撃つなんて、ドイツの人は随分沸点が低いんだね！」

怒ったシャルルは両手に武器を展開してボーデヴィツヒに向けて構えた。

「フランスの第2世代型ごときで私の前に立ち塞がるとはな。」

「未だに量産化の目処が立たないドイツの第3世代型よりは動けるだろうからね。」

互いに挑発して一触即発の空気になるが・・・

『その生徒っ！ 一体何をしているのっ！ 名前とクラスを言いなさいっ！』

管制室から監督している先生が放送で注意をした。

「ふん、命拾いしたな」

そう言ってボーデヴィツヒはアリーナをあとにした。
最後に一夏を睨みつけて。

そしてボーデヴィツヒが姿を消すと箒達が一夏に問い詰めた。

あれから訓練を終えて俺達は今更衣室で休んでいる。

明久は訓練でぐったりとしているが、一夏は何かを考えているような表情をしていた。

恐らくボーデヴィツヒの事だろ。

「アキヒサ、大丈夫？」

シャルルが明久を心配してか声をかけていた。

「うん、僕の方は大丈夫。それにさっきは助けてくれてありがとうシャルル。でも、ボーデヴィツヒさんは何で一夏を目の敵にするんだろ？」

「それは・・・」

「何か事情があるんだろ。無理には話さなくてもいいがとばかりを受けた明久にはちゃんと謝っとけよ。」

「そうだな、ごめん明久。」

「別に僕は気にしてないからいいよ。でも、本当ボーデヴィツヒさ

んとの間に何があったの？」

一夏の表情から覗うに心当たりがあるって顔をしている。でも、まだ確信が持っていないから話ずに話せないって状態だな。

「じゃ、じゃあ僕は先に部屋に戻っているね。」

「え、ここでシャワー浴びていかないのか？お前っていつもそうだよな。何で俺達と着替えたりするの嫌がってんだよ。」

確かにシャルルの行動はそんな感じだ。だが、嫌がってるというよりも恥ずかしがっている様に見える。

「べ、別にそんなことないと思うんだけど・・・」

「そんな事あるだろ、一緒に着替えようぜ。」

そんなシャルルの態度に業を煮やしたのか、一夏がシャルルを捕まえた。

一夏はシャルルが困惑しているのに全く気づいていない。しやーない、助け舟を出してやるか。

「まあまあ、そう言ってやるな。シャルルだって悪気があってそういう事してるわけじゃないんだし。」

「そうかも知れないけど、裸の付き合いとか悪くないと思うんだが。」

「それにシャルルがここで着替えている時点で毎回明久の奴が鼻血出してるんだぞ。裸の付き合いなんてしたら血の海で溺死するといふ珍妙な死体が出来上がるぞ。」

「・・・否定できないな。はあ、しょうがないか。」

その光景を何回も見ているので一夏は納得してシャルルを解放した。それから着替えとシャワーを終えた俺達は寮までの帰り道を歩いていると、ある会話が聞こえてきた。

「答えてください教官！何故こんな所で。」

「何度も言わせるな。私には私の役目がある、それだけだ。」

ボーデヴィツヒが鬼斑先生に問い詰めていた。
その会話が気になり俺達は隠れてそれを聞いた。

「くどいぞ、ラウラ。私はドイツに戻るつもりはない」

「そんなにこの学園の生徒が大事だとっ！？ 教官が教えるに値する生徒などどこにも居ないではありませんか！どいつもこいつもISをファクションかなにかと勘違いしている。そんな奴らなど放つて置いて」

「ラウラ、ただか1年や2年会わない間に随分と偉くなったものだな。もう選ばれた人間気取りか。」

「教官・・・違います！ ただ私は教官にふさわしい場所に居て欲しいと」

「くどい。とつとと部屋に戻って予習でもしてろ。」

ポーデヴィツヒはそこで悔しげに項垂れて両拳を握り締めそのまま寮の方向へ走り去っていった。

「さて・・・その男子3人。いつまで隠れてるつもりだ、盗み聞きとは良い趣味だな。」

「千冬姉。」

「学校では織斑先生と呼べ。」

「それじゃあ、鬼斑先生に質問。」

そう言った瞬間に鬼斑先生がどこからともなく竹刀を出し、俺めがけて振り下ろしてきた。

「ちょっと！？いきなりそんな事するから鬼って呼ばれるんですよ！そんなんだから彼氏とかも出来ない……」

「どうやら貴様は死にたいようだな。」

とてつもない覇気を発しながら鬼斑先生が何処からとも無く真剣を取り出して構えた。

もしかして地雷踏んだ……って、そんな事考えてる暇はない！このままでは殺される……！！

「それじゃあ、さよなら先生！」（ダッ……！！）

「待て！逃がすか……！！」（ダッ……！！）

それから捕まったら即死のリアル鬼ごっこをやる羽目になった。
ちくしょう！何で俺だけ。

｝side out｝

｝side 明久｝

綾人が織斑先生の怒りを買って逃走していった。
織斑先生も覇気を発しながら追いかけていった。

「……やっぱり綾人って怖いものしらずだよな。」

「……本人は自覚無いみたいだね。」

そんな会話をしながら僕と一夏はとりあえず寮に帰ってきた。

「そうだ明久、ラウラの事でお前に詫びがしたいから部屋に来てくれないか。」

「え、そんなの悪いよ。それに僕は気にしてないし。」

「俺が気にするんだよ。勘違いとはいえ関係ないお前がとぼっちりを受けたんだ、ちゃんと謝っておきたいしな。」

「そっか、それじゃあその言葉に甘えさせてらうよ。」

僕は一夏の誘いを受けて一夏の部屋にやってきた。

一夏とシャルルはルームメイトだから、同時にシャルルの部屋でもあるね。

「ただいま、シャルル戻っているか？」

「お邪魔します。」

部屋の中にシャルルの姿は無かった。

シャワーの流れる音が聞こえているのでシャワー室にいるんだろう。一夏がベットに座ってくつろごうとした時、何かを思い出したように声を上げた。

「あ、そういえばボディークリーム切れていたな。シャルルに持って行ってやるか。」

そこで僕の意識は途絶えた。

side out

side 一夏

シャワー室が妙に騒がしくなったから気になって様子を見に行った。するとそこには、胸があつて男に付いている物が無いシャルルと血の海で倒れている明久の姿だった。

俺がこの場に介入した事でシャルルが叫んだので血の海に沈んでる明久を回収してシャワー室から出た。

明久も目を覚まして今は何とか落ち着いてシャルルのが出てくるのを待っていた。

「ねえ一夏、この状況って夢なのかな・・・」

「・・・夢であつて欲しかったなホント。」

さすがにあれはいろんな意味で衝撃的すぎて夢であつた方がよかつたよ。

そして、髪を下ろしたシャルルが出てきてベッドの上に座った。

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

「あー、そのー・・・お茶でも飲むか・・・？」

「う、うん。貰おうかな・・・」

この場を何とかするためにとりあえず3人分のお茶を入れる俺。
明久に渡してシャルルに渡そうとしたが、シャルルは手を滑らして
お茶の入った湯飲みを落とした。
落としたそれは俺と近くにいた明久の腕にかかった。

「うぎゃあああ！？熱い！！！」

「う、ごめん！」

俺と明久は急いでかかった箇所を水で冷やしていると心配したシャルルが近づいた。

「大丈夫！？ちょっと見せて！あー、赤くなってる！ホントにごめん2人共！」

シャルルは俺と明久の間から覗き込むようにして見る。
その結果、密着する形になり俺達の腕にやわらかい感触が襲ってきた。

た。

「いやたいした事ない……」

「それより……そのー……当たってるんだけど……」

「へっ……はわぁ／＼／＼!!」

俺達の言っている事に気づいたシャルルは慌てて離れた。

「イチカとアキヒサのえっち／＼／＼」

「何でだよ!?!」

「ブシヤアアア!!」

その一言でまた明久が鼻血を出して倒れた……ってまたかよ!?!?

第25話 因縁と過去とばれる正体（後書き）

今回はここまでで限界がきました。

綾「話は次回に持ち越したな。」

明「僕は鼻血出したただけだよな。」

文量つてどれぐらいがちょうど良いんだろうね？

綾「この小説は行き当たりばったりで書いてるしな、その辺ランダムなんだよな。」

1万文字以上越えてもいいものなら今回の話も長く書けたしね。

明「あんまり長すぎると読む人が困るからね。」

この調子が続くなら福音戦はカットの流れになっちゃうんだよね。その分、トーナメント戦はイレギュラーの介入で盛り上げるけど。

綾「今考えてる構想だとその戦いでCASとエヴォルトをフル活用する予定なんだよな。」

福音戦まで書くならイーガーと疾風はそこで出せるしね。相手が相手だから。

綾「ところでフラグメーカー対決はどうなったんだ？」

本決まりはまだだけど、現在の状況は明久の方に軍配が上がって

るね。

明「それは何で？」

投票があつてね、1人1票の計算でやって数えたら僅かながら明久の方が上なんだよね。

綾「けど、僅差だからまだ一夏になる可能性もあるんだな。」

そうだね。

ちなみに次回はあの子を出す予定だよ。

綾「原作7巻立ち読みして覚えたんだよな。」

断空我様からのアドバイスもあつたしね。

うまく書けるかわからないけど頑張つて書く事にした。

それではまた次回！

第26話 親子とは何ぞや？そして新しい出会い（前書き）

今回は織斑先生にコメントをお願いしました。

問題

以下の問いに答えなさい。

『この世の中で、恐ろしいものに順序をつけて言ったこと』を意味することわざを答えなさい。

ルシエド・シャルル・デュノアの答え

・地震・雷・火事・親父

織斑先生のコメント

正解だ。実は最後の『親父』とは、『お父さん』のことではなく『親父』とは『台風』のおおやましことを表す。

その『台風』のことを『大山風』おおやましと言い、やがて言葉の変化によって『親父』となったそうだ。

昔の父親というやつは厳しく怖かったと言われていたらしくそれも関係しているのかもしれない。

デュノアはフランスからの留学生なのに正解とはな。さすがだ。

篠ノ之 篤・セシリア・オルコット・凰 鈴音

・地震・雷・火事・織斑先生

織斑先生のコメント

お前達3人はグラウンドをIS装着して十週！
もちろんPICや補助動力は入れるな。

「『『そ、そんなー！ー！ー！！！！』』」

織斑 一夏の答え

・千冬姉の学習簿・箒の木刀・セシリアのライフル・鈴の青龍刀

織斑先生のコメント

この答えに関しては全てお前の自業自得だ。

ー「なんでそうなるんだよ！！」

吉井 明久の答え

・地震・雷・火事・鉄人

織斑先生のコメント

・惜しかったが不正解だ。しかし鉄人とは何だ？

明「何でしょうかね？いきなり頭に浮かんだので、

神薙 綾人の答え

・滝の水切り・鉄のブーメラン・ジープ・鬼斑先生

織斑先生のコメント

・なら希望どおりにジープで追いかけてやろう。

綾「最悪な組み合わせが完成した！？」

前回バカテストを載せるのと 龍夜MK2さんの質問に答えるのを忘れてしまって申し訳ありませんでした。

千「これがあの3人のテストでの学力だ。」

綾人

- ・古典 70点
- ・現国 75点
- ・数学 100点
- ・世界史 70点
- ・日本史 80点
- ・物理 100点
- ・科学 100点
- ・英語 90点

明久

- ・古典 6点
- ・現国 50点
- ・数学 40点
- ・世界史 0点
- ・日本史 100点
- ・物理 50点
- ・科学 30点
- ・英語 40点

一夏

- ・古典 50点
- ・現国 50点
- ・数学 60点
- ・世界史 75点
- ・日本史 70点
- ・物理 60点

- ・科学 60点
- ・英語 90点

千「以上だ。神薙は苦手分野はないがほとんどはアニメや漫画、特撮といった物で学んだらしい。」

綾「理数系は中島製作所で研修生やってたから得意だ。英語はドラゴンナイト見るために覚えた。」

千「吉井は日本史以外はほとんどが壊滅的に悪い。世界史は本来80点ぐらいなのに名前をアレクサンドロス大王と書いたから0点だ。」

明「それを言わないでえええ!!！」

千「織斑は基本物を知らないだけで学習能力なら高いが今回はISの訓練ばかりやって勉強を疎かにしたからこの点数だ。織斑と吉井はあとで補習だ。」

明「——いやああああ!!！」

第26話 親子とは何ぞや？そして新しい出会い

あれからまた鼻血を出して気絶した明久を目覚めさせて、とりあえずシャルルから訳を聞く事にした。

「で、何で男のフリなんてしてたんだ？」

「・・・実家からそうしろって言われて。」

「シャルルの実家って？」

「確かデュノア社だったよな。」

「そう、僕の父がその社長。その人からの直接の命令でね。」

「「え？」」

「イチカ、アキヒサ、僕は父の本妻の子じゃないんだ。いわゆる愛人の子供なんだ。」

「「!？」」

「父とはずっと別々に暮らしてただけど、2年前お母さんが亡くなった時に引き取られたんだ。」

それで色々検査を受ける過程でIS適正が高い事が分かって……非公式だけどテストパイロットをやる事になってね。でも父に会ったのはたったの2回だけで話した時間は一時間程度にも満たないんだ。」

「そういうのが世の中にある事はまあまあ知ってる。」

「けど、どうすればいい？」

「ただ、シャルルに辛い話をさせてしまいそうなのが申し訳ない。」

「シャルル、辛いなら話さなくていいんだよ。」

「え？ でも」

「あれだ、シャルルは第3の性別秀吉って事でいいんじゃない。僕はそれで納得する。」

「俺もそれで納得する。秀吉の意味はわからないがな。」

シャルルは呆けた顔をしながら俺達をジッと見て、口元を右手で押さえて笑った。

「ありがとう2人共。でも、やっぱりちゃんと話すよ。ううん、話したい。」

そしてシャルルの話が再開された。

「まず一つは話題作り、さっきも言ったけど僕は非公式なテストパイロットだったからここは誤魔化し方がいくらでも・・・あ、これだけじゃダメだね。そういう状況を作ってデュノア社を持ち上げる必要が出てきたんだ。デュノア社は今深刻な経営危機に陥ってるんだ。」

「えっ！？ でもデュノア社って確か量産型ISのシェアが世界クラスだって前の授業でシャルルが言ってたよね。」

「そうだけど、結局リヴァイブは第2世代型なんだよ。現在ISの研究は第3世代型の開発が主流になっているんだ。例えばオルコックさんやボーデヴィツヒさんがここに転入してきたのもそのテストとデータを取るためだと思う。デュノア社も第3世代型の開発に着手はしてるんだけど中々形にならなくて、このままだと開発許可が剥奪されてしまうんだ。」

「……その話とシャルルがIS学園に男で転入したのどう繋がりがあんの?」

「簡単だよ、注目を浴びるための広告塔。それに、同じ男子なら日本に出現した特異ケースと接触しやすい。その使用機体と本人のデータも取れるかもってね。そう、イチカのデータを盗んでこいって言われているんだよ。僕はあの人にね……」

「それって、つまり一夏と白式のデータを開発の参考にするって事だよ。あれ、でもそれだと僕や綾人もそれに該当するよね。」

「それは2人が世間に知られてないからだよ。僕も教室に入ったときはびつくりしたよ、ターゲットのイチカ以外に男子生徒が2人も居たから。」

「そういえば綾人が千冬姉に何か交渉していたが、世間に知られてないのは多分それが原因だろうな。」

「……ホントの事話したら楽になったよ、聞いてくれてありがとう2人共。それと今まで嘘についてごめん。」

「シャルルはそれでいいの。」

「明久の言うとおりだ、いいのかそれで。いいはずないだろ！」

俺と明久は自然に立ち上がってシャルルに近づいた。

「ア、アキヒサ？それにイチカも。」

「親だからってこんな事する権利なんてない！おかしいよそんなのはっ！」

「親がいなけりゃ子供は生まれぬ。そりゃそうだろうよ。でも、だからって何をしてもいいなんてそんなバカなことが！」

「アキヒサ、イチカ……」

「……俺と千冬姉も両親に捨てられたんだ。いや、俺の事はいい。今さら会いたいなんて思わない。だけど、お前はその後どうするんだ。」

「どうって、女だってバレたから本国に呼び戻されると思う。後の事はわからない、良くて牢屋行きかな。」

「だったらここに居る。」

「えっ？」

「そうだよ、僕達が黙っていれば問題ないよ。それに仮にバレたとしてもシャルルのお父さんや会社は手出しが出来ない筈だよ。確か・・・」

そう言つて明久はIS学園の生徒手帳を取り出しある項目のページを開き読み始めた。

そうか！？その手があつたか。

俺も生徒手帳を取り出して目的の項目のページを開く。

「IS学園特記事項第21条。本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。」

「そして本人の同意がない場合、それらの外敵介入は原則として許されない。つまりこの学園に居れば少なくとも3年間は大丈夫だ。デュノア社が何をしてこようと絶対に守られる。」

「その間に何かいい方法を考えればいいよ。」

呆けたような顔のシャルルを見つつ生徒手帳を閉じて俺達は安心させるように笑う。

「よく覚えてたね。特記事項って55個もあるのに。」

「こう見えても勤勉なんだよ俺は。けど、明久が覚えているのには驚いた。」

「あ、それは僕も思ったよ。」

「ちょっと待って!?!?それどういう意味なの2人共!」

するとシャルルはそこで噴き出すように笑って立ち上がり俺達の方を向いた。

「アキヒサ、イチカ、庇ってくれてありがとう。」

笑って屈託の無い笑顔を俺達に向けた。

その笑顔に俺達はドキツとしたが、別の所に視線がいつてしまう。シャルルが立ち上がった事で胸が見えそうなのだ。

「む、胸。胸が見えそうだって……」

「えっ?……あぁっ!?!?!」

俺達は顔を反らして注意した。明久の奴は鼻から血が出かけてる。シャルルはそれに気づいてジャージの胸元を閉めた。

「そ、そんなに気になる？／／／」

「あ、当たり前だろ！」

「すごく気になる！（そんなことないよ）」

明久、建前と本心が逆になっているぞ。

「・・・ひよっとして見たいの？／／／」

「「なっ!?!」」

「イチカとアキヒサのえっち／／／」

「違っつて！何でそうなるんだ！」

「ブシャアアアア!!」

「そしてお前はまたかよ!!」

「ア、アキヒサ!？」

再び鼻血を出して気絶する明久。

すると部屋のドアがノックされる音が聞こえた。

「一夏さん、いらつしやいますか?夕食をまだ摂られていないようですが、御加減でも悪いんですか?」

この声はセシリアか、けど今のこの状況を見られるわけにはいかない。

今からシャルルが男装する時間なんて無いからこの場を何とかごまかさないと。

とりあえずシャルルと気絶した明久をベットの間に急いで入れる。

「一夏さん、入りますわよ。・・・何をしていますの?」

「いや、シャルルが何だか風邪っぽいって言うから布団をかけてやってたんだ。あはははっ。」

「じほっ、じほっ。」

「そんなんですの？それはお気の毒に。一夏さんをお連れしてもよろしいでしょうか？」

「じほっ、じほっ、どうぞー。」

「偶然わたくしも夕食がまだなんですよ。ご一緒しません事・・・
って何なんですかその膨らみは？」

そう言ってセシリアがシャルルの寝ているベットのある一点を見つめる。

やばい！？ついうっかり明久を同じベットの中に入れてしまった！
このままではまずい！

「そうなのかー、それなら一緒に行くかセシリア。」

「はい！では、参りましょうー！！」

俺の誘いが嬉しかったのかセシリアはものすごい勢いで引っ張り俺達は部屋を後にする。

何とかごまかせたが、俺の方はこの後すぐに箒にも捕まり何故か2人から腕を組まれた状態で食堂に行く羽目になった。

抗議をしようとしたら2人が容赦なくつねってくるし・・・不幸だ
ー！！

side out

side 綾人

鬼斑先生を何とかまいた俺は今、本音に連れられてISS学園のISS
整備室に来ていた。

ちなみに何で本音と一緒になのは、鬼から逃げている途中で偶然出
会い匿ってもらったからだ。

俺は何かお礼がしたいと言ったところ、それなら会ってほしい人が
居ると本音が言ったのだ。

「今から会う人ってどんな人なんだ本音。」

「そうだねー、一言でいうなら暗い子かなー。」

「そうなのか、てかさんな子と俺が会っても大丈夫なのか？」

「だいじょーぶ、なぎーならすぐにかんちゃんと仲良くなれるから
ー。」

「……それよりも……この人は……誰？」

そう言って通称かんちゃんが見て俺を見て本音に訊ねた。

「同じクラスで友達のなぎーだよ。最近転校した来た。」

「……そう……あなたが……。」

何だか睨まれてる感じがするがとりあえず自己紹介しないと。

「神薙 綾人です。呼び方は自由で良いよ。えーっど？」

「……更識……簪……。」

すくシンプルな自己紹介だ。

「とりあえず更識さんでいいかな？」

「なぎー、この学園には更識って人がもう1人いるからかぶっちゃ

「うっ。」

「そうなのか、お姉さんでもいるのか？」

「この学園の生徒会長で学園最強の名も持っているひとだよ。」

「……………」

ふと更識さんを見ると表情が暗くなった。
どつやら姉と何かあったのかもな。

「だったらおじょうさまーて呼べば良いよー。いいですよーおじ
ょうさまー。」

「…………お嬢様は…………やめて…………。」

「うっい！かんちゃん！」

「…………そつちも好きじゃないけど…………。」

「えー？」

このやりとりを見ていた俺は1つ質問する事にした。

「本音と更識さんでどんな関係なんだ？見ていてただの友達って感じがないんだが。」

「さすがなぎー、鋭いねー。実はー・・・」

そして本音から色々聞いた。

何でも本音の家は代々更識家の使用人家系らしく、今の更識家の当主であり生徒会長でもある更識 楯無さんとその妹の更識 簪さんの幼馴染兼使用人らしい。

本音は更識さん（妹）の専属メイドだそうだ。

「それじゃあ、簪さんって呼んでいいかな？」

「・・・好きに・・・すればいい・・・。」

そう言っただけで彼女はスタスタとこの場から去ろうとする。

どうやらかなり内気のような。

すると、何かを落としたのでそれを拾う。これは・・・携帯か。

「おーい、簪さん。携帯落としたよ。」

「!?!」

そう言うと彼女は慌ててこちらに近づき携帯を取るが、勢い余ったのかそれをまた落としてしまう。
落下の衝撃のせいなのか、携帯の画面からある映像が流れてきた。

「天に輝く五つ星！五星戦隊！」

『ダイレンジャー!?!』

簪さんはすぐさま携帯を掴み映像を切った。

恥ずかしかったのか顔に赤みがかかっているが、今の俺が言える事はただ1つ！

「い、今のはダイレンジャー!?!しかも変身せずに名乗ると言う伝説の名乗りシーンではないか!?!」

「そういえばー、なぎーもこれとおなじこと授業でしてたよねー。」

「スーパー戦隊の名乗りやポーズは練習してマスターしてるから何

「頼むから蒸し返さないでくれ本音。あれはさすがに反省しているから。」

「えー、どうしよっかなー？」

「マジで勘弁してください！どうかこの通り！」

土下座して本音に頼む俺。

え、プライドは無いのかって？そんなん知るか。

「……ふふっ……。」

簪さんが俺達のやりとりを見て笑った。
どうやら無表情ってわけではないんだな。

「あー！かんちゃんが今笑ったー。」

「／／／……そんな事ない……。」

「あー、せっかく可愛いかったのにー。」

「そうか・・・お前ってエスパーか何かだろ絶対。」

「エスパーではないが普通の人間とは違うかな。」

魔神と聖剣宿しているからな。

とりあえず事情を聞いたら何でもシャルルが風邪をひいてるの食事を持って行くんだそうだ。

俺も見舞いに行こうかといったら一夏は断った。

けど、こいつは普通に喋っているつもりかもしれないが一瞬言い淀んだのを俺は見逃さなかった。

だからカマをかけてみる事にした。

「そうか、それじゃあシャルルにお大事になって伝えてくれ。あと女の子なんだから健康には気をつけろって。」

「おう。それじゃあ・・・って!?!お前、どうしてその事を!?!」

「静かにしろ、他の生徒に聞かれたらまずい。とりあえずそれに関しては部屋に着いたら話してやる。」

そして部屋に到着して中に入る。

そこには髪を下ろしているシャルルと気絶している明久が同じベッ

トの中にいた。

「……とりあえず避妊対策はしたよな？」

「待つて！？アヤトはすごい誤解をしているから！」

「大丈夫だつて、俺つて口は堅いほうだから。現にお前が男装して
る事だつて黙つていたし。」

「そういう問題じゃなくて……つて、ええ！？」

「そういう事だからお前達に何があつたのかの説明頼むわ。」

それからシャルルを落ち着かせて気絶している明久を物理的に起こして何があつたのかを聞いた。

「それにしても衝撃的な話だな。」

「綾人もやっぱりそう思う。」

「まさか明久が学園特記事項を1つでも覚えてるなんて、明日は

「大災害でも起こるのか？」

「っってお前もかい！？というより2人よりもヒドイんだけど！！！」

そんな感じで俺もシャルルの秘密を知る仲間に加わった。

ちなみに一夏が持ってきた食事はシャルルの分だけで明久の分は忘れていたらしい。

しかし、シャルルが2人で半分個にして食べようと提案した時に明久は涙を流して感謝していた。

カロリーに何か執着でもあるのか？

第26話 親子とは何ぞや？そして新しい出会い（後書き）

これで3人はシャルルの秘密を隠し通さなければならなくなったね。

綾「けどまあ、普通に正体バレル気配無いから特に問題ないと思うがな。」

明「他の生徒達は普通に男の子って思っているからね。」

そして簪を登場させて見ました。

綾「原作7巻立ち読みして内容暗記して書いたんだよな。」

だからうまく書けているのかすごく不安なんだよね。

明「ところでこの子のISって登場させるの？確かこの時期って完成してないし、本人の登場すらないよね。」

簪は出したかったキャラだから思い切って書いてみた。

ISに関しては出す予定はないけど、要望があったらだすよ。綾人がいるからこそ出来る方法だしね。

綾「そういえば福音戦カットするんだよな。」

色々と検討した結果そうする事にした。
そうしないと異世界道中じゃないしね。

第27話

黒い雨と友情？とトーナメント開幕。

(前書き)

沢山の感想ありがとうございます!!

綾「それに応えるためにも早く更新しろよな。」

そうしたいんだけど話の構想に詰まったり、仕事が忙しかったりで
・
・

明「でも更新速度あげないとIS編終わるの冬ぐらいになっちゃう
よ。」

それだけは避けたいけど・・・

綾「どうしたんだ作者？何かまずいのか？」

それは後書きで話すよ、それでは本編をどうぞ。

第27話 黒い雨と友情？とトーナメント開幕。

side ????

夜、1人の生徒がアリーナに佇んでいた。

「教官、あなたの完全無比な強さこそ私の目標であり存在理由。」

その生徒ラウラ・ボーデヴィツヒは身に付けていた眼帯をはずす。
そこから金色の目があらわになる。

「織斑一夏、教官に汚点をあたえた張本人……排除する。どのような手段を使っても。」

彼女は1人誰もいない夜のアリーナで誓う。

「なるほど、あれを利用してこの世界の重要存在と例の謎の集団を始末しろと言うことか。」

その様子を誰にも気づかれない事なく遠くから見つめる人物がいた。

「この世界の技術の解析と複製も終わった、そろそろ仕掛けるとするか。」

そして、その人物の後ろに例のオーロラが発生する。

「クツクツクツ、どんな声で泣き叫ぶのか楽しみだ。」

その人物・・・シュウザーはオーロラの中に入りその姿を消した。

）side out）

）side 箒）

私は学園の屋上で内心頭を抱えていた。というか転げ回りたい。

なぜだ、なぜ私が優勝したら一夏と付き合つという約束が……

「（今月の学年別トーナメントで優勝したら織斑君たちの誰かと付き合えることになってるらしいの。）」

・・・何でこんな話になっているんだ。

落ち着け……落ち着け、篠ノ之箒。一夏と付き合えるのは私だけのはずだ。

と、とにかくだ、私が優勝すれば問題ない。優勝すれば……大丈夫だ。

今回はあの時とは違う、大丈夫……大丈夫なはずだ。

……私は強さを見誤らずに勝つ事が出来るだろうか……いや、勝たなくてはならない。

何より己自信に。

side out

side 明久

「イチカ、アキヒサ、今日も特訓するよね？」

「ああ、トーナメントまで日がないからな。」

「綾人が居ないうちに始めないと、また変な訓練されるのはいやだよ。」

現在は放課後、僕達はいつものようにISの訓練をするためにアリーナに向かっている。

ちなみに綾人は授業が終わってすぐに織斑先生に呼ばれてこの場にはいないから一夏達と一緒に訓練することになる。

綾人がいたらまたジープで追いかけてさうだからこの場にはいないのは正直助かるよ。

それに一夏が言ったようにもうすぐ学年別トーナメントが始まるから気合を入れて特訓しないと。

「第3アリーナで代表候補生3人が模擬戦やってるって！」

「「「えっ!?!」」」

学園の生徒達がそんな会話をしながら走り去っていく。

気になった僕達も急いで第3アリーナに向かった。

途中で篠ノ之さんと合流して慌ててアリーナに来たら、中で吹き飛ばされている鳳さんとオルコットさんの姿が見えた。

「鳳さんとオルコットさんだ!?!」

「相手は……ボーデヴィツヒさん!?!」

「何してんだあいつら……」

そして鳳さんは反撃するために衝撃砲を発射したのに対してボーデ

ヴィツヒさんが右手をかざす。
すると突然ボーデヴィツヒさんの目の前で爆発が起こって衝撃砲は……あれ、命中とかしてない？

「龍砲を止めやがった!？」

「今の何なの!？」

「……A I Cだ。」

「そうか、あれを装備していたから龍砲を避けようとしなかったのか。」

「「A I C?何それ?」「」

シャルルと篠ノ之さんに突然出てきたA I Cについて質問する僕と一夏。

「シユヴァルツエア・レーゲンの第3世代型兵器、アクティブ・イナードナル・キャンセラー。」

「慣性停止能力とでも言っ。」

「……ふーん。」

「わかっているのかお前達は？」

「はっきり言うと難しい事はわからないよ。けど、」

「今見た、それで十分だ。」

戦闘の方は凰さんが必死で衝撃砲を撃つも全てAICで防がれている。

そして、ボーデヴィツヒさんのISからワイヤーブレードが射出された。

凰さんは避けようとするが脚部に絡まれて捕縛されてしまう。

するとオルコットさんがビットで攻撃を仕掛けるけど、またしてもAICで止められる。

でも、どうやらボーデヴィツヒさんの動きを止めるのが狙いらしくライフルを構えていたけどボーデヴィツヒさんはそれを読んでいたらしく肩に搭載されていたレールカノンを発射して攻撃を相殺した。そして、ワイヤーブレードで捕縛していた凰さんをオルコットさんに向けて投げつけて2人を地面に叩きつけた。

「「あつ!?!」」

2人は立ち上がるうとするけどボーデヴィツヒさんが追撃を仕掛けるために急接近してきた。

鳳さんは衝撃砲を撃とうとしたが、レールカノンが衝撃砲を発射する前に龍咆を破壊した。

でもそれと同時にオルコットさんもミサイルを発射して大きな爆発が起こった。

「至近距離でミサイル撃つなんて、セシリアの奴無茶苦茶だな。」

「でもあれならダメージは与えられたんじゃないの？」

僕達がそんな感想をもらしていたら、爆煙の中から無傷のシュヴァルツエア・レーゲンとボーデヴィツヒさんが現われた。

ボーデヴィツヒさんはワイヤーブレードを2人の首に巻きつけて締め上げるだけでなく、そのまま2人をなぶり殺すかのように攻撃を仕掛けていく。

そんな!?!どうして!

「ひどい!?!あれじゃあシールドエネルギーが持たないよ!」

「もしダメージが蓄積しESが強制解除されれば2人の命に関わるぞ!」

「やめるラウラ！やめるー！！」

「もう勝負はついてるのにどうしてそんな事をするんだ！！」

僕と一夏はバリアを叩きながら戦いをやめるようにボーデヴィツヒさんに訴えかける。
でもボーデヴィツヒさんはその戦いにつつすらと笑みを浮かべていた。

「ふざけるな！！」

「うおおおおお！！その手を離せええッ！！」

僕と一夏は村雨と白式を展開しバリアを破壊する。

アリーナの中に入ってボーデヴィツヒさんに攻撃したけどAICで動きを止められてしまう。

そして捕まっていた2人のシールドエネルギーが切れてISが強制解除された。

「感情的で直線的、絵に描いたような愚か者達だな。」

「くっ！！」

「体が……動かない……」

「やはり敵ではないな、この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では有象無象の1つでしかない、消える！」

「やらせないよ！」

僕達に向けてレールカノンを発射しようとしたけど、上空からリヴアイブを展開したシャルルがボーデヴィツヒさんにアサルトライフルを連射した。

「イチカ、アキヒサ、離れて!!！」

「ちっ、ザコが。」

シャルルの攻撃でボーデヴィツヒさんが離れた事で僕達にAICの効果が無くなり動けるようになった。

一夏は倒れた2人を抱えて安全な所まで運ぼうとする。

けれどボーデヴィツヒさんは一夏に向けてレールカノンを発射した。

「!?!？」

けれど一夏はイグニッションブーストでそれを回避する。
そしてその隙に僕はボーデヴィツヒさんに接近しムラサメブレード
で斬りかかる。

「でりゃあああああー!!」

「ちっ、邪魔をするなああああー!!」

けれどブレードが当たる寸前でAICを展開され僕の動きが止めら
れる。

そして至近距離からレールカノンを発射された。

「アキヒサ!？」

再び僕に向けてレールカノンが発射されようとしたが、シャルルの
攻撃でそれは阻止された。

レールカノンの弾が当たる前に何とかギリギリでソードキャノンを
弾に向けて発射した事でダメージを軽減させたけどシールドエネル
ギーがほとんど持っていかれた。

「うっ、くうっ!」

戦況を見ると、シャルルの腕がワイヤーブレードに絡められ動きを拘束されていた。

何とか逃げ出そうとアサルトライフルを撃つけどAICで全ての弾を止められてしまう。

「面白い、世代差と言うやつを見せつけてやるう。」

「!?!?シャルル!?!」

ボーデヴィッツさんは腕から紫色のビームサーベルのような物を展開した。

僕はシャルルを助けるために動くも、この距離じゃ間に合わない。このままじゃシャルルもあの2人の様にされてしまう。

そんなこと……そんなこと……

「させてたまるかああああ!!」

そう叫んだ瞬間、村雨に変化が起こった。

背部のムラサメブレードが無くなり、そこにブースターが搭載され機体色も赤へと変化する。

腰のほうに2つの小太刀が追加され装甲各所にフィンが追加された。ワンオフアビリティ「エヴォルト」が発動して村雨はその姿を疾風に変えた。

僕はブースターを吹かし2つの小太刀を鞘から抜き、シャルルを拘束していたワイヤーブレードを切りすてる。

「何!？」

「一体……何が……」

突然の事でシャルル達が困惑していた。

他から見たら火の玉のような物が高速でワイヤーブレードを切り裂いていったように見えたのだから。

「うおおおおお!!」

ボーデヴィツヒさんに急接近して連続で斬りつける。

AICを展開しようとしても今の僕のスピードについていけず動きを捉えられないため展開できないでいた。

小太刀になった事で攻撃速度は上がったけど威力は激減してしまっ
た。

なら、相手のシールドエネルギーが0になるまで何回も斬ればいい
だけだ!

「こんな……バカな!!」

防戦一方になった事で弱音を漏らしたボーデヴィツヒさん。

これならいけると思った。

けど、突然疾風から元の村雨の姿に戻り動かなくなっていました。

「そんな、どうして!？」

「どうやら今は相当なエネルギーを消費するようだな。」

動きが止まった事でボーデヴィツヒさんが僕の姿を捉えてワイヤーブレードで拘束する。

展開していたブレードで僕に斬りかかろうとしたその時、ISの武器を持った織斑先生がその攻撃を止めた。

「き、教官!？」

「やれやれ、これだからガキの相手は疲れる。」

「織斑先生……」

「模擬戦をやるのは構わん。だが、アリーナのバリアまで破壊する事態にならねば教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか。」

「教官がそうおっしゃるなら。」

ボーデヴィツヒさんはそう言ってISを解除した。

「織斑、吉井、デユノア、お前等もそれでいいな。」

「あ、ああ。」

「えっと……。」

「教師にははいと答える、馬鹿者共。」

「「は、はい!」!」

「僕もそれで構いません。」

「では学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散!」!

その一言でこの場は解散になった。

Side out

明久達から事情を聞いてセシリアと鈴の見舞いに医務室まで来ていた。

鬼斑先生が急に飛び出していった時は何事かと思ったが、まさかそんなことが起こっていたとはな。

「別に助けなくても良かったのに。」

「そのまま続けていれば勝ってましたわ。」

身体中のあちこちに包帯を巻いている2人がそんな事を言った。
うん、説得力0だ。

「無理しちゃって、2人共好きな人にカッコ悪いところ見せたから恥ずかしいんだよね。」

シャルルが2人に飲み物を渡しながらそんな事を言った。
それを聞いた2人は面白いくらいに動揺してそれを否定している。
だから説得力0だって。

「そもそも何だっつてラウラとバトルする事になったんだ？」

一夏の一言で2人は飲んでいる物を同時に吐き出した。

今シャルルの言った内容から察するにポーデヴィツヒが一夏をバカにするような安い挑発をしてきてまんまとそれに引っ掛かってバトルになったんだろう。

一夏は全く気付いてないがな……

すると、地震も起こってないのにいきなり周りが揺れだした。

大量の何かがこっちに近づいてくる音が聞こえ、それらは医務室のドアを突破して中に入ってきた。

『織斑君！！デュノア君！！』

『神薙君！！吉井君！！』

「「な、何なんだ！？」」

「ど、どうしたのみんな？」

『じれっ……』

突如乱入してきた女子生徒達に驚く一夏達、シャルルが事情を聞こうとしたら女子達が一斉に何かの書類を出してきた。

俺達はそのうちの1枚を取り中身の内容をを確認する。

「なになに 学年別トーナメントはより実戦的な模擬戦闘を行うため、ペアでの参加を必須とする。」

「なお、ペアの相手が見つからなかった者は抽選で選ばれた生徒と組む事とする。締め切りは……」

「とにかく！私と組も、織斑君、もしくは神薙君。」

「私と組んでデュノア君か吉井君！」

女子達の勢いに思わずたじろぐ俺達。

「え、えーっと……みんな悪い！俺は綾人と組むから諦めてくれ！」

「ぼ、僕もシャルルと組むつもりだからごめん！」

一夏と明久が突発的にそんな事を言った。

それを聞いた女子達は意外とあっさりこの場から去っていった。

去り際に何か色々と言っていたが……

そして鈴とセシリアが一夏に自分をパートナーにしると詰め寄ったが、山田先生が現われ2人のISのダメージが多いため出場を止め

た。

「あと言つとくが俺と明久はトーナメントに出ない……いや、正確には出られないぞ。」

「「えっ!?!」」

「綾人、それって何で?」

「俺達はここの上層部と鬼斑先生達に頼んでその存在を世界に知られないようにしている。それなのに世界各国の御偉い方が来るこのトーナメントに出場なんかしてみろ、ISを動かせる新たな男達って事で厄介ことになるのは目に見えている。」

「もしかして、千冬姉に呼び出されたのってその事だったのか?」

「そゆこと、だから一夏とシャルルで組んでくれ。」

と言う事で一夏とシャルルがペアになったが、シャルルが少し残念がっていた。

そして、その話を聞いたセシリアと鈴は何かを考え互いに目配せをして一夏とシャルルを応援した。

「いいあんた達、絶対に優勝すんのよ！」

「わたくし達の分まで頑張ってくださいな、心から応援いたしますわ！」

「お、おう、任せとけ。」

「ありがとう。2人の気持ちに応えられる様に頑張るよ。」

「ふふっ、美しい友情ですね。」

「そうですね、山田先生が言うように美しい友情ですね。」

……その裏に様々な思惑がなければ。

それから数日後、学年別トーナメントが開催された。

来賓の御偉い方達に姿を見られないように俺達は鬼斑先生達と共に管制室にいる。

「それにしても1回戦目からいきなりだな。」

「そうだね。まさか一夏とシャルルのチームとボーデヴィッツとさん

と篠ノ之さんのチームが戦うなんてね。」

そう、一夏とシャルルのトーナメント第1回戦の相手はボーデヴィ
ツヒと筈の抽選チームだった。

第27話 黒い雨と友情？とトーナメント開幕。 (後書き)

トーナメント開幕です。

綾「それにしても打鉄・疾風が出てきたな。何でだ？」

とりあえず予行練習みたいな感じで書いた。

明「そういえば何か報告があるんだよね。」

そうそう、前回福音戦カッって言ったけど福音戦まで書く事にしたの。

綾「急な心変わりだな、何かあったのか？」

5巻のDVD手に入ったのとトーナメントの戦いだけじゃイレギュラーどころかゼロと村雨の全形態出すのは無理だと思って。それと福音戦でのネタが思いついたから。

綾「なるほど。これでIS編だけで20話いくな。」

なるべく巻きで書けるようには努力するよ、次の世界の候補もあるし。

明「どんなの？」

こんなの。

・スーパー戦隊のどれか

- ・平成仮面ライダーのどれか
- ・ゴット・イーター
- ・遊戯王

つてな感じ。

綾「個人的にはスーパー戦隊か仮面ライダーだな。」

まあ、オリジナル挟んでメンバーが増えてからだけどね。

第28話 暴走する憧れ 現われる暴竜（前書き）

今回の話でイレギュラー登場です。

綾「やっぱりイレギュラーもゾイド系なのか？」

それは見てからの楽しみという事で、それでは本編スタートです。

第28話 暴走する憧れ 現われる暴竜

Side 一夏

今俺達の目の前にはラウラと篝の抽選組みタッグが立ちはだかつている。

「1戦目で当たるとはな、待つ手間が省けたと言っものだ。」

「そりゃあ何よりだ。こっちも同じ気持ちだぜ。」

お互いに軽く挑発する。

そしてアリーナの上空に四角く青い半透明のカウンターが表れカウントダウンが始まる。

5.....4.....3.....1.....0

「叩きのめすー!」「」

カウントが0になった瞬間、俺は雪片式型を展開して最大速度でラウラに衝突を叩き込む為に突っ込む。

距離は一気に埋まるが俺はラウラの前で停止した。

ラウラが展開したAICにより動きを止められてしまったのだ。

「開幕直後の先制攻撃か、分かりやすいな。」

「そりゃどうも、以心伝心伝心で何よりだ。」

こうしてトーナメント第1回戦の火蓋は切って落とされた。

＼side out＼

＼side 綾人＼

試合開始早々に一夏がボーデヴィツヒに速攻を仕掛けたがその一撃は止められた。

「何だあれ、ボーデヴィツヒのISにはプロテクトシールドでも付いてんのか？」

「AICって言うらしいよ。詳しい事はわからないけど。」

「心配すんな、お前に説明を求めようとは思っていないから安心しろ。」

「綾人はホント僕に対して容赦ないよね！」

「事実だから仕方ないだろ。と言う訳で鬼斑先生、A I Cって何ですか？」

「織斑先生と言え、A I Cと言うのは……」

鬼斑先生からA I Cの説明を聞いて理解した俺は再びモニターに目をやる。

動きを止められた一夏の背後からシャルルがライフルを構えて現われ射撃を行う。

ボーデヴィツヒが回避行動に移った事で一夏に向けて発射したレールカノンの軌道が逸れて外れる。

シャルルは瞬時に左手に新たに射撃武器を展開して連射を始めた。

「シャルルの奴、武器の切り替えがかなり早いな。あれが噂のラピッド・スイッチか。」

「ラピッド・スイッチって？」

「ラピッド・スイッチとは大容量の拡張領域を活用して事前に武装の呼び出しをせずに戦闘と同時進行で武装を呼び出す技法の1つだ。それを平然とやるあたりデュノアはあれが得意技のようだな。」

弾丸の雨がボーデヴィヒを襲うが、打鉄装備の箒がフォローに回りシャルルを攻撃して射撃を止めた。

すぐさまシャルルに追撃をかけるが、今度は一夏がフォローに回りその一撃を止める。

後退したシャルルは動きの止まった箒に向かって両手の武器で狙い撃つが、そこにボーデヴィヒが箒にワイヤーブレードを絡めてそのまま上空に投げ飛ばした。

投げ飛ばされた箒は弾には当たらなかったがそのまま地面に落とされ引きずられた。

「ボーデヴィヒさんの今の動きって篠ノ之さんを助けたわけじゃないみたいだね。」

「ただ邪魔だった、それだけだろうな。」

ボーデヴィヒは両腕のプラズマブレードで一夏と斬り合いながら後方にいるシャルルに向かってワイヤーブレードで攻撃するという器用な戦いをしている。

起き上がった箒が援護に向かおうとするがそれをシャルルが阻止する。

「先に篠ノ之さんを倒す作戦でしょうか？」

「賢明だな。ラウラは自分側が複数の状態での戦いを想定していない、パートナー等とは最初から数に入れていない。」

「それでも勝てるって本人は思ってるんでしょうね。それって負けフラグ立てるようなもんなのに。」

「そうだよな。いくら強さに自信があっても1人の力じゃ限界があるもん。」

「それに比べて織斑君とデュノア君の連携はすばらしいの一言ですね。」

「このくらいは出来て当然だ。」

山田先生が一夏達のコンビネーションを高評価したのに対して鬼斑先生は辛口の評価だ。

戦闘の方はシャルルが箒を撃墜して一夏の援護を開始した。そして一夏はその機体に黄金色の光を纏う。

「零落白夜を発動させたか。一夏の奴、これで決めるつもりか。」

「でも、ボーデヴィツヒさんにはAICがあるから難しいと思うよ。」

「

「だろうな。けど、どんな武器にも欠点や弱点ってのはあるんだぜ。」

「それって？」

「A I Cが発動した時とその後のボーデヴィツヒの行動を見ていればわかる。」

シャルルがハンドガンを連射しながら接近するがそれをA I Cで止める。

だが、その後方から一夏が接近して雪平を振う。

それに気付いたボーデヴィツヒはA I Cの発動をキャンセルして後方に大きく回避する。

「もしかしてA I Cって複数の敵には対処できない？」

「明久も気付いたか。本当にA I Cが万能で無敵ならわざわざ回避行動をとる必要はない。なのにボーデヴィツヒはさっきからそれを行っている。どうやら今の一夏も気付いたようだな。」

戦闘はA I Cで動きを止められた一夏の後方からシャルルがラビッツスイッチによる連射でボーデヴィツヒを攻撃してレールカノン

破壊した。

「停止させる対象物に意識を集中させていないと効果を維持できない。それがA I Cの致命的な弱点だ。」

1対1なら圧倒的に有利だがこれはタッグ戦だ。
戦う相手は1人じゃないからA I Cはその機能を活用するには難しい。

「けど、それなら何で鳳さんとオルコットさんはあんなにボロボロだったの？」

「挑発にのって頭に血が上っていたのとA I Cの機能に驚きすぎて冷静さが欠けていたんだろ。もし冷静に分析していたら弱点に気付いて逆に2人がボーデヴィツヒをボコっていただろ。」

現に今ボーデヴィツヒは一夏達に負けそうだしな。

シャルルがイグニッションブーストで急接近して攻撃を仕掛ける。
シャルルの奴、この戦闘中にイグニッションブーストを覚えたようだな。

そして左腕の装甲がパージされてそこからパイルバンカーが現われる。

「今度はリボルビングステーキみたいなやつが出てきたな。I Sっ

てスーパーロボット意識してんのか？」

シャルルはボーデヴィツヒの懐に入り込みその杭をヤツの腹に突きつけトリガーを引いた。

打ち抜かれたボーデヴィツヒはアリーナの壁まで吹き飛ばされた。

そして再び急接近して某アルトアイゼンの如く連続で杭を打ち込んだいった。

＼side out＼

＼side ラウラ＼

私は軍による遺伝子操作によって生み出され戦うための兵器として育て上げられ最強となった。

あの日、ISというオーバースペックな兵器が生まれるまでは。

そして私にも適合性向上のために肉眼へのナノマシンの移植手術が施された。

しかし、私の体は適合しきれずその結果・・・出来損ないの烙印を押しされた。

だがそんな時、どん底だった私はIS教官として軍に出向してきた一人の女性と出会った。

彼女は究めて有能な教官だった、私はIS専門となった部隊の中で再び最強の座に君臨した。

本当に……本当に嬉しかった。そして私は私を見下した奴らを踏みつけた。

side out

side シャルル

最後の一撃を打ち込もうとした時、突如ボーデヴィツヒさんのISが気味悪く液化化して青い火花を走らせる。

黒い液体は彼女を飲み込み、一気に2メートルほどの大きさに膨張しながら火花をまき散らし変形を始めた。

そしてそれは、さほど経たずにある一つの形状を取った。

その姿は全身黒いISをまとった女性の彫像でデザイン的には打鉄に近い形になっている。

右手には白式の雪片式型に似た形状の剣を持っていた。

「な、何これ!？」

避難勧告と非常事態を知らせるアラームの音が周囲に響き渡る中、その影は僕に向かって踏み込んだ。

振るわれた左薙の斬撃をシールドで防御しつつ後ろに大きく下がると、黒い刃はシールドを両断した。

両断されたシールドが地面に落ちる音が響く前に猛烈に嫌な予感を感じて右に大きく跳ぶ。

次の瞬間、鋭く返され打ち込まれた袈裟の刃が僕のそれまで居た空間を斬り裂きながら地面を捉え砕いた。

「な・・・!!」

僕はそのまま地面を滑りながら衝撃によって大きな土煙があがるのを見ていた。

「俺がやる!！」

「え？」

後ろにいたイチカはそう言って雪平を構えて接近するけど、黒いISの方が先に接近して斬りかかる。イチカはその一撃を雪平で受けるけど、そのまま弾き飛ばされて倒れてしまう。

「イチカ！」

「はっ!？」

黒いISがそのままイチカを両断しようとした瞬間、赤い火の玉のような物が黒いISに向かって飛んでいった。

「何とか間に合った!！」

あの時僕を助けてくれた時と同じ姿のISを装着した明久が2本の刀でその一撃を止めていた。

そしてその後方から白いISを装着したアヤトが現われて腕のクロ―で黒いISを攻撃した。

その一撃は防がれたけどイチカを連れて距離をとるには十分な時間が出てきたので、僕はイチカを引っ張って距離をとった。

アヤト達もすぐにあのISから離れて僕達と合流した。

イチカは僕を振り払ってまたあのISに突っ込もうとしたけどアヤト達に止められる。

「一夏、何があったかは知らんがとりあえず落ち着け。」

「そつだよ、不用意に突っ込んだら危ないよ。」

2人の言葉で冷静さを取り戻したのか、イチカは徐々に落ち着いてきて頂垂れた。

「アイツ、千冬姉と同じ技使ってたっ！てーかアレ、千冬姉の現役の時の姿そのままなんだっ！」

「「「はあっ!?!」「」」

僕達は驚きながらも改めてISを見してみる。

「あぁっ！そう言えば資料で見た織斑先生と格好が同じっ！あれっ
て先生が乗ってた暮桜だよねっ！」

「確か鬼斑先生が第1回モンド・グロツソという世界大会で勝ち抜
いた第1世代型のISだよな。教科書にも載っていた。」

「ああそうだ。だからアイツは俺が！」

「待て、見たところアレはこちらへの攻撃行動に反応してカウンタ
ーするタイプっぽい、現に今俺達に対して攻撃を仕掛ける素振りが
ない。まずは落ち着け。」

確かにアヤトの言つとおりアレは僕達に対して追撃をしてくてこな
い。
さっきの僕に対しての攻撃は恐らく最後の1撃を打ち込もうとした
時のアレに反応したんだと思う。

「だが。」

「だからダメだよ。それに忘れたの？ あの中にはボーデヴィツヒ
さんが取り込まれているんだよ。」

「いや、忘れてない。分かってるさ、冷静にはなる。だから俺にやらせて……いいや違うか、これは俺がやりたい事だ！」

イチカの意味は変わらないようだ。

それを聞いていた僕達は両手でお手上げポーズを取って下がる。

「分かった。けど、言い切ったからには勝てよ。」

「分かってる。負けたら男じゃねえよ。」

「それじゃあ、負けたら明日から女子の制服で通ってね。」

「うっ、い、いいぜ。」

僕が負けた時の罰ゲームを提示したらイチカは顔をしかめたけど、すぐに表情を引き締めた。

アヤト達は「負けられなくなったなっ」って言っているけど、どうせなら……

「ちなみに行かせたアヤト達も連帯責任と言っ事で罰ゲームだから

」

「「な、何だつてええええつ!!」」

案の定、アヤト達はすごくいいリアクションをとった。

「一夏、お前絶対負けんなよ!! 負けたらジープでひき殺すからな!!」

「ホント絶対勝つてよ!! 別の世界でまた女装なんて絶対に嫌だ!!」

アヤト達は必死になって一夏に脅迫と応援をしていた。

けど、アキヒサが言っていて別の世界ってなんだろう？

そして、イチカが黒いISに向かって構えようとした時、突然黒いISの後ろにオーロラのような物が出てきた。

オーロラはすぐに消えたけど、その場に何かが見われた。

「何なの今のオーロラ？ それにあれはIS？」

「ちっ、このタイミングでかよ!!」

「もしかして、あれがお前達の言っていたイレギュラーってヤツなのか？」

「多分、そうだと思う。」

アヤト達が何か言っているけど、僕はオーロラから出てきたISを見る。

全身装甲で色は白く背部に巨大なドリルのような爪を二基搭載したブースターパックを装備している。

そして人型ではなく恐竜のような形に近く尻尾のような部分もあり、その複数のバーニアが装備されていた。

「あれは一体……」

「一夏とシャルルはあの黒いISを頼む。俺と明久がああのがフューラもどきと戦う。行くぞ明久！」

「了解！」

そう言って2人は謎のISに向かって飛び出した。

side out

第28話 暴走する憧れ 現われる暴竜（後書き）

―夏達の戦闘は原作とは多少違った形になりました。

綾「確か原作だと零落白夜を使いすぎて途中でエネルギー切れを起こすんだよな。」

原作といってもアニメしか見てないけどね。

明「それにあの偽ISの攻撃で白式が解除されちゃうけど、僕が助けた事でそれが無くなっているね。」

そしてイレギュラーの方はバーサークフューラーをモデルにしたよ。

綾「こつちがライガーゼロモデルだしな。そして次回でラウラ編は終わるんだろ。」

―応その予定。

そして番外編挟んで福音編に入るよ。

綾「確かアニメとかかなり違くなるかも知れないんだろ？」

そうじゃないと差異が出せないからね。

第29話 新しい自分を始めるために(前書き)

みなさん沢山の感想ありがとうございます!!

綾「今回でラウラ編も終わりだな。」

そうだね。

でも、内容を一気に詰めたからいつもよりも分量が多いんだよね。

それに、本来ならもう少し早く更新できたんだけどある事が起きて・

・

明「ある事?それって?」

それは後書きで話すよ。

それでは本編スタートです!!

第29話 新しい自分を始めるために

Side 一夏

「イチカ、今のうちにボーデヴィツヒさんを」

「ああ、分かっている。」

綾人達が謎のISを相手にしているうちに、俺は呼吸を整えながら今までじつとしていた千冬姉の偽者に向き直る。

改めて目の前のアレに意識を集中させて雪片式型を展開状態に移行する。

「一夏。」

後ろから声があったので振り向くと、打鉄を解除した筈がいた。

「死ぬな、絶対に死ぬな！」

「俺を信じろ筈。ただ、信じて待っていてくれ。必ず勝つ。」

零落白夜を稼働させて再び金色の光に身を包みながら一気に踏み込む。

千冬姉は小さい俺に真剣を持たせた上でこの技を見せてくれて『重いだろっ』と優しい顔で言った。

俺が持っている剣の重さは人を傷つけ命を奪う武器の重さ。

あの時感じた重さを雪片式型に乗せていく。

刀は振るうもの、振るわれるようでは剣術とは言わない。

だから俺はこの力を・・・振るう。

「いくぜ、偽者野郎!!」

俺はその先へと足を進める。

偽物も俺へと踏み込み刃を右に振りかぶるが、俺も同じように動き雪片式型を鋭く打ち込む。

刃と刃の衝突とそれに伴って衝撃で偽物はそのデカイ刃を右に弾かれ体勢を崩して上半身を大きく前に逸らす。

そこを狙って俺は更に踏み込み、二撃目を放つ。

「はあああああああああああああああああつ!!」

偽物の胴体に打ち込んだ斬撃がその黒いボディに刻み込まれた。

そしてその身体に火花が走り、俺がつけた傷が大きく開いてそこからラウラが前のめりになりながら出てきた。

その時ラウラの左目の眼帯が外れてやや開かれた瞳から……オッドアイ?

また液状化したかのように崩れゆく偽物から解放されたラウラをゆ

つくりと受け止める。

「箒、ラウラを頼む。俺は今から綾人達の手伝いに行く。」

「だったらリヴァイブの残りエネルギーを持って行って。悔しいけど消耗した今の状態じゃアキヒサ達の力になれない。だから、全部イチカに託すよ。」

「サンキューシャルル助かる。偽者のおかげでエネルギーがほとんど残っていなかったからな。」

すると大きな爆発が起こった。

音の発信源の方を見ると、そこにはシエルターを破壊されて剥き出しになった観客席の姿だった。

ラウラを箒に任せて俺達はすぐに白式へのエネルギー供給を始めた。

＼side out＼

＼side 綾人＼

俺と明久は現われたイレギュラーに向かって突っ込む。

まずは明久が疾風のスピードを生かして先制の一撃を当てようとしたが、イレギュラーは背部のバスタークローを前面に展開しその1

つで明久の一撃を簡単に止めた。
そしてもう片方のクローで明久を狙おうとするが、明久の背後から俺が飛び出し展開したストライククローで胴体に斬り込んだが、ヤツは当たる直前に後退したので攻撃は掠る結果に終わった。

「まだまだ!!」

疾風から村雨に戻った明久がムラサメブレードを構えてすぐに追撃を行い斬りかかるが、ヤツはEシールドの様なものを発生させてそれを防ぐ。

「それぐらいあると思っただぜ!!」

Eシールドの展開を予想していた俺はストライクレーザークローを発動させて突っ込む。

明久はその場からすぐに下がり、そこに俺が渾身の一撃を叩き込む。

「ストライクレーザークロー!!」

光を纏った爪はEシールドを切り裂くが、ヤツは2つのバスタークローをドリル状にして回転させながらその一撃を止めた。

俺は押し返そうとしたが、ヤツのパワーの方が上でそのまま弾き飛ばされてしまう。

「綾人!？」

「大丈夫だ。けど、まさかストライクレーザークローが効かないとはな・・・」

どうしたもんかと考えていると、イレギュラーが口の中から砲身が出現する。

そして砲身の先にエネルギーが溜まっていく。

背部の2基のバスタークローにも同様にエネルギーが溜まっていく。

「まさか!？全力で止めるぞ明久!!」

「わかつてる!!」

ヤツが今からやる行動に気付いた俺と明久はそれを阻止するために突っ込むが、ヤツのほうが早く3つの集束されたエネルギー・・・荷電粒子砲が発射された。

「!!!???」

俺達は3つの荷電粒子を辛うじて避けるが、俺達の背後にあった観客席に直撃した。

バリアーは荷電粒子に耐えられず破壊されシエルターにまで貫通しそれをも破壊した。

荷電粒子は消えたが直撃した観客席が丸見えになった。

『な、何あれ！？』

そこにはまだ非難できてない生徒達がいて突然シエルターが破壊された事で混乱していた。

「綾人、まだ非難してない生徒が！」

「わかってる！けど、今の俺達に非難誘導をする余裕はない。」

どうしたものかと生徒達の方を見ると、そこにはセシリアと鈴がいた。

「セシリアに鈴！みんなの避難誘導を頼む！」

「ち、ちょっと！何なのよ今は！？それにあのISは……」

「説明は後だ！とりあえず今は非難を……」

「わかりましたわ！みなさんこちらに！！」

「ちゃんと後で絶対説明しなさいよ！！」

2人はすぐに生徒達の非難を始めてくれた。
イレギュラーが再び荷電粒子砲の発射態勢をとろつとするが俺と明久がそれを許さない。

「お前の相手は！」

「僕達だ！！」

ヤツの左右から同時に仕掛けていく。
イレギュラーは荷電粒子砲の発射体勢をやめて俺達の迎撃を優先させた。
ブレードとクローでの鏖迫り合いをしながら俺はある事を実行するために明久に指示を出す。

「明久、少しでいいから時間を稼げるか？」

「何とかやってみるよ！！」

俺は一旦後退して距離をとりもう一つのワンオフアビリティを起動させる。

「ラファール・ゼロ、コマンドインストール　　シュナイダー。」

その言葉と共にゼロの装甲とイオンブースターがパージされ中のメカが剥き出しの状態になる。

そして新たに各所にスラスタを付けたオレンジ色の装甲にブレドが付いた7基の翼と先程よりも少し大きめのイオンブースターが出現し、それらはパージされた箇所に着着されていく。
そしてすべての工程が終わり準備が完了する。

「おーい、なぎー！ー！ー！」

攻撃されたシエルターから声がしてきたので見るとそこには本音と簪さんがいた。

2人もあそこの近くにいたのか。

「負けちゃダメだよー！ー！ー！」

「・・・負けないでー！ー！」

本音は手を振りながら応援し、普段は大声なんて上げない簪さんが力いっぱい大きな声で応援してくれた。2人に向かつてサムズアップをしたら、2人は満足したような顔をして非難した。

俺はイレギュラーの方に向き構える。

「GO！シュナイダー！！」

全てのブースターとスラスターを解放してイレギュラー目掛けて突き進む。

翼の役目もしている7本のレーザーブレードの内の2本を両手に持ってイレギュラーに突っ込む。

ヤツと斬りあいをしていた明久は俺の存在に気付いてヤツから距離をとる。

そこに俺が突撃して右手のレーザーブレードを振るい斬りつける。

ヤツはバスタークローを回転させての突き攻撃をしてくるが、それをかわして左手のブレードで追の斬撃を当てる。

そして翼のブレードを展開してすれ違い様に斬りつける。

「綾人、それってシュナイダーかな？」

「使うのは今が初めてだが、この状況だとこれが最善だと思ってな。」

俺と明久は2人がかりでイレギュラーに近接戦仕掛ける。

最初は何発か当たってはいたが次第にヤツの動きが洗練されたものになっていき徐々にこっちが追い詰められていく。不利と感じた俺達はヤツから離脱して、急いで策を練ろうとする。

「まさか、TVみたいに学習機能があるのかアイツ？」

「そうかも。けど、どうするの？このままじゃジリ貧だよ。」

「1つだけ試したい手がある。」

「その手、俺も混ぜるぜ。」

すると、一夏が飛んできて俺達に合流した。ふとアリーナの方を見たら、ボーデヴィツヒを介抱している箒とシヤルルの姿があった。どうやら勝ったみたいだな。

「内容はシンプルだ。お前達2人がアイツの防御を崩す。そこに俺が強烈な一撃をかます。以上。」

「ホントにシンプルだね。」

「でも、わかりやすく助かる。」

「それじゃあいくぜ！2人共！！」

俺達はイレギュラーに向かって突撃するように飛び立つ。

イレギュラーは俺達を葬るためか、荷電粒子砲の発射態勢に入る。

「最初は俺から！」

一夏は零落白夜を発動してその体に金色の光を纏わせて展開した雪平をヤツ目掛けて振るう。

イレギュラーはEシールドを展開するが、エネルギーを対消滅させる零落白夜の前でそれは防御にはならずとも簡単に斬り裂かれて、その一撃はヤツのバスタークロー1基を叩き斬り爆発させた。

「次は僕！」

一夏の攻撃で体勢を崩したイレギュラーにムラサメブレードを構えた明久が迫る。

残ったバスタークローで迎撃を図るが、明久はそれを滑るように受け流して背部のバスタークローの付け根を狙いムラサメブレードを振るう。

零落白夜によってEシールドは消滅しているためその一撃を防ぐ術はなく、付け根から斬られたバスタークローは宙を舞って地上に落

ちた。

「最後は俺だ!!」

俺はシュナイダー専用のワンオフアビリティーを発動させる。翼の5本のレーザーブレードは前面に展開され集束した形になり、スピードを最高速度まで上げ突撃体制に移る。

「バスタースラッシュユ!!」

俺は弾丸の様にヤツに向かって突貫した。Eシールドとバスタークローを破壊され体勢を崩したイレギュラーには回避も防御も不可能でありその一撃をまともにくらい外壁まで吹き飛ばされて爆発が起こり爆煙が舞う。

「はあ、はあ、あゝしんどかった。」

「さすがにこれで終わりだよな?」

「そうじゃないと困る。もう、戦闘できるほどエネルギーが残っていない。」

「こつちもだ。零落白夜の発動どころか動く事すら出来そうにもないぞ。」

ヤツが吹き飛んだ場所を警戒しながらそんな会話をしていると、煙が晴れ始めた。

すると、そこにはボロボロだ動いているイレギュラーがいた。

「うそ！？今の一撃をまともにくらったのに!？」

「おいおい、まさかの第2ラウンド開始かよ。」

そうならISを解除して変身して戦うしかないな。

そう思っていると、イレギュラーの背後に再びあの謎のオーロラが発生した。

オーロラはイレギュラーを飲み込むように包んですぐに消滅した。そこにイレギュラーの姿はなかった。

「消えた・・・？」

「でも今のオーロラ、あのイレギュラーを逃がすみたいに発生したようにも見えた。」

「一体、何がどうなっているんだ？」

「一夏、無事か!？」

「アキヒサ、大丈夫!？」

今起こった出来事について話していると、ボーデヴィツヒをおんぶした箒とシャルルがこちらに向かって走ってきた。箒が一夏に、シャルルが明久に心配の言葉をかけたけど俺には何もなかった。な、泣いてなんかいないぞ……グスン。

「それにしてもあのISは一体なんだっただけ？」

「どこかの国が開発したものとじゃないと思う。うっん、あんなすごい性能を持ったISを作る技術を持った国なんてどこにもないよ。」

「遅れてすまない。どうやら全員無事のようにだな。」

ルシエドが走ってきて俺達に合流した。

「遅いぞルシエド。こっちはかなり大変だったんだぞ。」

「すまない、非難でどのルートも生徒達で塞がれていてそれを抜けるのに時間をくってしまった。それと生徒達や来賓に怪我はない様だ。」

「そうなの？良かった。」

「それよりも何があったのだ？」

ルシエドにさっきまで起こった出来事を話した。

「そうか、どうやら今回のイレギュラーの背後には何かがあるかもしれないな。オーロラの発生のタイミングがいくらなんでも出来すぎている。」

「オーロラは破滅の予兆、そしてその破滅を引き起こすのがイレギュラー。そしてそれらを操っている黒幕がいるって事か？」

「そう考えるのが妥当だろう。今この世界の意思と対話してみたが、苦しんでいる様子からどうやらイレギュラーはまだこの世界にいると思われる。」

「だとしてもしばらくは大丈夫だろ。かなりのダメーヅくらって虫の息だったから回復の為にそれなりの時間がかかるだろう。」

「と言う事は、まだ僕達のIS学園での学生生活は続くってことだね。」

「そいつは助かる。お前達がいなくなったらまた男子が俺だけになっちゃう、あの中に男1人は生きた心地がしないからな。」

「?何を言っている一夏、男子ならデュノアがいる・・・どうしたんだデュノア?」

シャルルを見た筈の言葉に俺達もシャルルの方を見ると、ルシエドを指差しながらプルプル震えているシャルルがいた。

「い、」

「くくくくい?」「くくく」

「犬が喋ってるううううっ!!」

そして大絶叫するシャルル、そういえばシャルルには俺と明久の正

体を隠しているからイレギュラーや異世界の事については何も話していなかったな。

＼side out＼

＼side ラウラ＼

「お前はなぜ強くあるうとする。どうして・・・強い。」

誰もいないこの真つ暗なこの空間で私はそんな事を言った。
そしたら返事が返ってきた。

「強くなんてねえよ。俺は・・・全く強くない。もし、俺が強いって言うなら、それは・・・強くなりたいから強いのだ。・・・強くなったらやってみたい事があるんだよ。」

やってみたい事・・・

「（誰かを守ってみたい、自分の全てを使ってただ誰かの為に戦ってみたい。）」

「（それはまるで、あの人のようだ。）」

私の目標であり存在理由であるあの人のようだ。

「（そうだな。だから、お前も守ってやるよラウラ・ボーデヴィック。）」

「……ん……わ、わたしは……何が……起きたのですか……」

目が覚めるとそこは医務室で、既に夕方で陽が落ちようとしているような時刻だった。

ベッドに寝ていた私の傍らには教官がついてくれていて、まず私は何が起こったかを教官に聞いた。

「一応重要案件である上に機密事項なのだが……VTシステムは知っているな。」

「ヴァルキリートレースシステムですか？」

「そう、IS条約でその研究はおろか開発・使用すべてが禁じられている。それがお前のISに積まれていた。精神状態、蓄積ダメージ、そして何より操縦者の意思、いや願望か……それらが揃うと発動するようになっていたらしい。」

「・・・私が・・・望んだからですね。」

知っていても知らなくても、私は力を望んだ。

望んで・・・うつすらとだが、私が何をしたか覚えている。

私は力に振るわれた。奴が力を振るっていたのに私は・・・

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。」

「は、はい!？」

だが、そんな私に教官から厳しい声がかかる。

それは叱責と失望の言葉だと思い私は覚悟を決めた。

「お前は誰だ。」

続いた言葉は、そんな私の覚悟を砕いた。

そしてなにも答えられない。その問いかけはあまりに単純で、でも複雑でもあつて答えを見失っていた。

「誰でもないなら丁度いい。お前はこれからラウラ・ボーデヴィツヒだ。」

「……えっ……」

それだけ言っつて教官は立ち上がり、私に背を向けて医務室の入り口へ歩き出す。

だが少し歩いて足を止めた。

「それから、お前は私になれないぞ。」

教官は振り返り、私を見て笑顔でそう言っつて医務室から出た。

1人残された部屋の中で、私は笑った。

なんだか私という人間があまりに滑稽に思えてきて……いや、理由など分らない。

ただ教官の言葉で何かの糸が切れた事だけは分かつて、私は1人医務室のベッドで寝ながら笑っていた。

） s i d e o u t ）

） s i d e 明久 ）

現在の時刻は夜で僕達は食堂で夕食を食べながらシャルルにイレギユラーや異世界の事について説明した。

ちゃんと他の生徒に聞かれないようにね。

「・・・っと、こんなところかな。」

「今まで黙っていてゴメン。」

「ううん、気にしないでアキヒサ。それに、僕も女だって事を隠していたんだからお相子だよ。」

「それにしてもシャルルは俺達の話をおあまり疑ったりはしないんだな。」

「異世界とか世界の破滅ってところはよくわからないけどアヤト達が嘘を言っていないって事はわかるよ。それに喋る犬がいる時点で信憑性があるよ。」

「確かにな。俺もその時はかなり驚いたぞ。」

シャルルは苦笑いしながら、一夏は夕食のラーメンを啜りながら言った。

ふと、僕の頭の中にある疑問が浮かび上がった。

「あ、結局トーナメントってどうなるんだろ？」

「そういえばボーデヴィツヒのISの暴走とイレギュラーの介入でそこんとこ有耶無耶だったな。」

「その事だけど、トーナメントは中止だった。ただ、個人データは取りたいから1回戦は全部やるみたい。」

「ふーん……んっ?」「」

何かの視線を感じた僕達は食事の手を止めてその方向を見る。そこには複数の女子生徒達がいてこっちを見ていた。

「優勝……チャンス……消えた。」

「交際……無効。」

『うわああああんっ!!』

女子達は何かをぶつぶつ言った後、泣きながら食堂を後にした。一体何だったんだろ?

そして女子達が去った後、再び視線を感じその方向を向くと篠ノ之さんが居た。

「あつ。」

すると、何か思い当たる事があつたのか一夏が席を立ち篠ノ之さんのところに向かう。

僕達は静かに事の成り行きを見守る事にした。

「そついえば筈、先月の約束な・・・」

「えっ！？／＼／」

「付き合ってもいいぞ。」

「「「えっ？」「」」

傍観していた僕達は互いに顔を見合わせながら小声で喋る。

「（もしかしてこれって告白？）」

「（今の状況から考えるとイチカとシノノノさんの間に何か約束があつたみたいけど？）」

「（けど、これで一夏は彼女持ちになるんだね。・・・羨ましい。）」

「（いや待て、あの鈍感に限ってそれはない筈だ。多分オチがあると思うぞ。）」

綾人がそう言うので僕達は再び一夏達の方を見た。

「／／／何い！！本当か！？本当に本当なんだな！！」

「お、おう。」

「何故だ、理由を聞こうではないか／／／」

「幼馴染の頼みだからな付き合っさ。「そうか！！／／／」買い物ぐらい。」

その瞬間、一夏の顔に篠ノ之さんの右ストレートが放たれた。すごい！？まったく見えなかった！

「そんな事だろうと思っただわ!!」

そして、一夏の腹に強烈な蹴りをくらわして篠ノ之さんは怒りながら食堂を後にした。

「・・・オルコットさんやファウさんの時も見えて思ったけど、イチカってワザとやってるんじゃないかって思う時があるよね。」

「それを無自覚でやっているからな、このキングオブ鈍感ほ。」

一夏、今のはさすがにダメでしょ。鈍感も程々にしないと。ん、何だろ?どっかからお前が言うなっ!!て声が聞こえたような気がしたんだけど・・・気のせいだよな。

「織斑君達、朗報ですよ!」

すると、今度は山田先生が食堂にやって来た。朗報って何だろ?

「今日は大変でしたね。でも!みんなの疲れを癒す素晴らしい場所が今日から解禁になりましたよ!」

「え、それってどこですか？」

「男子の大浴場です！」

それから僕は今、ひとりで大浴場でのんびりとお風呂に使って疲れを癒している。

ちなみに何で僕1人かと言うと、篠ノ之さんの攻撃力が予想以上に高かったのか一夏はそれで気絶してしまっていた。

とりあえず綾人は一夏を医務室に連れて行くから先に入ってるって言ったのでその言葉に甘えて今に至るんだ。

「はあああゝ生き返る。風呂はいいねえ、リリンの生み出した最高の文化だよ。」

「お、おじゃまします／＼／＼」

戸が開く音がして声のした方を向くとそこにはタオルで前を隠しながら恥ずかしがっているシャルルが居た。

「………何で!？」

「あんまり見ないで、アキヒサのエッチ／＼／＼」

「し、ごめん!………って、どうしてシャルルがいるの!?!？」

僕は背を向けてシャルルを直視しないように質問した。
危うくまた鼻血を出しそうだった・・・

「やっぱ、その、お風呂に入ってみようかなって。迷惑なら上がるよっ。」

「いやいやいや、上がるなら僕が上がるよ！もう堪能したし。」

それに、早くこの場から離れないと僕の理性が持たない！！

「あ、待って！！」

湯船から出ようとした僕をシャルルが止めた。

「話があるんだ。大事な話だからアキヒサにも聞いてほしい。」

僕達は互いに背中合わせになって話をする事にした。
頼むから耐えてよ僕の理性。

「その、前に言った事なんだけど・・・」

「……それって学園に残るって話？」

「うん。僕ね、ここに居ようと思う。アキヒサ達が居るから僕はここに居たいと思えるんだよ。」

そう言っつてシャルルが僕の手の上に自分の手を重ねた。

それにドキツとして、必死に理性の崩壊を防ぐように頑張る。

「それにね、もう1つ決めたんだ。僕のあり方を。」

そして今度は僕の肩に手を置いて、背中に抱きついてきた。

何か背中に柔らかい何か当たっているんですけど!?

頼む、耐えてくれ僕の理性!!

「……シャルルのあり方って？」

「今度から僕の名前はシャルロットって呼んでくれる。」

「それがシャルルの本当の……」

「そう、僕の名前。お母さんがくれた本当の名前。」

「そうなんだ、それじゃあ改めて、吉井明久です。初めましてシャルロット。」

「シャルロット・デュノアです。初めましてアキヒサ。」

自然と僕達は改めて互いの自己紹介の挨拶をしていた。

そしてここから僕の目の前で優しい笑顔を浮かべる女の子の『これから』を探す旅が始まっていく。

僕も自分の記憶と世界を探す旅を頑張らないとね。」

）side out）

）side 綾人）

「えー、今日はみなさんに転校生を紹介します。」

あの激闘から次の日、またしても転校生が俺達のクラスにやって来た。

やって来たヤツは俺達がよく知っているアイツだった。ただし、ミニスカ金髪な『女の子』の格好でだが。

「シャルロット・デュノアです。みなさん、改めてよろしくお願
いします。」

「えっと、デュノアくんはデュノアさんという事でした……」

『はあああああああああああああああつ!?!?』

目の前に居るのは昨日まで『シャルル』だった子がいきなり女の子
になったもんだから全員驚愕の余り教室が揺れた。

てか、何だこの急展開は!?!?さすがに予想外すぎるぞ!!

『デュノア君て実は女?』

『おかしいと思った。美少年じゃなくて美少女だったわけね。』

『って織斑君!同室だったら知らないって事は……』

『ちょっと待って、昨日って確か男子が大浴場使ったよね?』

『それじゃあ、神薙君や吉井君も知っていたって事になるんじゃない?』

まずいな、せつかく一夏1人を犠牲にしてこの場を乗り切ろうとしたが、このまま黙っていたら俺の方にも飛び火しかねん。ここはもう1つの生け贄要員に頑張ってもらおうか。

「言つとくが昨日俺は一夏を医務室まで運んだので昨日は大浴場は使用してないぞ。」

「綾人！お前は僕を生け贄にする気か！！」

「でも、同室の一夏は気付いていたんじゃないか？現に今まで黙っていたし。」

「おい！？ここで俺に振るのか！！」

いやだつてさあ、その方が面白いじゃん。

え、何、鬼畜？

やだなあゝ人聞きの悪い。俺は事実しか言っていないぞ。

すると教室の壁が突然崩れて、そこからISを装着した鈴が現われた。

「一夏ああああつ！！」

そう言つて鈴は龍咆の照準を一夏に向けて発射した。

「え、ちよつと待て！？死ぬ死ぬ！？俺、絶対死ぬうううっ！！」

龍咆が一夏に直撃するかと思つたら、とある乱入者によつてそれは阻止された。

「・・・あれ、死んでない？・・・つてラウラ？」

そう、ボーデヴィツヒがISを展開してAICで龍咆を止めてかき消したのだ。

一夏が礼を言おうとしたら、ボーデヴィツヒは何も答えずに一夏の方へ振り返り右手を襟首に伸ばしてそれを掴む。

そこから一気に一夏を引き寄せてその唇を奪つた。

その光景に俺を含めた全員が固まり沈黙する。

「お、お前は私の嫁にする。決定事項だつ！ 異論は認めんつ！」

『ええええええええええつ！！』

俺達のクラスは更にカオスに・・・つて、納得出来るかああああああつ！

マジでちよつと待てつ！なんでアイツいきなりデレてんのっ！？

一体何がどうしてこうなった！？なんで俺達置いてけぼりくらってる！？

こうして新しい自分を始める2人によってかなりカオスな1日が始まった。

第29話 新しい自分を始めるために（後書き）

と言う事でラウラ編はこれで終了です。

綾「最後がすごくカオスだったがな。てか、ボーデヴィツヒのあの突然のデレは何なんだ？」

でもこれって原作通りなんだよね。

そこはまあ、一夏のフラグメーカー能力のせいであって事にしよう。ら・

綾「それもそうだな。そして、シャルルの様子を見る限りでは対決の方は明久の勝ちのようだな。」

僅差だったけどね。

一夏が勝っていたら原作通りになっていたよ。

綾「勝負の分かれ目は第の攻撃力だな。そういえば、今回って本当は早く更新できたって言うていたが、どうして遅れたんだ？」

書いている時に全角/半角キーを押そうとしたら誤ってEscキーを押しちゃったのよ。

保存していなかったからどっさり書いた文が一気に消えて書き直しに……

明「それは……悪夢だね。」

それで今度はコマめに保存しながらやっていたけど、戦闘書いている時に筆が進んで保存をすっかり忘れてまた同じ悲劇が……

綾「あゝ、筆が進む時はぶっ続けて書く事があるからな。他の作者様達はどうかわからないけど？」

おかげで、E s cキーを何度ぶっ壊そうと思ったか・・・

明「ドンマイ作者。ところで次回は？」

とりあえず本編とは関係ない番外編書いた後に福音編に入る予定だよ。

投稿されたオリキャラも出すしね。

綾「明久のヒロイン候補の1人だろ。果たして明久はnice b a r tなE N Dを回避できるのだろうか？」

明「不吉な事言わないでよ!!!」

それでは次回をお楽しみに!!

番外編 女装と四神の少女達（前書き）

やっと書きあげました。

綾「遅すぎるわポケエ！1週間ちよつとすぎるならともかく、3週間以上もかかっているじゃねえか！！」

明「言い訳があるなら聞くけど。」

コラボって書いてみたら予想以上に難しくて。

コラボする作品のキャラを上手く再現するのに考えまくったりで。

それにここんとこずっと残業が続いてたし、日曜出勤で深夜コースだったしで、時間が全く取れなかったのよ。

綾「せっかく借りているからな、失礼の無いように書くのは当然だ。それで出来のほうは？」

とりあえず石を投げられる事は確実だと思っ。

明「って全然ダメじゃん！？」

とりあえず番外編どうぞ。

番外編 女装と四神の少女達

「テストパイロットと模擬戦？」

「僕と綾人ですか？」

「そうだ。お前達2人には2日後に南賀重工のテストパイロット4人と模擬戦をもらう事になった。」

ある日、鬼斑先生が職員室に俺達を呼び出してそんな事を言ってきた。

「何で俺達なんですか？この学園には各国の代表候補生もいるし、高度な戦闘データを取るならISの操縦が特に慣れている上級生がやった方がいいんじゃないんですか？」

「言われてみれば確かにそうだよね。」

その瞬間、一夏の頭に出席簿アタックが炸裂した。弟に対してもマジで容赦ないなこの鬼先生。

「お前達である理由だが、神薙と吉井に関しては使用しているIS

「があまりにも常識はずれな為に様々な戦闘データが欲しいと上からの命令だ。」

なるほど。俺と明久のISは装備や姿を自在に変えるという他のISとはかなり違った物だ。

それに目的を果たして俺達がこの世界を去ったら誰もゼロや村雨を操縦する事は出来ないから学園の上層部は今後のIS研究の為に今の内に様々なデータを取りたいんだろう。

「話はわかりました。俺達は存在の秘匿とISを借りている身だから特に異論はありませんよ。元々そういう取引でしたし。」

「でも、それだと僕と綾人の存在がばれちゃうんじゃないの？」

「確かに明久の疑問はもつともだ。でも、その辺り鬼斑先生が何か考えているんじゃないのか？そうじゃなかったら俺達にこんな話をしないと思うぞ。」

「神薙の言うとおりそれに関してはある方法を使用する。ばれるばれないは本人達次第だな。」

案の定、鬼斑先生に何か考えがあったな。

でも何でだ？何かすごく嫌な予感がするんだが・・・

「話は決まったな。早速だが神薙と吉井にはある特訓をしてもらいそれを当日までにマスターしてもらおう。いいな、2人共。」

「「わかりました。」」

「ではまずは着替えてもらおう。山田先生例の物を。」

「は、はい。でも……いいんですか？」

「かまわん。本人達は了承したから文句は言わないだろ。」

あれ？ ホントに嫌な予感がビンビンしまくる。
そして、山田先生がある物を俺達の前に出してきた。
出してきたのは学園の制服だ……女子用の。

「お前達2人にはこの学園の女子として模擬戦に出てもらう。当日までに女子の仕草や言葉使い等を頭に叩き込んでもらう。何か質問はあるか？」

「「大有りじゃボケエエエエエエツ!!!!!!」」

俺と明久の叫びは学園全体を揺らすぐらいに響いた。

「明久ならともかく何で俺が女装せないかんとですか！！そんな事したら女装趣味があるって学園中の生徒達に思われてしまう上に腐女子達の格好の獲物になるじゃないですか！！」

「ちょっと！？僕ならともかくってどういう意味さ！僕だって女装なんて絶対嫌だよ！！」

ただでさえ学園中に何故か俺達のBL同人誌（本人達の無許可なうえ非公式）が流れているというのに、女装なんてしたら腐女子達が新たなジャンルを開拓して新作とか書き出す恐れがある。

「既に決定事項であり変更はできない。黙ってさっさと特訓に移れバカ者。」

「「この鬼いいいいいいっ！！！！！！」「」「」

こうして俺と明久は女装しての女子力向上訓練をやる羽目になった。何だこれ！？新手のイジメか！？

そして2日が過ぎて模擬戦当日。

アリーナで南賀重工からやって来たテストパイロット4人との顔合
わせが始まった。

4人とも既にISSスーツを着用していた。

「ボクの名前は辰東野辰美あじまやたしひだよ。よろしくね。」

「朱羽南波あけはななみです。今日はよろしくお願ひしますね。」

「北丘武瑠きたおかたけるだ。よろしく頼む。」

「フラウディア＝尾崎＝ウエストロードや。」

まずは向こうからの挨拶。

1人目が長い黒髪を側頭部で一本に束ねてサイドテールにしている
日本人の少女、辰東野 辰美。

2人目はクリーム色のふわふわしたロングヘアにタレ目の少女、朱
羽 南波。

3人目は黒色のボブカットでツリ目で目つきが悪いが美人系の顔立
ちでの少女、北丘 武瑠。

4人目は金髪碧眼で癖のあるショートヘアの小柄な少女、フラウデ
ィア＝尾崎＝ウエストロード。

この4人が今日の模擬戦で戦う少女達だ。

「……吉井 明子って言います。よろしくお願ひしますね。」

顔を引きつらせ声色を変えて挨拶をする女子の制服を着た明久改め
明子。

「神薙 綾香と申します。本日はお互いに全力で頑張りましょうね。」

女子らしくお辞儀をしながら挨拶をすませる女子の制服を着た俺。
この2日間、相手にばれないように徹底して女子らしさを教師陣に
強制的に叩き込まれた。

その甲斐あって並大抵の洞察力を持ってない限りではばれないレベ
ルにまで完成した。

女装に関しては明久はリトバスの世界の時に女装をしたのを見てい
たが、やはり完成度が高い。

俺の方も何故かどこかのガンダムマイスターレベルの女装らしい。

うん、全然嬉しくない。

「挨拶は済んだようだな。では戦闘の準備にとりかかってもらう。
神薙、吉井の2名は更衣室に行つてすぐに着替えて来い。」

鬼の指示に従つて男の娘と化して不満タラタラな俺達はスーツに着
替えるために更衣室に向かった。

更衣室も正体がばれないように女子の方を使用しなければならな
い。うえにISスーツも女子用のヤツを着用しないといけない。

「早く終わってくれ模擬戦!!」

俺と明久の思いは1つ。早くこの悪夢が終わってくれる事だけだ。さつきから俺達の精神はガリガリ削られまくってるんだ。着替え終えた俺達はアリーナの中央に向かい合うように並ぶ。

「対戦の方だが南賀重工からは辰東野、ウエストロードの2名からだ。呼ばれた2名以外ははピットで待機だ。」

鬼斑先生の指示にしたがって俺達と呼ばれた2人以外はピットに向かい、アリーナには今から模擬戦を行うメンバーだけになった。

「それじゃあ、ISを展開しようか。まずはボクから」

そう言つて辰東野は辰美は蒼い手甲のはまった左手を握りしめて脇を締めて腰ために構え、軽く足を開いて立ち、伸ばした右手は左上へと向かい、左肩より高い位置まで上がる。

そのまま右腕を大きく回し、後ろへ引いていきながら拳を固めて右腰へ。

それに連動するように腰を回転させて左手を胸元まで持ち上げ握りしめる。

「変身!!」

かけ声と共に辰東野の全身が光に包まれたかと思うと、蒼い機体が姿を現す。

「……まさか変身ポーズとって展開する人が他にもいたとはね。」

「何言ってるんですか明子さん？変身ポーズは必要事項ですよ。それじゃ次は私が。」

俺はバツクルの形で待機しているゼロの中にカードを入れて腰に当てると、そこからカードが流れ出しベルトの形を形成する。

「変身!!」

T U R N ・ U P

バツクルのグリップを引くと T U R N ・ U P と音声の流れで目の前に障壁のようなものが発生し、俺は障壁に向かって走る。障壁を潜り抜けると、そこにはゼロを展開した俺の姿があった。

「……どうしてブレイド風なの？」

「たまたま最近見たから。」

「神薙さん、あなたとは仲よくなれそうな気がするよ。」

「そうですね。私も辰東野さんとはすごくいいお友達になれそうな気がします。」

せっかく特撮好きの同志と出会えたのに女装中だから素直に喜べない。
そしてウエストロードと明久がISを展開して模擬戦開始の合図が出るのを待つ。

「両者、準備はいいようだな。それでは・・・戦闘開始!!」

鬼斑先生の合図で模擬戦が始まる。

「明子さん、辰東野さんの相手を頼みます。私はウエストロードさんの相手をします。（女言葉は喋りづらいから疲れる）」

「わかりました。綾香さんも気をつけて。（さっきから声色変えているせいか喉が痛くなってきたよ）」

辰東野のISは見た感じ重装甲型なうえに結構な火力を持っている

と予想する。

ゼロの武装であるISにダメージを与えられるのはストライクレーザークローぐらいたと思うが、あれはエネルギーを消費するうえにリーチが短い。

だからエネルギーを消費することなく強力な一撃を与えられるうえにそれなりに速い村雨をぶつけるのが妥当だろ。

それにエヴォルトはCASと違って発動したら一瞬で姿を変えられるしな。

「あたしの相手はあんたの様やな。」

「はい、未熟の身ですが全力でお相手致しますよ。」

俺は腕のクローを展開してウエストロードの駆る白地にタイガーストライプの機体色で一分の隙もなくパイロットを覆っている全身装甲でありながらスマートな形のIS「ヴァイステイガ」に向かって仕掛ける。

ウエストロードは両手に短機関銃を持ち、天空を滑走するかのような動きで俺から距離をとりながら機関銃を発射する。

「空中を走っている！？それにスピードもある！」

「そう言いながらうちの射撃を平然と避けているあんさんもすごいな。」

結構ギリギリだったけどな。とりあえず今はウエストロードのISだ。

俺は腰の両側にショックカノンを1基ずつ展開し、それは発射しながらあのISの自己分析を開始する。あのISは他のと違って空中を飛ぶのではなく“走る”ため、動きが読みづらくてしかも速い。さっきのクローを避けた感じからスピードはゼロより上だろう。

ウエストロードはアサルトカノンやバズーカランチャー等に切り替えての射撃を行っているが、多分あのISの本領は接近戦で近接格闘と思う。

「そろそろ仕掛けんでー。」

距離をとりながらひたすら射撃戦闘を行っていたウエストロードがそんなことを言い出す。

ウエストロードは空中で左足を折りまげ、右足を後ろへ伸ばしながらブレーキをかけ、両手の短機関銃を投げ捨てた。

瞬間。その姿がブレた刹那、ゼロの肩に衝撃が走る。

「くっ!？」

ISの絶対防御により外傷はないが、ダメージは肩に響いてきて俺はその痛みに顔をしかめる。

ゼロから警告が出るが、それよりも早くに白い閃光が走り、機体に衝撃が走る。

そしてまた白い閃光が走って来るが、その一撃にタイミングを合わ

せてクローで迎撃する。
ヴァイスティーカーの腕部に装備された展開式ビームクローとゼロのストライククローが激突し、双方の武器がはじかれ互いの機体が吹き飛ばされる。

「・・・今のでシールドエネルギーが結構削れてしまいました。」

「そう言いながらあたしの“ファントム”にもう反応したうえに反撃してくるって、あんた何者や?」

「ただの生徒ですよ。それに、その動きは漫画で見たことがあります。だから。」

最初あの動きをどっかで見たことあるかと思ってたが、ウエストロードがファントムって言った時点で答えが出た。

まさかジンキを見ていてその知識が役に立つとは世の中何があるかわからんな。

さっき反応できたのもファントムがどんな動きかを知っていたから出来た事だ。

「でも、いくら反応できても今の私のISではそのISのスピードについて行けないのが現実ですけどね。」

「そう言いながらも負けませんって顔してるであんた。」

「もちろんそのつもりだからですよ。」

「はっはっはっ、あんたのその負けん気に入ったで。なら、全力で倒しにいかせてもらうで！」

ウエストロードは再びファントムを発動して仕掛けてくる。

俺はその一撃をくらって地面にまで吹き飛ばされ、辺りに砂煙が舞う。

「これでこっちはおわ」まだ終わりではないですよ。「!？」

ウエストロードが言い終わる前に俺のクローの一撃が襲う。

いきなりのことで反応が遅れたのか、その一撃を完全に防御しきれず後退してしまふ。

「!？・・・それがあんたの隠し玉かいな。」

ウエストロードが驚くのは無理もない。なんせ今まで戦っていた相手のISの姿形が突然変わったのだから。

「確かにさっきまでの状態ではスピードについていきません。だか

ら、ついていけるように変えました。」

今のゼロの姿はさっきまでと違い装甲色はネイビーになり、イオンブースターは可変式の大型に変わり、展開用ウイングが各所の装備された装甲を身に纏った高速戦闘形態「イエーガー」になっている。さっきの一撃をわざとくらい、相手との距離をとり砂煙で自分の姿を隠してCASによる換装を行った。さて、今度はこっちから行くぜ！

「GO！イエーガー！！」

イオンブースターを吹かしヴァイスティーガに迫る。ゼロとイエーガーでは通常速度が全く違うためすぐにウェストロードの懐に入り込む。俺のクローの一撃をウェストロードは両腕のビームクローでガードして後ろに下がろうとしたが、俺は装甲に搭載されたバルカンポットを発射して追撃を行う。

「さっきとは速さが違いすぎるわ。けど、燃えてきたで！！」

再びファントムを使い攪乱するように俺の周りを走る白き虎。俺もイオンブースターを展開して高速戦闘に移る。その戦闘は端から見たら青と白の光が交錯しているようにしか見えない。

「はあああああつあつ!!」

交差しながら互いに腕と脚のクローで殴る蹴るを繰り返す。

その結果、互いのISの装甲各所が砕けひしゃげた状態になる。

「次で決めるで!!」

ウエストロードは高らかに宣言してファントムのトップスピードで走り出す。

「こつちもこれで決めます!!」

ブースターを最大出力まで吹かしトップスピードで飛び出す。
アーマーが展開してそこから金色の光があふれクローに金色の光が集まりだす。

「ストライクレーザークロー!!」

金色の爪はヴァイス・ティガーのシールドバリアごと白き装甲を斬り裂いた。

「エネルギー残量ゼロ、あたしの負けか〜。」

「いえ、この勝負は引き分けですよ。」

最後の交錯時、白き虎の爪はゼロの装甲を捉えていた。そのため、その一撃でこっちのエネルギーもゼロになったのだ。イエーガーはその速さゆえ装甲が薄く防御力がかなり低いため受けるダメージ量が多くなる。

「どうやら向こうの方も終わったようですね。」

明久達の方を見たら、2人のISはボロボロになって地面に突っ伏していた。

こちらでもダブルKOにより引き分けになったようだ。

「各人すぐにピットに戻れ。神薙・吉井の二名は15分の休憩の後残り2人と試合をしてもらう。」

鬼斑先生の容赦ない無茶振りが聞こえてきた。

あんだだけの激闘したのにたった15分しか休憩ないってスパルタの度を超えているだろ!!!

それから15分後に朱羽と北丘の2人とも戦ったが、そこで少々トラブルが起こり模擬戦は中止となった。

「神薙、言い訳があるなら聞こう。」

「・・・すみません。」

現在俺は職員室で鬼斑先生に土下座して謝っていた。
なぜこんな事をしてるかという・・・

「相手が重火器系のISとわかって自分も重火器型で対抗してアリ
ーナを火の海にして半壊させるとはバカはバカでも大バカ過ぎるぞ。」

そう、アリーナを火の海にした事で俺は今土下座させられながら反
省分を書かされている。

北丘のIS「玄甲」が重火器系でこれでもかって言うほど撃ちまく
ってきたので、それに対抗しようとパンツァに換装して反撃した事
が始まりになった。

火器の撃ち合いで互いにヒートアップしていき、俺がバーニング・
ビックバンを使った後には辺り一面火の海になっていて、近くで戦
っていた明久と朱羽はその最中の流れ弾をくらって早々にエネルギー
ーがゼロになった事でISが動かなくなり降り注がれるミサイルの
雨から必死になって逃げていたとか。

「だが、模擬戦は中止になってしまったが必要以上のデータが取れ
たことが幸いだったな。」

「……僕に関しては命の危険に晒されていたけどね。」

「……すまん。」

そんなやりとりをしていたら南賀重工の4人がやって来た。

「今日は楽しかったで。次にあんたと戦う時があったらその時は負けへんで。」

「神薙さん、もし次に会ったら色々とお話したいんだけどいいかな？」

「ウエストロードさん、その時は私も負けるつもりは無いですよ。辰東野さん、私も是非お話がしたいです。主に特撮関係で。それと朱羽さん、申し訳ございませんでした！」

「私は気にしていませんから顔を上げてください神薙さん。それに流れ弾を避けられなかった私にも非はありますし。」

なんていい人なんだ朱羽さん！
どっかの鬼とは大違いだ！！

「それについては私にも非がある。神薙、勝負の方はあんな結果になっちゃったが楽しかった。また会えるのを楽しみにしている。」

「はい、北丘さん。その時はパンツァは永久封印して戦うのでよろしくお願いします。」

こうして俺達のある意味地獄の模擬戦は幕を閉じた。

女装をする羽目になったりしたが、4人と出会えた事に感謝した。それから翌日、教室で一夏達と駄弁っていると一夏がこんな事を言ってきた。

「そつえば綾人達に聞きたいことがあるんだが・・・いいか？」

そつ前置きしてから、一夏は申し訳なさげな顔をして女性陣達には聞こえないように言った。

「お前達前に女装していただく、それでスカート履くのつてどんな感じなんだ？」

その言葉を聞いた瞬間、俺と明久の頭の中の糸が音を立てて切れた。

「・・・知りたい？」

「え？」

俺と明久が一緒になって一夏を見ると、なぜか一夏が少し後ずさりした。

なぜだろう？俺達はただただ一夏に向かって優しく笑いかけてるだけなのに。

「一夏、アレは嫌々やらされただけで、女装趣味があるように言われるの嫌なただけだ。」

「一夏、言い忘れてたけど俺・・・不用意にそういう事聞いてくるヤツ見ると潰したくなるんだ。」

「いや、あの・・・待て！？ちょっと待て！？あの・・・冗談だよ、冗談。」

「へえ、そう・・・冗談なんだ。じゃあ俺（僕）達、冗談みたいな格好してたんだ。つまりアレかな。俺（僕）達の人生そのものが冗談・・・あははは、もうひどいなあ。」

「いや、だから落ち着けっつてっ！誰もそんな事言っただろうっ！？そしてお前ら息合い過ぎだからっ！普通になんでそんなにハモ

れんだよっ!!」

「ねえ綾人、こういう場合ってどうすればいいかなあ？さすがに謝って許すつても違うし。」

「無視するなよっ！ 頼むから俺の話聞いてくれっ!!」

明久は微笑みながら後ずさりする一夏に迫る。というか俺も同じく。

「簡単だ明久、一夏は『知りたい』そうなんだから。」

「・・・ああ、それもそうだね。じゃあ一夏は身を持って知ろうか。うん、チャレンジだね。ほら、ハンターイモトさんって居るし、言うならハンターイチカになるんだよ。」

「さあ一夏・・・覚悟は出来てるよな。」

「だからちょっと待てっ!？お前らマジ怖いぞっ!！てか、篝達も見てないで誰かたすk」

「「「「一夏の女装・・・じゅるり。」」」」

「アキヒサ、ボクも手伝うよ。イチカには異性に化ける苦しみを体験してもらおうかな。」

騒ぎ出した俺達の会話を聞いて大体の内容がわかった女性陣約4名は自分の欲望に忠実で、もう1人は何か感じるものがあつたのか俺達に協力するようだ。

「助けるどころか協力すんのかよ！？ちょ、やめ、いやあああああああああつ！！！」

その日、教室には男子の姿は2人しかおらず、それとは別に鬼斑先生によく似た生徒が1人確認された。それから学園中に何故か俺達の女装姿の写真や女装姿で性転換されて百合同人誌などが出回ったりした。

番外編 女装と四神の少女達（後書き）

綾「ホントにダメだな今回の番外編。折角のコラボなのに全然四神のキャラ達が出てねえじゃないかよ。」

更新しちゃったけど、これに関しては後から大幅に書き直す予定だよ。

明「だったら何で更新したの？」

これ以上番外編で悩んでると時間がなくなるから、先に本編進めようかと。

綾「いい加減すすめないと、流石にやばいからな。」

この番外編に関しては後々書き直す予定です。

GAU様、こんな駄作に仕上げて本当に申し訳ございませんでした。

第30話 海に向けての前哨戦？（前書き）

今回から福音編に入ります。

綾「それで今回は投稿されたキャラが出るんだよな。」

そっだよ。と、言ってもちよっただけだね。

綾「と、言うわけでIS編第2部？の福音編スタートです。」

第30話 海に向けての前哨戦？

side ????

薄暗く赤い照明だけが点いている部屋の中で端末を操作する1人の女性がいた。

そんな時、部屋の中で着メロが鳴った。

その音に反応してか、彼女の頭に装着している機械式なウサギの耳がひくひくした。

「むむむ、この着メロは!？」

彼女は素早く右手で傍らの折り畳み式でピンク色の携帯を取り出し開いて通話ボタンを押す。

「もしもしひるもすー?みんなのアイドル、篠之野 東さんだよー」

『……………』

「わわ、待って待ってっ!?! 切らないで篝ちゃんー!」

電話の相手篠之野 篤はその応答が不快だったのか携帯を切るうしたが、それに気付いた東が慌ててそれを止めさせた。

『……姉さん。』

「やあやあ我が妹よ、うんうん用件はわかっているよー。欲しいんだよね、君だけの専用機が。」

『！っ？』

「もちろん用意してあるよー。最高性能にして規格外、そして白と並び立つもの。その機体の名前は紅椿。」

東の視線の先には、紅い鋭角的なデザインに巨大なウィングユニットを搭載したISがあった。

＼side out＼

＼side 一夏＼

「うん……ん？」

ぐっすりと寝ていた俺は足の方に何か違和感を感じたため目を覚まし見てみると、自分のとは違う足が存在していた。

「・・・・・・・・・・」

俺は大量の冷や汗を出しながら隣の膨らみの正体を確認する。そこには何も着ていないラウラが居た。

「だあああああああああああああああつ!?!」

あなたは目が覚めて隣に裸の少女が居たらどう思うだろうか、とりあえず俺は見ての通り叫んだ。
その上でベッドの枕元に後ずさりながら距離を取り、一糸まとわぬその姿を見て身体に震えが走る。

「ん……なんだ?もう朝か。」

ラウラは眠たそうに右手で目をこすりながら起き上がり、俺の目の前で裸体を晒す。

「お前、いつの間に入ってきたんだ!?!というかなんで裸……つて、とりあえず隠せっ!?!」

目の前に居るラウラに問いかけると、奴はムカつく事に疑問の表情を向けてきやがった。

「夫婦とは互いに包み隠さぬものだ」と聞いたぞ。ましてはお前は私の嫁……」

「包み隠さずつてのは精神的なもので肉体的なところは包み隠すんだよっ！あと嫁って何だよ！俺はお前が知つての通り男なんだがっ！」

「日本では気に入つた相手を『俺の嫁』とか『自分の嫁』とか言うそつだが。」

「お前に間違つた日本の知識を吹きこんだのは誰だっ！？」

震える手でラウラに指さすと、何故か右腕を取り、素早く自分の身体を絡ませながら俺を倒して腕挫十字固めをかけてきた。

「お前はもう少し寝技の訓練をすべきだな。寝技を磨きたいと言つたら……私が相手になつてやらんでもないぞ／＼」

「なぜそこで赤くなる！お前、絶対性格変わってるだろっ！！」

「違う。私がお前を変えてしまったのだ。私はお前の強さに、お前の言葉に。」

「おーいー夏、朝っぱらから何騒いでんだ？」

その声を聞いた瞬間、自然と俺の視線は部屋の入口の方へ向けられる。すると入り口の方から制服姿の綾人がやって来て、俺とラウラを見た。

「……とりあえず食堂の方に赤飯炊いてもらおうように言ってくる。」

「待ってくれ！？この状況でそう思われるのも無理ないが、とりあえず助けてくれ！」

「えー、だってせっかく夫婦の営み第2ラウンドが開始されるかもしれないのにそれを邪魔する方が無作法だろ。突然部屋に来て悪かつたなボーデヴィツヒ、邪魔者は退散するから頑張れよ。」

「だそうだー夏。神薙がせっかく私達夫婦を応援してくれているの

だからここはそれに応えるべく・・・」

「よし、とりあえずお前は黙ってる！話がこじれるから！！あと綾人、第1ラウンドすら無いのに第2ラウンドとか無いからな！！」

「はあ、どうせ大方朝目が覚めるといつの間にか不法侵入して来たボーデヴィツヒが何故か全裸でお前の隣で寝ていて、マイナーな日本の知識を吹き込んだのは誰か問い詰めようとしたら腕挫十字固めをかけられ今に至るってところが。」

「お前絶対最初からどっかで見ていただろ！！それも勘か！あと、状況わかっているなら助けるよ！！」

「それはその腕挫十字固めからか？それとも、そろそろこの部屋に向かって来る筈からか？あの性格だと今日が日曜でも関係なく朝練と言ふ事で引つ張り出してくると思うが・・・あ、足音が聞こえてきた。」

「そのどっちともから助けてくれ！この光景を筈に見られたら間違いないく殺される・・・！」

「しゃーない、この事は貸しにしとくぞ。まあ、すぐに返してもらふ事になるが。」

こうして綾人の助けにより俺の日曜の朝は地獄の色朱に染まる事にはならなかったが、精神的疲労で寿命が縮んだ。

＼side out＼

＼side 明久＼

IS学園にはモノレールのような交通施設・・・というか駅がある。そこから僕は一夏とシャルル・・・じゃなくて、シャルロットとの2人と一緒に買い物のために街に出る。

今日は今度ある臨海学校の為に水着を買いに行くのが目的だ。

「はぁー、朝っぱらからかなり疲れた。」

「最悪の展開にならなくてよかったね一夏。けど、綾人の性格を考えると修羅場見たさに助けずにそのまま放置って可能性もあったと思うけど・・・」

「・・・あの後綾人にその事で一応礼を言おうとしたが、そんな時に本来ならお前の自業自得だが、今回はこっちにも事情があるから助けただけだ。本当はリアル修羅場を見たかったが。」って言うてたんだが。くそー、いつか絶対綾人に今日の俺の苦しみを味あわせてやる。」

一夏が綾人に復讐？を企てようとする姿を隣に座っている僕と向かいに座っているシャルロットは頬を引きつらせて見ていた。それにしてもさつきからシャルロットがそわそわしているけどどうしたんだろ？

「そういえばアキヒサは何で私服なの？一応IS学園の生徒は制服で外出しないといけない決まりだけど？」

「世間では僕と綾人は存在を隠しているからね。それにISを使える男子が一夏以外にもいるって事がバレルから織斑先生が私服での外出を許可してくれたんだ。」

「そういえばアキヒサ達は世間には知られてないんだっただね。あと、今日は誘ってくれてありがとねアキヒサ。でも、どうして僕を誘ってくれたのかな？／／／」

「その事だけど僕も水着を買おうかと思ってたんだけど、この世界に来てからIS学園の外には出た事がないからどこで買ったらいいかわからない上に街にどうやって行ったらいいかもわからなかったんだよね。それで一夏に相談したら自分も水着を買いに行くから道案内してくれるって。それにシャルロット前に女子用の水着持ってないって言っていたからついでにどうかなって。」

「ついで・・・」

何故かシャルロットが急に落ち込み始めた。

「まあ、どうせそんな事だろうと思ってたけどね。乙女の純情を弄ぶ男は馬に蹴られて死ぬといいよ。」

「どうしたんだ？まあ、確かにそんな奴は死んだ方がいいと思うがな。」

「そうだよな。そんな女性の敵は死んだ方が世界の為だよな。」

「・・・はあく、鈍感コンビ。篠之野さん達はこんな苦労をしたんだね。」

それから目的の駅に着いたけど、シャルロットが何故か不機嫌で急ぎ足でモノレールから出たので僕は急いで追いかけた。

「待ってよシャルロット。何で怒ってるの？」

「・・・はい。て、手を繋いでくれたら許してあげる。」

「?そんな事でいいなら、はい。」

「あっ／＼／」

「知らない街ではぐれたりしたら大変だもんね。しっかり?まっつていてね。」

「おい、何やってんだ2人共。早く来ないと置いて行くぞ。」

僕はシャルロットの手を掴んで離さないようにして歩き出し一夏の後を歩いていく。
一夏を見失わなったら迷子になってしまうから気をつけないと。

「・・・アキヒサの唐変木。」

シャルロットがまた落ちこんでいる。

本当にどうしたんだろ?

＼side out＼

＼side 綾人＼

「明久の奴、いつの間にシャルロットにフラグ立てたんだ？あれは完全にそうとしか見えん。」

「でもー、よっしーもおりむーと同じで鈍感タイプとはねー。デュノアさんも大変だー。」

「だな。てか気づけよ明久。シャルロットの様子見たら普通気づくだろ、これだから鈍感は。」

「・・・なぎーも人の事言えないよー。」

「・・・うん。」（コクコク）

俺は本音と簪の2人と一緒に明久達を隠れて観察していた。

今日は今度ある林間学校の為に必要な物を買い揃えるためにモノレールに乗って街までやって来た。

その駅でたまたま一夏の案内で後ろを歩く明久とシャルロットを見かけて今に至る。

ちなみにあいつ等の様子を見ているのは俺達だけではない。

「ところでお前達は何をやっているんだ？セシリア、鈴。」

「「うわあっ!?!」」

俺は光のない目で特に一夏を見ていたであろう2人の背後から声をかけた。

そしたら見事なリアクションが返ってきた。

「・・・って綾人?もう、驚かさないでよ!」

「そうですね!寿命が縮まりましたわ!」

「そりやすまんかったな。で、何でそんなヤンデレ状態の目で一夏を見てたんだ?それと鈴はその展開している甲龍の腕を解除しろ、ここは公共の場だぞ。あつそこの人、通報は勘弁してください。」

さつきから学園の生徒も含め一般の人達がセシリア達を見るなり逃げするようにこの場から去っているからな。

恐らくこの2人の一夏に対する殺気に当てられたんだろ。

あ、写メも勘弁してください。

「最初は一夏さんがデュノアさんと一緒に学園を出たという情報を聞いて急いで追いかけたのですが・・・」

「シャルロットの本命は一夏じゃなくて明久かもしれないって安心したの。でも……」

「なるほど。大方街に出掛けるのに何で一夏は自分達を誘わないの
かって結論に達したと。」

「「そのとおりよ」ですわ（！！）」「」

この様子から察するに声すらかけられてない様だな。

「ほう、楽しそうだな。」

「！？ラウラさん！」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

「ようボーデヴィツヒ、お前も買い物か？」

そこに突如ボーデヴィツヒが現われる。

セシリアと鈴は警戒するが、ボーデヴィツヒからは以前のよつな敵
意を感じないので俺は普通に挨拶する。

てか、今日の朝会ったばっかりだし。

「そんなところだ。あと神薙、呼びにくいなら別にラウラでも構わ
んぞ。」

「それは助かるな、俺の方も綾人でいいぜ。お前達もその警戒解い
たらどうだ。」

そしてラウラは一夏達の方に向かって歩き出したが、セシリアと鈴
の2人に止められた。

「ちょ、待ちなさいよ!?!」

「どっぴするつもりですの!?!」

「決まっているだろ。あの3人に混ざる。それだけだ。」

「ま、まだシャルロットが敵じゃないとは決まっていけないのよ!?!
それに、未知数の敵と戦うには情報収集が先決でしょ!?!」

「そうですね!ここは追跡の後、デユノアさんの真意と一夏さんが
フリーであるかを見極めるべきですわ!?!」

「うんうん!」

「・・・なるほど。一理あるな。」

「・・・こいつらは恋愛に積極的なのか消極的なのかよくわからんな。

「あー、盛り上がっているところ悪いが一夏達はもうどこかに消えたぞ。」

「・・・なっ!?!」

「てか、普通に混ざればよかつたんじゃないか。そうしたら合法的にダブルデートって形になってシャルロットの監視と一夏との進展も出来て一石二鳥じゃなかったか?」

「・・・しまったああああっ!!! その手があつたああああっ!!!」

そうして3人の女子は一斉にorz状態になった。
関係者だとは思われたくないの俺は本音と簪と合流してこの場を去った。

side out

side シャルロット

アキヒサと手を繋ぎながら一夏の後を付いて行く。
最初手を繋いでくれた時はちょっと期待したけど……はあ。

「どうしたのシャル？何か元気ないようだけど。」

「ううん、何でもな……シャル？」

「あ、うん。シャルロットて呼ぶのがちょっと長いと思って少し短くして呼んでみたんだ。こっちの方が呼びやすいし親しみやすいからね。でも、ダメだった？」

「ううん、ダメじゃないよ。むしろ嬉しいかな。そうか、シャルか……。」

これってちょっと特別な存在って事だよねノノノ
それに、愛称で呼ばれるなんて初めてだからすごく嬉しい。

「ありがとねアキヒサ・・・ってアキヒサ？」

お礼を言おうと振り返ったら、そこにアキヒサは居なかった。それに手を握っていたはずが、いつの間にかその感触がなくなっていた。

「ん、どうしたシャルロット？」

「どうしようー夏！？アキヒサとはぐれちゃった！！！」

「何！？ってホントに明久の奴がいねえ！？てか、手握っていてどうやったらはぐれるんだよ！」

それは僕が知りたいよ！！
アキヒサ、どこに行っちゃたんだろ？

＼side out＼

＼side 明久＼

あれ、おかしいな？

確か僕は今の今までシャルと手を繋いで歩いていたはずなのにいつ

の間にか僕1人だけになっている。
それにここはどこ？何かどこかの路地裏みただけど・・・

「もしかして今の僕、迷子とか・・・」

・・・うわあああああつ！？何て事だあああつ！！
はぐれないようにって言ったそばからはぐれるなんて。
しかも連絡用に綾人が用意してくれた携帯も学園に忘れてきちやっ
たし。

「そうだ！誰かに駅までの道を聞こう。それで、学園まで携帯を取
りに戻って連絡すればいいんだ。僕って頭いい。」

それじゃあ早速誰かに道を・・・って、

「誰1人居ないんですけど!？」

1秒も経たないまま万策尽きたよ!？
もはやこれまでか。

『あ、あの、私大事な用事があつて急いでのので。』

『え、いいじゃん別に。それよりも俺達と楽しい事しようぜ。』

ふと、どこからか声が聞こえてきた。

耳を澄まして声のした場所を目指すと、そこには1人の女の子とそれを囲む複数の男が居た。

あの子I S学園の制服を着ている。って事は学園の生徒か。

『ほ、ホントに急いでいるので！ごめんなさい！』

『待て、逃がすかよ！』

『や、離してください！！』

女の子が男達の誘いを断ってこの場から立ち去ろうとしたが男の1人が女の子の腕を掴んできた。
女の子は必死で逃げようとするが、相手の力の方が上で逃げ出せない。

「ごめーん、お待たせ。」

『あん？』

「えっ？」

僕は女の子に声をかけて近づいていく。

「すみません。この子は僕と今日ここで待ち合わせの約束してたんですよ。（話を合わせて）」

「！？そ、そうなんです！私、彼と待ち合わせてたんで。」

「それじゃあ、僕達はこの辺で。」

男の腕を離し、僕は女の子の手を取り急いでこの場を後にする。

「逃がすかよ。お前等、男の奴はボコって女の方を頂戴するぞ。」

『おう！！』

後ろからそんな声がすると同時に、いくつもの足音がこっちに近づいてきた。

振り返るとさっきの男達がこちらに向かって走ってきた。

急いで逃げようとしたが、この子の手を引きながらじゃ追いつかれて捕まるのは時間の問題だ。

なら・・・

「ごめん！ちょっとガマンしてくれる。」

「えっ？き、きゃっ!?!」

僕は女の子を巷で言うお姫様抱っこの状態で抱きかかえて走り出す。

「こっちの方が逃げやすいから、しっかり？まっついて。」

「は、はい／＼／」

何か顔が赤いけどどうしたんだろ？いや、今はあの男共から逃げないと。

とりあえず人が居そうな所を目指して走るしかないね。

それから適当に道を走っているとだんだん人通りが多い場所に出てきた。

それでも男達は追いかけてくる。

「もう、君達しっこすぎるよ!!--」

人通りの多い道を走っているので僕達の存在はいやでも目立ち通行人からのいくつもの視線が向けられる。

けど、この鬼ごっこは意外な所でゴールを迎えた。

「お前達、すぐに止まれ！」

突如進行方向に織斑先生が現われたので急ブレーキをかけてその場に止まった。

「吉井、それからお前は4組の川上か。お前達、公共の場で何をやっている。」

「今はそれどころじゃないんですよ織斑先生！早くしないとあいつらが「やっと追いついたぞ！」って、もう来ちゃったよ!？」

止まった事で男達に追いつかれてしまった。

万事休すか、まったく織斑先生が止めなければ・・・
ん、待てよ？織斑先生・・・

「あ、僕達助かった。」

「え、どういふ事ですか？」

「ところで、お前達は誰だ？うちの生徒を追いかけていたようだが

事情を聞かせてもらえるのだろうか。」

「はあ？何だよおばさん。」

その瞬間、織斑先生の右ストレートが男の顔面に放たれた。男は近くの柱まで殴り飛ばされ激突し、意識を失う。うわあ、何て命知らずなんだ。

「そうか、どうやらお前等全員死にたいようだな。それに、あのバカのおかげで溜まった鬱憤を晴らすのに丁度いい。」（ポキポキ）

『ひいひいひい！？』

織斑先生が腕を鳴らすと、先程の光景を見た男達は自分達の未来を予想したのか、気絶した男を抱えて急いでこの場から逃げ出した。その後、僕達はさっきまでであった出来事を織斑先生と少ししてやって来た山田先生に話した。

「事情はわかった。川上、お前には私と山田先生が同行する。異論はないな。」

「は、はい！よろしくお願いします！」

「それじゃあお願いしますね先生達。僕はこれから一夏達を探さないといけないんで。」

「織斑達となら先程会った。まだこのデパート内に居るだろう。」

「ホントですか！？それじゃあ急いで探さないで。」

「アキヒサ」

そしたら後ろの方から声が聞こえたので振り返るとそこにはシャルが居た。

けど、何故だろう？笑顔なのにプレッシャーを感じる。

「今までどこに居たのかな？」

「い、いや、それは、その……」

「そうだよな。アキヒサはさっきまで女の子をお姫様抱っこして街中を走っていたんだよね。」

「何故それを!？」

すると、シャルが携帯を開いて画面を見せてきた。
そこには先程までの僕の逃走劇の画像と文章があった。

「え〜と『題名 明久、愛の逃避行。僕達結婚します!!』って何じゃこりゃ!?!」

「アヤトが送ってきてくれたんだ。それでアキヒサ・・・この子は誰?」

綾人おおおおおおおつ!!

こうしてこの後、黒いオーラを纏ったシャルを落ち着かせるのに苦労した。

＼side out＼

＼side 綾人＼

orz状態の3人を放置して駅を出た俺達はデパートまでやって来た。
水着を含めて必要な物を購入した俺達はそこで意外な人物達に出会った。

「あ、あそこに居るのって織斑先生と山田先生じゃないかなー？」

「・・・先生達も水着を買いに？」

「えっ？見せる相手もないのに。」

次の瞬間、俺の目の前に何故か出席簿が飛んできた。

危険を察知した俺はそれをギリギリでかわす。

そしてかわされたその出席簿は柱に当たり、その一部が砕け散った。

「避けるなバカ者！当たらんではないか！」

「避けるに決まっているでしょ！？今の当たってたら確実に死ぬわ！！てか、その出席簿どっから出した！」

俺の言葉にかまわず鬼斑先生は第2投を投げようとしたので、本音と簪の手を掴み急いでこのデパートから逃げ出した。

「ふう、ひどい目にあった。」

「あれはなぎーが悪いよー。」

「・・・綾人が悪い。」

「うっ、それを言われると・・・んっ、あれは明久か？」

俺の視線の先には、学園の制服を着た女の子をお姫様抱っこしているかにもモテなさそうな顔をしている男達と逃走劇を繰り広げている明久がいた。

「よっしーがお姫様抱っこしている子ってさっちゃんじゃないかな！

」

「さっちゃん？」

「・・・川上 さつき。私と同じクラスの子。」

「そうなのか。明久の奴もしかしてシャルロット達とはくれたのか？」

どうやってはぐれたのかすごく気になるな。
てか、手を繋いでいてはくれる事ってあるんだな。

「とりあえずシャルロット達が探しているかもしれないからメールしとくか。」

携帯を取り出して逃げている明久達の写メを撮りシャルロットの携帯にタイトルをつけて送信した。

「よっしー、あの人達から逃げれてもデユノアさんと会ったら不味いんじゃないのー?」「」

「・・・もしかして、そうなるようにする為に写メを送ったの?」

「あ、あそこにカードショップがある。」

「かんちゃんのこととおりみただねー。」

カードショップを見つけた俺は急ぎ足で向かっていく。

決してジト目で見てくる2人から逃げるわけじゃないからな!

第30話 海に向けての前哨戦？（後書き）

綾「そんなに話が進まなかったな。」

いや〜何故かこうなっちゃってしまっ

明「それで今回は龍夜Mk2様から投稿された川上 さつきさんが登場したね。」

綾「その結果、明久はスクイズENDになったな。」

明「なつてないよ！てか、あの写メのせいで大変だったんだよこっちは！！」

龍夜Mk2様、キャラの投稿ありがとうございます！！

うまく書けたかどうか正直不安ですので、さつきの事で何か不快な点がありましたらバシバシ言ってください。

綾「次回はどうなるんだ？」

とりあえず海に着いたところからスタートかな？

それではまた次回！

第31話 海に着いたら11時(前書き)

アンケート 臨海学校で楽しみと言えば何ですか？

織斑 一夏の答え

・クラスメート達と楽しい思い出を作る事。

織斑先生のコメント

織斑らしい解答だな。だが、演習もある事を忘れるな。

セシリア・オルコットの答え

・夜の旅館で一夏さんと・・・

織斑先生のコメント

教師がいるところで淫行を期待するな15歳。

篠ノ之 篝・・凰 鈴音・ラウラ・ボーデヴィツヒの答え

・一夏と一緒に夜の旅館で・・・

織斑先生のコメント

・・・お前達もか。

神薙 綾人の答え

・逆に質問、見せる相手もないのに水着を買った鬼斑先生の心境は？

山田先生のコメント

・織斑先生が急に飛び出していったので代わりに私が・・・って神

薙君！？生徒がそんな事を言っではいけません！！

川上 さつきの答え

・あの時助けてくれたお礼を吉井君に言いたいです。

山田先生のコメント

・別のクラスのが混ざってましたね。でも、頑張ってください。先生も応援しますよ。

第31話 海に着いたら11時

side ラウラ

あれから何とか立ち直り一夏を探す為と今度の臨海学校の為に必要な物を買いにデパートへやって来た。

演習も込みとは言え水着が必要になる。

だが、店の中には様々な水着があり、色とりどりでデザイン豊富で正直何を選べばいいのか分からん。

「これが全て水着か。世の中にはこんなに水着があるのか。」

「しっかり気合入れて選ばなくっちゃね！」

ふと、そんな声が聞こえたのでそちらに視線を向けると、声の印象通りに楽しそうに2人の女性が水着を選んでいた。

「似合わない水着着てったら彼氏に一発で嫌われちゃうもん。」

「他の事全部100点でも水着が格好悪かったら致命的だもんね。」

その瞬間、私は胸に弾丸が撃ち込まれたような感覚に陥った。

たかが水着だと思っていたがまさか、それほどまでに重要な事だったとは!?

事の重大さを認識した私は素早く黒い長方形型の通信機を取り出し、専用回線のチャンネルにかけた。

side out

side ????

ドイツ国内、軍の中にあるIS特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』通称『黒ウサギ部隊』の司令部に、突如、通信が入ってきた。

『クラリツサ、私だ。緊急事態発生。』

「ラウラ・ボーデヴィツヒ隊長。何か問題が起きたのですか？」

副隊長のクラリツサ・ハルフオーフがその通信に応答する。

部隊員達は隊長であるラウラの突然の通信に何かと興味をもち、視線を副隊長に向ける。

『う、うむ。例の織斑一夏の事なのだが・・・』

「ああ、織斑教官の弟で隊長が好意を寄せているという彼ですか？」

『そうだ。お前が教えてくれたところの、所謂私の嫁だ。』

ラウラ・ボーデヴィツヒの突然の変化は恐らく副隊長であるクラリツサが原因なのかもしれない。

『実は今度臨海学校というものに行く事になったのだが、どのような水着を選べばいいのか選択基準がわからん。そちらの指示を仰ぎたいのだが。』

「了解しました。この黒ウサギ部隊は常に隊長と共にあります。ちなみに、現在隊長が所有しておられる装備は？」

『学校指定の水着が1着のみだ。』

その答えにクラリツサの表情が険しいものになる。

「何をバカな事を！！確かIS学園は旧型スクール水着でしたね、それも悪くはないでしょう。だが、しかしそれでは！」

『それでは・・・』

「イロモノの粹を出ない!!」

その渾身の言葉に隊員達がおおっ!と声を上げる。

「さすがは黒ウサギ部隊の副隊長。」

「伊達に日本のマンガやアニメを愛好してはおられない。」

『ならば・・・どっにする?』

「ふっ、私に秘策があります。」

クラリツサは目を光らせて自身ありげにそう告げるのだった。

〈side out〉

〈side 綾人〉

今日は生徒達が待ちに待った臨海学校当日。

空は青く砂浜は白くそして、広がる入道雲は果てしなく大きいという絶好の海水浴日和だで、浜辺には水着姿の女子生徒達でいっぱいだ。

そんな臨海学校初日で俺と明久は今・・・

「・・・焼きそばとカキ氷2人前入ったぞ。」

「・・・了解、今すぐ取り掛かるよ。」

・・・海の家で働かされていた。

「「何でじゃああああああっ!!」」

「うるさいぞバカ者。」

海水浴場に響き渡る俺と明久の叫びを聞きつけたのか鬼斑先生がやって来た。

「おい鬼！何で俺達だけ海の家で働かされているんだよ！？ここはオリ主が原作メンバーと絡むのがセオリーで自然の流れだろ!!」

「そうですよ!!折角海に来て水着姿の女子達と遊べるという男子

だったら涙が出るほど嬉しいイベントなのに何が悲しくて焼きそばやカキ氷作らされてるんですか!！」

「神薙、メタな発言をするな。それに織斑先生と呼べ。お前達の言いたい事は分かった。だが、いいのかそんな事を言つて。」

鬼がニヤリと笑みを浮かべる。

何かスゲーム力つくんだけどその表情。

「女子だけしか居ないIS学園の行事に男が参加しているのはおかしいだろ。織斑はISを動かせる男として世界中からその存在を認知されているが、お前達はどうか？」

「「うっ!?!」」

今回ばかりは反論できんな。存在隠している俺達が普通に居たら確かに不自然だ。

それに一般の人間も居るし、そこから俺達のことかバレてしまう可能性もあるな。

「明久、今回ばかりは俺達に反論する権利はなさそうだ。鬼斑先生達は約束を反故にしていない。」

「そうだね。僕達もその事を忘れていたのも悪いしね。織斑先生、フォローありがとうございます。」

「これに関してはルシエドの提案だが、そう言ってもらえると助かる。」

これはルシエドの入れ知恵か。ホント抜け目ねえなああの犬。

ちなみにルシエドも臨海学校に来ていて生徒達に遊ばれている。ルシエド曰く犬扱いされるのは最大の屈辱だと言っていたが。

「ところでお前達、話しこんでいる暇があるのか？」

鬼斑先生がそう言って視線を別の場所に向けたので俺達もその視線の方向を向くと、そこには客が殺到してしままだか、まだかと待っていた。

「しまった！？客待たせているのすっかり忘れてた！！明久、急いで作るぞ！！」

「了解！！」

「ま、頑張れ。それと学園の生徒も来るだろうから客足が途絶えることは無いぞ。」

「「「やっぱり前言撤回してもいいですか!?!?!」」」

「こうして俺達の海の家に殺到する客との戦いが始まった。

）side out）

）side 一夏）

海に着いて早々セシリアからは殴られるわ溺れている鈴を助けるわと色々あったが海を楽しんでいる。

「明久、今度はラーメンと焼きとうもろこし4人前だ!?!」

「今手が離せないから綾人の方で何とかして!?!」

「わかった、これは俺で用意する!てか、何でこの海の家で働いてるの俺達2人だけなんだよ!?!」

・・・綾人達は見なかったことにしよう。

「イチカ、ここに居たんだね。」

シャルロットの声がして振り向くと、水着姿のシャルロットと・・・銀髪ツインテールで眼帯つけた全身ミイラな奴が居るんだがっ!?!? 何だこのバスタオルお化けは!?!?

「ほら、イチカに見せたら?大丈夫だよ。」

「だ、大丈夫かどうかは私が決める。」

「・・・その声ラウラか?」

そして覚悟を決めたように勢いよくバスタオルを脱ぎ去る。するとその中から顔を真っ赤にして少し大胆な黒ビキニを着たツインテールなラウラがいた。

「わ、笑いたければ笑えばいい。」

「おかしなところなんて無いよねイチカ。」

「おう、可愛いと思うぞ。」

そう言ったらラウラは顔をさらに赤くしてモジモジし始めた。どうしたんだ？

『あのすいません、あそこにいるリア充を殺したいんですけど何か武器になる物ありますか？』

『すいませんお客さん、そういう物騒なのは扱ってないんでとりあえずこの鋭利な焼きイカでも投げてください。』

『あの男だけを狙ってくださいねお客さん達。』

「そしてお前らは客にナチュラルに鋭利な焼きイカ提供すんな！てか、何で俺は一般人の男達から命狙われてるんだよ！？」

それからビーチボール大会になって白熱した試合が展開されていた。

途中、綾人と明久が差し入れといってカキ氷や焼きそばを持ってきてくれた。

休憩時間の間だけという事で綾人もビーチバレーに参加したんだが・

「ふん！！」

「はあっ!!」

綾人と千冬姉が何故か殺気全開で試合をしていた。

千冬姉と同じチームの俺と山田先生、綾人と同じチームののほほんさんと4組の更識さんの4人は2人の放つ殺気に呑まれそうになっている。

「くたばれ不良生徒!!」

千冬姉が放ったスマッシュは目にも止まらぬ速さで綾人に向かっていく。

「IKI OKURE教師に負けるか!!」

綾人は左脚を大きく上げると、勢いよく踏み込んで右腕を突き出し飛んできたボールと激突した。

ボールと拳がぶつかり合い火花を散らす。

そして拳がボールを跳ね飛ばしボールはこっちのコートの上のラインギリギリの場所に落ちた。

「……これはもうビーチバレーじゃないだろ。」

俺の言葉にみんながうんうんと首を縦に振った。

side out

side 明久

綾人達がビーチバレーで白熱しているのを遠目で見ながら僕は海辺でのんびりと休憩している。
海に着いてから休み無しで働いたからすごく疲れたよ。

「あ、あのー／／」

後ろから声をかけられたので振り返ると、以前街で出会った女の子がいた。

「え〜と、確か川上さんだったかな？」

「は、はい！4組の川上 さつきと言います！／／」

「そつえば僕も自己紹介がまだだったね。僕は1組の吉井 明久。よろしくね。」

「は、はい！こちらこそよろしくお願いします！！／＼／」

それにしても川上さんがさっきから落ち着きが無いように見えるけど、どうしたんだろ？

「わ、わたし、よ、吉井さんに言いたいことが／＼／」

「僕に？でも、とりあえず先に落ち着いたほうがいいよ。」

僕がそう言うと彼女は数回深呼吸をした後、覚悟を決めたように勢いよく顔を上げて僕を見据えた。

「好きです！！」（あの時、助けてくれてありがとうございます！！）
（！！）

「……………入っ？」

彼女から発された言葉は僕の思考回路をフリーズさせるほど衝撃的なものだった。

『落ち着けシャルロット！そりゃ愛が重すぎれば憎しみになるって言うけどとにかく落ち着け！』

『どうしたんですか山田先生にアヤト？僕はすごく落ち着いていますよ。』

『だったらその曇った目と黒いオーラを消せ！他のみんながそれでメチャクチャ怖がってるんだよ！』

『何をしているこのバカ者！』

向こうでは先生達と綾人が何故かISを展開しているシャルを取り押さえていた。

偶然にもシャルと目が合ったら、すごくいい笑顔で僕を見ていた・
・黒いオーラを纏いながら。

『（明久、お前は店に戻って避難してろ。）』

「（了解。）」「（ブンブン）」

綾人が目でサインを送ってきたので僕はそれを受けて高速に首を縦に振る。

そして何とかこの場を逃げ出して海の家に戻った。

＼ side out 〉

＼ side ??? 〉

海岸を一望できるであろう岩山に1人の少女が立っていた。
少女・・・篠之野 箒は憂鬱な表情でただ海をじっと眺めていた。

「こんな所にいたのか。何をしている。」

そこに担任教師の鬼m失礼、織斑千冬がやってくる。

「あ、千冬さん・・・織斑先生。」

「気もそぞるといふ様子だな。何か心配事でもあるのか？」

「・・・それは。」

「束の事か？・・・先日、連絡を取ってみた。ラウラのVTシステムの一件は無関係だそうだ。それと神薙達が言うイレギュラーと呼ばれるあの謎のISについても同じだそうだ。」

「・・・はい。」

「・・・明日は7月7日だ。姿を見せるかもしれんなアイツ。」

篤はうんと頷き、脳裏に束の言葉がよみがえる。

『もちろん用意してあるよ！。最高性能にして規格外、そして白と並び立つもの。その機体の名前は。』

「・・・紅椿。」

＼side out＼

＼side 綾人＼

なんやかんやあって海での壮絶な1日は終わり、今は旅館に帰ってきている。

風呂で今日の疲れを癒して宴会場でクラス全員集まっの夕食を頂

いている……一夏達だけ。

「……綾人、僕達って臨海学校終わるまでこんな扱いなのかな？」

「……とりあえず飯食え。考えたところで俺達が無力な事には変わりないんだ。」

「むっ、この炊き合わせの味はなかなか。この旅館の料理のレベルは高いな。」

「そしてお前は何ナチユラルに溶け込んで飯食ってんだよ!!」

別室で夕飯を食べていた俺と明久は、箸を器用に持って飯を食べている奇妙な犬と化しているルシエドにツツコンだ。ちなみにこの旅館はペットOKらしい。

こんな感じで食事していると宴会場の方が騒がしくなり、鬼斑先生が一喝してそれを治めている声が聞こえた。

side out

side セシリア

「うっ、ひどい目に遭いましたわ。」

夕食の時に後で部屋に来てくれと誘われた時にはもう昇天するよう
な気持ちでしたわ。

でも、もしかしたらと思いついて用意していた勝負下着を同室のクラスメ
イト達が見て「セシリアはエロイ。」って言われましたわ。

こ、これはエロくありません！これは身だしなみですわ！！

「は、でもこれでやっと一夏さんに会えますわ。」

そして一夏さんの部屋（と言っても、織斑先生の部屋でもあります
が）のある廊下に辿り着くと、部屋の前で聞き耳を立てている筈さ
ん達を見かけた。

「どうなさいましたの?」

「しっ。」

鈴さんは静かにそういうと、引き戸を指差し再び聞き耳を立てた。
そして、部屋の中の会話が聞こえてきた。

『千冬姉、久しぶりだからちょっと緊張してる?』

『そんなわけあるかバカが。 あん、少しは加減をしる。』

『はいはい。じゃあこじは?』

『なっ、あ、そこは、や、やめ・・・』

『すぐによくなくなるって。 大分溜まってたみたいだしね。』

「こ、こ、こ、これは一体なんですかの／＼／」

聞こえてくる会話の内容を詳しく知る為にわたくしもみなさんと同じく聞き耳を立てる。

すると、わたくしも含め寄りすぎたせいか急に引き戸が外れて前のめりに倒れてしまう。

倒れたわたくし達の目の前にはうつぶせに寝ている織斑先生にマッサージをしている一夏さんがいました。

そして、わたくし達全員は織斑先生からの説教と一夏さんのマッサージを受けるといふ天国と地獄を同時に味わいました。

それから、織斑先生から「女なら奪うくらい気持ちでいかななくてどうする。自分を磨けよガキ共。」という助言もいただきました。

同時刻、綾人達は・・・

「でも彼氏いない歴〇年齢の人が言っても説得力ゼロだ。」

「急にどうしたの綾人？」

「いや、何かツツコまなければいけないような気がしてな。」

「何だそれは？まあいい、では続けるぞ。ドラゴニック・オーバーロードのカウンターブラスト発動！」

「なっ！？それ必勝パターンじゃねえか！」

「手札を消費しすぎたお前が悪いのだ。バーのブースト、オーバーロードでリアガードのゴードンにアタック。お前の手札はG3しかないからガードできまい。」

「くっ、・・・ノーガード。」

「ドライブチェック、クリティカルゲット。効果は全てオーバーロードに、そしてスタンド。次にリアガードのガンスロットにアタック。チェック・・・クリティカルゲット、再びオーバーロードに、そしてスタンド。これでトドメだ、オーバーロードでヴァンガードにアタック。チェック・・・クリティカルゲット。」

「3連続クリティカルとか生き残れるかああっ!!！」

「これで綾人の10連敗だね。」

ルシエドとヴァンガードをして連敗していた。
こうして1日目が終了した。

第31話 海に着いたら11時（後書き）

次回はあの人と絡みます。

綾「あゝあの人か。どういう風な感じになるんだろうなホント。」

明「でも、フラグが立つ心配は無いだろうからちょっと安心だね。」

フラグ立てるって意見もあったけど、あの人にフラグってどうやったら立てれるんだろうね。

綾「リア友から原作借りて見た感じじゃあの性格だと無理があるしな。」

次回は出来たら福音との初接触まで・・・書けたらいいなあー。

綾・明「何か弱気だ!?!」

第32話 朝起きたら6時半(前書き)

みなさん沢山の感想ありがとうございます!!

それとレフェル様、楽しんでます様の作品にうちの綾人が出演しました!

綾「だから報告遅すぎだ!!もう結構前から出ているのに!」

書こうと思ったら何故かバカテストになったりして・・・ホントに遅れて申し訳ありません!

明「そういえばヒョウガ様の作品にも出演するんだよね。綾人、引つ張りだこだね。」

綾「ギャラが入るなら結構な額になってるかもな。」

もしそうなら何に使うの?

綾「とりあえず寄付かな。俺は必要な分だけあればいいから。作者は?」

とりあえずイニグマン・ウェーブが揃うまで虚影神蝕を買うかな。いつまで経ってもデッキが完成しないし・・・

綾「とりあえず使う予定のないメガコロニーのRRRとRRR売って来い。」

明「それでは本編をどうぞ。」

第32話 朝起きたら6時半

明朝、目が覚めた俺は顔を洗って朝食の時間まで暇を潰す為に旅館の中を歩いていた。

明久はまだ寝ていてルシエドはイレギュラーの調査の為にこの周辺をパトロールしている。

退けはしたが倒した訳じゃない。それにあれから日が結構たっているからまたいつ襲撃があってもおかしくないからな。

「それよりも、昨日鬼斑先生が乱入したおかげでヴァンガードが中断されたのが腹立たしい。」

あの後、互いに1軍デッキで戦って俺がルシエドを後一步まで追い詰めたところで鬼斑先生が「早く寝らんかバカ者!!」と言って部屋に襲撃をかけて来たおかげでファイトはおひらきになった。

その時の鬼斑先生はまるで魔界侯爵アモンのようだった。

「今度からはアモン鬼斑と言った方がいいかもな・・・ん、あれは一夏に筈か？」

そんな愚痴をこぼしていると、庭の一部を凝視している一夏と筈を見かけた。

「おはよう一夏、筈。庭に何かあるのか？」

「おう、綾人おはよう。まあ、あると言えばあるんだが……」

一夏は困った顔をして何かを凝視している筈を見た。

つられて俺も見るとその先には……機械で出来たウサギの耳の様な者が埋まっておりその上に「ひばってください」という看板が刺さっていた。

「……これはツツコンだら負けという事か？」

「なあ、これってもしかして……」

「知らん。私に聞くな。」

そう言っつて筈は自分は無関係と言いたそうな表情でその場を後にした。

何やら触れて欲しくない様な感じだったが。

「ところで一夏、お前はこれが何なのか心当たりがあるのか？」

「……一応な。」

一夏は決心したのか表情を引き締め刺さっているウサ耳モドキを抜いたが、特に何も無かった。

「ん、何か音が聞こえる。それに、何かがこっちに向かって落ちて来るような……って!？」

空を見たら何か赤い謎の物体がこちらに向かって落ちてきた。その物体は先程の看板があった所に落下し、その衝撃で砂煙が舞う。煙が晴れたその場所には巨大なメカニンジン？が刺さっていた。

「あははははっ 引っ掛かったねいっくん、ブイブイ」

メカニンジンから笑い声が聞こえると、それが開き出し中から庭に刺さっていたのと同じメカうさ耳を装着してロングの髪に薄紫色で、白を基調とした胸元の空いたエプロンドレスを着用していて胸がデカイ。少しタレ目な瞳の女性が出てきて両手の指をカニの様に動かしVの形を作った。

「お、お久しぶりです束さん。」

「うんうんお久だねえ、ホンットーに久しいね。ところでいっくん、篝ちゃんはどこかな？」

「え、えつと〜・・・」

「まあ、私が開発したこの篝ちゃん探知機ですぐに見つかるよじやあねいっくん、また後でね。」

そう言っつて謎の女性はこの場を後に・・・

「待たんかい!!!」（パシーーン!!!）

しようとしていたので、その前に俺がハリセンを取り出し後頭部に叩きつけた。

えっ、何でそんなの持つてるかって？気にするな。

「さっきからツッコミどころ満載なんだよ！何だ今の登場の仕方は！？下手したら死人が出るだろ！それをほんの茶目っ気みたいなのりですんな！それとそんな探知機使っつて篝見つけるぐらいならさっさと出て来い！後なによりも・・・何でモフモフしたうさ耳つけてねんだよ!!!」

「お前耳の部分が一番怒つてないか!？」

当たり前だ!!!この世界の動物系のコスプレアイテムや着ぐるみの

モフモフ感は本物と引けを取らないほどのクオリティーなのに、何故それがわからない！！

「イタタタ、何だね君は？」

その女は起き上がるとなぜか不愉快そうに俺を見た。

しかも声のトーンが凄い勢いで下がって俺に対して冷たい目の色を浮かべる。

「人をいきなりハリセンで叩いていいと思ってるのかね？いや、君はそもそもそれが出来るほどに偉い人間だと思ってるのか。だとしたらそれは勘違いだよ、有史以来人間が平等だった事はないし君にはその資格はない。なぜそう言い切れるか分かる？君の行動で私の時間が削られるからだよ。というか誰だよ君は？どういう了見でしゃしゃり出て来たんだ。」

その理論武装に俺は何も言わずにそのまま足を踏み出した。

「そもそも君のような礼儀も品性も知性も足りていない不良は私の知り合いには居ないんだが。それに誰だよ君は？」

「言いたい事はそれだけか。」

素早く隠し持っていたライドルを取り出しRのボタンを押す。
ライドロープに変わったライドルを手に取り投擲し、この女をぐるぐる巻きにする。

「えっ？」

驚いている間に遠慮無く背中に回り込んだ上で改めてハリセンでどつく。

「こらこら綾人っ！ お前なにしてんだよっ！？」

「こっちは危うく殺されかけてるんだぞ、それなのに元凶のコイツは全く反省していない。あの時、落下ポイントが少しでもずれていたら一夏に直撃していて確実に死んでいた。怒る理由は十分だろ。」

「綾人、お前……」

「何よりこいつはモフモフの素晴しさをわかっていない！！動物のコスアイテム付けるならそんなメカ物なんて付けんじゃねえっ！！」

「結局お前はそこ一番怒ってるのかよー！！」

そんな事は気にせずハリセンでグリグリする。

「なにより理論武装で人の勢い削ごうって神経が気に食わん！それは上条 麻や日奈森あ 等の話術サイド側の人間の特権なんだよ！！！」

「誰だよそいつ等！？」

「何をするんだね、やめたまえ。私にこんな事をすればどうなるか・・・」

「反省の色は無しか。」

もうちょっとハリセンでグリグリすると、目の前の女は身体を震わせて口から甘い声を出した。

「なによりその格好がいけねえな。うさぎって基本は鳴かないんだぞ。うさぎになりきるんだったらもうちょっと無口になってモフモフの耳を付けないと。なりきり度が中途半端だ。てか、何で段々と息が荒くなってるんだ？」

「くう！違う・・・これは・・・」

いや、真面目にさっきから何で甘い声を出してんだ？
というか、どうして俺の方を見たら何故顔を赤らめるんだ？
何かもうさっきからおかしいんだが・・・

「やめ・・・やめ」

「だったらちゃんと反省しろ。それで結局あんたは誰？何者？」

尋問をせずこの不審者が何者かをハッキリさせないと。

それで謎の女は俺の方へ振り返り赤い顔をしながら俺の方を見た。

「私は・・・変態うさぎです。」

「・・・はい？」

「あなたに叩かれて縛られて感じている、変態なエロうさぎです。
だから・・・やめないで！もっと、もっと叩いてえ〜！」

その艶っぽい目が本気なのが分かって俺と一夏はつい後ずさりする。
ソイツは上半身を起こして寂しげに艶っぽい目で俺を見た。

「どうしてやめるの？ねえ、お願いだからもつと叩いて。あんなの・
・あんなの初めてだった。叩かれる度に電気が走ってこの私が虐
げられている事実が溜まらなく興奮して・・・お願いっ！もつと叩
いてっ！さっきのがもつともつと欲しいのっ！いけない私をもつと
罵ってっ！」

「一夏、通報しろっ！！コイツダメ人間過ぎるっ！てか俺はそんな
つもりで攻撃してないんだけど!？」

「どうしたんですか束さん！？前から変わった人だとは思っていた
けど何でそんな変態になってるんですか!？」

「もうそんなのどうでもいいから早く私をもつと罵ってっ！」

「だが断る!!」(ダッ!)

「あゝん、待って!」

身の危険を感じたのですぐにこの場から逃げ出す俺だが、すぐに変
態が追いかけてくる。

「・・・俺は何も見っていない。うん、何も見なかったことにしよう。

」

見なかったことにすんなよ一夏！知り合いなら止めるよ！！
それから朝食の時間まで変態との鬼ごっこは続いた。

｝side out｝

｝side 明久｝

朝食の後すぐに織斑先生から呼び出しがあり、僕と綾人、それに専用機持ちのみんなは集合場所の磯場にやって来た。

そこそこの広さもあり陸地の方は高い崖で仕切られているため、ここへはちよつとした坂を降りてやって来た。

「それにしてもどうしたの綾人？朝食の時から何かテンションが低いけど。」

「・・・何も聞かないでくれ。俺は朝のアレを無かった事にしたいんだ・・・」

・・・何故か聞いたなら絶対後悔しそうな内容かもしれないと僕の本音が告げたので聞かない事にした。

「よし、専用機持ちは全員揃ったな。」

「ちょっと待ってください。筭は専用機を持っていない筈ですが。」

「それに彼女達は一体？」

織斑先生に質問する鳳さんとシャルだけど、その疑問はもつともだね。

それにしても・・・

「川上さんって専用機持ちだったんだね。それに更識さんも。」

「でも確か更識さんの専用機は完成してないはずですよ、それに4組にクラス代表以外で専用機持ちがいるなんて初耳ですわ。」

「それに関してだが本人たちの口から言った方が早いだろ。更識、川上、説明してやれ。」

「は、はい！実は私の専用機は倉持技研に所属していた兄が私のために設計・開発した打鉄の後継機候補のISなんです。それがつい先日届いたんです・・・」

そう言うと川上さんの表情が少しだけ暗くなっただけど、すぐに元に戻った。

今の暗い表情は一体……

「……私の方もつい先日完成しました。マルチロックオン・システムは完成してませんが戦闘の方に支障が無いレベルです。」

「まあマルチロック・システムもそのうち完成するしな。戦闘能力は製作に協力した俺が保障するぜ。」

「綾人、それどういう意味？」

「そういえば言ってなかったな。簪のISだけど、俺も製作に協力してるんだよ。大掛かりなところは整備科の上級生に頼んで手伝ってもらって、稼動データと戦闘データはゼロと白式のを使って仕上げたんだ。それとは別で誰かからのデータ提供もあったけどな。」

「そうなんだ……あつ、もしかしてトーナメントの前ぐらいの時期からちよくちよく何処かに出かけていたのってそれだったんだね。」

「それと篠ノ之の方だが私から説明しよう。実は……」

『やつほおおおおおおおつ！』

すると、こつちに向かつて誰かが走ってくるような音と声が聞こえた。

それを聞いた織斑先生と篠之野さんは呆れた表情になり、何故か綾人は寒気を感じたかのように震えだし僕の背後に隠れた。

そして傾斜になっている崖の上から誰かが全力疾走してしてこちらに降りてきて、ある程度降りたところで跳躍して織斑先生に飛びかかった。

『ちいちゃあああああああんっ！』

織斑先生は呆れながらその人に手を伸ばし、何故か頭を掴みアイアンクローでキヤッチした。

「やあ、やあ、会いたかったよちいちゃん！さあ、ハグハグしよう！愛を確かめあお・・・」

「うるさいぞ束。」（ギリギリ）

「相変わらず容赦のないアイアンクローだね！」

そのやりとりに僕を含めこの場にいる全員が引いていた。
束と呼ばれたその人は、今度は岩陰に隠れている篠ノ之さんに向か
っていった。

「じゃじゃーん！やあっ！」

「……どうも。」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかな？大きく
なったね箒ちゃん！特におっぱいが……ブフっ！！！」

篠ノ之さんは木刀で躊躇なくその人を殴った。

あの木刀どこから出したんだろう？

「殴りますよ！」

「殴ってから言った！箒ちゃんひどい！」

「おい束、自己紹介ぐらいしろ。」

「えーめんどくさいな。……私が天才の束さんだよ ハロー……
終わり。」

・・・えらく簡単な自己紹介だ。

「束って!？」

「ISSの開発者にして天才科学者の!？」

「篠之野 束!？」

「みんなあの人が誰か知ってるの？」

僕がそう言ったら専用機持ちのみんなが一斉にずっこけた。
あれ？僕何か変な事言ったかな？

↳side out↳

↳side 綾人↳

「ア、アキヒサ、ホントに勉強してるの？」

「ISに関わる人どころか世界でその名を知らない人は殆んどいませんよ吉井さん。」

「吉井、お前には特別補習が必要なようだ。みっちりしごいてやる。」

「何ですか!?!」

そりゃISの基礎中の基礎を知らないからだろ。
でも、あの朝の変態がIS開発者の篠之野 束だったとは・・・

「あつ!き、君は!?!?!?!」

すると、変態が俺を見て顔を紅潮させた。
やばい、見つかった。

「ちいちゃん!あの子ともしかして知り合いなの!?!名前は!」

「落ち着け束、あいつの名前は神薙 綾人。学園の不良生徒だ。」

「誰が不良生徒だ!?!どう見てもごく一般の普通の生徒だろうが!?!」

全く失礼な！

うん？どこからか絶対にそれは無いと聞こえたが気のせいだな。

「じゃあ、あやくんだね。えへへ・・・」

変態は蕩けた顔になって俺に近づいてきた。

「ねえあや君、朝の続き……して欲しいな！。あのね、私天才なんだ。だから他の人なんて基本どうでもいいの。でもそんな私が君みたいな凡人に叩きつけられて罵られて・・・それで凄い興奮するって知っちゃったの。だから・・・」

「鬼斑先生、この人は今すぐ海に沈めましょうっ！てか、誉めてんのかけなしてんのかどっちかにしろっ！あと、俺はあんたを罵ってはいないだろうが!!」

さすがにここまでとなるとドン引き気になってしまうのは許して欲しい。俺はつい後ずさりしてしまう。

「誉めてるよ。あなたは私の私の頭脳でも理解出来ない感覚をもたらしてくれた。私は君との接触を貴重なデータとして記録したいの。だから・・・ね？」

そう言っつて、何故か変態は両手を自分の胸元に当てて谷間を強調して俺に見せてきた。

「確かに私だけデータ取りするのはフェアじゃないよ。あや君がもし肉体的接触による快楽に興味があるなら・・・いや、むしろ私がお願いしたいかも。」

「一体なんの話だよっ!?!」

「だから君と私が(ピーーーーー!)をするという話だよ。」

規制音かかるような事あっさり言っつなっ! あと何でそういう情緒のない言い方するっ!?!

「あれよりも強い形で罵られ好き勝手されたら私の身体と精神がどういっつ反応をするのか知りたいし。調べるならそれが1番だと思っつんだよー。もちろんあや君にも私で欲求を吐き出せるといっつメリットが。」

「断る!!!俺に変態趣味は無い!」

そう言っつと変態はまた蕩けた顔になっつた。もう嫌だこの変態。

「ああ、素敵。そうやって冷たく放置される中にも喜びが存在しているんだね。これは凄く貴重なデータが取れそうだよ。」

「東さん、しっかりしてくださいっ！さっきからここに居る全員ドン引きですからっ！俺も引いてるんですけどっ！」

「あ、いっくん朝方ぶりー。元気してたー？」

「それはアンタに言いたいよっ！アンタしばらく合わない間にマジでバカになっただろっ！」

そんな一夏の悲痛な叫びを無視して変態は改めて俺の方を見てまた笑った。

「それよりもあや君、私を好きにしてくれていいよ？自慢じゃないけど身体は普通の女性よりスタイルが良いから。あや君が望むならどんなプレイを行ってもいいから・・・私をさっきよりも激しく罵って踏みつけて・・・はあ、はあ・・・ああんっ！」

なんか身体震わせて色っばい声出したっ！？てか、その幸せそうな顔するのやめろっ！

誰かー！ここに変態が居ますー！非常に救いがたく特殊な変態がい

まーすっ！

「ああ、興奮する。こんなのは初めてだよ。ねえ、分かる？あや君が私の性欲をかき立ててるんだ。天才束さんはそういう変態さんだったんだね。これは大発見だよ。」

「んなもん分かるわけもないし分かりたくもないわっ！よし、話進めましょう！鬼斑先生、コレがとてつもないド変態なのはよく分かりましたっ！それで結局この変態は何でここに来たんですかっ！確か現在逃亡中じゃありませんでしたっけ！」

「あ、それは簡単だよー。ふっふーん。」

変態は右手を大きく上げて、天を指差し不敵に笑う。

「さあ、大空をご覧あれー！」

俺はみんな共々上を見上げた途端に猛烈に嫌な予感を感じて叫ぶ。

「各自、散開しろ！！」

声を上げてから数瞬後、俺達のほぼ真上から太陽の輝きを受けた銀

色の正八面体のオブジェが落下してきた。

轟音を響かせながらそれは地面に立ち、俺達はそれを囲むようにしながら啞然としていた。

「おい変態！」

そこで恍惚とするな！俺の一体なにがそんなに気に入ったんだよ！？

「うつとりすんな！また殺すつもりか！朝のアレ全然反省してないだろ！！」

「えへへ・・・あやくーん」

いきなり飛び込もうとしてきたので、素早く右手を伸ばしてアイアンクローを変態にかます。

「ああ、素晴らしいよこのアイアンクロー！ちいちゃんにも負けないくらいの力強さに私に対してのこのそっけなさが・・・はあ、はあ・・・はあああああああああああんっ！いいっ！いいよあやつくんっ！私が変わっていくのが分かるんだっ！この感動を今すぐ伝えたいよっ！」

「鬼斑先生、この変態マジで海に沈めていいですか！あと箒、お前の姉なんだから止め……って背を向けるな！お前不干涉の姿勢保つつもりかいっ！」

「東、落ち着け。それよりこれは何だ。話が進まないからとっとと説明しろ。あと神薙、説明が終わったら沈めても構わん。」

「えー、やだーめんどくさい。」

「いいから説明しろっ！これは何でお前は何でここに居るのかはつきり説明しろ！そうしてくれないと沈められないだろうが！」

「うーん、あや君がそう言うなら。」

変態が何かのスイッチを取り出して押すと、落下した銀色の正八面体が一瞬で粒子化していく。

その中から出てきたのは、紅い鋭角的なデザインがところどころに見られる巨大物体。

巨大なガントレットに具足、背中はそれに接続されていない形で存在している巨大なウイングユニット。それは……

「これが箒ちゃん専用機っ！全てのスペックが現行ISを上回る最新型　その名も紅椿あかつきはなっ！」

その物体の正体はISだった。

第32話 朝起きたら6時半（後書き）

東さんにフラグを立てたのは綾人でした。

綾「おい作者！明らかにアニメや原作よりも変態度上がっているだろあのうさぎ！」

いや、東にフラグ立てるならお前の変態度を上げたら立つんじやないかって意見があったんだけど・・・あえて東の変態度を上げてみる事にしたの。

明「その結果がアレなんだね・・・」

何か不思議な事に書いていて筆が進んだんだよね。

綾「その結果、福音のふの字すら出なかったと。」

次回には出すよ。そうじゃないと終わりが見えないから。

第33話 その境界線の上に立ち（前書き）

書き上がったので投稿します。

綾「今回はどれだけ進むんだ？」

・・・それでは本編どうぞ！

明「そんなに進まないみたいだね。」

綾「本当にいつ終わるんだよIS編。」

第33話 その境界線の上に立ち

「これが箒ちゃん専用機っ！全てのスペックが現行ISを上回る最新型 その名も紅椿あかつばきっ！」

その言葉で織斑先生と変態うさぎ以外の全員の表情が驚愕の色に染まる。

変態は嬉しそうに更に表情を緩め、左手を胸に当てる。

「何たって紅椿は天才束さんが作った第4世代型ISなんだよ！」

「第4世代！」

「各国でやっと第3世代型の試験機が出来た段階ですわよ！」

「なのにもう第4世代型が！」

「そこがホレ、天才束さんだから」

変態の発言に各人が驚愕し意見を述べる。
なるほど、ISのコアを開発した天才なだけはあるな。

「さあ、箒ちゃん。今からフィッティングとパーソナライズを始めようか。」

すると紅椿の各パーツが展開して人が乗り込む体勢を作る。

鬼斑先生に促され箒は紅椿を見る。その目には驚きと喜びの2つの色があった。

「箒ちゃんのデータはある程度先行して入れてあるから、後は最新データに更新するだけだね。」

そして変態が箒の紅椿とのフィッティングとパーソナライズを始めた。

その手の動きは早く、出てくる画面が瞬く間に消えていく。

「すごい、信じられないスピードだわ。」

「救いようのない変態だが、伊達に天才を名乗ってはないうて事だな。」

「ああん！あやくんの罵声交じりの褒め言葉がすごくいい！あやくん、もつと束さんを罵ってメチャクチャにしてええええっ！！！」

「アモン・・・鬼斑先生、この変態海の藻屑にしているんですか！パ
ンツアの全武装使って塵にしているんですか！！」

「個人的には許可したいがダメだ。それと今何か言わなかった神薙
？」

「気のせいです。・・・変態、1つ聞きたいことがある。」

「何かな？あやくんの言う事なら何だって聞いちゃうよ。」

変態の言葉に寒気がするが、それをガマンしてある事を聞く事にし
た。

「お前は特殊なコアを作ったりしたか？そして、それを世界中の企
業が保有するコアにこっそり混ぜたりしたか？」

俺の質問を聞いて一瞬だが変態の手の動きが止まったが、すぐにま
た作業を再開した。

「それについては私も聞きたかった。東、結局のところどうなんだ
？」

「質問の答えはYESだよ。試しに作ったコアを2つほど世界にばら撒いてデータ収集をしたかったんだけど、まさか誰にも動かせないときたからね。回収もめんどくさかったしそのまま放置する事にしたの。」

「それで東、そのコアはどんな物なんだ？」

「あの時はゾドにすごくハマっててその影響でオーノイドみたいなコア目指して作ったんだけど、搭載した機体が機動しないってわかったらしらけちゃってね。いつの間にか忘れちゃってたんだよ、テへ」

「すごくどうでもいい理由で作られたんだなオイ！」

「しかもさつき放置したって言ってたけど、実はただ忘れてただけなんだね。」

ちなみにこの質問をしたのはゼロと村雨の事を知る為だ。

どっちとも第2世代型でありながら第3世代型に匹敵するどころか下手したらそれすらも超える性能を持っている。

ISの事を詳しく調べているうちにあの2機だけはこの世界のどの企業でも作れるほどの技術が無い。

もし原因があるとしたら、それは自然とコアになる。コアは開発者である変態ならソレの製造も可能だしな。

そんで出た回答がゾイにハマって作っただ。話を聞いた鬼斑先生

や他のみんなも呆れているぞ。

「もし起動してたなら第4世代型と同等かそれ以上の機体になってたかもね・・・フィッティング終了！チヨー早いねさすが私」

いつの間にかもうフィッティングが終わったようだ。

喋りながらも手を動かすのをやめてはいなかったからそりゃ早く終わるな。

「そんじゃ試運転も兼ねて飛んでみてよ。篝ちゃんのイメージ通りに動く筈だよ。」

「ええ、それでは試してみます。」

ゆっくりと浮かぶ紅椿　篝。そして次の瞬間には飛び上がり、周囲に風をまき散らし雲を突き抜けるような高度に達した。

「何これ、速い!？」

「これが第4世代の加速・・・っと言う事!？」

篝は空をせわしなく飛び回る。遠目からだけどかなりの速度出して

るのがわかる。
青い空の中で紅い機体はかなり目立つから見失う事は無く動きが追える。

「じゃあ刀使ってみよつか。右のが雨月あまつきで、左のが空裂からわれね。武器特性のデータ送るよーん」

空中モニターを展開して箒を見ながら通信で指示を出す変態。
箒は両手に刀を持って降下しながら急停止し上空目がけて右の刀を打ち込む。

すると刃の軌跡から4つの紅の閃光が放たれ、射線線上にあった入道雲を突き抜ける。

遠く先にある入道雲は放たれた4つの力の衝撃により一瞬で弾けた。

「いいねいいね。じゃあ、今度はこれ撃ち落としてみてね。」

変態が右手で箒を指差すと、何故か突然その横に全長2メートルぐらいありそうな緑色のミサイルランチャーが現れた。

「ちょっと、アレ何っ!？」

「……事前に量子変換してあの場に設置してたんだと思う。」

簪の説明で疑問の声を上げた明久共々納得している間に、ランチャーからミサイルが連射された。

これはやり過ぎじゃないのか？・・・と思ったが、筈は飛んできたミサイルに対して今度は左の刀を振るいそこから紅い斬撃波が放たれた。

紅い斬撃波はミサイルに迫り、その全てを両断していった。

「・・・やるな。」

「・・・すげえ。」

「これが第4世代型の力・・・」

「うんうん、いいねいいね。あはははっ、うふふふっ。」

紅椿の驚異的な性能に各々が驚くなか、変態の歡喜する笑い声が聞こえる。

鬼斑先生はそんな変態を険しい表情でジッと見ていた。かく言う俺もさつきから胡散臭い目で変態を見ている。

『た、大変です！！』

突如、通信機から慌てた声が聞こえてきた。後ろを振り返ると、山

田先生がこちらに向かって走って来た。

「はあ、はあ、織斑先生！！・・・これを！」

山田先生が鬼斑先生に携帯型の機械を渡すと、そこから複数の小さな空中モニターが現れる。

「特命任務レベルA、現時刻をもって対策を始められたし・・・テスト稼動及び予定していた演習は中止だ。お前達にやってもらいたい事がある。」

どうやら何かあったらしく、俺達は鬼斑先生の指示のもと宿に戻った。

だが、何だこの違和感は・・・

side out

side 一夏

予定していた演習が中止になり一般生徒は各自の部屋で待機になったが、専用機持ちである俺達だけは宿の一室に集められた。

携帯型の機材が各所に置かれ奥には大型の空間モニターが設置されて部屋の中は司令塔に早変わりした。

それぞれの機材の前ではIS学園の先生達がせわしなく指を動かす。そして俺達の前にも長方形型のモニターが床に沿って展開して、それを挟むように着席している。ちなみに束さんはあの場に置いてきた。その事で綾人がかなり喜んでいたので見て全員が苦笑した。

「それで鬼斑先生、そろそろ説明いいですか。先生達が臨戦態勢入ってるあたり只事でないのはわかりますが。」

「2時間前、ハワイ沖で試験稼働にあつたアメリカ・イスラエル協同開発の軍用第3世代型ISシルバリオ・ゴスペルが制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したと学園の上層部から連絡があつた。なお、この機体は無人のISだそうだ。」

それを聞いた俺達10人は表情を険しくした。

「訳したら銀の福音か。それで暴走して暴音と化したソレを俺達で止めろって事ですか？」

千冬姉は綾人の方を見て頷いた・・・って、

「「ええっ!？」」

俺と明久がユニゾンで驚いたが、それを無視して話が進んでいく。

「……それって福音がこの近辺に来るって事ですか鬼m織斑先生？」

「そうだ。衛星による観測の結果、福音はこのままいけばここから2キロ先の海域を通過する事が分かった。時間にして50分後、学園上層部により我々がこの事態に対処することになった。それと更織、今鬼斑と言おうとしなかったか？」

「……い、いえ。」

「ならいい。神薙、とりあえず1発殴らせろ。」

「何でだよ！？そんなんだから鬼って呼ばれるんだろうが！」

それについては同意するが、更織さんが段々悪い方向で綾人に染められていってるな。

「話を戻す。教師部隊は訓練機を使用して現場の海域を封鎖を行う。よって、この作戦の要は専用機持ちに担当してもらう。」

「マジですか!?!」

「いちいち驚くな鈍感コンビ。」

「急にそんな事言われたら誰だって驚く……って、驚いているの
って僕と一夏だけ?」

「……そうみたいだな。でも綾人、鈍感ってどういう意味だ?」

俺の質問に綾人が……いや、俺と明久以外が呆れたようにため息
をついた。何でだ?

「それでは作戦会議を開始する。意見のあるものは挙手するように。」

「はい。」

セシリアが真剣な表情で右手を上げてから、素早くその手を下ろす。

「暴走ISの詳細なスペックデータを要求します。」

「うむ、だが決して口外するな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会の裁判と最低でも2年の監視がつけられる。いいな。」

千冬姉が俺達全員が頷いたのを確認したら、床のモニターに白いISと英文で書かれたスペックデータ表が現れた。

セシリア達の会話を聞いて大体はわかった。

福音は広域殲滅を目的とした特殊射撃型で、セシリアのブルーティアーズと同じくオールレンジ攻撃が行えるらしい。

攻撃と機動に特化した機体な上に厄介な特殊武装を装備しているようだ。

福音が音速飛行で移動している為偵察が行えないらしくこれ以上の詳細なデータは無いらしい。

「それに福音にはリミッターがかけられてはいない。よって、保有エネルギー量はかなりのものになるため消耗を考えずに連発してくる可能性もある。そしてアプローチもおそらくは1回が限界だ。」

「一回限りのアプローチ……つまり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね。」

山田先生がこちらへ振り向いてそう言った。

俺はその意見にうんうんと頷いていると、いつの間にか周りの視線が俺に集まっていた。

「あんたの零落白夜で落とすのよ。」

「それしかありませんわね。ただ、問題はとうやって一夏さんをそこまで運ぶかですわ。」

「エネルギーは全部攻撃に使用しないと難しいだろう。問題は移動だ。目標の速度に追いつけるISでないといけないな。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう。」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！？俺が行くのか？」

『当然！』

「おわっ！？ユニゾンで言うな！」

「・・・織斑、これは訓練ではない実戦だ。覚悟が無いなら無理強いはしない。もちろんやめたからと言ってお前に不利益がかかったりはしない。・・・どうする。」

俺は千冬姉の言葉にハツとなり、自然と右手は握りこぶしになっていて力強く握っていた。

ほんの少しだけ考え、俺は答えを出した。

「・・・やります。俺がやってみせます。」

「よし、それでは専用機持ちの中で最高速度が出せる機体は。」

「ちょっと待ったー！その作戦はちょっと待ったなんだよ！」

突然、天井から声がしたので上の方を向くと、天井の壁の一部が抜けてそこから束さんが現れた。

あの人、また変なところから出たな。

「ちいちゃんちいちゃん、もつといい作戦が私の頭の中にナウプリーディングー」

「出て行け。」

「そして二度と現れるな。」

束さんに千冬姉と綾人が頭を抱えながら退場命令を下すが、それに聞く耳を持たずに束さんの話しは続く。

「聞いて聞いて、ここは断然！紅椿の出番なんだよ」

「何？」

東さんの提案で周りに戦慄が走る。

「・・・なるほど、そう言う事か。」

ただ1人、綾人だけが険しい表情で何かを言っていた。

side out

side 綾人

変態の言った提案でこの作戦は白式と紅椿の2機で行うことになった。

何でも紅椿の装甲は全身展開装甲になっていて攻撃力、スピード共に向上するらしい。

一夏と篤の2人は作戦決行の為に近くの浜辺で待機しており、残った俺達は作戦室での待機となった。

「織斑、篠ノ之、聞こえるか。今回の作戦の要は一撃必殺だ、短時間での決着を心がける。討つべきはシルバリオ・ゴスペル、以後は福音と呼称する。」

『了解!』

『織斑先生、私は状況に応じて一夏のサポートをすれば良いですか?』

「そうだな……。だが無理はするな、お前は紅椿での戦闘経験は皆無だ。突然なにかしらの問題が出るとも限らない。」

『わかりました。ですが、できる範囲で支援をします。』

今から命がけの実戦だったのに、篝の声はどこか楽しい感じのものに聞こえる。

「あの子、ちょっと声が弾んでない?」

「ええ、そう聞こえましたわね。」

「……篠ノ之さんの気持ちはわかります。ですが……」

「何だか嫌な予感がします。」

他のみんなも箸の状態に疑問を感じているようだ。
特に簪と川上は先日専用機を持ったばかりだ、通じるものがある
んだろう。

「織斑へのプライベートチャンネルを。」

「はい。」

鬼斑先生の指示で山田先生がキーボードを叩いて通信を切り替える。

「一夏、これはプライベートチャンネルで篠ノ之には聞こえない。
・・・どうも篠ノ之は浮かれている、あんな状態では何かを仕損じる
やもしれん。いざという時はサポートしてやれ、頼むぞ。」

『わかりました。意識しておきます。』

モニター画面に映った表情を見るに俺達が危惧している事を一夏は
わかっているようだ。

「オーブンチャンネルに切り替えます。スタンバイどうぞ。」

「では、始め！」

鬼斑先生の号令で作戦が決行された。

一夏が箒　　紅椿の背部装甲に？　　まり、すっかり背負った事を確認した箒は紅椿で一気に加速して飛翔した。

「イグニッションブーストの比じゃないよ！？」

「驚異的な速さだ。」

みんなが改めて紅椿の性能に驚いてるなか、誰にもばれないように俺と明久はこっそり部屋の中から退室する。

「（それじゃあ、俺達も行きます。）」「

「（一夏達を頼む。）」「

出る直前に鬼斑先生と目が合い、軽くアイコンタクトを交して部屋を出る。

そして足音を出さないように急ぎ足で一夏達がさっきまでいた浜辺に向かった。

第33話 その境界線の上に立ち（後書き）

次回は戦闘パートになります。

綾「福音は名前だけしかでなかったな。それにしても久々の戦闘だな。番外編から数えると約一ヶ月ぶりになるな。」

明「そういえばオリジナル挟んでから第4の世界に行くんだよね。」

そうだよ。でも、それでちょっと考えてる事があって。

綾「何をだ？」

第4の世界からはお前達2人をばらけさせてそれぞれ別の世界に行かせようかと考えている。

綾「つまり俺が別の世界に行ってるのと同時に、明久も別の世界に行っているという事か。」

そうそう、それでしばらくしてまた合流みたいな感じで。

明「それって断空我様の新訳前のドラゴンナイトみたいな感じになつてない？」

綾「確かに。そこんとこどうなんだ作者？」

さて、次回の執筆を始めないと。

綾・明「逃げたな。」

第34話 ゲット・レディ（前書き）

今回は福音戦その1です。

綾「久々の戦闘か、腕がなるぜ。」

明「ところで作者、戦闘描写の方は？」

そんなの自信ないに決まっているだろ

綾「気持ち悪い喋り方すんな。安心しろ俺は初から期待していない。」

明「僕もただ一応聞いたただだしね。綾人同様期待してないよ。」

・・・グスン、グスン。

綾「泣いている作者は無視して、それでは本編をどうぞ。」

第34話 ゲット・レディ

side 一夏

作戦開始の時刻になり、俺と篤はIS展開後すぐに発進した。

しっかし紅椿・・・マジで速いな。こんな加速はイグニッションブ
ーストでも味わった事がない。

というか、マジで篤に 紅椿の背部装甲に掴まる感じなんだよな。
我ながらちよつと情けない。

「 暫時衛星リンク確立、情報照合完了。 目標の現在位置を確認。 一
夏、 一気に行くぞ。」

「 お、おつ。」

すると、紅椿の装甲の各所が展開し、そこから薄い羽のような紅き
翼が形成された。

それにより紅椿は今よりもさらに加速していった。

そして、紅椿から警告音がなり始め、右のモニターに白くて大きな
翼を持つISが映っていた。

「 !?・・・見えたぞ一夏! 」

「あれが・・・シルバリオ・ゴスペルか。」

「加速するぞ。目標に接触するのは十秒後だ。」

箒は速度を上げ、福音の後を追いつつも下降していく。

俺は紅椿の背に乗り膝立ちの体勢になり、雪片式型を展開させ零落
白夜を発動する。

「うおおおおおつー！」

距離が段々と近づき、俺はただ福音だけを見つめて・・・雪平を構え、沸き上がる力の全てを袈裟に叩きつけようとしたが、シルバリオ・ゴスペル　福音は急遽反転して一気に上昇していく。

「箒、このまま押し切るー！」

箒に今のスピードを維持させるよう頼み、福音に一気に近づく。

「はあああああつー！」

雪平を構えなおし、福音の袈裟に振りかぶる。
しかい、その一撃は紙一重でかわされる。

「かわした!？」

福音は俺達から距離をとり翼を広げ次の瞬間、そこから無数の青白い弾丸達が放たれた。

すぐに紅椿の背中から離脱して俺達は散開した。

放たれた弾丸は追いかけるようにその軌道を曲げて箒に向かっていった。

箒はそれをかわしていたが、背部装甲に1発が被弾するも体勢を立て直す。

「箒、左右から同時に攻めるぞ。左は頼んだ！」

「了解した。」

箒は雨月と空裂を展開して構え、福音に向かって左翼から突っ込む。

「はあああああつ！」

「うおおおおおつ！」

2人で左右から福音への接近を試みるが、ヤツは弾丸を雨のように

展開し、俺達はそれをかわすので精一杯なため思うように近づけな
いでいた。

「一夏、私がヤツの動きを止める。その際に！」

「わかった！」

side out

side 等

福音の動きを止める為に紅椿の展開装甲を発動させ装甲各所に紅い
翼の様なエネルギーブレードが形成される。

2機の背部ユニットを切り離し福音に向けて射出する。

背部ユニットはセシリアのブルーティアーズのようにビットとして
も運用できる。

「はあああああつ！」

エネルギーブレードを展開した2機のビットが福音に迫る。

ヤツは1機目を回避するも、続けて向かってきた2機目を回避でき
ずバランスを崩す。

その隙に私が斬りかかるが、当たる直前に私の腕を掴んで防御され

た。
だが、動きは止めた！

「一夏、今だ！」

「おう！」

私の合図で上空にいた一夏が福音目掛けて急降下する。

「!?!」

これで決まる、そう思った。

だが、一夏は私の後ろをそのまま通り過ぎて行った。

「一夏!?!」

通り過ぎていった一夏を見ていたのが隙となつて、福音は私を跳ね飛ばし再び弾幕を放った。

流れ弾が一夏の方に向かったが、一夏はそれを回避せず展開していた雪片のエネルギーブレードでそれを弾いた。

「ふう。」

「何をしている！？折角のチャンスに！」

「船がいるんだ、海上は先生達が封鎖したはずなのに。」

「船？」

どうして福音を攻撃しなかったのか一夏に通信を開き問い詰める。返ってきた返答は封鎖されている筈のこの海上に船がいるというものだ。

確認の為に辺りをサーチしたら、国籍不明の船が確かにいた。

「密漁船のようだ。」

「密漁船・・・この非常事態に！」

海面に浮かぶ密漁船を見て一気に怒りをたぎらせるも、福音が弾丸をこちらに向け放ってきたためそれを回避する。

だが、一夏は回避せず海上に・・・いや、あの密漁船を守るように雪片で弾丸を弾いていた。

「奴等は犯罪者だっ！構うなっ！」

「見殺しには出来ない！」

そう言って一夏は弾き続ける。しかし、エネルギーが切れた事により展開していたエネルギーブレードは消え雪片は元の形に戻ってしまふ。

無防備になった一夏に1発の弾丸が迫るが、私が左腕に搭載されたシールドでそれを防ぐ。

「バカ者！犯罪者などを庇って！そんな奴等は放っておけ！」

「箒っ！」

怒気迫る真剣な表情の一夏の声に驚き、私は後ずさってしまふ。すると突然、私の視界には暗く星のような輝きに満ちた世界が展開された。何だ、ここは。

”箒、そんな・・・そんな寂しい事言つなよ”

通信ではなく直接頭の中に一夏の声が響いてくる。

これは一体・・・まさかとは思うがこれはISのコアネットワークの影響？

以前本で読んだ事があるが、姉さんが造ったISのコアはそれぞれ

が独立した個体でありながらも共通のラインを持っているという。それで別の機体の搭乗者の精神が同調した時、そのラインを通じてテレパシーのような事が出来るとか。まさか、これがそれなのか。

”力を手にしたら弱い奴のことが見えなくなるなんて・・・どうしたんだよ箒”

一夏は悲しげにそう言ってきた。

”らしくない。全然らしくないぜ”

”わ、私は・・・”

＼side out＼

＼side 一夏＼

箒は両手に持っていた刀を力なく落とす。

落ちていった刀はそのまま量子分解して消えていった。

震えながら自分の両手を見た箒は、視界を隠すように頭を抱え押し殺すように嗚咽を漏らした。

あいつもエネルギー切れか・・・

だが突如、福音は箒に向かって大量の弾丸を発射した。

「!?!?間に合つてくれー!!!」

俺は幕の前に出て襲い来る弾丸からその身を盾にして守る。
弾丸は容赦なく俺の体に直撃していき大きな爆発が起きる。
エネルギーが切れ、雪片が使えない今これしか方法が無かった。

「一夏あああああつ!!!」

あまりの絶対防御があるとはいえ、身体に伝わる衝撃とダメージは半端ではなく今にも俺の意識はとびかけていた。

「一夏!」

泣きながら俺の元に向かって来る幕と爆炎で燃え尽きていくリボン。
そして迫撃をかけようとすする福音を、紺と赤の何かがぶっ飛ばした
光景が映つたのを最後に俺の意識はそこで途絶えた。

side out

side 綾人

一夏達が発射してから数分後、同じ浜辺から俺と明久はISを展開しすぐさまワンオフアビリティを発動。高速戦闘型のイーガーと疾風にチェンジして全速力で一夏達の後を追いかけていた。

その途中、明久が通信を繋いできた。

「綾人、どうして僕達も一夏達と一緒に行かなかったの？4人で戦った方が成功率は高いはずだよ。」

「それにはちょっとした理由があるんだよ。」

「ちょっとした理由？」

「学園の生徒で専用機持ちでも俺達は秘匿された存在だ。そんな奴等が極秘の作戦にいきなり登場して活躍なんて事になったら色々面倒だろ。特に今回は国家問題にも発展するかもしれないって事件だ。他の世界に存在がばれないように上層部の方で色々と裏で手を回してもらってたんだ。」

「なるほど、それが完了してなかったから一緒に行けなかったんだね。」

「そう言う事だ。それに……っと、どうやらお喋りはここまでの

ようだ。」

ゼロと村雨から警告音が鳴り出したので、会話をやめ右側に出てきたモニターを見た。

そこには箒に迫り来る弾丸から身を挺して守ろうとする一夏の姿が映った。

弾丸は容赦なく一夏に直撃していき爆発が起こり、箒は一夏を庇うように抱きしめ一緒に海上に落ちていく。

福音は2人に追撃をかけようとするが・・・

「このクソ野郎が！」

「させるか！」

明久は二刀の小太刀を、俺はストライククロウを展開して福音に斬りかかる。

ヤツは当然現れた俺達に対して反応しきれずにその直撃を受けぶっ飛ばされる。

「綾人、早く一夏達を！」

「それは教師部隊の人達に任せよう。福音をどうにかしない事には救助も難しい、だから俺達で福音を引きつける。・・・鬼斑先生、今の聞こえましたか？」

『問題ない。回収部隊は既に向かっている。だから・・・福音を』

「・・・了解しました。」

通信を終え、俺達は福音に目を向ける。

福音は動きを止め、こちらを観察するかのように見ていた。

そしてヤツの頭部のモニターに文字のようなものが映し出されると、一変して両翼を展開して弾丸を放ってきた。迫り来る弾丸を散開して回避する俺達。

「さあて、第2ラウンド開始だぜ。」

「絶対に止めてみせる!」

雨のような弾幕を回避しながら突撃する俺と明久。

福音はさらに弾丸を放とうとしたが、俺は瞬時にイオンブースターを展開し急接近し、至近距離で全バルカンポットを一斉掃射する。絶対防御の影響でダメージは少ないがエネルギーを削るのには十分だ。

それにバルカンの一斉掃射で煙が舞い、それは少しずつ周囲を囲むかのような大きさにまでなる。

福音は視界を晴らすようと自身を回転させ、その風圧で煙を晴らす。だが、目の前には誰もいない。

それもその筈、なぜなら・・・

「ストライクレーザークロー！」

既に俺はヤツの上空にいるからだ。

ワンオフアビリティを発動して上空から福音目掛けて突っ込む。
奴は回避行動をとろうとするけど・・・遅いぜ！

「翼の一本もらっていくぜ！」

翼の根元を狙い斬り裂く。

片翼を失った福音はバランスを大きく崩したところに、別方向から
追撃をかける機体がある。

「ついでにもう一本もらっていくよ！」

明久は疾風で急接近し、攻撃の時に瞬時に村雨に戻りムラサメブレ
ードを振るう。

ムラサメブレードは残った片翼の根元を斬り裂いた。

全ての翼を失った福音はそのまま重力に逆らうことなく海へと落下、
大きな水しぶきが上がる。

福音の落下地点を見ながら通信を繋ぐ。

「・・・鬼斑先生、救助部隊の方は？」

『2名の救助を完了し、すぐにこちらに戻ると報告があった。・・・福音の方は？』

「とりあえず翼の折れた天使ならぬ翼のもげた福音状態にして海に沈みました。」

『!?!? やったか!』

「ちょ、ま!?!? そのセリフは!?!?」

「それを言っではダメです織斑先生!」

その時落下地点から凄まじい光の柱が立ち昇った。

それに目を見開いている間に光は霧散して、その中には・・・福音が居た。

翼を斬り落とした筈なのに背中には八枚の光の翼が生えた状態で。

「鬼! お前のせいで生存フラグどころかパワーアップフラグまで立つちまったじゃないか!」

「織斑先生、責任とって何とかしてくださいよ！」

『ええい、わけのわからん事を言うな！それに何故私の所為になる！』

「そんなもん生存フラグ立てたからに決まってるんだろ！やったかってセリフは最強の生存フラグ何だよ！世界の常識だろうが！」

『ふむ、確かに。クラリツサもそんな事を言っていた。教官、これはやはり教官の所為なのでは？』

『そんなもの知るか！それはお前の中の常識だろ！それとラウラ、お前は黙っている！いくらなんでもキャラ崩壊しすぎだ！』

「ちよつとみんな、喧嘩している場合じゃないよ！福音が来るよ！」

明久の言葉で福音の方を見ると、福音は翼を動かしその先を自身の頭上に向け、翼と同じ色の巨大なスフィアを形成し始めた。そして、形成されたスフィアから奔流が撃ち出された。

「ダメだ、避けられねえ！？」

回避しようとしたが、奔流の弾速は予想以上に早くその直撃をくらい俺は海に墜落した。

side out

side 明久

「綾人!？」

復活してパワーアップした福音の攻撃を綾人は避けられず直撃、墜落した。

「そんな、綾人がやられるなんて・・・うあつ!？」

動揺している僕に福音は容赦なく攻撃を仕掛けてくる。
落ち着くんだ、今は戦闘中だという事を忘れてはいけない。
早く福音を何とかして綾人の救出に行かないと。

「くっ、疾風!」

疾風にエヴォルトして福音に接近してムラサメディバイダーとナイフで斬りかかる。

ただど福音は2刀の小太刀を片手で掴み、残ったもう1つの腕で僕の腕を拘束した。
抜け出そうと必死にもがくけど、力が強くて抜け出せない。

「ぐうう！だつたら！」

エヴォルトを解除して疾風から村雨に戻る。

それにより？まれていたデバイダーとナイフは大太刀のムラサメブレードに変わる。

大きさが変わったことで福音の片手で掴んでいた福音は仰け反る体勢になってしまう。

「抜け出せないなら・・・このまま押し切る！」

ブレードを持つ手にさらに力を込めて無理やり押し切る。

だがその時、福音が翼を大きく広げたそれは一瞬で僕を包み込み、翼から翡翠色の電撃が放たれた。

「ぐあああああああつ！」

その痛みに思わず叫んでしまう。

電撃を受け続けた痛みで身体に力が入らなくなり、意識を保っているのがやっとだ。

それだけでなく電撃が村雨のの装甲各所を叩き、そのボディにヒビ

を刻みつけ続ける。

・・・薄れゆく意識の中でも福音が電撃を止めたのが分かった。僕は身体のおちろちろから白い煙を上げながらも福音を見上げる。福音は翼を広げ・・・またあのスフィアを形成し、動けない僕に対して奔流という形で放たれる。

それを避けられはらずもなく真正面から受け止め、大きく吹き飛ばされて一気に下降し海上に叩きつけられる。

シールドエネルギーはまだ僅かに残っているけど・・・身体が痺れて動かない。

そんな僕に対して福音は・・・翼を広げ弾丸の雨を降らしていく。

村雨が出てくれた警告画面にその様子が映っている。

でも無理だ・・・僕は動けない。それに・・・もう意識が持ちそうにない・・・

「明久!!」

僕を呼ぶ声が聞こえたのを最後に僕の意識は途絶えた。

side out

side 綾人

結論から言おう。作戦は失敗、一夏と篝の2人は俺と明久が福音を引きつけている間に教師部隊によってなんとか回収された。

パワーアップした福音に撃墜されてもエネルギーは残っていたが戦

闘できるほどではなく俺も意識を失っていた。
目覚めた時には、海上に浮いている明久に弾幕の雨が降り注がれようとしていた。

弾幕の雨が降り注がれる中、残りのエネルギーを振り絞り明久の回収に向かった。

明久を回収後、襲い来る弾丸を装甲をパージして盾代わりにする事でやり過ごし帰還した。

それで明久と一夏の2人は・・・幸いにもギリギリで絶対防御が解けていなかった為目立った外傷はないが意識不明の重体。今は別室で医療スタッフの治療を受けている。

「・・・停止していますね。」

モニターに映る赤い点を見て山田先生そうが言い、鬼斑先生はじつとそのモニターを見つめ続けている。

「本部はまだ私達に作戦の継続を？」

「・・・解除命令が出ていない以上継続だ。」

「で、ですが、これからどのような手を・・・」

その時、背後の引き戸からノックの音が聞こえた。

「失礼します。デュノアです。あの」

「待機と言った筈だ、入室は許可できない！」

鬼斑先生がそう言うところがまた静かになり、それで外から息を吐く音が聴こえた。

「神薙、お前にも待機命令を出した筈だ。何故いる？」

「少し聞きたいことがあるだけです。聞いたらすぐに退出しますよ。」

そう聞きたい事は一つ・・・

「この事件、首謀者はあの変態・・・篠ノ之 束だろ。」

第34話 ゲット・レディ（後書き）

という事で、福音にボコボコにされて負けた綾人達だった。

ちゃんちゃん。

綾「ちゃんちゃんじゃねえよ！・・・それにしても福音のパワーバ
ランスおかしくないか？」

自分的にはコレぐらいはアリだと思って。

明「それに福音が第2形態にもなったしね。これって原作やアニメ
どおりならここではならないんでしょ。」

そうだよ。

ここになったのは綾人達が空気読まずにフルボッコしていたのが原
因だね。

綾「その後で逆に俺らがフルボッコにされたがな。でも、これでI
S編も終わりが見えてきたな。」

とりあえずうまく纏められればあと2〜3話で終わるね。

その後にもう1回番外編書いてオリジナル展開に突入かな？

明「そういえば、オリジナルの後の世界はどうなるの？」

平成仮面ライダーかスーパー戦隊のどちらかだね。

でも最近、真・恋姫やっていてネタが思いついたから恋姫の世界も
どうだろうかと思っている。

綾「恋姫は書いている人多いから後でもいいだろ。」

それではまた次回！

第35話 立ち上がる少女達（前書き）

ブラックホールが吹き荒れるぜええつ！！

綾「おい、開口一番で何を叫んでいる。」

ごめん、ごめん。

ウルトラマンゼロ外伝 キラー ザ ビートスターの発売日が近づいてるもんでつい。

綾「ベリアル銀河帝国以来久々の新作だな。それに来年の3月にはウルトラマンサーガが公開されるからな。確かにテンション上がるなという方が無理か。」

その前に12月にMOVIE大戦が公開だしね。まさに特撮キタアアアアアッ！！だよ。

明「ところでお金あるの？確か今月ヴァンガードで結構使ったでしょ。それに今日は遊戯王の新しいパツクの発売日でしょ。」

・・・そうなんだよね。

今月分はデュエリストボックスとオーダーオブカオスの分しか残ってないんだよね・・・orz

綾「外伝の事知ったのがヴァンガードを買いつくした後だったからな。知っていたら残していただろうに。」

第35話 立ち上がる少女達

「この事件、首謀者はあの変態・・・篠ノ之 束だろ。」

俺はそう言って、鬼斑先生を見る。

部屋にいた山田先生は言葉を発してはいないが、俺の言った事になり驚いている。

対して鬼斑先生はだんまりだな。

「・・・何故そう思う神薙。」

「今日はおかしな事だらけでしたからね。違和感持つなという方が無理な話でしょ。」

「おかしな事か・・・どこがおかしかった？」

「今日に入ってから的事全部ですよ。まず変態がここへ姿を見せて紅椿を筈に渡した直後に福音が暴走。学園上層部は専用機持ちに作戦の中核を任せた。けど、作戦が失敗したのに学園上層部とまともにやり取りが出来ないどころかその返答が来ないのが気になる。一夏達や鬼斑先生達もあくまで一生徒や教師に過ぎない。そんな中途半端の集団に指揮をこれ以上許すとは思えない。それに福音が今こっぴどくやって“完全に動きを止めている”事もおかしい。」

福音は現在ここから南西に30キロ離れた海域で停止している。その海域には特別な施設なんかはなく、小島があるだけだ。

ステルスとかを使ってレーダーに映らないようにはしているが、光学的な迷彩は使っていないらしく衛星観測による目視で発見出来た。

「これは暴走なんてしてない。誰かがなんらかの目的で制御している。本当に暴走しているなら“真っ直ぐ”この海域に向かって飛んで来ない。」

「・・・確かにそういう印象は受けるな。だが、確定ではないだろう。では逆に聞くが、福音は何のために今動きを止める？」

「俺の推測が当たっているなら、福音は今あそこに誰かが来るのを待っている。例えば・・・紅椿。」

山田先生が息を飲み、鬼斑先生はジッと俺を見る。でも俺は・・・
光点から目を離さない。

「そう考えると綺麗に繋がるし、疑問に思っている事の全てが綺麗に解ける。上層部がまだこの体制での作戦続行を黙認している事も同じく。多分だけど福音が応戦してきたのは、紅椿が居たからだ。
一夏やセシリア達だけだったら、きっと変わらずに逃げ続けていた。」

変態は紅椿を作戦に入れる為に会議に乱入してきた。

鬼斑先生はある段階からそこが分かってたと思う。

こう考えたらもつと分かりやすいんじゃないか。

犯人が紅椿じゃないと追いつけないようなISはなにかと考えて、福音が選ばれて暴走させられたとしたら？

それで先生はその犯人に心当たりがあった。だからこういう体勢で作戦を進めたとしたら？

それでこういう体勢でしか進められなかったとしたらどうか。そうじゃなかったら被害が拡大していたとかさ。

犯人は紅椿を出すためなら何をするか分からないような奴だと思っ
て、それ等を作戦に加えたとしたら？

確証はないが、偶然と片づけるにはおかしいところが多すぎる。

「ちょ、ちょっと待ってください！？まさか神薙君は・・・今回の事態は篠ノ之博士が起こしているって！？ 福音を紅椿で止めるためにっ！」

「山田先生、もう少しボリューム落としてください。外に聞こえますよ。これはあくまでも仮定の話です。けど、そう考えると一応の辻褄は合つんですよこれが。」

「・・・なるほどな。だが、仮にその推測どおりだとしたら何故お前と吉井が攻撃された？紅椿以外は相手にせずそのまま逃げるのではないのか？」

「そんなのデータ取る為に決まっているでしょ。起動できないでお蔵入りしたISが突然起動した状態で現れたという変態にとってはカモがネギしょってやって来たような状況ですからね。福音が逃げずにしばらく俺達をジツと見ていたのがその証拠だ。」

「・・・ならば聞く。もしそうなら東の目的は何だと言うのだ？」

「考えられる答えは2つ。まず1つは単純に紅椿の能力を証明したか。実際福音のスペックは驚異的だけど紅椿なら良い勝負が出来て威力証明には十分。そしてもう1つは、箒を華々しくデビューさせてあげようという姉心だ。」

篠ノ之姉妹の仲だが、箒の方はよくわからんが、変態の姉は妹を溺愛しているのが目に見えていた。

だから妹の為にコレだけの事をすると考えてもおかしくはない。

「・・・話はわかった。だが、生憎だが私には犯人の見当がついていない。よってお前の質問に答える事は出来ない。」

「大丈夫ですよ。鬼斑先生を見ていたら大体わかりましたから。それじゃあ命令に従って退出しますかな。」

言いたい事は全部言ったし、喋りはしなかったが、鬼斑先生の態度である程度の確信も持てた。

俺は引き戸に手をかけて退出しようとしたが、最後に言う事があったのを思い出した。

「鬼斑先生、作戦を優先させるプロ根性は尊敬します。けど、一夏の様子を見に行くぐらいは許されると思いますよ？ たった1人の家族で大事な弟なら尚更。」

「……………」

最後にそう言っただけ俺は部屋を退出した。

部屋の外には案の定シャルロット達が居た。

「…………綾人は部屋の中に居たんだ。」

「ちょっと聞きたい事があってな。それでお前達はこんな所で世間話か？」

「織斑先生にイチカの様子を見に行っただけだと思っただけだ。先生もイチカの事を心配してる筈だから。だってお姉さんなんだよ。」

「手当ての指示を出してから、ずっと様子を見に来ていないなんて……………」

「そうだな。・・・それで容態の方は？」

「あれからずっと目覚めていません。吉井さんの方も同じく・・・」

明久の名前が出た途端、シャルロットと川上の顔が今にも泣き出しそうな表情になりかけていた。

俺が明久を背負って海岸に帰還したら、そこには意識を失っている一夏を見て今にも泣き出そうとするセシリア達や泣いている生徒とただジツと俯いている篤の姿があった。

その場にポロポロの状態の俺が一夏同様重体の明久を背負ってやってきたもんだからさらに生徒が泣き出し、お通夜のような空気になった。

「それよりもあなたの方はどうなのよ？一夏や吉井ほどでないにしろ怪我している事には変わりないでしょ。布仏さんがかなり心配してたし。」

鈴の言うとおり、海岸に帰還して明久を医療スタッフに預けたら本音がいきなり抱きついてきて号泣しだした。

密着している事でアレの感触がダイレクトに伝わるもんだから、理性がガリガリ削られながらも本音を落ち着かせるのに苦労した。

それにしても本音って着やせするタイプなんだな、結構大きくてやわらかゲフン、ゲフン。

「・・・綾人、今何か考えなかつた？」

「ソナナコトナイゾ、それよりも何でいきなり抱きついてくるんですか簪さん？」

「・・・別に。」

理由無いのかよ！？そりゃ嬉しいけど柔らかいモノが当たって俺の理性が現在進行形で削れてるからやめてくれ！

え、胸の大きさ？そんな関係ない、当たっている事が重要何だよ！

「篤さんにも声をかけませんでしたわ。いくら作戦失敗とはいえ冷たすぎるんではなくて・・・」

「今は福音の補足に集中する。教官はやるべき事をやっているに過ぎない。教官だって苦しいはずだ、苦しいからこそ作戦室に籠っている。心配するだけで・・・一夏を見舞うだけで福音を撃破できるとでも？」

ラウラの言っている事はもつともだ。

他のみんなもそれをわかつてはいるが、どこか納得できない。

だから誰も言い返せないでいる。

でも・・・誰でもいいから未だに抱きついていている簪を何とかして！俺が離そうとしたら涙目＋上目使いしてくるもんだから逆らえない

んだよ！

『自分で何とかしなさい！！』

「出来ないから助け求めてるんだろっが！てか、全員同じ意見って
どっいう事だよ！？」

「それよりも問題は……」

「無視ですか！？この状況で無視なんですか！」

「そんなのシリアスな空気が壊れるから無視に決まってるでしょ。」

「ふざけんな！他の奴等もうんうんて頷くなよ！？って簪、頼むから胸を押し付けなさい！理性が削れるからやめてええええっ！！！」

その後、作戦室の前で騒いでいたもんだから鬼斑先生が部屋から出てきて全員に拳骨を下したのは言うまでもない。

side out

作戦室の近くの部屋に一夏と吉井は布団の上に寝かされ、呼吸器をつけられ、医療器具に囲まれ眠り続ける。

眠り続けている一夏のその横で私は髪を降ろしたまま膝を崩して座っていた。

それで何度も何度も泣き続ける。

福音に撃墜された時に燃えてしまったりボンの事など置いてけぼりで私は泣き続ける。

一夏を守れなかった。それどころか私を庇った事で一夏に大怪我を負わせてしまった。

救出されて出発地点に戻って来た時の全員の驚愕の表情と、私に何も言わずに指示を出し去っていく千冬さんの姿が頭にちらつく。

「私、は……」

頭の中で今日の事が 中学の時の全国大会での彼女の涙が思い出されていく。

それによって生まれる痛みが私の涙になっていく。

「違う、違うんだ。見えなくなっただけじゃない。……奴等が弱いと言うのか。守るべき存在だと言うのか。……奴らは秩序を乱した。なのに……どうしてお前は奴等を許せる。」

そう問いかけても一夏は何も答えない。

部屋の中には医療器具の電子音と眠っている2人の呼吸音だけが響いている。

「それが・・・お前の強さなのか？だからお前は強いのか？・・・お前に比べて私は、力の向くままに暴力を振るっていただけだったのだろうか。・・・一夏にとって密漁船も私も等しく守るべきものだったと言うのに・・・私は。」

私は自分が許せない。私の傲慢さが一夏を悲しませ、傷つけてしまった。

一夏を傷つけた時の事を思い出し更に涙を流すと、後ろからノック音が聞こえてきた。

「篠ノ之さん、あなたも少し休んでください。根を詰めてあなたまで倒れてしまつてはみんな心配しますよ。」

「私は大丈夫です山田先生。・・・ここに居たいんです。」

「いけません、休みなさい。これは織斑先生からの要請でもあるんです。いいですね？」

「・・・わかりました。」

私はゆっくりと立ち上がり、最後に一夏を見つめ部屋を後にした。そして、部屋を後にした私は夕暮れの海岸をただひたすらに走り続けた。何も考えられないように、自分の息が切れようともひたすらに走っていた。しばらく走り続けているとあの時出撃した浜辺まで来て、そこで足を止め呼吸を整えようとする。私は昔一夏に助けられた事を思い出していた。

私と一夏が初めて会った頃の事、私は同じクラスの男子に『男女』とからかわれた。

剣道が強く、可愛げのない性格の私を男子がそういう風にからかうのは当然だろう。

その上私がリボンを着けていると似合わないと言い・・・そんな時、一夏が助けてくれた。

物の弾みで殴り合いになっても私の味方をしてくれて、それで・・・私がリボンを着けていてもおかしくないと、とっても似合っていると言ってくれた。

それが本当に嬉しかった。一夏はそうやって私の気持ちを守ってくれた。

困っている誰かが居ると必ず手を伸ばしていた。

私はそんな一夏に惹かれて一緒に居られる時間が嬉しくなって、なのに私は・・・

「第！」

すると、背後から私を呼ぶ声がした。

この声は・・・凰か。

「わっかりやすいわね。あのさ！一夏や吉井がこうなったのってア
ンタのせいなんですよ！」

その言葉に私は何も言えなくなる。

凰の言うとおり私のせいで一夏だけでなく吉井にまで大怪我を負わ
せてしまった。

「っで、落ち込んでますってポーズ？・・・ざけんじゃないわよ！
！」

私は凰に胸倉を？まれ面と面に向かい合う形になった。

「やるべき事があるでしょうが！今戦わなくてどうすんのよ！」

凰の目が射抜くように私を見る。

「もうISは・・・使わない。」

「！...」

そう言うと突然左頬に衝撃が走り、私の身体は地面に向けて倒れた。そして、自分が鳳に叩かれたんだという事に気付いた。

「甘ったれてんじゃないわよ！専用機持ちつてのはね、そんなワガママが許されるような立場じゃないの！それとも、あんたは戦うべき時に戦えない臆病者なわけ！」

「……どうしろと言つのだ、もう敵の居場所もわからない。戦えるなら……私だって戦う！！」

立ち上がり、鳳に吐き出すようにそう叫ぶ。すると、鳳は安心したように表情を緩めた。

「クスッ。やっとやる気になったわね。」

鳳が後ろに目をやり、つられて見ると、そこにはセシリア達がいた。

「あゝあ、メンドくさかった。」

「な、何？」

「みんな気持ちは1つつて事。」

「負けたまま終わっていいはずがないでしょう。」

「まだここには我々がいる。」

「・・・私達には戦える力がある。」

「何もしないで諦めて、ただ見ているだけなんて私は嫌です！」

みんなのその瞳からは強い意思を感じる。

「ところでラウラ、福音は？」

「確認済みだ。ここから30キロ離れた沖合い上空に目標を確認した。作戦室で居場所を知ったであろう綾人からも助ける事を条件に吐かせたからまず間違いない。」

「さすがドイツ軍特殊部隊 やるわね。それに更織さんのアプローチがこんな形で生かされるなんてね。」

「・・・本音には負けられない。」

「お前達の方はどうなんだ？準備は出来ているのか？」

「当然、甲龍の攻撃特化パッケージはインストール済み。」

「こちらも高機動パッケージ ストライクガンナーの量子変換も完了してますわ。」

「僕も準備オツケーだよ。いつでもいける。」

「・・・援護射撃は任せて。」

「私の方も最適化が終わってますからいつでもいけます。」

「待ってくれ、行くというのか？命令違反ではないのか？」

「だから？あんたも今戦うって言ったでしょ。」

「お前はどっしする。」

「私、私は……」

お前はどつする。か、……そんな事はもう決まっている！

「戦う、戦って勝つ。今度こそ負けはしない！」

「決まりね。今度こそ確実に落とすわ。みんな、気合入れていくわよー！」

『おーーーーー!!』

もう、迷わない。勝ってこんな事は終わらせるんだ。

私が隣に立ちたい人に胸を張れるように、今はその為に剣を振るう！

＼side out＼

＼side ???＼

「さて、そろそろ事態が動く頃ね。」

福音が停止している海域のとある小島で、それを見つめる人物が居た。

「取り込むエサとしては上々。アレを取り込めばこの世界を滅ぼす毒としては完成でしょうね。」

銀のオーロラが発生し、その人物は姿を消す。

そして入れ変わるようにその場には新たな何かが残った。

再びこの世界に現れた暴竜は止まっている福音を見て、その赤い目を光らせた。

＼ side out ｝

第35話 立ち上がる少女達（後書き）

次回から福音戦最終です。

綾「何か最後にイレギュラーと謎の人物も登場したな。」

謎の人物に関しては龍夜Mk2さんから頂いたオリキャラだよ。ちよつと設定が変わってるけど。

綾「名前は戦いの後とかに出す予定なのか？」

敵sideになった時にね。

それではまた次回！

綾「そして我々はウルトラマンゼロ外伝 キラー ザ ビートスタ
ーを全力で応援したいと思います。」

第36話 君の名は（前書き）

今回は福音最終戦の前半戦です。

綾「原作やアニメよりも戦うメンバーは多いが、不安要素全開だな。」

福音はすでにセカンドシフトな上にイレギュラーもいるからね。

綾「激闘は必至か。いまだ目覚めない一夏と明久とかも気になるが、とりあえず本編をどうぞ。」

レフェル様、GAU様、つぐみとひばりの使用の許可ありがとうございます！

第36話 君の名は

どうして・・・こんな事になってしまったんだ。

「あの、何で俺は鬼の監視の下、正座で反省文を書かされているんですか？」

「そうか、覚えがないのか。なら追加でもう100枚書くといい。」

非常事態中に作戦室の前で騒いだと言っ事で、罰として正座で反省文を書かされていた・・・俺だけ。

「てか何で俺だけなんだよ！騒いでいたのはセシリア達もだろ。それなのに何で俺だけ!？」

「そんなものお前が全ての原因だからに決まっているだろう。解放されたかったら早く書くことだな神薙。ちなみに書き終えるまで一切何も口に出れないと思え。」

「もうあんた鬼とか悪魔とかのレベル超えているだろ!」

くそっ、魔界侯爵鬼斑アモンのヤロウ！絶対いつか復讐してやる!!

俺がアモン鬼斑に復讐を画策していると作戦室の警報が鳴り出した。

「先生、これは!？」

「あいつ等……」

モニターの方に目をやると、福音に対し砲撃をぶちかまして喧嘩を売っている7機のISの反応が出ていた。

あゝ、やっぱり行ったのねあいつ等。

それじゃあ俺も行くとするか!

「命令違反です!呼び戻しましょう!」

「こいつなるだろうとは思ってはいたがな……ところで神籬、なぜ部屋を出ようとしている?」

「え、ただのトイレですけど何か?」

「そうか、ならば早く行って済まして来い。しくじらないように気をつける。」

「この歳でトイレに失敗したら尊厳が大崩壊ですから絶対しません

よ。」

鬼斑先生とそんな軽口を言い合い俺は部屋を出た。

さてと、さつさと終わらせてあいつ等にもたんまり反省文を書かせてやりますか。

＼side out＼

＼side シャルロット＼

ラウラの放ったレールカノンは福音が自分を包むように展開していたバリアーに直撃した。

それにより赤子のように膝を抱えていた福音は目覚めるように起き上がり八枚の光の翼を輝かせる。

「続けて砲撃を行う！」

ラウラはレールカノンを連射して福音を狙うが、相手のスピードが速すぎて捉えられないでいる。

「くっ、セカンドシフトに移行している事で予想以上の速さだ。」

福音は砲撃を潜り抜けラウラの懐に入り、その鋭利な爪を構えてラウラに迫る。

「はああああああつ！」

ただ、セシリアが上空から高速で突貫しそれを防ぐ。

その衝撃でバランスを崩した福音にセシリアがスナイパーライフルを構え狙撃する。

福音はすぐに復帰して迫り来る光弾を避け、光弾が飛んでくる方向目指して飛翔して目の前にある雲を突き抜ける。

けれど、出た先にセシリアはおるか誰もいない。

周囲の索敵行動の為に福音はその動きを止めた・・・今だ！

「かかった！」

福音の背後に回っていた僕は両手のショットガンを構えその引き金を引く。

発射された散弾は福音に命中したけど、光の翼のせいかダメージはあまり見られない。

僕の存在に気付いた福音は発射される散弾を避けながら距離をとる。ラピッド・スイッチでショットガンからアサルトライフルに武装を切り替え追撃を行う。

けど、光の翼から光弾の雨が発射されたので僕は搭載していた防御用パッケージ「ガーデン・カーテン」を展開。

発生したエネルギーシールドでそれを防ぎきる。

「このぐらいじゃ落とせないよ！」

そつだ、落ちなんかしない。僕達がここで今日福音を落とすんだ。もうアキヒサが傷つかないで、戦わないでいいように。

アキヒサはいつも僕を助けてくれた。正体がばれてどうしたらいいのかわからなかった時も。

あの時はまだギスギスしていたラウラにやられそうだった時も。だから僕が・・・今度は僕が、アキヒサを助ける番なんだ！！

＼side out＼

＼side 明久＼

僕は今、どこかの学校の教室？にIS学園とは違う制服姿でそこにいた。

何故教室に？とつけたかと言うと、それは・・・ここが廃屋のごとくボロボロだからだ。

周りには何か処刑執行人のような覆面とロープを纏い鎌を持った集団が誰かを追いかけていた。

「相変わらずのバカ面でなにポーっとしてるんだ明久。」

そんな時、誰かが僕に話しかけてきた。

声のした方に振り返るとそこには赤毛の男が居た。
何故か顔の方に靄の様な物がかかっている顔がわからない。
でも、1つわかった事は・・・

「何でゴリラがこんな所に？もしかしてエサを求めて脱走してきたの？」

「誰がゴリラだ！寝ぼけてんじゃない、このバカが！！」

むっ、失礼なゴリラだな。

「何を騒いでおるのじゃお主達は？」

「・・・・・・・・何事？」

騒ぎを聞きつけたのか、僕と同じ制服を着た2人の生徒がこちらにやって来た。

ゴリラと同じで顔に靄がかかっているけど、何故か頭の中に自然と浮かんでくる。

背の低い方は声からして男で・・・エロの化身。

もう1人は声からして女の子、顔はわからないけど・・・美少女に違いない！

「だからわしは男じゃと言つておるだろう明久！」

「・・・・・・・・・・エロの化身などではない。」

なんで心の中を読まれたんだろう？

でも、何故か君達からは説得力を感じられないよ。

「どうしたの？またアキがバカな事やってるの？」

「あ、起きたんですね明久君。」

今度は声と姿からして2人の女の子がやって来た。

1人は大きな果実のようなおっぱゲフンゲフン、大層なものを持っており、癒しのオーラを漂わせていた。

それとは対象でもう1人の方は、まっ平らな胸をして細い体つきで僕の関節があらぬ方向にいいいいいいっ！

「誰がまっ平らよ！あるにはあるんだからね！！」

気が付いたら僕は関節技をかけられていた。

何でさっきから心が読まれてるの！？

「大丈夫ですか、明久君？」

大きい方の子が僕に手を差し伸べてくる。
なんていい子なんだ。

「あ、そういえば私今日はケーキを作ってきたんです。よかったら食べてくれますか明久君？」

訂正、その言葉に僕は寒気を感じ、差し出されたケーキからは黒いオーラを感じた。
僕の本能が「ここから逃げろ、でないと命は無い」と警告を鳴らしている。

「ごめん、今はちょっとお腹が・・・」

「食べてくれますか？」

「いや、ちょっと」

「食べてくれますよね？」

「お腹が・・・」

「食べてくれますよね？」

ちよつと、目が怖いんですけど!?

それに何かケーキと一緒に黒いオーラが見えるし!

もう、ダメだ。そう思った時、

「何やってるの瑞希ちゃん!そんな怖い顔して迫っちゃダメだよ!」

「それにもいちゃんはまだ料理したらだめだって言ったでしょ!」

2人の小学生が「小学生じゃないよ!?そこまでちっちゃくないよ!」「訂正、2人の少女がピコハンと子烏丸と書かれたハリセンで大きい子の頭を叩いた。

それによりその子が沈んだ事で僕は解放された。

「まったくもう、みいちゃんは。」

「アキ君、大丈夫?」

「うん、なんとかね。ありがとう。」

お礼を言おうとして僕はそこで気がついた。

僕はこの人達を知っている気がする。それにこの人達は僕の事を知っている。

でも、誰一人としてその名前も顔も僕は覚えて・・・いや、思い出せない。

そして段々と意識が朦朧としてきて僕はその場で倒れてしまい、そこで意識を失った。

教えてくれ、君達は一体・・・

＼side out＼

＼side 一夏＼

そこは青い海の上。地平線が広がり、どこまでも続いていく世界中。

俺は制服姿でその水面に立っていて、近くにはマングローブみたいな木がまばらと生えていた。

見た事もなければ来た事もない知らない世界の中で俺は、ただ穏やかな気持ちで視線を泳がせる。

それでそんな場所に、白い無地のワンピースを着た女の子が居た。

その子は優しく吹く風に髪をなびかせる。

俺は自然とその子に向かって歩み始める。そして、何故かはわからないが懐かしさを感じる。

女の子は俺に背を向けながら空を見上げる。

「呼んでる……行かないや。」

その子がそう呟き、俺も空を見上げる。

次に女の子を見た時には女の子の姿は消え、その子の居た場所から波紋がゆっくりと広がっていき、俺の居る世界はその色を変えた。

｝side out｝

｝side 篇｝

デユノアの奇襲をくらってもビクともしない福音に対して、皆と共に果敢に攻めている。

ラウラとセシリアと更織の3人が遠距離からの射撃を、シャルロツトと川上が中距離からの牽制と防御、私と鈴が隙を見て切り込む戦法で攻めている。

福音がスフィアを形成し、そこから光の奔流を私に向けて撃ち出した。

「Hフィールド！」

その射線上にネコミミの風なヘッドギアを装着し、通常の打鉄や更織の専用機である式式とは違って細身で軽量化された川上の専用機

打鉄・守人、通称ナナツが飛び出す。

バックパックを展開して両手を前に向ける。

そこからバリアフィールドが発生して奔流を受け止める。

「プレッシャー！」

その言葉と同時に、受け止めていた光の本流を福音に向けて跳ね返す。

跳ね返されるとは予想外だったのか、奴は戻ってきた自分の攻撃を慌てるように回避した。

だが、それこそが大きな隙となり、私達にとっては好機以外の何物でもない！

「隙アリ！」

私は両足の展開装甲を解放して紅き刃を形成し、それを福音めがけて振り下ろす。

当たる。そう確信した時、紅椿から警告音が鳴り出す。

そして直感的にその場から離れると、私がさっきまでいた場所に強力な奔流が通り過ぎていった。

「何!?!」

奔流の跳んできた方を見ると、そこには以前学園に襲撃をかけた恐竜型のISがいて、この戦場目掛けて飛んできている。

「くっ、こんな時に例のイレギュラーが攻めてくるとは!」

どうすればいい。そう思っていたら、イレギュラーは福音にその目を向けた。

そして奴の装甲が開き、そこには黒い球体のようなものが存在した。だが、私はその黒い球体を見て寒気を感じた。

「何・・・あれ・・・」

「なんなんですよ、この不快な感じは・・・」

他のみんなも同じように感じている。

あの黒い球体からは負の概念そのものの様な不快感を感じる。

そう、まるで全てを食い殺すかのような毒だ。

すると、球体から触手の様なものが無数に飛び出し福音を捉え、その動きを拘束する。

そして、触手は球体に引っ張られるように戻っていき、もがいている福音を吸い込むように取り込んだ。

「福音を・・・取り込んだ。」

「何なのよ・・・一体なんだって言うのよ!？」

福音を取り込み終え奴の装甲が閉じられる。
そして、背後に福音のように光の翼を生やした。
違うのはその数、奴は10枚もの光の翼を広げていた。

「
！！！」

奴が言葉では表現のしようがない叫び声を上げると、翼から弾丸の雨を発射した。

私達はすぐに回避行動に移るも、その数は先程の福音の放った倍以上であり弾速や大きさも別物と化していて回避はギリギリで、防御してもシールドは持ちこたえられず、エネルギー系統の防御ではエネルギーを大幅に削られ逆効果だ。

「箒さん、危ない！」

セシリアの声が聞こえると、イレギュラーが翼から3つのスフィアを形成し、私目掛けて撃ち放った。
発射されたうちの2つの奔流を回避したが、3つ目の奔流は回避できずくらってしまい、近くの小島に墜落してしまい私は意識を失った。

side out

篠ノ之さんが落とされた事で私は動揺していた。
あんなのに勝てない、ここから逃げたいという考えが頭の中に生まれてくる。

「(なに・・・これ・・・?なん、なの・・・)」

恐怖という感情が私の中を駆け巡り動けなくなってしまふ。

「更識さん!」

「ひっ・・・!?!」

川上さんの声が出たと思ったら、私の目の前にあのISがいた。

「(たす・・・けて・・・。誰か、助けて・・・!)」

ぎゅっと目を閉じて祈るようにすがるようにただひたすら念じる。
こんな時にヒーローがいてくれたら、きっと自分を助けにきてくれる。

風を纏って颯爽と、闇を切り裂いて堂々と完全無欠のヒーローが来

てくれる。

けれども、現実はそのなに甘くない事を知っている。
でも、今の私にはそうするしか出来なかった。

「・・・や・・・と・・・」

目の前のISが私に向かって鋭利な爪を振るう瞬間・・・私はあの
人の名前を全力で叫んだ。

「綾人っ!!」

そして私はやってくる痛みを覚悟した。

でも、それはやって来なくて、恐る恐る目を開いた。

「ぎりぎりセーフ、ところで俺の事呼んだか？簪。」

私の目の前には白いISを纏った綾人が居た。

その姿は紛れもなくヒーローだった。

私の心のヒーロー・・・

side out

俺はゼロに移動専用のエネルギータンク搭載型のブースターを工具で取り付け、トイレと言う名の戦場に向かっていた。

ゼロには拡張領域がないので本来は新たに武装をインストールできないので、展開した後無理やりブースターを取り付けた。

けど、そのおかげで戦闘空域までゼロのエネルギーを消費することなく到着できた。

使用済みのブースターをパージして切り離すと同時にある光景が目に映った。

簪の目の前に羽が生えたイレギュラーが今にも攻撃されそうだった。俺はイグニッションブーストを使って急接近し、イレギュラーを蹴り飛ばした。

「ぎりぎりセーフ、ところで俺の事呼んだか？簪。」

飛び出す前になんかそうという声が聞こえたので、涙目になっている簪に聞いてみる。

「綾人！！」

そうしたら簪に抱きつかれた・・・って、またこのパターンかよ！？

「あ、あのー簪さん、出来ればそういうのは全部終わった後のほう

が・・・」

「!?!?・・・ごめんなさいノノつい・・・嬉しくて。」

よく見たら簪のやつ体が震えているな。

よっぽど怖かったんだな。

俺は安心させるように簪の頭に手をやり、その髪を優しく撫でる。

「・・・簪。」

「な、なに!?!」

「いけるな。」

「うっ、うん!」

簪が元気になったら、他の専用機持ちが俺達の所に集まってきた。

「ちょっと綾人、あのイレギュラーっての規格外すぎるんだけど。」

「今来て見た感じだと福音を取り込んだようだが、そのせいで余

計に手がつけられなくなった見たいだな。みんな、エネルギー残量と武装の方はどうだ？」

「すまない、こちらはエネルギー残量が心配になってきている。」

「わたくしと鈴さんも同じく……」

「ボクと川上さんはまだやれるよ。」

「……私も大丈夫。綾人と一緒に戦いたい。」

「そうか。なら、シャルロット達は牽制を頼む。俺は遠距離射撃型に換装して援護射撃に務める。その弾薬が切れたらシュナイダーで切り込む。その間にラウラ達はエネルギーの回復に努めてくれ。それが完了したらシャルロット達と交代……イレギュラーが攻撃態勢に移っているので今すぐ作戦開始！」

『了解！』

その合図と共に作戦を開始する。

「ラファールゼロ、コマンドインストール　パンツァ。」

CASを起動させ白い装甲をパージ、新たに緑色の厚い装甲が各所に装着され、背部には大型の重砲が2基搭載された。換装を完了した俺は真下の岩場に着陸した。

この形態は防御と火力は凄いが、あまりの重さに飛行が出来ないという欠点がある。

確か設定だとパンツァって砲撃戦ゾイドの火力と高速戦闘用ゾイドの機動力を両立した革命的な機体って書いてあった。

「・・・何でTVの欠陥装備の方を採用したんだあの変態は？」

とりあえずその事は頭の隅に一旦置いて、俺は背部に搭載された2基の重砲を構え、サイトで標的をロックする。

「ハイブリットキャノン、発射！」

発射された2つの閃光はイレギュラーに当たり爆発と爆煙が舞う。だが、爆煙が晴れるとピンピンしたイレギュラーがそこにいた。

「あれでダメージないって精神的にかなりくるな。」

イレギュラーは翼を広げ弾丸の雨を降らしてくるが、俺はパンツァのワンオフアビリティを起動させる。

ゼロの各装甲が展開してミサイルの頭が出てくる。
目の前に巨大なロックサイトが出てきて向かって来る弾丸全てを口
ツクする。

「バーニング・ビックバン!!」

ゼロから無数のミサイルが発射された。
迫り来る弾丸の雨に向かっていき、空に大きな爆発と爆煙が舞った。

side out

side 一夏

「力を、欲しますか？」

夕焼けの色に染まった世界の中で、声が響く。
その声の主は俺の正面にいた。
白い羽に薄手の装甲、それとフルフェイスに近い形のメットを着け
た女性がいた。
白い騎士のように見えるが、あれはISか？

「力を、欲しますか？」

その質問に俺は小さく首を縦に振った。
俺はアレが何か、ちゃんと分かっている。うまくは言えないが、敵じゃないのは分かる。

「何の為に？」

「うーん、そうだな？友達を……いや……仲間を守る為、かな。」

「仲間を……」

「何て言うか、世の中って結構色々と戦わないといけないだろ。道理のない暴力って結構多いぜ。そういうのから出来るだけ仲間を助けたいと思う。この世界で一緒に戦う仲間を。そして、別の世界からこの世界を守る為にやって来た仲間を。」

「そう、だったら……行かなきゃね。」

「えっ？」

白い騎士とはまた違う声が響くと、また世界の色が青に戻る。それで俺の傍らにいつの間にかあの女の子が居た。

「行ってくつて、どこへ？」

「あなたが今行かなきゃいけない場所。あなたの事を待っている人達が居る場所。」

そして、気がついたら医療器具が並んでいる部屋にいた。
いや、正確にはその部屋で今まで眠っていて、今日が覚めたところか。

今の夢は一体……

「待って、君達は誰なの！」

さっき見た夢の事を考えていたら、隣の布団から何かを言いいながら明久が起きた。

「今の夢は……それに、一体僕はどうなったの？」

「起きたのか明久。」

「えっ、一夏！？よかった、無事だったんだね！」

「逆に俺は何でお前が寝込んでいるのかが非常に気になるが、それよりも急ぐか。」

「えっ？急ぐって・・・ああ、確かに急がないとね。」

最初はキョトンとしていたけど、俺の言葉の意味を理解した明久。俺達は急いで外に出てISを起動して戦っているみんなの所に向かった。

＼side out＼

＼side シャルロット＼

綾人が合流してきてすぐに作戦を立てて戦闘を再開したけど、未だにイレギュラーは健在している。

ゼロの方も弾薬が尽きて近接戦闘型に換装して切り込んではいけるけど、相手の速さについていけず決定打を与えられず、僕達は徐々に追い詰められていた。

「ちっ、攻撃も防御もスピードも全部桁違いの奴を倒せってどんな無理ゲーだよ。」

「アヤト、他に装備は？」

「パンツァはさつき撃ち尽くして使用不能、イエーガーは前の戦闘でのダメージが大きくて使用不能、もうシュナイダーしか残ってないんだ。」

「・・・2人とも、あのISの様子が変。」

更識さんに言われてイレギュラーの方を見る。

イレギュラーは大きく翼を広げ急上昇していった。

ある程度上昇したら急停止して、僕達を見下ろすような体勢になり大きく口を開いた。

その口から砲身が出ると同時に光の翼と背部のバスタークローが大きく展開し、砲身に巨大なスフィアが生まれ膨れ上がるように巨大になっていく。

「全員散開！急いでこの場から離れる！！」

綾人の指示にしたがって僕達はイレギュラーから遠ざかる。

そして、巨大なスフィアは奔流となって放たれた。

奔流は巨大な光の柱のように海上に突き刺さり、その衝撃で津波と突風が発生し海が干上がった。

あんなのくらったらひとたまりもない。

ISの絶対防御なんて関係なく一発で消し去ってしまう。

「綾人、更識さん、川上さん、誰か応答して！」

見当たらないみんなが心配になり僕は通信をするけど、誰からも返事が来ない。

すると、リヴァイブから警告音が鳴り後ろに振り返ると、翼を広げたイレギュラーがいた。

僕は両手に持っているライフルで応戦しようとしたけど、それよりも早くイレギュラーが光の翼を竜の顎の形に変えて僕を飲み込み拘束した。

咄嗟にガーデン・カーテンを展開したけど、電撃を纏った牙はそれごとリヴァイブの装甲を貫き焼いていく。

その痛みに必死で耐え意識を飛ばさないようにしている僕に、イレギュラーは再び口の砲身を開きスフィアを形成していく。

「ここまで……なんだね。」

死ぬ。そう思ったら自然と涙が出てきた。

けど、死ぬのが怖いから泣いているんじゃない。

これは……そうか、僕は……最後にアキヒサに会えないから泣いているんだ。

「助けられなくて……ゴメンね……アキヒサ……」

さようなら、僕の……大好きな人。

目の前に迫る光を受け入れるように瞳を閉じた。

「諦めちゃダメだっ！」

その声が響いた瞬間、僕の涙は一気に止まった。

同時にリヴァイブが警告音を鳴らし、それに反応して目を一気に開く。

すると、僕を捉えていた光の顎に切れ目が生まれ、それは瞬く間に広がっていき消え去っていく。

「！！！？！？」

イレギュラーは悲鳴を上げるかのように鳴いた。

光が晴れると同時に拘束から解放され倒れそうになる僕を誰かが優しく抱きかかえてくれた。

「シャル、大丈夫？」

「アキヒサ・・・怪我はっ！？それにその姿・・・」

アキヒサが装着しているISは村雨だけどいつもと違う。

白色に金色のラインが入った装甲に、背部に2本の大刀を携えている。

「打鉄・無限。これがもう1つのエヴォルトだよ。村雨を再装着したらなぜかわからないけどこの状態だったんだ。とりあえずシャルは下がっていて。」

アキヒサは僕を後ろに下げてイレギュラーから庇うように前に出る。

「ここからは選手交代だっ！」

アキヒサは2本の大刀を構えてイレギュラーに向き合った。

｝side out｝

｝side 篇｝

私は自分の意識が海の奥底にまで沈むような感覚に陥る。
会いたい・・・一夏に・・・会いたい。

「一夏・・・」

そして私の意識は暗い闇に落ちていった・・・

“ 篤 ”

だが、私を呼ぶ声が聞こえた瞬間、光が差しこみ闇が晴れた。瞼を開き、まだ焦点の合わない視界の先に誰かがいた。

「うう、・・・一夏？」

「ああ、待たせたな。」

その声を聞いて私の意識は完全に目覚め、その目にハッキリと一夏を捉えた。

「一夏！？身体は！？傷は！？それにその姿は・・・」

今一夏が装着しているISは白式ではない。

背中のスラスタは鋭角的な四枚の翼になっていて、胸元のアーマ―形状も変わっている。

肩のアーマーがなくなった代わりに何かのアンテナのようなパーツが肩の上につけられている。

両耳にはヘッドホンのような形のアーマーがつき、左手は大型化していた。

「なんか再装着したら壊れたところも直った上に形状変わったんだ。でも大丈夫だ、戦える。」

「よかつ・・・よかつた、本当に・・・」

その無事な姿を見て私は涙を流し泣いた。
本当に無事でよかつた。

「それと箒、これ。」

一夏は右手でどこからともなく布きれのようなものを持ち出し、私に優しく手渡した。
これは？

「いつもの髪型の方が似合ってるぞ。誕生日おめでとう。今日は7月7日だろ。」

私は自然と左手を胸元に当て、リボンを　一夏のプレゼントを優しく掴む。

「それじゃあ・・・行って来る。」

一夏はそう言っ
て右手に刃を
持ち、飛び立
った。

side out

第36話 君の名は（後書き）

次回でIS編も終わりです。

綾「長かった。ここまで来るのにホント長かった。それにしても、次で終わらせる為に今回は内容を無理やり詰め込んだ感があるな。」

文字数も10000字を超えたからね。

でも、こうでもしないとあと2話ぐらい使わないと終わりが見えそうになかったから。

明「本編進行を考えたらそうするしかないかもね。IS編だけで4ヶ月もかかってるんだから。」

この後なんだけど、旅の一向にシャルかさつきを加えようかと悩んでるんだよね。

綾「そういえばそんな意見があったな。どうするんだ？」

連れて行くにしてもどっちかが明久の相手になるわけでもないし、別に連れて行くのは構わないんだけど・・・出番がねえ。

綾「確かにな。それにこの先色々投稿キャラも出るから必然的に出番も少なくなって最終的にあっかつりくん化してしまうな。」

明「タイトルコールもモブキャラに奪われて姿も透明になるんだね、わかります。」

綾「そういえばレンタル分も含めてバカテスキャラが出てきたな。」

顔と名前は思い出せてない状態だけどね。
記憶喪失キャラにはこういった場面が必要かと思って。

綾「本格的な参戦はかなり後だな。ところで、バカテス側からのヒロイン候補ってあのロリっ子2人か？」

そっだよ、原作のあの2人はヒロインできないし。

綾「原作キャラを差し置いてオリキャラがバカテス代表とはな。まあ当然か。」

ル「あの2人は濃くてキャラが立つはているが、女子力はないからな。」

第37話 ゼロの軌跡 帰還と明日と冒険と・・・（前書き）

問題

以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい

『光は波であって、（ ）である

ルシエド・川上さつきの答え

・粒子

織斑先生のコメント

ふむ、正解だ。

織斑一夏の答え

・零落白夜

篠ノ之箒の答え

・絢爛舞踏

織斑先生のコメント

・自分達のワンオフアビリティーが頭に浮かぶのはいいが不正解だ。

吉井明久の答え

・レーザーブレイド

織斑先生のコメント

・どこの宇宙刑事だ。

神薙 綾人の答え

・ギャバンダイナミック

織斑先生のコメント

誰が必殺技を書けと言った。

更識 簪の答え

・スーパ―戦隊の大いなる力

織斑先生のコメント

・何かの番宣になつてないか？

綾「ゴ―カイジャーVSギャバン、公開が待ち遠しい。」

南 光太郎の答え

・キングストンフラッシュー！！

織斑先生のコメント

・これは誰の答案だ？

第37話 ゼロの軌跡 帰還と明日と冒険と・・・

Side 一夏

白式 第二形態・雪羅。この形態になった事で白式の加速は以前より5割増しレベルで速くなっており、イレギュラーとの距離を詰めやすくなった。

俺は斬撃を撃ち込みつつ雪片式型を展開させ、生み出した閃光の刃を奴に打ち込む。

だが、奴は大きく斜め上に飛んでその斬撃を避け、後退しつつ弾丸の雨を振らせて来る。

雨を右に動いて避けつつ加速し、後ろに下がる奴を追いかける。

奴は俺に背を向けてまた翼を羽ばたかせた。

そこから襲い来る雨を上動いて回避しつつ、イグニッションブースト開始。

奴の上を取って突撃するが、奴は俺の方へ振り返りまた翼を羽ばたかせ急降下していく。

回避してまた距離が出来るのが嫌だった俺は左手をかざす。

「雪羅、シールドモードに移行。」

開かれた左手の平の赤いクリスタルが輝き、そこから俺を守る半透明の盾が生まれた。

その盾に弾丸が触れるとそれは音もなく霧散していった。

それを見た奴は口を開き荷電粒子砲の発射体勢になろうとするが、この戦場にいるのは俺だけじゃない。

「隙だらけだよ！」

イレギュラーの背後から明久が両手に持っている2本の大刀で斬りつける。

奴は翼を使って防御しようとするが、明久の大刀はその翼を意図も簡単に斬り裂き奴の背部を斬りつけた。

その衝撃でイレギュラーの体勢が崩れ、そのまま海へと落ちていく。それを好機と見た俺はすぐにシールドを解除、雪平を構えて追撃に出る。

イレギュラーは海面すれすれで停止して、斬り裂かれた翼を再び生やして俺達から距離を取る動きを見せる。

俺は左腕を奴に向かってかざした次の瞬間、水面を割りながら赤いエネルギーの奔流が左手の平から放たれた。

それは回避行動を取っていたイレギュラーに直撃し、大きく吹き飛ばし奴はそこから弾かれるように上昇しながら退避した。

これは多機能武装腕の雪羅。

今みたいな砲撃やさっきみたいな零落白夜のシールドを展開したり出来るらしい。

ここに来る途中に説明読んで使い方はバツチりなんだが・・・ごっそり削れたSGを見て俺は頬を引きつらせる。

はつきり言っただけは消耗が激しい。それは雪羅を使用した時だけじゃない。

さっきイグニッションブーストを使った時のエネルギーの減り方も加速と同様に5割増しになっている。

マジで上手く使わないと一瞬で・・・いや、早めに奴を倒さないと駄目だ。

「一夏、2人でアイツの動きを止めるよ。」

「でも、それだと誰が攻撃を・・・ああ、そういう事か！」

奴が再び振らせてきた弾丸の雨をエネルギーの減りを気にしながら回避しつつ加速して俺は真上に急上昇し、放たれた弾丸の雨を避ける。

明久のISは村雨の時とスピードが変わらないため、まずは俺から一気に突撃。

雪片式型を展開して撃ち込むように斬りつけるが、イレギュラーはそれをバスタークローで止める。

エネルギーがまたごっそり減ったが、奴の動きを止めることには成功した。

「はあああああつ！」

今度は明久がイグニッションブーストを使って突撃し、奴の側面から斬り込む。

イレギュラーは残ったバスタークローに翼の片翼を纏わせるようにしてそれを止める。

舞台は整った。だから・・・

「綾人、思いっきりブチかませ!!!」

「当然！」

俺達の後方からゼロシユナイダーのレーザーブレードを前面に集束展開した綾人がイレギュラー向かって突撃してくる。

綾人はイレギュラーに悟られないように身を隠してチャンスを覗っていた。

俺と明久もどこに隠れていたかは知らなかったが、綾人のならず仕掛けてくると確信していた。

そしてその確信は当たり、綾人が突貫してくる。

しかも、集束しているレーザーブレードは5本ではなく7本だ。

「セブンブレードアタック！」

俺と明久は瞬時にイレギュラーから離れ、すぐに綾人が突貫して来た。

直撃、そう思った。

突如、イレギュラーは光の膜のような物に包まれ、セブンブレードの一撃を止めた。

「まさか、デスザウラー仕様のEシールド!？」

綾人がそう叫んだことで俺はあの膜が何なのかを理解した。

でも、有りえないだろ。あんな膜の様なバリアーが最高速度の攻撃を簡単に止めるなんて。

「ぐっ、くううううっ!!うわああああっ!?!」

綾人は必死に押し込もうとしたが、最終的にはシールドに弾かれた。するとイレギュラーは一気に加速して綾人の懐に飛び込みバスタークローで斬りかかろうとする。
今のは・・・イグニッションブースト!?

「まずい!?!」

「綾人!?!」

俺と明久はすぐに向かうが・・・ダメだ、間に合わない!

「・・・させない!!」

バスタークローが当たる直前、イレギュラーに数発のミサイルが着弾した。

ミサイルはEシールドで防がれたが奴の体勢を崩すのは十分で、その隙に綾人が一気に後退した。

それからすぐにイレギュラーに向かってビームや弾丸が飛んできた。

「すまん、回復に手間取った。」

「さあ、反撃のお時間ですわよ。」

「一夏、さっさと片付けちゃおうよ。」

俺達のところにみんなが集まってくる。

「吉井さん！？目が覚めたんですね・・・よかった。」

「なんか心配かけたようでゴメンね。」

「本当に心配したんだからね。それに・・・また助けられちゃった。」

「急いで駆けつけたらシャルが危なかったんだもん。でも、間に合
つてよかった。」

明久がシャルロットにそう言って優しく微笑むとシャルロットの顔
が赤くなり、それを見ていた川上さんが羨ましそうに見ていた。
それにしても明久の事を親身になって心配してるなんて・・・いい
友達だよな。

えっ、友達じゃないって？どう見てもいい友情じゃないか。

「どう見ても友情よりも愛情の方がデカイだろ。」

「？何か言ったか綾人？」

「・・・別に。ホント鈍いなお前。」

綾人の言葉にセシリア達がうんうんと頷いた。鈍いって何がだ？
まあ、今はいいか。

「それじゃあ、全員集まった事だし反撃と行くか！」

『おっ！！』

俺の掛け声に応えるようにみんなが返事をした。
そして俺達はイレギュラーに向かって飛んでいった。

＼side out＼

＼side 第＼

「一夏。」

飛んでいく一夏の背中を見て改めて一夏の強さを知った。

私は共に戦いたい・・・本当の意味で一夏と並び立つ私でありたい。あの背中を守る私でありたい。

目を閉じそう想っていると全身が温かい何かに覆われるような感覚がした。

その異変に気がつき目を開くと、私と紅椿が黄金色の光に包まれていた。

「これは一体？それに・・・エネルギーが回復！？」

戸惑いながら現れるモニターに目をやると、エネルギー残量ゲージが一気に上がっていき消費していたエネルギーが全回復してモニターに文字が現れた。

「絢爛舞踏、これが・・・紅椿のワンオフアビリティー！？」

私は一夏がくれたプレゼントで髪をいつものポニーテールにまとめた。

「行くぞ、紅椿！」

そして光は収まり、私は一夏達の元へと飛び立つ。

＼ side out 〉

＼ side 明久 〉

「はあああああつ!!!!」

オルコットさん達の援護射撃とシャル達の牽制攻撃でイレギュラーの動きを止めたところで僕と綾人が左右から仕掛ける。イレギュラーがバスタークローを使ってその一撃を抑えたところで、正面から一夏が赤光に包まれた左腕の爪を奴に突き立てる。

「今度は逃がさないっ!!」

イレギュラーはバリアーを張ったようだけど、雪羅の爪はそれを侵蝕し貫通した。

「!!!!!!!!!!」

一夏はバリアー突破した左腕の雪羅の手の平からさっきの赤いビームを放とうとしたが、イレギュラーは叫びを上げながら翼を広げて僕達に光弾を発射してきた。

僕達は咄嗟に離れて武器で弾くも至近距離だったため数発はくらい、僕達は距離をとって集まる。

すると、バキンと何かが砕けるような音がした。

「くっ！限界が来たか。」

音の正体は綾人が持っているブレードだった。

いや、持っている分だけじゃなく、外装のブレードも全部砕けていた。

「そんな！？ブレードが全部ダメになるなんて・・・」

「バリアもそうだが、アイツの装甲はかなり頑丈だ。セブンブレードアタックが弾かれた時に前兆は出ていたが、ここに来て限界が来たんだ。」

「だが、この状況で攻撃力の低下は痛すぎるな。どうしたら・・・」

「・・・1つだけ提案がある。ただし、かなり危険な賭けになる。」

すると、一夏が何かを思いついたようだ。

「鈴、“あの時”のアレをやるぞ。」

「あの時のアレって・・・もしかしてアリーナを襲撃してきたISの時のやつ?」

「そうだ。綾人のシュナイダーが無くなった今、もうそれしかない。それに、俺の方ももうエネルギーが残っていない。」

そう言って一夏が白式のゲージを見せると、ゲージは見事に真っ赤で今にも切れそうだった。

「・・・それしかないようだな。一夏と鈴は準備を。残った奴等ではイレギュラーを引き付けるぞ。」

『了解!』

作戦を開始するべく一夏達は再び飛び立つ。

「綾人はどうするの?もう換装できるパーツは無いんでしょ。」

「何言ってる、まだ“ゼロ”のパーツがあるだろ。」

「!? そうか!」

「ラファール・ゼロ、コマンドインストール　　ゼロ!」

換装を始めた綾人を後に僕はイレギュラーに向かって飛翔する。

イレギュラーはバリアーを展開して荷電粒子砲の発射態勢をとろうとしている。

その視線の先は・・・一夏が準備をしているポイントだ。

「一夏! イレギュラーはバリアを張って荷電粒子砲の発射態勢をとろうとしている!」

『それで?』

僕は急いで一夏に通信を繋いで言ったが、一夏は冷静にそう返した。それで? って・・・いや、この際慌ててもしょうがないか。

「一夏、僕達がああのバリアを絶対破る。だから強烈な一撃を頼むよ!」

『おう、わかってる！頼むぜみんな。』

『了解！！』

そして僕達はイレギュラーに最後の一斉攻撃を開始した。

〈side out〉

〈side 一夏〉

明久からの連絡でイレギュラーが俺に向かって荷電粒子砲を発射仕様としているらしい。

しかもバリアを張つての念入り仕様だそうだ。

でも、慌てたところでどうにもならないしやる事は1つだ。

多分、龍咆の衝撃砲から供給できるエネルギーでも今の白式を完全に回復させるには足りないだろう。

でも、これしか思いつかないからやるしかない。

「一夏、これを受け取れ。」

「えっ？」

箒がこつちにやってきて俺の手を掴む。
すると、繋いだ手から金色の光があふれ出していき、その光は俺と箒を包み込んだ。

「これは・・・エネルギーが回復!?!」

エネルギーゲージが出て来て一気に半分近くも回復した。
これは一体？

「絢爛舞踏、これが紅椿のワンオフアビリティだ。この力で私はお前の背中を押す。だから、奴を倒すぞ一夏!」

「おう!」

箒はそう言ってすぐに明久達と合流してイレギュラーに攻撃を仕掛ける。

そして・・・その時が来た。

『一夏、今だ!』

「鈴、頼む!」

「了解、バッチリ決めてきなさいよ一夏！」

鈴は龍咆を放ち、俺はそれを背中で受け止める。

ウイングユニットから龍咆を吸収してエネルギーを充填し、その衝撃も利用して一気に加速し突撃する。

目の前には俺を一瞬で消滅させれるほどの巨大な光の奔流が迫ってきている。

俺は零落白夜を発動して展開した雪平を突き出すように構えて光に飲み込まれた。

＼side out＼

＼side 箒＼

絢爛舞踏の能力で一夏にエネルギーを分け与えた私はイレギュラーへの総攻撃に加わった。

「全体的に攻撃してもあのバリアは破れない。方法があるとするなら同じ場所を一点集中で攻撃する。それならいけるかもしれない。みんな・・・行くよ！」

シャルロットの合図で攻撃が始まる。

ラウラがレールカノンをイレギュラーのバリアーに向けて連射する。着弾点を確認してシャルロットと川上がアサルトライフルとハンドガンを連射して同じ箇所に向けていく。

「今度はわたくしが！」

セシリアがブルーティアーズ全機を用いて一斉射撃を行う。

発射されたビームは集束するように着弾箇所に向たり、それを追撃するように遅れてミサイルが当たる。

「今度は私が……。打鉄式式、マニュアル誘導システムを起動。48個の並列多重で……」

更識がカツと瞳を見開くと同時に両手と両足の装甲が粒子になって消え、空中投影キーボードが2枚上下に出てきた。更識は解放された指を確かめるようにぐっ、ぐっ、と開閉してキーボードに入力を始めた。

「大気の状態……各弾頭の機動性、タイムラグ……爆発における相互干渉を計算して発揮できる攻撃力を……すうう……はあ……」

高速でキーボードをタッチしていた指の動きを止め、深呼吸をした。

「力を貸して打鉄式！・・・山嵐！」

肩部のウイングスラスタの装甲が展開すると、中から8連想ミサイルが計48発が顔を出して一斉発射された。

「ダイレクトリンク確率・・・！マニュアルロック開始・・・！」

発射されたミサイルは直線的な動きではなく、まるで生きているような複雑な動きをしながらイレギュラーに急接近していく。そして48発全部をピンポイントに同じ箇所に着弾させる。まさか、ミサイルの一基一基をすべてマニュアル操作で命中させたというのか！？

「バランスが崩れた！・・・後はお願い！」

更識の言うとおり、イレギュラーが爆発の反動で発射態勢を崩していた。

いくらバリアを張っていたとはいえ48発のミサイルを連続で同じ箇所当てられれば爆発と反動はかなりのものになり否が応でもバランスを崩してしまう。

私は雨月と空裂を強く握り渾身力で振るう。

「私に力を・・・紅椿！」

2刀から放たれた紅の閃光が集束し1つとなって奴のバリアに直撃した。

バリアの方は破れなかったが、着弾箇所小さなひびが出来ていた。

「打鉄・無限、活路を切り開く！」

吉井が2本の大刀をひびに突き立てる。

ひびはその大きさを広げていき大きな亀裂となる。

「これで、ラストオオオオオツ！！！」

吉井は突き入れた2本の大刀をバリアから抜き、渾身の力で振るいバリアを切り裂いた。

「一夏、今だ！」

一夏に合図を送り吉井はすぐにその場を離れる。

そして、上空から金色の光に包まれた一夏が雪平を前面に突き立てるように突貫してきた。

「

！！！！」

バリアを破られ発射態勢を崩したイレギュラーだったが、荷電粒子のチャージを止めていなかったのか、一夏に向けて無理やりな体勢で荷電粒子砲を発射して、その光の奔流は一夏を飲み込んだ。

「一夏！」

「一夏さん！」

「そんな……」

私達は一夏が奔流に飲み込まれた光景を見てショックを隠せれなかった。

そんな……私はまた……

「……待って、あれは！？」

『えっ？』

シャルロットの驚く声が聞こえ、私達は一夏の飲み込まれた場所を見た。

そこには……荷電粒子の光の奔流をもともせず突き抜けようとする一夏の姿があった。

「一夏!?!」

「一体どうして!?!」

「……そうか! 零落白夜はエネルギー系の攻撃を対消滅させる能力。ああやって刀身を前面に突き立てることで荷電粒子を対消滅させてるんだ。」

「……綺麗、まるで荷電粒子を切り裂いているようですね。」

「一夏……」

お前は本当に強い男だ。
だから……絶対に勝ってくれ一夏!

〈side out〉

〈side 一夏〉

荷電粒子の光が迫ってきた時はどうしようかと内心焦っていた。

でも、「大丈夫」と、あの夢の中で出会った女の子の声が聞こえて不思議と焦りが消えた。

俺は零落白夜で切り裂くように荷電粒子中を突き進んでいた。だが、出力が上がってきているのか、荷電粒子の光に押されてきた。くっ、負けてたまるかよっ！

「うおおおおおおおおつ！！！」

スラスターの出力を最大にまで上げて荷電粒子を押し返すように一気に突き進む。

荷電粒子を突破し、イレギュラー共々海面に突撃してその上を滑りながら数百メートル移動。

俺は近くの小島にまで乗り上げられ周囲に砂埃が舞うも、零落白夜を深く突き刺し続けた。

そして力尽きるように光の翼消えていった。

「終わった……。」

そう思ったら急に力が抜けて倒れそうになったけど、何とか堪えた。砂埃でイレギュラーの姿がみえなかったが、段々と晴れていき雪平を突き刺した物があらわになった。

「えっ……福音？」

雪片に突き刺されて機能を停止させたものの正体は福音だった。

「そんな、それじゃあイレギュラーは・・・ぐわあっ!？」

目の前の光景が信じられなくて動揺していると、背中に衝撃が走り俺は吹き飛ばされる。

倒れながらも恐る恐る衝撃の来た方向を向くと・・・そこにはイレギュラーがいた。

そして奴は俺にトドメを刺すように近づいてくる。

「ダメだ。もうエネルギーが残ってねえ。」

逃げようにもさっきのエネルギーを殆ど使ってしまったって動けない。近づいてきたイレギュラーはバスタークローを俺目掛けて振るう。

「うっ!?!」

俺は目を閉じて迫り来る痛みを覚悟した。

でも、いつまで経っても痛みは来ずに何か壊れるような音がした。恐る恐る目を開くとそこには、元の状態のゼロを装着した綾人がイレギュラーのバスタークローを破壊した光景だった。

side out

Side 綾人

換装を終えてイレギュラーの総攻撃に参加しようとしたら一夏が零落白夜を発動させて特攻するという作戦終盤だった。

だが、一夏の雪片が突き刺さる直前にイレギュラーの前面装甲が開き何かを盾代わりに排出したのが見えたので小島にまで飛んで行った一夏を追いかけた。

小島についたら案の定イレギュラーは健在でエネルギー切れの一夏にとトドメを刺そうとしてから、俺はストライクレーザークローを発動させてバスタークローを切り裂いて破壊した。

「よう一夏、お疲れさん。後はまかせろ。」

「綾人・・・でも、その通常状態で大丈夫なのか？」

「それが大丈夫かもしれん。何かアニメ最終回みたいな状態だから。」

そう、本来のゼロの装甲への換装を終えたら全ての性能が飛躍的に上がっていた。

前の戦いではストライクレーザークローで奴のバスタークローを破壊するなんてできなかった。

それが可能になったのは恐らくゼロ自身が学習してそう出来るよう

にしたのかもしれない。
まあ、IS自体がそういう物なんだが、ゼロの学習機能はそれを遙かに超えている。

「とにかく、これでファイナルラウンドにするからお前は見物してろ。」

「エネルギーが無いからそれしか出来ねえよ。綾人、勝てよ。」

「当然！」

俺はイレギュラーに飛びつき奴の懐に潜り込み、右腕のクローで先制する。

奴は残ったバスタークローでそれを防ぎ、自身の爪をカウンターの要領で振るってくる。

俺は止められていた右腕を引いてスウエーバックで後退してそれを回避して跳躍、ストライクレーザークローを再び発動させて奴の懐を狙う。

イレギュラーはバスタークローで防御するが、レーザークローはその防御を突破して奴の装甲を切り裂いた。

奴はバスタークローを破壊されながらも回避行動に移っていたので直撃は避けたが、頭部と胸部の装甲は切り裂かれ剥げ落ちていき中のメカとコアである黒い球体が剥き出しの状態になった。

すぐに追撃をしようとしたが、奴は振り返るように尻尾を振るいそれを阻止して、それを回避して無防備状態の俺に体当たりをかましてきた。

「ぐっ!?!?・・・どうやら向こうも学習たようだな。長期戦闘はやはり不利か。」

そう思っていると、奴は荷電粒子砲の発射体勢になり口から砲身を出して急速にチャージを始めた。

俺は回避行動に移ろうとしたが、ここが勝負どころだと判断してやめた。

残りのエネルギーを全て両腕のクローに渡すようにワンオフアビリティを発動させる。

「集中しろ。大事なのは踏み込みとっ。」

足に力を込めながら構える。

「間合いとっ。」

チャージを終えたイレギュラーが荷電粒子砲を放った。

「気合だあああっ!!」

それと同時に俺は地面を蹴って飛び込み。

「でりゃあああああっ!!」

奴の頭部を左腕のクローで上向きに固定して、残った右腕のクローを奴のコアに突き刺した。
そしてコアから光があふれ最終的に爆発。イレギュラーの存在の終わりを告げた。

＼side out＼

＼side 明久＼

「作戦完了・・・つと言いたところだが、お前達は重大な違反を犯した。」

『はい。』

イレギュラーを倒して帰って来た僕達は旅館の玄関で織斑先生から説教されている。

理由は僕達が無断で出撃して福音と戦ったから。
こればかりは全員覚悟の上なので誰も言い訳はせず素直に受け入れている。

「帰ったらすぐ反省文の提出だ。懲罰用の特別トレーニングも用意しているからそのつもりでいろ。」

その内容を聞いて僕達全員が苦い顔をした。うーん、わかっていた事とはこれは辛い。

「あ、あのー織斑先生、もうそろそろこの辺で。みんな疲れている筈ですし。」

「・・・ふん。しかしまあ・・・よくやった。」

『えっ?』

「あゝ、全員よく帰って来たな／＼／＼今日はゆっくり休め。」

顔を赤らめて労いの言葉をかける織斑先生を見て僕達はポカンとした。

すると、先に正気に戻った綾人が挙手してこう言った。

「あのー、非常に申し上げ難いんだが・・・俺と明久は今をもって学園やめるんですけど・・・」

『はあ！？』

綾人の爆弾発言に僕以外の全員が驚愕の声を上げた。

「確かに。目的のイレギュラーも倒しちゃったから次の世界に行かないとね。」

「そういう事だ。でないと異世界道中記じゃないからな。」

「メタ発言はやめろ。」

そこへルシエドがやってきて綾人にツツコンだ。

「荷物とかはもうロンバルディアに転送してある。後は我々だけだ。」

「犬が喋った！？」

「……我はあと何回」のシッコミを言われなければならないのだ。」

「そんなもん非常識が常識になっていいる世界に行くまでだろ。そういえば川上と簪には言っでなかつたな。」

ちなみにツツコンだのは川上さんと更識さんの2人で、更識さんはすぐに復歸したけど川上さんは立ったまま失神していた。

「と云うことで、突然だがここでお別れだ。」

「みんなの力があつたからあのイレギュラーを倒せたよ。一緒に戦つてくれてありがとう。」

「礼を言つなら俺達もだ。」

「ああ、お前達がいなかつたら私も一夏も福音にやられていたかもしれなかつたからな。」

「まっ、あんた達が居たおかげで面白い事もあつたしね。」

「でも、いなくなると寂しくなりますわね。」

「私はお前達と共に戦えた事を誇りに思う。」

「お前達ほど手を焼いた生徒はいなかったぞ。」

「……綾人。」

「そう泣きそうな顔するなよ。別に一生の別れになるわけじゃないんだし。全部終わらせたならまた会えるさ。だから……笑って向かい出してくれないか簞。」

「……うん。」

「……アキヒサ。」

みんなが各々お礼を言ってく僕達を送り出してくれている。でも、シャルだけは今にも泣き出しそうな顔で僕を見ていた。

「……アキヒサ、僕……」

「シャル……またね。」

「……えっ？」

「さよならは言わないよ。他のみんなもまた・・・いつかまた会おうね。世界が違ってても友達なのは変わらないから。」

「アキヒサ、きっとだよ！絶対だからね！」

「うん。」

「そろそろ行くぞ。この世界での協力に感謝する。」

僕達はルシエドが準備した転送ポイントまで歩き出した。

「・・・アキヒサ！」

「ん、どうしたのシャ」

僕は言葉を最後まで言うことはなかった。
何故ならシャルの唇が僕の唇を塞いでい

×

side out

side シャルロット

僕は居ても立つてもいれなくなって大胆な行動にでてみた。

「明久の奴、事態が飲み込めないで処理落ちしたな。」

「手間のかかる奴だ。綾人、このまま引きずって船まで帰るぞ。」

「りょうかい。」

そして気絶しているアキヒサをアヤトが引きづるように引っ張って行き、ある程度歩いて止まると、アヤト達が光に包まれて消えた。

「シ、シャルロット、あ、あんた大胆すぎるでしょ!?!」

「まさかあのような大胆な行動に出るとは……」

「何を言っている？自分の嫁に口付けするのは普通だろ。クラリッサもそう言っている。」

「いや、普通じゃねえからな！よし、お前のキャラ崩壊はそのクラリッサという毒電波が原因だな！今度会わせる！色々と言いたい事があるんだが！」

「織斑、その時は私も立ち会おう。」

なんだか周りが騒がしくなっちゃったね。

ねえ、アキヒサ。今度会ったその時にはちゃんと口で伝えるよ。
あなたの事が大好きです……って。

「だからまた会おうね。次に会った時にはアキヒサが夢中になるぐらいの女の子になってるかもね。」

ううん、そうなるように自分を磨かないとね。
だからまたね、アキヒサ……

） side out ）

第37話 ゼロの軌跡 帰還と明日と冒険と……（後書き）

ついにIS編が終了したあああつ!!

綾「ホント長かったな。と言うよりもお前が無駄に長くしたとも言えるな。」

反省はしてるよ。

ル「だが、本編が終わっても番外編が残っているのだろう。」

そっちの方は大体構想が出来てるからね。

内容的に分量が少なかつたら2本立てになる予定だよ。

綾「たしかかなりぶっ飛んだ感じになるようだが……まあいい。」

ル「それで今後の予定は？」

番外編が終わった後はオリ話を4話位やってそれから第4の世界だね。

綾「第4の世界はどんなのだ？」

これのどれか

- ・仮面ライダーダブルもしくはディケイド
- ・ダイレンジャーもしくはデカレンジャー

てな感じで。

綾「どの世界になっても俺には得だな。さうて、色紙準備しないと。」

それではまた次回。

明「

×」

綾「……まだ復活してないんだな。」

番外編 5人揃って・・・でも6人目来たらどうしょ？（前書き）

というわけでIS番外編第2弾です。

綾「内容に関しては作者は責められても文句は言えないな。」

反省はしている、後悔はしていない。

明「それでは番外編どうぞ。」

番外編 5人揃って……でも6人目来たらどうしょ？

それはある日の事、校内放送で鬼斑先生から呼び出され俺達は職員室に呼び出された。

「プロモーションビデオですか？」

「そうだ。最近ISのによる事件が多発した事で世間がISの危険性を再認識すべきと言う訴えをしてきてる。」

「まあスポーツ競技用のスーツとして定着しつつあるのに軍事転用やら暴走とかで世間の目が厳しくなった。そして、バッシングを一番受けるのがIS学園と言うことだろ鬼斑先生。」

「察しが早くて助かる。そこで今回は学園のイメージアップの為に代表候補生によるプロモーションビデオを製作して欲しい。」

「話はわかった千冬ね……織斑先生。でも、それなら何で代表候補生じゃない俺や篤に綾人達が呼ばれたんだ？」

「それに関しては理由がある。織斑、お前は世界でただ1人ISを動かせる男だ。そんな特異ケースが安全性を訴えれば効果的だからな。」

「つまり一夏は客寄せパンダみたいなもんか。でもまあ今回に関しては必要な事だろうな。」

「ところで僕達は？」

「なんとなくだ。」

「酷い扱いだなオイ!?」

「冗談だ。お前達にはサポートを任せたい。」

こうして代表候補生プラスおまけによるプロモーションビデオの製作が開始された。

だが、製作は難航した。なぜなら・・・

「製作の指揮はわたくしがした方が適任ですわ！名門貴族が指揮をして製作したとなれば注目の的を浴びれますから問題ないはずですよ！」

「お家自慢の無い国の代表候補生がしたところでインパクト低いっつうの！ここは古い歴史がある中国の代表候補生のあたしがやるべ

「きでしょ！」

「ええい黙れ！ここは学園がある地、つまり日本人により作るべきだ！製作指揮は私がとる！」

「「篤（さん）は代表候補生じゃないでしょ！！」」

「……つと、こんな感じで互いに罵倒しあってる事で全然進んでいない。」

「……あいつら何であんなに張り合ってた？」

「……製作の主導権を握る事で自分の出番増やして目立つって魂胆だろ。それに、その場合だとお前との絡みも自然と増えるしな。」

「?どういう意味だ？」

「……いや、何でもない。俺はレベル5モンスター2体でオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚！セイクリッド・プレアデス！」

「来たか！だが、戦闘では俺のフィールドにいる銀河眼の光子竜は倒せないぜ。」

「プレアデスの効果発動、1ターンに1度オーバーレイユニットを一つ使って相手フィールド上のカード1枚を選択して持ち主の手札に戻す。俺は銀河眼の光子竜を選択！」

「なっ！？」

「これで銀河眼の光子竜はフィールドから消え、お前の場はがら空きだ。さらに俺は墓地の光属性モンスター1体と闇属性モンスター1体を除外してカオスソルジャー・開闢の使者・を特殊召喚！そしてバトルフェイズに移って一斉攻撃！」

「のわあっ！？また負けた！ちくしょおおおっ！」

そして俺達は遊戯王で遊びながらその光景を見ていた。

「ねえ綾人、何とかしてアレを止められないの？」

「さすがにこれ以上放つといたら期限に間に合わないよ。」

「そうだな。それにこの場を教官に見られたらお怒りになるだろう。」

「そうになったら俺達全員血祭りにされるな・・・しょうがない、あれでいくか。」

「・・・何か方法があるの？」

「ああ、単純かつ効果的で簡単な方法がある。おいお前等、とりあえず落ち着いて話聞け。」

俺は紙にある文字を書いてそれを箱に入れる。

「話し合いじゃ解決できないからくじ引きで決めるぞ。ルールは簡単、この中に1つだけ当たりと書いた紙がある。そこでそれを引いた奴が製作の指揮をとり、はずれた奴は文句を一切しない。つまり、運のみを使った勝負だ。もう時間ないからこれで決めるぞ。」

全員が頷いてくじを引く。

そしてその結果・・・

「・・・言いだしっぺの俺がなるとはな・・・」

「「「やり直しを要求する（しますわ）！！」「」」

「却下。こうなった以上はこれでいくぞ。俺も全力で頑張るから協力してくれよみんな。」

こうして俺の指揮の下プロモーションビデオの製作が始まった。

製作が進むに連れて俺のインスピレーションも冴えわたり最高の作品が完成した。

そして今日は教師や生徒達を集めての試写会の日だ。

「神薙、プロモーションビデオの出来はどうだ？」

「ノープロブレム！最高傑作が完成しました！」

俺は鬼斑先生にサムズアップして答える。

「・・・なあ、やっぱりアレを見せるのはマズくないか？」

「・・・少なくとも織斑先生は修羅の如く怒るだろうね。」

「・・・乗り気で協力したけど、今になって思えばアレはダメだよ

ねやつぱり。」

「あれはプロモーションビデオなのですか？」

「どう見てもアイツの趣味全開ビデオでしょ。」

「私はかなり納得のいかない役をやらされたしな。」

「お前等は何を言っている？あれほどの作品ならバッチリだろ。クラリッサのお墨付きももらったしな。」

『その謎のクラリッサ電波が不安を増長させてるんだが！！』

「・・・あれは紛れも無く最高傑作／＼／＼／＼／」

「更識さん、トリップしてないで戻ってきてください！？」

みんながあーだこーだ言っているけど気にしない。

俺はスイッチを入れて映写機を起動。

モニターに映像が映り始めナレーションが始まった。

side out

side 千冬

『IS 通称インフィニット・ストラトスと呼ばれるそれは本来は宇宙空間での活動を想定し開発されたマルチフォームスーツだったが、白騎士事件によって従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡ることとなり、本来の宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして軍事転用が始まり各国の抑止力の要がISに移っていったが、IS4は主に競技に使われているのは諸君の知ってのとおりだ。』

大型モニターから流れる映像とナレーションから始まったプロモーションビデオ。

神薙の指揮という事でかなりの不安があったがそれは取り越し苦労になりそうだな。

『だが、そんなISを悪用して世界征服を企む闇の組織が現れ人々の平和が脅かされる事になった。』

前言撤回、何だこの展開は・・・

「はーはっはっはっ！行け、我が配下のIS怪人達よ！その力を持ってして世界に破壊と恐怖を振り撒くがいい！！」

『奴の名は鬼武羅 千冬、世界征服を企む組織サウザンドスノーの首領だ。』

すると、モニターに何故か魔王のような格好をした私が現れた。これは何だ？私は一切協力はしていないのに何故このような映像が・

「おーほっほっほっ！世界よ、我々の前にひれ伏しなさい！」

『そして奴は邪魔陀 魔夜、サウザンドスノーの女幹部だ。』

今度は露出の高い衣装を着て高笑いしながら鞭を振るっている山田先生が現れた。

私の隣でこれを見ている山田先生は、突然の事にパニックを起こしかけている状態だ。

『世界はサウザンドスノーに対抗すべくIS部隊を編成し立ち向かったが、全く歯が立たず返り討ちにあっていた。そして全世界が破壊と暴力に染まりつつある中、希望が現れた。』

「そこまでよ！これ以上は私達が許さない！」

すると、その場に謎の5人組みが現れる。

「何者だ!?!」

「知りたいの? だったら教えてあげるよ! みんな、チェンジスタン
バイツ!」

『ラジャー!』

更識妹の声に4人の少女が応え、5人は手帳のような物を取り出し左横にあるスライド式のスイッチのような物を起動させた後ダンスのようにターンをして手帳を前にかざした。

『エマージェンシー!』

「打鉄・弐式!」

「ブルー・ティアーズ!」

「甲龍!」

「ラファール・リヴァイブ！」

「シュヴァルツェア・レーゲン！」

5人は白・青・黄・橙・黒の光に包まれ、その中でISを装着していく。

『フェイスオンツ！』

5人はそれぞれのヘッドギアを装着して、その場に姿を変えて現れる。

「一つっ！非道な悪事を」

更識妹は右手を上げて人差し指を立てその腕を左に振りかぶり、それから人差し指と中指を立てて拳銃を模した形にして前を指した。

「憎みっ！」

「二つつっ！不思議な事件を」

オルコットは同じように腕を上げて指を2つ立ててから、更識妹と同じように動いて最後に同じように前を指す。

「追ってっ!」

「三つつ!最先端の科学で」

鳳は指を三つ立て、腕を下ろしてから最後に左手で前を指す。

「捜査っ!」

「四つつ!良からぬ地球の」

デュノアは指を四本立て、その上ですぐに前を指す。

「悪をっ!」

「五つつ! 一気にスピード」

ラウラもそれに続き、指を五つ立て左手で前を指す。

「退治っ！」

「世界を守るは候補生の使命！」

更識妹の声に合わせて全員揃って両手を突き出す。

「ISジャパン！日本星 簪！」

「ISイギリス！英国星 セシリア！」

「ISチャイナ！中国星 鈴音！」

「ISフランス！仏国星 シャルロット！」

「ISドイツ！独国星 ラウラ！」

5人は拳法のような複雑な動きでポーズをとっていく。

『秘密電撃隊』

更識妹以外はさっきの手帳のような物を前にかざし、更識妹は右手を上げて5本の指を立て、敵である私？に見せつける。

『インファイニットファイバーS!!』

そして後ろで白・青・黄・橙・黒の5色の爆発が起こった。

「ゆけ、我がIS怪人達よ！」

魔王のような格好をした私？の命令で、全身黒タイツの上に変な形をしたISのような物を装備した集団が一斉に5人に襲いかかった。5人はアクロバティックに跳躍していき集団立ち向かっていき、それぞれ自分達の武器を展開して戦った。

「ええい！忌々しい連中ね！」

露出の高い衣装を着た山田先生？が5人に向かって鞭を振るうと何故か爆発が起こり5人は吹き飛ばされる。それよりもさっきまで戦っていた集団はどこに行ったのだ？

「これでトドメよ！」

「そうはません！」

山田先生？がさらに鞭を振るおうとしたら、何かが飛んで来て鞭を切り裂いた。

「な、何者！？」

山田先生？が驚いて飛行物体が飛んできた方角を見たら、そこには紅いISを装着した誰かがいて鞭を切り裂いた飛行物体はそのISに装備された。

「ISファイヤー！絢爛星 箒！」

紅椿を装備した篠ノ之が5人と同じように拳法のような動きでポーズをとった。

「くっ、たかが1人ぐらい増えたところで我等の敵では「おっと、もう1人いるぜ。」！？」

篠ノ之が現れた事に動揺するも激をとばそうとする私？に対して誰かの声が聞こえ、その方角を見ると今度はタキシードの上から白式を装備して仮面を着けた織斑がいた。

「あ、あなたは!？」

「『『『ビヤクシキード仮面様!!』『』『』」

更識妹とデュノア以外のメンバーが織斑の登場に黄色い声援を上げた。

織斑、何故そのような役を引き受けたのだ・・・

それよりも何かの路線が変わったような感じがするが、これ事態が既にイメージアップの為にプロモーションビデオという路線から外れているな。

私は一呼吸した後、迷い無く映写機の所まで向かい電源を落とした。

｝side out｝

｝side 綾人｝

「みんな、ISハリケーンいくよ!」

簪 ISジャパンの号令でシャルロット ISフランスがラゲ

ビー型のボールを取り出そうとしたところで映像が切れてしまった。

「おい！？今からいいところなのに！誰だ、電源切った奴は！！」

「神薙、言い訳があるな一応は聞くぞ。」

振り向いて映写機を置いてあつた場所を見ようとしたら、俺の目の前にはかなりご立腹の鬼斑先生がいた。
何で怒ってるのこの人？

「神薙、これは何だ？」

「何ってどっからどう見てもイメージアップの為のプロモーションビデオじゃないですか！それよりも何で映像切っちゃうんですか！この後さらに熱い展開が待っているというのに！」

「ほう、それはどういふ展開だ。」

「あの後ISハリケーンをくらつても生き残っていた鬼武羅 千冬がISジャパンに向けて放った弾丸をISファイヤーが庇って重傷を負って、ISファイヤーは自分がもう助からない事を悟って鬼武羅 千冬に向かって自爆特攻して倒すも、鬼武羅 千冬は最後の悪あがきで巨大化したところを5人のISが合体して巨大メカISボ

ンバーとなって最後の決戦という熱い展開なのに!!」

「長い!そしてそれはもう何をアピールしているのかわからんだろ
うが!」

何か鬼斑先生がキレ出した!?

「それよりも神薙君!アレってどういう事ですか!?何で私や織斑
先生があんな恥ずかしい格好して出てるんです!?!」

今度は山田先生が泣きながら訴えてきた!?
とりあえず説明をしないと。

「あ、あれはこっちで作った映像ですよ。声に関しては俺が当てて
るんで。まさか五代 雄介さんみたいに2000の技を使える男を
目指している時に覚えた声帯模写が役に立つとは・・・」

「とにかく!こんな物は却下だ!今すぐ作り直せ!!」

「あ、それ無理です。だってこれのマスターテープもう上層部の方
に回しちゃったんで。」

俺がそう言つと周りの時が止まったかのように静かになった。
そして……

「このバカ者があああああつ!!」

鬼斑先生の強烈な右ストレートが俺の顔面に直撃した……
うん、痛い。

こうして回収が不可能となった「秘密電撃隊インフィニットファイバーS」は世界各国の首脳陣や世界のお茶の間に放送されたが、これが奇跡的（鬼斑先生談）に受けて大反響。

ありとあらゆる場所でグッズアイテムやゲームが製作・販売されて大ブームに。

「おいみんな、今度のスーヒーロータイムの枠はインフィニットファイバーに決定して出演オファーが来たと連絡が入ったぞ！」

「……ホント!？」

「よし、この調子でこの作品を伝説にするぜ!みんな気合入れていくぞおおおお!!」

『もう勘弁してくれ……!!』

番外編 5人揃って……でも6人目来たらどうしょ？（後書き）

次回からオリジナル展開に入ります。

綾「それよりも今回の番外編は使った元ネタが多すぎるだろ。」

全部わかる人はいると思う……いたらいいな。

第38話 食べられてタンザー（前書き）

更新遅れて申し訳ございません！！

綾「で、今回は何でこんなに遅れたんだ？」

仕事の都合と執筆環境が理由と言うしかない。

明「またアバウトな。でも、今年までに更新間に合ってよかったね。」

環境と時間が整っていたらもう1話更新できたんだけどね・・・

綾「とりあえず本編をどうぞ。」

それと後書きの方でちょっとしたアンケートがありますので

第38話 食べられてタンザー

ISの世界を後にした俺達は現在ロンバルディアで次元空間を航行している。

ちなみに明久は意識を取り戻したがその時の記憶が飛んでいた。

シャルロット、お前の大胆な行動は何だったんだろうな・・・やべ、何か泣けてきた。

「ところでこれからどうするの？」

記憶が飛んだ事で衝撃事件を忘れている明久が質問してきた。

記憶喪失してる奴って記憶が飛びやすいのか？

「まずは1度サントアリオに戻る予定だ。この船の物資の補給もそうだし、行った世界は全部調査してなかった未開の世界だからその報告もしないといけないんだ。」

「それにオーロラが消えた事で我々以外の存在も入れられるようになったからな。また救われた世界に何かが入り込んでくるかもしれないからサントアリオの方からその監視と護衛の為に人員を回してもらえらるのだ。」

「なるほど。そういえば僕達が他の世界で戦っている間に破滅の予兆が出てきた世界は増えなかったの？」

「それに関してはマイスター達が留守の間中、私とT260Gの方で多次元世界の監視と調査団の報告を聞いたりしてましたが、今のところはまだ増えておりません。」

明久の質問にティーポットとお茶菓子を持ってきたリヴァイブが答えた。

「ご苦労様リヴァイブ。」

「いいえ、問題ありません。33話ぶりにようやく出番があっただけでも感謝しています。」

その一言に俺は涙してリヴァイブを抱きしめる。

「マジでゴメンな！せっかく直って現場復帰と思ったらクソ作者の作った設定のせいでお前の出番が皆無でただの留守番させるだけになって！」

「御気になさらないでくださいマイスター。マイスターにそう言ってもらえるだけで私は嬉しく思います。また出番がなくなる事になっても耐えられそうです。」

「リヴァイブーーーーー!!」

その直向さに俺はさらに号泣した。
なんて健気な奴なんだ!!

「・・・私も出番が無いと少しだけ嘆いていたが・・・我は出番がある方だったんだ。」（ホロリ）

「リヴァイブ・・・なんて健気な。」（ホロリ）

ルシエドと明久はそう言いながらもらい泣きした。
それからしばらくして落ち着き、俺達はティータイムに移った。
うくん、リヴァイブの淹れた紅茶は美味いな。

「あ、そういえば福音と戦った後に何か不思議な夢を見たんだけど・・・」

「お前と一夏が意識不明になった時か・・・で、どんな内容だったんだ？」

「え〜と、僕はIS学園とは違う学校の制服を着て廃屋のような教室にいたんだ。それから覆面と鷲部を纏った集団やゴリラやエロの

化身や自分を男だと言って姿を偽る超絶美少女に、関節技を仕掛けてくる胸無しの人と科学兵器を食べさせようとする胸の大きい人とロリっ子2人が出てきたんだけど・・・」

「・・・何だそのカオスなクラスメイト達は。」

「・・・そもそもそこは本当に学校なのか。」

明久の言った夢の内容に俺とルシエドが困惑する。

「それでその人達は僕の事を知っているみたいで、僕もその人達を知っているような感じがするんだけど・・・名前も顔も思い出せないんだ。」

「おそらくその夢はお前の失った記憶かもしれん。記憶喪失と言っても記憶そのものが消滅するわけではないからな。」

「福音に落とされた時のショックで脳が一時的に刺激された事で見ただらうな。でも、それは記憶が戻ってきている兆候かもな。」

「・・・そうだったら嬉しいかな。僕、あの人達を思い出したいんだ。僕にとつてすごく大切な人達だと、僕の心がそう言っている気がするんだ。」

そう言っつて胸に手を当てる明久。
この様子からして大切な人達つてのはあながち間違いないかもな。
それから雑談をしつつティータイムを楽しんでいたら突如、船全体
が揺れ始めた。

「どうしたの急に!？」

「T260G、現状の報告頼む！」

突如進路上に歪が発生し、現在その歪に引き寄せられています！
？

「次元航行中に謎の歪・・・まさか!？」

「心当たりがあるのルシエド？」

「話は後だ。T260G、何とかその歪から離脱できるか？」

最大出力でも離脱できる確立は20%程です。

離脱はかなり危険な賭けになるな。
それに歪みの正体がアレだとしたら・・・なら、

「T260G、そのまま引き寄せられる。下手に流れに抵抗するより身を任せたほうが安全だ。」

「確かに。最大出力で離脱するにしても時間をかけ過ぎたらオーバーヒートでこの船が吹き飛ぶからな。その方が安全だな。」

了解しました。これより流れに乗って歪みの中に引き寄せられま
す。

「・・・ルシエドもそうだけど、綾人もあの歪みが何か知ってるの
?」

「知っていると言っても噂で聞いたレベルだけどな。それよりも何
にかにしっかり？まっとけ。かなりの衝撃がくるぞ。」

「ちよっ!?!?そういうのは早く言ってよ!」

明久は慌てて固定型の椅子にしがみついた。
そして、すぐに強力な衝撃が船全体に走った。

＼ side out 〉

＼ side ??? 〉

「うーん、まさかやられちゃうとはねえ。」

以前、ISの世界を訪れイレギュラーを放つてすぐに消えた人物は、その時の戦闘映像を見ていた。

「取り込んだ物はあの世界では結構強力な兵器でしたのにい。」

「どういう事だ、Drアスモ!？」

そこにブラッククロス四天王の1人シューザーが苛立った状態でやってきた。

「あらシューザー様、どういったご用件ですか?」

「とぼけるな!例のアレに任せれば万事ぬかりないと言いながら失敗したとはどういう事だと聞いている!」

「あらあら、そんなに怒っては血糖値が上がりますわよお？」

「ちっ、話にならん！やはり俺が直接出向いた方が確実だったか！」

「それはいけませんよお。世界はアレの力でないと殺せないと言っているじゃないですか。だからあのお方はあなたの介入を禁じたんですよお。」

「失敗しては意味がないだろ！ふん、お前や我等が首領が言っているあのお方と言う奴も」

大した事ない奴、と言おうとした瞬間、異常なまでの殺気がシューザーに向けられる。

殺気を当てられたことによりシューザーは喋るのをやめ、殺気を発しているDrアスモの方を向いて身構える。

「あらあら、私の前であのお方をバカになさる発言をするなんて・・・よっぽど死にたいようだな。」

アスモは尋常じゃない殺気を放ち、口調も軽いものからドスのきいた口調に変わっている。

この突然の変化にシューザーは動揺し、殺気により声も出せないでいた。

「だんまりですかあ。まあ、今回は見逃してあげますよあ。でも、次に言ったら言葉を発することなく瞬殺しますのであしからず」

そう言つてアスモは殺気を出すのをやめていつもの口調に戻ると部屋を出て行った。
アスモが去つてすぐにシュウザーは構えを解き、その場に倒れそうになる。

「はあ、はあ、はあ、まさかこの俺が何も出来ないとはな・・・」

シュウザーは自身の腕に目をやると、自分の腕が震えていたことに気付いた。

それはアスモの殺気に恐怖している証でもあった。

＼side out＼

＼side 綾人＼

「・・・どうやら不時着できたようだな。大丈夫かみんな。」

「僕は大丈夫。」

「我も大丈夫だ。」

「問題ありませんマイスター。」

歪みのなかに吸い込まれて船全体に大きな衝撃と揺れが発生したが、それが治まったのでみんなの安否を確認した。

「それよりも一体僕達はどうなったの？」

現在ロンバルディアは着陸場所を見つけて待機状態です。外部の方は外出可能かスキャンした結果、問題ありません。

「サンキューT260G。何かあるかわからないからリヴァイブも付いて来てくれ。」

「了解しましたマイスター。」

船の方はみなさんが出て行った後にバリアフィールドを展開するので心配する必要はないです。それではハッチを開きます。

ロンバルディアのハッチを開いてもらって外に出てみると、そこには周りが臙物だらけの異様な景色があった。

「・・・何ここ？すごく不気味すぎるんだけど・・・」

「そうだな。でも、まさか実在したとは・・・」

「そういえば2人は知っているみたいだったけど、結局どこなのこ
こ？」

「ここはタンザーと呼ばれる世界だ。世間では捕食する世界だとも
言われている。」

「恐らく周りの臙物はタンザーの内臓や血管だろ。タンザーは稀に
現れてはリージョンシップを飲み込むからそれによる行方不明事件
が多々あるんだ。世間じゃ都市伝説ぐらいにしか騒がれてなかった
が、まさか自分達が飲み込まれるとはな。」

「突然発生した次元の歪みって、もしかしてタンザーの口なのかな。」

「そうなりますね・・・マイスター、この先にリージョンシップの
反応があります。恐らく我々とは別にタンザーに吸い込まれた船だ

と思われませぬ。」

「吸い込まれたのが俺達以外にも居たんだな。船の状態や乗っている人達の安否が気になるな、行ってみよう。」

タンザーの中を移動しながら明久に説明していると、途中でリヴァイブがシップの反応を感知した。

船や乗組員の安否の確認をする為に俺達は船の方に向かった。

side out

side アルカール

サントアリオのヒーロー委員会本部で調査報告を終えてデスクワークをしていたら突如、調査員の1人が慌てた様子でやって来た。

「報告します！？ロンバルディアがタンザーに飲み込まれたとの情報が入りました！」

「何だと！？まさか実在していたとは・・・それで向こうにコンタクトは取れるか？」

「それが・・・色々と試したのですが・・・」

「そうか。さて、どうしたのか・・・」

吉井明久の実力の方と力の覚醒はまだわからないが、綾人の実力ならそう簡単にはやられはしないだろうし、ルシエド殿もついているから大丈夫だろう。

だがタンザーは未開であり異質な世界だ、故に常識という物が通用しない可能性もある。

どうしたものかと考えていたら、部屋のドアが開いた。

「何かあったんですかアルカールさん？」

声のした方を向くと、そこにはミニスカートタイプのワンピースの格好をした少女が居た。

「君は・・・そうか、そういえば今の時刻は君の到着予定時間だったな。」

「はい！でも本当は結構早く着いてたんですけど、ちょっと野暮用で別の場所に行っていたもので・・・
それよりも何かあったんですか？さっき部屋に慌てて連絡員の人が入っていくのが見えましたけど。」

「おっと話が逸れてしまったな。実はロンバルディアが次元航行中にタンザーに飲み込まれて音信不通になってしまったんだ。」

「ええ！？タンザーって実在してたんですか！？そんなのに飲み込まれるなんて、わたしまだ乗っていなくてよかった。」

「君のロンバルディアへの配属は最近決まったからな。本来ならもう帰還して補給の後に乗艦してもらおう予定だったが・・・さて、どうしたものか・・・」

「ならわたしが行きましようかアルカールさん？ロンバルディアの内部の写真とかあるならすぐに行けますよ。」

そう言って彼女は緑色の宝石を出してきた。

「なるほど、レポートジエムを使つての転送か。確かにこれならタンザーではなくロンバルディアの中に転送してそのままタンザーに到着する事ができるな。だが・・・」

確かにこの方法ならうまくいくとは思つ。
ただ1つの不安要素を残せば・・・

「な、何ですかその疑ってるような視線は!？」

「いや、君はそういった転送系の道具とはその・・・最悪の相性だっただろう?」

申し訳ないように私が言うと、彼女に何かが刺さりぐったりと倒れそうになる。

「だ、大丈夫ですよ。あれから色々修行してうまくいくようになってますから・・・」

「そうか、だったら何故目が泳いでいる?ちゃんところちを向いて喋ってくれ。」

「と、とにかく!他に方法がないんですからこれでいきましょう!うまくいきますよ!へいき、へっちらッ!」

「そうだな・・・これが内部の写真だ。恐らく彼等の事だからタンザー内部を調査していると思う。転送後は管制コンピューターのT260Gに事情を説明し、君もタンザー内部を調査しつつ彼等と合流してくれ。」

「わかりました!それでは行って来ま〜す!」

元気よく返事をして彼女はテレポートジェムを使用した。
そして彼女は光となってこの場からいなくなった。

不安だ、果てしなく不安だ・・・ちゃんと目的地に着いてくれると
いいが・・・

「ルシエドさんがタンザーに食われたってどういう事や!」

「エレノアさん落ち着いてください!?!別に死んだわけではないん
ですよ!」

「止めるなミミ!ルシエドさんの一大事に落ち着いてなんかいられ
るかあああっ!」

今度はいきなりドアを蹴破ってやって来たこいつ等の相手をしなく
てはならないのか・・・

＼side out＼

＼side 綾人＼

リージョンシップの場所まで行き、船の船長と乗組員から事情を聞

いた。

何でもこのリージョンシップは旅客船で中には民間の人達が多く乗り合わせていた。

とりあえずその人達には船の中で待機してもらって、俺達は再びタンザーの調査に移った。

「あの旅客船も不運だよね、こんな不気味な世界に飲み込まれるなんて。」

「不運という事に関しては俺等もそうだけだな。それにしてもどんだけ広いんだよタンザー。」

「あれから結構な時間が経つが未だにタンザーの中枢すら見えてこないからな。」

「焦ってはダメだと言いたいですが、こつも時間が経つとそう言いたくなるのも理解できます。」

「そうだな・・・ん、あれは？」

「あれって・・・人が倒れてる!？」

調査の途中で倒れている人間を見つけてすぐに駆け寄り明久が抱き

かかえる。

倒れていた人間は女の子で黒いコートにシャツに黒いスカートといった服装で、膝まで伸びた黒と銀の髪を首で一つにくくっつけていて銀髪だけはねている。

「君、大丈夫！？しっかり！」

「う、うん……」

明久の呼びかけで倒れていた女の子の意識が目覚める。

「にん……げん？」

「気がついたんだね、よかった。」

「にん……げん……ウウ、ウガアアアアッ！！」

その女の子は覚束無い目で明久を見て何かをつぶやいていたが、ハッキリと目覚めて再び明久を見た瞬間、女の子から強烈な殺気が放たれ叫びだした。

「明久、その子から離れる！」

「グルアアアアアッ！！」

女の子は明久に向かって魔法陣を発生させ、そこから青白い熱線を放った。

「やらせん！」

「えっ、うわぁ！？」

寸前でルシエドが明久をくわえて大きく跳躍して放たれた熱線を回避した。

回避された熱線はタンザーの内蔵でできた壁に命中して強力な爆発が起きる。

「なんつう威力だよ。」

「やめるんだ君！僕達は敵じゃない！」

「アアアアアアアッ！！」

明久が自分達は敵でない事を必死に訴えるが、女の子はそんな事にはお構い無しに再び魔方陣を展開していくが、今度は複数の陣を展開してそこから熱線を乱射してくる。

俺達は飛んでくる熱線を避けながらどうにか彼女に接近して拘束しようと考えるが、容赦なく飛んでくる熱線の雨を潜り抜けられないでいた。

そして彼女は巨大な魔方陣の形成を始めた。

「やむおえんか・・・綾人、明久、変身して彼女を鎮圧しろ。」

「いきなり何言ってるのルシエド！？そんなのダメだよ！」

「このままでは我々がやられてしまう。その前に彼女を止めるんだ。それに我は彼女を倒せとも殺せとも言っではない。」

「あの熱線を切り抜けるには変身した状態でしか無理だからな。それに彼女を傷つけないならちゃんと手加減できるように攻撃しろって事だよ。そうだよなルシエド。」

ルシエドの意見に明久が反対するが、俺がルシエドの真意を直訳してやる。

俺の答えにルシエドが頷いたのを確認した明久は一瞬だけ目を閉じて、覚悟を決めたように目を開いた。

そして俺達は変身の構えに移る。

「へんし」どいてええええええええ！？」ん？」「

「ガフツ！？」

変身と叫ぼうとした時、突如彼女の頭上に光が発生してそこから誰かが落ちてきた。

彼女は落ちてきた何かに押し倒されて意識をまた失った。

「今の一体？それに落ちてきたは誰だろうか？」

「・・・なあルシエド、今のあれってレポートジエムの光だったよな。それにあの声って、もしかして・・・」

「・・・恐らく彼女だろうな。このような光景は何度もあったからな。」

「だよな・・・。。。。。。はあ。」

俺は突如現れて殺意全開の彼女の上に墜落してきた鎮圧した人物の元まで歩いていく。

ちなみに下敷きにされた彼女は目をグルグル回っていて完全に気絶していた。

「相変わらず転送アイテムとの相性悪いんだなリリカ。」

「ううー、ここどこ？・・・って、綾人？」

こうして俺達は奇妙な世界で珍妙な登場をして戦闘を強制的に終わらせて微妙な空気を作ったエレアニックの魔女っ子に出会った。

第38話 食べられてタンザー（後書き）

と言うわけでオリジナル編1話目だね。

綾「ここにきて一気に登場キャラ増えたな。」

リリカの登場は最初から予定してたけど、他の子たちは投稿キャラだよ。

リ「それにしても作者、わたしの出番遅すぎでしょ！15話の後書きで存在ほろめかせといてそれから23話以上たつての登場ってあんまりだよ！」

綾「それに夜叉龍様からもらったキャラの登場あれだけだよ。」

それに関しては一応和解の部分は別で書き上げてるんだけど、それを入れたらかなりの長さになるかと思ってカットになってしまって夜叉龍様、申し訳ございません！

明「ところでもう1人のキャラの方は？」

その子も次回出てくるよ。

てか、うまくいったら次回でタンザー脱出するかも。

綾「ところで最初に言っていたアンケートって？」

第4の世界のことでちよつとね。

次の世界は仮面ライダーで決まったんだけど、どの話をベースに書くか迷ってるんだけど、投票で決めようかと。

リ「それで候補は？」

この2つ

・MOVIE大戦2010

・Atoz 運命のガイアメモリー

1番目はデイケイドとダブル、それに他のライダーとかも出せるけど、アクセルやエターナルやオーズの出番がないんだよね。

2番目の方はそれらが出てくるけど他の平成ライダーとかが出ないんだよね。

綾「アクセルやエターナル好きって人も多いしな。だから投票で決めよう?。」

うん、投票に関してはメッセージ限定で。

そっちの方が読者にどの世界になるのかってハラハラを持たせやすいから

明「でも書き上げた駄文のクオリティーの低さにがっかりさせられるんだね、わかります。」

・・・頑張れ！負けるな！力の限り書いてやるううう！

綾「小須田部長とはまた懐かしいネタを・・・。」

ちよつとしたアンケート&予告 (一部ネタバレ注意) (前書き)

これは第5の世界についてのアンケートを募る為の予告編です！

綾「まだ第4の世界にも行ってないのか。まあ、早めに決まった方が書きやすいからな。」

それでは予告編どうぞ。

ちょっとしたアンケート&予告（一部ネタバレ注意）

カレー屋でワニの店員と遭遇

「はいー、お待ちせしましたー。恐竜カレーランチですー・・・どうしましたお客さまー。」

「ぐす、まさか恐竜やで恐竜カレーが食べられるなんて・・・感動だあああっ!!！」

「こいつのコレはちょっとした病気みたいなものだ。気にしなくても問題ないぞヤンデンワニ殿。」

「でも綾人の気持ちよくわかるよ。店とかもテレビそのままだし。」

ヒーロー達との邂逅

「SPDだ！全員この場から動くな。」

「ドギーさんキタアアアアッ!!！」

「そこのお前、静かにしろ。」

「サインください！そして・・・モフモフさせてええええええ！！」

「なっ！？や、やめろ！？ぐわあああああ！！」

『ボスーーーーー！！』

「どうするの！？綾人のせいで捕まってしまったじゃないか！」

「確実に言い逃れのできない公務執行妨害だからな。それより貴様はいつまでトリップしている！」

「ドギー・クルーガーの毛をモフモフできる日が来るなんて・・・生きててよかつたああああっ！！」

現れる強大な悪

「くっ、強い。」

「やつ等は一体何なんだ・・・」

「さらばだ。28番目のスーパー戦隊。」

立ちあがる戦士達。

「一つ！ 非道な悪事を憎みっ！」

「二つ！ 不思議な事件を追ってっ！」

「三つ！ 未来の科学で捜査っ！」

「四つ！ 良からぬ宇宙の悪をっ！」

「五つ！ 一気にスピード退治っ！」

「六つ！ 無敵がなんかイイっ！」

「七つ！ 悲しみの連鎖を砕きっ！」

「八つ！ 涙はもう流させないっ！」

「SPD!」

「デカレットツ!」

「デカブルー!」

「デカグリーンツ!」

「デカイエロー!」

「デカピンクツ!」

「デカブレイクツ!」

「デカブレイザー!」

「デカカイザー!」

『特捜戦隊デカレンジャー!』

特捜戦隊デカレンジャー編

戦争が競技として盛んな世界

「見つけた。こここそが」

「「こここそが？」」

「俺の・・・全て遠き理想郷アウアロンだあああつ!!」

そんな世界に呼び出された少年、せつんシンク・イズミ

「姫様からのお呼びに与り、勇者シンクただいま見参!!」

「バカもんがあああ!!」

「イタツ!? 何でハリセンで叩かれないといけないんですか!」

「お前の場合は声的に目標を駆逐する! !とか、未来を切り開く! だろうが!」

「何なんですかその理不尽すぎる理由は! ?」

切磋琢磨する少年達

「エターナルブリザード!」

「マジン・ザ・ハンド!」

「オーディンソード!」

「・・・何をやっているんだお前等は。」

「えっ、何ってフロニヤルド力を使って超次元サッカー。」

「貴様等はフロニヤルド力を何だと思ってる!」

「そう怒るなエクレール隊長。これも訓練なんだぞ。あっシンク、お前は吹雪の技しか使うなよ。明久もフィディオの技以外ダメだぞ。声的に。」

「「またそんな謎の理由で!?!」」

忍び寄る恐怖と不安

「何故だ!?!なぜ変わらない!?!なぜ、変わってくれないんだ!?!」

「この世界の魔獣という存在、大いに活用させてもらおう。」

闇を切り裂き、未来を切り開く少年達

「綾人に言われたからじゃないけど・・・シンク・イズミ、未来を切り開く!?!」

「神をも殺す存在か。だが、俺の中の魔神は殺せるかな。」

「ここで決着を着ける!?!」

突如現れた謎の天球

「有機生命体は敵。」

「どうしたんだリヴァイブ!? 攻撃をやめるんだ!」

コント・・・ロール・・・不能・・・

そして別の宇宙でも

「一体何なんだこれは!?!」

「姫様が!」

「焼き鳥はどうでもいいが姫さんは助けねえと！」

天球の中での出会い

「わたくしはエメラナ・ルルド・エスメラルダと申します。」

「この天球のコース上に惑星が!？」

始まる戦い

「ブラックホールが吹き荒れるぜええええ!!！」

「有機生命体……抹殺……」

「心を開いて!ジャンキラー!……!!！」

恐るべき正体

「ビート……スター……それがこの天球の名前……」

「奴は異なる宇宙をいくつも旅してきた。同時にその宇宙にいる有機生命体を抹殺しながら……」

「命とは……何だ。」

「命とは生命体そのものだ。それを失えば彼らは活動を停止する。」

「だがな！1つしかない命だからこそ、俺達は今を全力で生きるんだ！」

命を救うための共闘と激闘

「我々が時間を稼ごう。」

「お前達は天球のコースを変えるんだ。」

「力を合わせよう。」

「心つてのはな、胸の奥で熱く燃える炎だ！命の雄叫びだ！」

「心を持たないお前なんかに！」

「俺達の命を！」

「裁く権利はねえ！！！」

ウルトラマンゼロ外伝 キラーザビートスター編

ちょっとしたアンケート&予告 (一部ネタバレ注意) (後書き)

今の3つの中からお願いします。

このアンケートの投票もメッセージでお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3078u/>

バカと少年の異世界道中記

2011年12月28日23時49分発行